

2018 年

日本の韓国人居住者の外来性管理

—接触場面における習慣化された日本語の管理の観点から—

(千葉大学審査学位論文)

今 千春

## 目次

<b>第1章 本研究の概要</b> .....	<b>1</b>
1.1 本研究の背景と目的.....	1
1.2 日本に移住する韓国人.....	2
1.3 韓国人居住者に関する先行研究.....	3
1.3.1 言語接触からみた韓国人の言語使用.....	3
1.3.2 第二言語習得からみた韓国人日本語学習者.....	4
1.3.3 韓国人居住者が参加する接触場面と言語管理研究.....	5
1.3.3.1 接触場面.....	5
1.3.3.2 外来性.....	5
1.3.3.3 言語管理理論.....	6
1.3.3.4 韓国人居住者が参加する接触場面の言語管理研究.....	7
1.4 本研究の理論的背景.....	8
1.4.1 韓国人居住者の外来性.....	8
1.4.2 言語使用の共時性と通時性.....	8
1.4.3 ライフストーリーの研究.....	10
1.4.3.1 ライフストーリー研究.....	10
1.4.3.2 ライフストーリーにおける転機、エピソード.....	10
1.4.4 接触場面に向かう言語管理の研究.....	11
1.4.4.1 言語バイオグラフィー研究.....	11
1.4.4.2 接触場面に向かう言語管理.....	12
1.4.4.3 ネウストプニーの類型論的アプローチ.....	13
1.4.5 Norton の第二言語習得論.....	14
1.4.6 社会的ネットワーク.....	15
1.4.7 外国人の日本語に対する評価研究.....	16
1.5 本研究の位置づけ.....	17
<b>第2章 方法論</b> .....	<b>18</b>
2.1 調査の目的.....	18

2.2	先行研究での調査方法と問題点.....	18
2.3	本調査の概要.....	19
2.3.1	調査方法の検討.....	19
2.3.2	調査協力者.....	20
2.3.3	調査の手順.....	22
2.3.4	資料の文字化.....	25
2.3.4.1	会話資料の文字化.....	25
2.3.4.2	インタビュー資料の文字化.....	26
2.4	調査データ.....	26
2.4.1	収集された調査データの概要.....	26
2.4.2	接触場面の会話データ.....	26
2.4.3	第三者に評価された韓国人居住者の逸脱.....	28
2.4.4	韓国人居住者の言語バイオグラフィー.....	28
2.5	分析方法.....	29
2.5.1	分析の手順.....	29
2.5.2	会話における日本語の逸脱の分析.....	30
2.5.3	言語バイオグラフィーの語りの分析.....	34
2.5.3.1	語りの分類.....	34
2.5.3.2	韓国人居住者の個人的背景の分析.....	35
2.5.3.3	日本語習得プロセスにみられる転機の分析.....	35
2.5.4	類型論的アプローチによる原則とストラテジーの分析の枠組み.....	36
2.5.4.1	類型論的アプローチの枠組み.....	36
2.5.4.2	言語バイオグラフィーからの原則の分析.....	37
2.6	本論文の構成.....	38
 <b>第3章 言語バイオグラフィーからみた韓国人居住者の個人的背景.....</b>		<b>40</b>
3.1	韓国人居住者の個人的背景.....	40
3.2	KR1の背景.....	40
3.2.1	KR1の経歴.....	40
3.2.2	KR1の社会的ネットワークの特徴.....	41

3.2.3	KR1の語りの特徴	42
3.3	KR2の背景	42
3.3.1	KR2の経歴	42
3.3.2	KR2の社会的ネットワークの特徴	42
3.3.3	KR2の語りの特徴	43
3.4	KR3の背景	43
3.4.1	KR3の経歴	43
3.4.2	KR3の社会的ネットワークの特徴	43
3.4.3	KR3の語りの特徴	44
3.5	KR4の背景	44
3.5.1	KR4の経歴	44
3.5.2	KR4の社会的ネットワークの特徴	45
3.5.3	KR4の語りの特徴	45
3.6	KR5の背景	45
3.6.1	KR5の経歴	45
3.6.2	KR5の社会的ネットワークの特徴	46
3.6.3	KR5の語りの特徴	47
3.7	KR6の背景	47
3.7.1	KR6の経歴	47
3.7.2	KR6の社会的ネットワークの特徴	47
3.7.3	KR6の語りの特徴	48
3.8	KR7の背景	48
3.8.1	KR7の経歴	48
3.8.2	KR7の社会的ネットワークの特徴	49
3.8.3	KR7の語りの特徴	50
3.9	KR8の背景	50
3.9.1	KR8の経歴	50
3.9.2	KR8の社会的ネットワークの特徴	50
3.9.3	KR8の語りの特徴	51
3.10	KR9の背景	51

3.10.1	KR9 の経歴.....	52
3.10.2	KR9 の社会的ネットワークの特徴.....	52
3.10.3	KR9 の語りの特徴.....	52
3.11	KR10 の背景.....	53
3.11.1	KR10 の経歴.....	53
3.11.2	KR10 の社会的ネットワークの特徴.....	53
3.11.3	KR10 の語りの特徴.....	54
3.12	KR11 の背景.....	54
3.12.1	KR11 の経歴.....	54
3.12.2	KR11 の社会的ネットワークの特徴.....	54
3.12.3	KR11 の語りの特徴.....	55
3.13	KR12 の背景.....	55
3.13.1	KR12 の経歴.....	55
3.13.2	KR12 の社会的ネットワークの特徴.....	56
3.13.3	KR12 の語りの特徴.....	56
3.14	本章のまとめ.....	57
<b>第4章</b>	<b>会話場面における韓国人居住者の逸脱の管理.....</b>	<b>59</b>
4.1	第三者による逸脱の評価.....	59
4.1.1	評価の主体と逸脱の認定.....	59
4.1.2	評価された逸脱の概要.....	60
4.1.3	言語的逸脱.....	61
4.1.4	社会言語的逸脱.....	64
4.1.5	社会文化的逸脱.....	70
4.2	当事者による逸脱の管理.....	71
4.2.1	当事者に調整された逸脱.....	71
4.2.2	メッセージの受容と産出に関わる逸脱の管理.....	74
4.2.2.1	逸脱が問題として解決される場合.....	74
4.2.2.2	会話の進行が優先される場合.....	75
4.2.3	メッセージの受容と産出以外の要素に関わる逸脱の管理.....	76

4.2.3.1	逸脱が管理の対象にならない場合.....	76
4.2.3.2	逸脱の否定的要素が緩和される場合.....	80
4.2.3.3	逸脱がコミュニケーションのリソースになる場合.....	83
4.2.3.4	日常的に共有されている逸脱.....	92
4.2.4	韓国人居住者の逸脱の調整ストラテジー.....	98
4.3	本章のまとめ.....	100
<b>第5章</b>	<b>韓国人居住者の通時的な日本語の管理.....</b>	<b>102</b>
5.1	日本語の管理に対する通時的な語りの概要.....	102
5.2	日本語習得の転機.....	102
5.2.1	韓国人居住者の日本語習得の転機.....	102
5.2.2	韓国人居住者による転機の語り.....	103
5.2.2.1	転機のタイプ.....	103
5.2.2.2	初期の転機.....	103
5.2.2.3	初期以降の転機.....	112
5.2.3	韓国人居住者の日本語習得の転機の分析.....	117
5.2.3.1	社会的ネットワークの概要.....	117
5.2.3.2	社会的ネットワークへの参加管理.....	126
5.2.3.3	言語的インプットの管理.....	129
5.3	日本語使用・学習の原則の形成.....	131
5.3.1	日本語の使用・学習の原則とストラテジー.....	131
5.3.2	KR1の原則の語り.....	131
5.3.3	KR2の原則の語り.....	134
5.3.4	KR3の原則の語り.....	137
5.3.5	KR4の原則の語り.....	140
5.3.6	KR5の原則の語り.....	142
5.3.7	KR6の原則の語り.....	143
5.3.8	KR7の原則の語り.....	144
5.3.9	KR8の原則の語り.....	147
5.3.10	KR9の原則の語り.....	148

5.3.11	KR10の原則の語り	150
5.3.12	KR11の原則の語り	151
5.3.13	KR12の原則の語り	152
5.4	アイデンティティ獲得のための投資と原則	153
5.4.1	投資として日本語使用・学習の管理	153
5.4.2	韓国人居住者の想像のアイデンティティの概要	154
5.4.3	韓国人居住者による投資と原則	155
5.4.3.1	KR1の投資と原則	155
5.4.3.2	KR2の投資と原則	157
5.4.3.3	KR4の投資と原則	159
5.4.3.4	KR6の投資と原則	161
5.4.3.5	KR7の投資と原則	162
5.4.3.6	KR9の投資と原則	165
5.4.3.7	KR10の投資と原則	165
5.4.3.8	KR11の投資と原則	166
5.4.3.9	KR12の投資と原則	166
5.5	本章のまとめ	167
<b>第6章</b>	<b>類型論的アプローチからみる習慣化された日本語の管理</b>	<b>169</b>
6.1	韓国人居住者の日本語の管理の階層性	169
6.2	原則とストラテジーの相互依存関係	171
6.2.1	共時的にみた原則とストラテジーの関係性	172
6.2.1.1	原則とストラテジーが自然な相互依存関係をもっている場合	172
6.2.1.2	原則とストラテジーに自然な相互依存関係がみられない場合	174
6.2.2	通時的にみた原則とストラテジーの関係性	187
6.2.2.1	原則の形成に関わる言語管理	187
6.2.2.2	原則の変容に関わる原則とストラテジー	191
6.3	本章のまとめ	200

<b>第7章 結論</b> .....	<b>202</b>
7.1 社会的ネットワークと日本語接触.....	202
7.2 韓国人居住者による外来性管理の特徴.....	203
7.1.1 会話における韓国人居住者の日本語使用.....	203
7.1.2 韓国人居住者の習慣的な日本語の管理.....	203
7.3 移民に対する言語政策と日本語教育への提案.....	205
7.4 今後の課題.....	206
<b>参考文献</b> .....	<b>207</b>
<b>謝辞</b> .....	<b>220</b>

# 第1章 本研究の概要

本章では、まず本研究の背景と目的を述べてから、先行研究を概観する。そして、本研究の理論的背景および枠組みと本研究の位置づけを説明する。

## 1.1 本研究の背景と目的

グローバリゼーションの進展に伴い、国境を越えた人びとの移動が日常的になりつつある。日本と韓国とは地理的・歴史的に深い関係にあり、互いの国の行き来も頻繁に行われてきた。また、近年では人的往来の数的な増加だけでなく、その目的も多様化している(任榮哲<sup>1</sup>・生越、2005)。2016年現在、日本に住む韓国出身者は45万人と日本滞在外国人の約20%を占めており<sup>2</sup>、もはや日本に韓国人がいることは珍しいことではなくなっている。

日本に住む韓国人は「在日コリアン」と呼ばれ、日本で最大のバイリンガル集団として知られている(生越、2005)。在日コリアンは、来日時期によってオールドカマーとニューカマーとに大きく分けられている。オールドカマーとは、日本が朝鮮半島を植民地にしていった時代とその前後に日本に渡った人たちとその子孫を指す。オールドカマーの人たちは、日本に生活の基盤があり、将来的にも日本に居住することが多い。一方、ニューカマーは1980年代以降、ビジネスあるいは結婚、留学などのために来日した人たちとその家族のことをいう。ニューカマーの人たちは、以前は留学を終えた後は韓国に帰国する人が多かったのだが、最近では長期滞在するケースも少なくない(高民定、2010)。こうした日本に住む韓国人は、日本社会において様々なコミュニティを形成しながら、「外国人居住者」として、または「生活者としての外国人」として暮らしている。

これまで、「韓国人」や「韓国語」をテーマとした研究は数多くなされており、日本においてかれらに対する関心が高まっていることがうかがえる。しかし、従来の研究では日韓対照研究が中心となっており、日本人と韓国人とのコミュニケーション問題は、双方の習慣や考え方の違いに起因すると結論づけられることが多かったように思う。また、近年では帰国子女や国際結婚の子どもなど、日本に住む韓国人も多様化しており、オールドカマーとニューカマーというくくりだけでは、その特徴をとらえることは困難になりつつある。

こうした状況をふまえ、本研究では在日コリアンとしては比較的新しい世代にあたる韓

---

<sup>1</sup> 本論文では同姓の韓国人研究者による文献が多いため、本文中も韓国人はフルネームで表示する。

<sup>2</sup> 法務省「平成28年末現在における在留外国人数について」(2017年3月17日発表)による。

<http://www.moj.go.jp/content/001233904.pdf>

国人を対象とする。2000 年前後に来日した韓国人は、比較的日本社会の韓国への理解が深まった時期に来日しており、それから 5 年から 10 年という長い間日本で生活を営んでいる。そのため、かれらは自分が「韓国人」または「外国人」であることをそれほど隠す必要のない環境のなかで暮らしており、日本に同化するというよりは、独自の適応の仕方しながら日本人とのコミュニケーションを実現させてきたと予想される。それでは、このような韓国人居住者は実際にどのようにして日本人とコミュニケーションをおこなっているのだろうか。従来の研究では、韓国人と日本人のコミュニケーションスタイルの違いから、誤解や摩擦が生じることが多いと言われてきた(任榮哲、2006)。このような違いをどのようにして乗り越え、日本人と良好な関係を構築しているのだろうか。

そこで本研究では、日本に長期滞在する韓国人のうち、日本人との接触が日常的にある人、つまり日本人と人間関係が構築されている人を対象とし、日本でどのような生活を送っているのか、日本人とどのようにしてコミュニケーションを成功させているのかを検証していくことにした。韓国人の場合、他の出身からの外国人に比べ、日本人と外見の違いがほとんどなく、文化的にも類似している部分が多い。そのため、日本において韓国人がみずから外国人であることをあらわす要素は日本語使用にあると考えられる。つまり、接触場面においてどれくらい日本語らしい日本語を話すか、または外国人らしい日本語を話すかによって、かれらの外来性が表示されたり、潜在化されたりするのである。そこで本研究では、日本に住む韓国人の日本語使用に焦点を当てる。かれらが実際の接触場面においてどのような日本語を使用しているのか、それが日本人との関係においてどのようにとらえられているのかをさぐる。さらに、こうした日本語使用の特徴や意識がどのような経過をたどって形成されてきたのかを日本語習得のプロセスから検証する。これらの考察から、日本に住む韓国人がみずから使用する日本語を管理することによって外来性を表示していること、その日本語の管理は習慣化されていること、そして習慣化された日本語の管理をおこなうことによって、韓国人が個々の接触場面でもっともふさわしいとみなされる日本語を使用し、望ましい自分自身を実現しながら参加している様相を明らかにすることを目的とする。

## 1.2 日本に移住する韓国人

前節で述べたとおり、歴史的・地理的な要因によってこれまで多くの韓国人が日本に移住してきている。こうした日本に在住する韓国人の位置づけも時代によって異なっており、

呼び名も研究分野における捉え方によってさまざまなものが使われている。その中でも、最も目にする機会が多いのは「在日コリアン」であろう。これはおもに民族集団を想定するもので、「在日朝鮮人」もしくは「在日韓国人」と区別される(前田、2005)。しかし、高泰洙(2009)はこの「在日コリアン」について、一般的に「在日」、「在日朝鮮人」、「在日韓国・朝鮮人」、「在日コリアン」など人によってさまざまに用いられており、その範囲も多様であり、この概念を整理することは容易ではないことを指摘している。

一方で、近年はグローバル化の影響で国境を超えて移動する人びとが注目されるようになり、日本に住む韓国人も日本への「移民」としてとらえられることが多くなった。それにともない、「韓国人移民」といった呼び名も出現してきている(高民定、2014)。

本研究で対象とする韓国人も民族集団というよりは移民であることを想定している。ただ、人々の移動よりは日本社会に住む人びとという特徴に焦点を当てるため、本研究においては、対象となる韓国人を「日本の韓国人居住者」もしくは「韓国人居住者」と呼ぶこととする。

### 1.3 韓国人居住者に関する先行研究

韓国人居住者（以下、KR とする）に関する研究はさまざまな分野で長い間蓄積されてきている。本節では、これまでの韓国人居住者をめぐる研究を概観し、韓国人居住者の特徴とこれまでとられてきた研究アプローチを提示する。

#### 1.3.1 言語接触からみた韓国人の日本語使用

韓国人の日本語に関する研究は、言語接触研究における対象の 1 つとして、在日韓国・朝鮮人の言語生活について実態解明が試みられ、言語使用意識や言語使用の特徴について考察がおこなわれてきた(任榮哲・生越、2005)。在日コリアンの言語行動について代表的な研究は、任榮哲(1993)である。任榮哲(1993)は、在日コリアンがどのような話し手、どのような場面で韓国語と日本語を使い分けているのかについて大規模なアンケート調査を行い、在日コリアンが話し相手と場面によってことばを使い分けており、話し相手が年上の場合、または私的な場面で韓国語がより多く使われていることを明らかにした。

さらに、在日コリアンの言語使用についてはコード・スイッチング研究が盛んに行われている。日本語と韓国語間のコード・スイッチング研究には、黄鎮杰(1994)、金美善(1998、2001)などがある。黄鎮杰(1994)は、在日韓国人一世と三世間で交わされた対話資料の中か

ら、切り替えの用例を単語レベル、区・節レベル、文レベルごとに分析し、どのレベルで切り替えが頻繁に起こるのか、また切り替えに世代差がみられるかどうかを明らかにした。また、金美善(1998、2001)は、日・韓混用コードで生成される複合動詞について分析している。また、吉田(2005)は「ニューカマー」に注目し、韓国系民族学校の高校生を対象に、来日時期とコード・スイッチングの特徴について、談話資料をもとに分析を行っている。さらに、郭銀心(2006)では、日本で幼少期を過ごした帰国子女の会話データをもとに、日本語と韓国語間のコード・スイッチングの特徴を考察している。

このように、韓国人の言語行動に関する研究では、在日コリアンをはじめ、ニューカマーや帰国子女を対象に、場面による使い分けやコード・スイッチングについて考察が行われている。

### 1.3.2 第二言語習得からみた韓国人日本語学習者

日本語学習者としての韓国人の日本語習得についての研究は、言語面、社会言語面においておこなわれている。

言語面に関しては、音声的側面を扱った研究と文法を扱った研究が目立つ。音声に関する研究は、関光準(1989)、松崎(1999)において韓国人学習者の母語干渉による日本語の発音の問題がまとめられている。文法に関しては、安龍洙(1996)の指示詞、許明子(2008)の受け身表現、若生(2010)のノダ表現、高木(2014)の助詞などさまざまな文法要素について研究が行われている。

一方、社会言語学面に関しては、李承禧(2004)、稲熊(2005)、松田他(2007)などが挙げられる。李承禧(2004)では、相手に希望・意思を表す待遇表現について、アンケート調査から分析を行い、「(し)てあげる」、相手を「あなた」と呼ぶことや、自称詞「私」の過剰使用などが失礼につながっていたとことを指摘している。また、稲熊(2005)では、申し出場面の授受表現について談話完成テストにより考察を行った結果、韓国人学習者は「あげる」系の動詞を、相手の力関係にかかわらず過剰使用する傾向にあることを明らかにしている。松田他(2007)では、依頼場面に日本語表現についてアンケート調査により分析を行った。その結果、依頼場面における韓国人学習者の不自然な表現の使用は、韓国語の影響を受けていることを指摘した。

このように、韓国人の日本語習得に関する研究は主に母語からの転移について考察を行ったものが多い。これは、韓国語と日本語の類似性からきていると考えられる。また、調

査方法はアンケート調査や談話完成テストが中心となっており、実際の使用場面を資料としたものは少ない傾向にある。

### 1.3.3 韓国人が参加する接触場面と言語管理研究

#### 1.3.3.1 接触場面

韓国人と日本人が参加するインターアクション場面の研究は、これまでおもに接触場面研究として行われてきた。

接触場面(contact situation)は「外国人場面」(ネウストプニー、1981)としても知られ、異なる言語、文化背景をもつ参加者間のインターアクション場面を指す(Neustupný, 1985, 1994; Fan, 1994; ファン 2006)。接触場面は母語話者同士が参加する母語場面とは本質的に異なっており、その場面におけるコミュニケーションに独特の特徴をもっている(ネウストプニー、1995)。

接触場面の概念は、場面性と参加者の視点によって特徴づけられる。

Neustupný(1985:44)は、場面の根本的な区別は文化内と文化間であるとし、文化内の場面は「内的(internal)」場面、文化間の場面は「外国人(foreign)」または「接触(contact)」場面として提示した。また、場面は具体的なインターアクション行為がおこなわれる場であり、時間や場所、参加者、インターアクションの目的、メッセージの形式や内容、話し方やスタイルなどのコミュニケーション構成要素によって構築されている(Hymes, 1974)。個々の場面では、これらのコミュニケーションの構成要素によって適切なデフォルトが設定されるものとみなされる。そして、場面ごとにデフォルトを設定するのに適用されるコミュニケーション要素の束は(基底)規範(base norm)と呼ばれる(村岡、2016a)。

また、接触場面においては、参加者の視点からその場面で生じる現象をとらえようとする。まず、接触場面の成立も、単に外国人と日本人がいれば接触場面として認定されるわけではなく、参加者が「特別な場面」として認めることによって接触場面となりうるのである。また、接触場面においてコミュニケーション問題を考える際にも、参加者がどのような不適切さを認識し、コミュニケーションの過程で処理していったかという視点から分析がおこなわれる。

#### 1.3.3.2 外来性

接触場面の諸現象は、参加者の外来性(foreignness)、または外国人性(foreign factors)に由来

し、コミュニケーションの場が母語場面から接触場面へと移行する引き金となる (Neustupuný, 1985; 1994; フェアブラザー、2003; 村岡、2010)。

Fan(1994)によると、外来性は異なるスピーチ・コミュニティに属している参加者間にある差違であり、スピーチ・コミュニティの条件をもとに言語的外来性、社会言語的外来性、社会文化的外来性の3つに分類される。言語的外来性は、メッセージの伝達や受信、メッセージの形式に関わるもので、メッセージの不理解や話す声の大きさ、イントネーションなどが含まれる。社会言語的外来性はコミュニケーションに関わるもので、メッセージのスタイルや人物呼称、会話の話題や進行、非言語行動なども含まれる。社会文化的外来性は、言語以外の文化的な側面に関わるもので、参加者の個人的な背景や考え方、価値観などが含まれる。

こうした外来性は、従来はコミュニケーション問題の引き金としてとらえられ、否定的に評価される傾向にあった。しかし村岡(2010)は、日本の外国人居住者が日本の標準的な規範にしたがうだけでなく、独自の規範によって接触場面に参加している事例から、外来性を取り除くべき問題ではなく、管理すべき問題として考えていく必要性を論じている。

村岡(2006)では、接触場面における問題を3つの類型として提示している。1つは、解決を目指した問題で、もう1つは解決できない問題である。たとえば、意味のわからない語彙があった場合には、相手に尋ねたり、辞書で調べるなどして意味を理解し、解決することができる。一方、発音の外国人なまりや在日外国人のリテラシーの問題は、解決できない問題とされる。また、解決できない問題への対処としては、問題の負担を軽くするストラテジーや問題を潜在化するストラテジーが考察できるという。さらに、3つめの類型としては、インターアクションを促進するリソースとしての問題がある。これは、問題がインターアクションの障害としてではなく、物珍しいもの、新しいもの、自分が持っていないものとして肯定的に評価される場合を指している。

### 1.3.3.3 言語管理理論

接触場面における言語問題を考察するにあたり、問題のプロダクト分析とは別に、問題の認知から始まる一連の問題処理のプロセスを分析することが求められる(高、2016a)。この分析のためのモデルは「言語管理理論」(Neustupuný, 1994; ネウストプニー、1995)と呼ばれ、接触場面の会話などの具体的な言語行動の中から言語問題をとらえようとしている。そして、この言語管理のプロセスは、以下のようなモデルが設定されている。

- 第1段階 規範(norm)からの逸脱(deviation): 規範からの逸脱が現れる
- 第2段階 留意(note): 逸脱が留意される可能性がある
- 第3段階 評価(evaluation): 留意された逸脱が評価される可能性がある
- 第4段階 調整(adjustment)の計画: 評価された逸脱に対して調整が選ばれる
- 第5段階 調整の実施(implementation): 選ばれた調整が実施される

上記の管理プロセスは必ずしも5段階のすべてをたどるとは限らない。逸脱が留意されても評価されず、プロセスが途中で終わることもある。また、高(2016a:27)では、このプロセスのそれぞれの段階の特徴について、以下のようにまとめている。

- (1) 逸脱の留意: すべてが参加者によって留意されるわけではない。留意は必ずしも意識を意味しない。どの逸脱が留意されるか、あるいはされないのかを調査することは言語問題の目録を作成する上で重要であるとしている。
- (2) 逸脱の評価: 逸脱が留意されてもそれが必ずしも評価を伴うとは限らない。次の段階に行かず、管理プロセスが終わってしまう場合がある。しかし、逸脱に対する積極的な評価は言語問題の調整や解決につながるとされる。
- (3) 逸脱の調整: 参加者が必ずしも積極的に調整を行うとは限らない。調整計画があっても遂行しない場合もある。参加者が使用した調整ストラテジーをはじめ、規範との関係についても調べるのが重要である。

#### 1.3.3.4 韓国人居住者が参加する接触場面の言語管理研究

韓国人居住者が参加する接触場面の研究は他の分野に比べると少ないが、最近では徐々に研究が蓄積されてきている(全鍾美、2010; 高映喜、2012など)。ただ、韓国人の言語管理について研究を行ったものはまだ多くはない。キム・キョンソン(2008)では、韓国人超上級日本語話者の事前調整について韓国人と日本人との接触場面を対象とし、考察を行っている。その結果、韓国人超上級日本語話者は、表層化される前に逸脱が起きないように事前調整を多く行っていること、それに対して日本人は留意しないことが明らかになった。また、高民定(2005)では、日本における韓国語の非母語話者と韓国人母語話者との接触場面を調査し、言語問題を明らかにしている。それによると、非母語話者には文法能力だけでは

なく、文法外コミュニケーションによる逸脱もあり、文法外コミュニケーションの逸脱に対して母語話者は否定的な評価を行う傾向にあったことが報告されている。

## 1.4 本研究の理論的背景

### 1.4.1 韓国人居住者の外来性

本研究では、外来性を Fan(1994)の定義にしたがい、スピーチ・コミュニティの参加者間の差違を示すものとする。

KR の特徴的な外来性で知られているものには次のようなものがある。まず、言語的外来性に関しては、第二言語習得研究では韓国語の負の転移からくる韓国人学習者特有の誤用が当てはまる。たとえば、音声面では濁音や長音など、また直訳語彙などが挙げられている(尹喜貞, 2004; 高村 2004 など)。また日本人からみた場合、韓国人は「早口で話す」イメージがあるという(長谷川, 2011)。社会言語学的外来性としては、おもに敬語の使い方などが外来性として捉えられていることが報告されている(金由那, 2006)。また、日本人には「物事をはっきり言う」、「感情を表に出す」といった発話行為も留意される傾向にあるという(長谷川, 2011)。社会文化的外来性については、日本人に「キムチを食べる」、「エステに行く」といった生活習慣、また情熱的な人が多いイメージがあるという。最近では韓流ブームの影響を強く受けており、韓国人の歌手や俳優の行動から外来性を意識することも多いとされている(長谷川, 2011)。

### 1.4.2 言語使用の共時性と通時性

19 世紀までの言語学は歴史言語学が主流であった。その中でも言語の歴史的な変化をさぐるために同じ系統に属する複数の言語を比較する比較言語学が盛んに行われてきた。20 世紀になると、言語学における「通時」と「共時」という概念がソシュール(1916)によって初めて提唱された。ソシュールは、言語研究の切り口として「通時言語学」と「共時言語学」を区別し、前者を時間の流れに応じた言語の変化(通時態)を扱う言語学、後者を時間の干渉を排除し、言語の体系(共時態)を扱う静的な言語学であるとした。そして、19 世紀までの言語学では通時的な言語変化の研究に焦点を置きすぎていたこと指摘し、言語の共時態を研究することが重要であると主張した。これ以降、言語学の中心は歴史言語学から共時言語学へと移行していった。

共時的言語学のうち、社会言語学における代表的な研究には、Labov(1972)の言語変異理

論が挙げられる。この理論では、あるスピーチ・コミュニティにおける言語変異が性別、年齢、社会階層、エスニシティなどといった社会的要因と相関関係にあることを実証し、コミュニティの人びとの社会的属性の違いによって見られる言語のバリエーションを明らかにしている。

言語接触研究では、人の移動にともない、異なる言語が接触することによって生起する言語現象や言語変異に注目し、ピジン(pidgin)やクレオール(creole)をはじめとした接触言語の分析が進められてきた(Weinreich, 1953; Haugen, 1966 など)。一方、複数の言語変種が併存しているコミュニティ内において、それぞれの変種が場面や機能によって使い分けられている社会状況はダイグロシア(diglossia)と呼ばれ、社会システムとして決められている安定した二言語併用の状況として特徴づけられている(Ferguson, 1959)。さらに、個人が二言語を使用している状態はバイリンガルとされ、それぞれが社会の領域や場面によって役割を持ち、使い分けられていることが示されている(Fishman, 1967)。また Clyne(1990)は、移民による言語の使用状況を調査し、移民先の社会において移民の地域言語が社会的・文化的な機能をもって使用されている実態から多言語社会の問題を論じている。

このように、ソシユール以降の言語学は共時性が優位とされ、それは言語変異や言語接触の研究にも反映されている。言語使用の状況は安定的または固定的なものとして捉えられ、個人よりもその社会やスピーチ・コミュニティの全体性が意識されてきた。

しかし、人びとの移動が日常的になった現代の社会では、移動の状況やそれによる言語使用も多様化しており、国やスピーチ・コミュニティといった枠で捉えることは困難である。また、移動が繰り返されたり、長期化したりすることによって、言語使用は安定的なものではなくなっている。こうした状況の中で、最近では言語学的エスノグラフィーにおいて移民全体の言語使用ではなく、移民の主体性をもって言語使用の多様性を捉えること、また個々の言語使用を超えて、その前後の歴史的なプロセスも扱うことの重要性が指摘されている(Blommaert, 2010; Rampton et al, 2014 など)。Blommaert and Backus(2013)は、あるコミュニティ・メンバーが用いる言語リソースの総体として、言語レパートリー(linguistic repertoire: Gumperz, 1964)を取り上げ、移民の言語レパートリーは所属するコミュニティとの関連よりも、個人が歴史的にたどってきた軌跡によって示されるものであるとしている。また、Muraoka, Fan and Ko(2016)では、移民の言語レパートリーは移民個人による言語管理の蓄積によって形成されることを指摘している。このように、最近の移民の言語使用に関しては、移民個人による言語使用について、通時的なプロセスを考慮に入れてとらえよう

とする研究が進められている(ファン、2017)。

### 1.4.3 ライフストーリーの研究

#### 1.4.3.1 ライフストーリー研究

通時的な視点から対象者を考察する研究として代表的なものにライフストーリー研究(Denzin 1989, 桜井 2002 など)が挙げられる。

ライフストーリーは、個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語で、また個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つのことである(桜井、2012:6)。ライフストーリー研究は社会学を中心にさまざまな分野で使用されており、近年では日本語学習者や日本語教育の多様化にともない、日本語教育の分野でもライフストーリー研究が行われるようになった。そして、対象者個人の語りを通時的にみることによって得られた知見をもとに、教育への応用や新たな方向性が提言されるようになった(中山、2007; 三代、2015 など)。

韓国人日本語学習者を対象とした研究には、中山(2007; 2008; 2016)、三代(2008、2009)などが挙げられる。中山(2007; 2008)は、韓国人留学生を対象にライフストーリー・インタビューをおこない、日本での社会的ネットワークと「自分らしさ」との関係、大学生活への満足度について論じている。また、三代(2008、2009)では、韓国人留学生のライフストーリーから、留学生が日本の生活でいかにして人間関係を構築し、コミュニティへの参加を実現していく様相を明らかにしている。

#### 1.4.3.2 ライフストーリーにおける転機、エピファニー

人びとが自分の過去の人生を振り返るとき、その後の人生を変えるような重大な経験をした時期を見いだすことがある。桜井(2002:236)では、このような経験を「転機」とし、この経験によって自己の新しい意味体系を獲得し、新しい自己像やアイデンティティ形成に関わっていく過程であると定義づけている。

また、デンジン(1992)はこのような個人の人生の転換点となる重要な契機を「エピファニー」という概念を用いて解釈している。デンジン(1992:202)によると、エピファニーは他者との間に生じる出来事の中で起こるもので、相互行為的な状況の中に位置づけられるという。

さらにデンジン(1992)は、エピファニーには4つのタイプがあると指摘している。1つは、「主要なエピファニー」で、人生のあらゆる基盤に触れる契機である。2つめは「累積的なエピファニー」で、長い期間に渡って進行中の出来事に対して起きる瞬時に激しい反応を意味している。3つめは「照射的、副次的なエピファニー」で、人との関係の中での主要な問題的契機を副次的だが象徴的に示す出来事を指す。4つめは「再体験的なエピファニー」で、その出来事が後になって想起されたり活性化されるときに起こるものである。これらは相互に依存しており、あるひとつの出来事が個人や他者との関係の中で転化することもありうるという。このことから、転機やエピファニーはある1つの出来事や体験によって決まるものでも、人生の中で唯一1度だけ起こるものでもなく、いくつかバリエーションがあり、それは人生のさまざまな関係の中でとらえかたが変化するものであるととらえることができる。

また、ある出来事や経験が転機あるいはエピファニーになりうるかどうかは、ストーリーのプロットを手がかりにして解釈できるという(桜井・小林、2005:42)。プラマー(1998)は、個人的なナラティブのストーリーは苦難を受け(suffering)、切り抜け(surviving)、克服した(surpassing)話に焦点が当てられるとしている。桜井(2012)はこれをもとに、ストーリーのプロットの基本として、まず緊張をもたらす苦難があり、つづいて危機(転機、エピファニー)が訪れ、解決(変身、克服)がはかられるという3つの要素を提示している。つまり、ある出来事や経験が転機となるには、その出来事や経験そのもので決まるのではなく、その前後の苦難や解決といった流れによって決定づけられると言える。そして、このような過程を経ることによって、人は新しい自己の概念や意味体系を獲得することができるのだという(桜井、2002:240)。

#### 1.4.4 接触場面に向かう言語管理の研究

##### 1.4.4.1 言語バイオグラフィー研究

ライフストーリー研究のほかに、通時的な視点から対象者を考察する研究として、個人の言語経験を語る言語バイオグラフィーの研究が挙げられる(Nekvapil, 2003)。

Nekvapil(2003)は、1920年代から1930年代に生まれ、チェコ共和国で育ったドイツ人に対してこれまでのライフストーリーをインタビュー調査した。その語りの中から、当時から現在までの言語環境を取り出し、言語がその人の人生においてどのような役割や意味を持っているのかを分析した。そして、対象となったチェコのドイツ人群の典型的な言語バ

イオグラフィーの特徴を提示し、個人の言語バイオグラフィーには個人的な問題だけではなく、他の個人のバイオグラフィーや家庭言語バイオグラフィー、さらに特定の言語コミュニティの言語環境も含まれることを指摘した。こうした個人の語りから得られる言語バイオグラフィーを蓄積させていくことで、典型的な言語バイオグラフィーが抽出できるのだという。さらに、話し手が言語習得や言語使用について話すときには、その言語の話し手およびそのコミュニティに対する態度の表明が分析できるとした。そしてこれらの分析から、言語バイオグラフィー研究によって、歴史的プロセスにおいてその人が置かれていた言語環境とそれに対する態度が明らかにできると主張している。

これ以降、外国人移民や多言語使用者の言語使用を通時的に研究する方法として、言語バイオグラフィーを援用した分析が進められるようになった(村岡、2016; 今、2012; 高民定 2016 など)。村岡(2016)では、日本に滞在する多言語使用者を対象に、多言語使用の現在の状況と過去の言語使用についてインタビュー調査を行った。そして、対象者が言語形成を行った社会の言語環境と語られた言語習得、言語使用の経験と態度について言語バイオグラフィーを提示した。村岡(2016)ではさらに、対象者が実際の会話において行っている自己の位置づけとして *footing*(Goffman, 1981)の分析を行い、会話における言語使用と対象者の言語バイオグラフィーから多言語使用者の接触場面に向かう管理(村岡、2010)を分析することを試みている。また、今(2012)では、日本に居住する韓国人女性に焦点を当て、彼女の言語バイオグラフィーから彼女が現在の日本語使用に至るまでの道すじを記述し、接触場面や日本語使用に対する方針とその形成過程を明らかにした。高民定(2016b)は日本語外国人居住者の言語バイオグラフィーから、かれらの日本語使用を含む言語使用意識と日本語習得に対する評価について、外国人居住者の言語環境に注目して考察をおこなっている。これらの研究は、最終的には次節で説明する「接触場面に向かう言語管理」(村岡、2010)を明らかにすることを目的としており、言語バイオグラフィーと接触場面に向かう言語管理の研究は通時的な言語管理をさぐるために一緒におこなわれることが多い。

#### 1.4.4.2 接触場面に向かう言語管理

接触場面研究ではもともと言語使用を個人の主体的な言語管理のプロセスと個人が参加する場面から捉えようとする立場にあるが(ファン、2006)、さらに最近の動向では通時的な文脈から言語管理の軌道をとらえ、接触場面に向かう言語管理を明らかにしようとしている(Muraoka, Fan and Ko, 2013; 村岡、2016 など)。

外国人居住者が来日初期や日本人との接触経験が少ないころに接触場面に参加した場合には、接触場面においてさまざまな言語問題が出現し、なんらかの対処を試みていたと推測される。このような場合の言語問題やその対処のプロセスは、「接触場面における言語管理(language management within contact situation)」として、従来の言語管理プロセスのモデルによって考察することができる。一方、接触場面への参加が日常的になった場合には、言語管理プロセスによる言語問題の処理は参加者によって何度も繰り返されており、次第にその場その場で対処されるものではなく、習慣的な対処のパターンや原則が形成されていく(村岡、2016a)。このような習慣化された言語に対する行動は「接触場面に向かう管理(language management towards contact situation)」と呼ばれる(村岡、2010)。この管理は、従来のような個別の接触場面のみを研究するだけでは観察することはできない。そのため、参加者の接触場面の経験や言語使用の変化について言語バイオグラフィーを通時的に考察することによって、記述する試みが進められている(村岡、2010; 2016b; 2017; 今、2011; 2012; Muraoka, Fan & Ko, 2013; 高民定、2014; 2016b)。このような通時的・共時的という視点を取り入れた研究によって、従来の研究では取り上げられていなかった外国人居住者の習慣化された言語管理(村岡、2010; 今、2011; 2012)や、個人の言語レパートリーの変容がそれまでの接触場面への参加によって生じた言語管理の軌道(trajjectory)であること(Muraoka, Fan & Ko, 2013)、移民の言語習慣と評価の多様性と言語環境との関わり(高民定、2014)、外国人移住者の出身地域における言語環境と日本語使用意識や習得問題との関係(高民定、2016b)、また移民の言語使用の原則と評価がどのような言語管理の軌道によって形成されてきたか(村岡、2016b)、通時的な語りからみた日本語能力の自己評価の構築(村岡、2017)などが明らかにされている。

#### 1.4.4.3 ネウストプニーの類型論的アプローチ

言語バイオグラフィーの語りによって接触場面に向かう言語管理を分析する際、語りによって取り出される接触場面に対する管理の方針には、さまざまなレベルの異なる方針があり、それらは相互に関連付けて考えることができる(村岡、2010; 2018)。こうしたレベルの異なる方針を階層的な関係性は、ネウストプニー(1989)の類型論的アプローチによって説明することができる(村岡、2010)。

類型論的アプローチは、相互依存関係にある現象のセットを 4 つの階層において理解しようとするもので、それぞれ一般性のレベルによって、決定要因、マクシム(大原則)、スト

ラテジー、普通規則・併記規則に区別されている(ネウストプニー、1989)。村岡(2010)はこれを言語使用に関する語りにおいてもこの関係性が想定できるとして、社会又は個人の広い領域に適用可能な言語についての態度として表れるマクシムまたは原則があり、その下にそれよりも狭い領域に複数のインターアクションに応用できる習慣化された事前管理としてのストラテジーがあり、さらに、下位に位置づけられる一般規則と併記規則が、ディスコースにおける言語生成と言語管理のために適用されるとしている。また、こうした相互依存関係をもった階層性の性格について、以下の点を指摘している。

(i) ネウストプニーが指摘しているように、これらの関係はゆるやかな相互依存関係としてあり、必ずしも構造主義的な意味での階層性が含意されるわけではない。相互依存関係は顕在化されていない言語意識にも開かれた系をつくっていると考えることも可能である。

(ii) これらの相互依存関係について、通常の(unmarked)言語使用であれば、規則とストラテジーとマクシムの間に自然な相互依存関係が見られるが、ときにはマクシムがルールとの間に強い関係を作っている場合(e.g. 社会的・政治的なマクシムが規則を縛っている)や、マクシムとストラテジーが対立しているように見える場合(e.g. 経験してきた場面や状況によってマクシムとは異なるストラテジーを形成せざるをえなかった)、などの矛盾をはらんだ相互依存関係がありうる。

(iii) 相互依存関係を開かれた系としても構築していくとすれば、そこに含まれる規則、ストラテジー、マクシム、決定要因にはある程度、雑多な言語意識が含まれざるを得ない。重要なことは、あくまでも階層的な関係性であり、階層内のメンバーシップではないと考えられる。

以上のように、言語使用の管理の語りは相互依存的な関係はゆるやかな関係であり、語られていない原理とも関連しうる開かれた系としてとらえることができる。一方で、ある現象を見た場合、それぞれの原理の間に不整合が観察されることもありうることも指摘されている。さらに、ルールのレベルの言語使用や言語管理を明らかにするためには、相手側の言語使用や言語管理を無視することができないという面もある。接触場面に向かう管理を類型論アプローチから考察するには、こうした関係性を明らかにしていく必要もある。

#### 1.4.5 Norton の第二言語習得論

第二言語学習者の言語習得を目標言語社会との関わりから論じたアプローチに Norton のアイデンティティ理論がある。

Norton(1995)は、言語学習を自己が獲得しようとしているアイデンティティへの投資(investment)(Bourdieu1997)として捉え、言語習得をアイデンティティ交渉のプロセスから理解するよう提唱した。Norton(1995)では、アイデンティティを「自分と社会との関わりをどう受け止めるか、その関係が時と空間を超えてどのように構築されているか、そして未来に対して自分の可能性をどう見るかということを目指す」と定義している。そして、アイデンティティとは本質的で固定的なものではなく、多様で、矛盾があり、ダイナミックで時と空間とともに変化するものだとしている(Norton, 2000:125)。また Norton は、言語学習において学習者がこうなりたい、このようなコミュニティであってほしいという未来の想像に焦点を当て、こうしたアイデンティティをそれぞれ「想像のアイデンティティ」、「想像のコミュニティ」と名付けた(Norton and Toohey, 2011)。

Norton(1995)では、学習者が第二言語習得に投資するのは、アイデンティティを獲得するための資源・資本を得られるからであるとしている。つまり、第二言語に投資することによって学習者は、より広範囲の象徴的リソース(言語、教育、交友関係など)および物的リソース(資本資源、不動産、お金など)を手に入れられると認識しており、やがてまわりまわって、自分の文化的資本(学歴などの個人的資産)を増やすと考えているからであるという。

#### 1.4.6 社会的ネットワーク

外国人居住者の社会参加という視点からの考察には、社会的ネットワークが関わる。

社会的ネットワークの概念は、小集団や企業組織、国家、国際システムまでさまざまなレベルの分析に適用され、数多くの研究がおこなわれている(カドゥシン、2015)。個人レベルの社会的ネットワークについて Milroy(1987:178)は、個人によって構築された社会的関係性であると定義し、個人の多様な言語使用の様相が分析可能であると指摘している。また、ネウストプニー(1997)は、ネットワークを個人が個別的な場面に参加する行動ネットワークの繰り返しによって形成されるとし、「あるプロセスの参加者がどのように配置され、どのように関わりあっているかということの意味する」と定義づけている。以上の概念から、本研究における KR の社会的ネットワークは、個人が参加する行動ネットワークを基盤として構築される社会的な関係性として位置づけることができる。

日本語習得と社会的ネットワークについては、日本語学習者がおこなう学習ストラテジーの中の社会的環境に働きかける社会的ストラテジーの 1 つとして、学習者の日本語能力の高さと社会的ネットワークの広さや接触時間との関連性が明らかにされている(春原、

1992; 伴・宮崎他、1997; 内海・吉野、1999; 遠藤・宮崎、2003 など)。また、異文化コミュニケーションの視点からの研究では、留学生にとって友人をはじめとした人間関係の形成は、言語習得だけでなく、文化理解や学習動機などにも影響を及ぼしており、充実した留学生活を送るうえで重要であることが指摘されている(田中、2000; Fraser, 2002; Isabelli-Garcia, 2006; 山川、2012)。このように社会的ネットワークは、KR の日本語習得や日本生活にさまざまな影響を及ぼしていると考えられる。

#### 1.4.7 外国人の日本語に対する評価研究

外国人個人による言語使用と言語管理に関わる研究が進む一方、言語教育分野では言語学習者に対する母語話者の評価研究が行われている。1970年代から1990年ごろまでの評価研究は、コミュニケーション・アプローチを中心とした当時の言語教育の流れにおいて盛んになっていた誤用分析(Corder, 1967; Burt & Kiparsky, 1974)の研究と深く関わっている。この時期の評価研究では、誤用の重篤性(error gravity)が注目され、学習者の誤用が受け手にとってどれくらい許容されるものなのかについて、その重篤性の一般的な順序などをさぐる研究が進められた。1990年代以降は、それまでの誤用の許容度よりも、評価の際にどのような観点が重視されるかという点が注目されるようになり、教師と一般母語話者といった評価者の属性によって評価の基本方針がどのように異なるのかが研究の重要な関心事となった(宇佐美、2014:50)。日本語学習者を対象とした評価研究としては、深沢(1982)の誤用の重要性に関する研究、日本語教師と一般の日本語母語話者による評価を比較した研究(趙南星、1991; 小池、1998; 河野・松崎、1998 など)、一般の日本語母語話者による評価の特徴を考察した研究(原田、1998; 石崎、2000; 渡辺、2003; 野原、2011; 崔文姫、2012 など)。また最近では、日本語学習者だけではなく、生活者としての外国人の日本語運用までを考慮に入れ、これらに対する日本人の評価を問い直すことを目的に、日本人の評価感や評価プロセスを明らかにする研究も進められている(宇佐美、2014)。

これらの評価研究は、評価の主体が第三者である点で共通している。一方、接触場面における言語管理の研究では、評価の主体は当事者である。高民定(2013)では、特定のインターアクションの中で、当事者である参加者が認知した問題に対しておこなう参加者自身による評価を「当事者評価」とし、第三者評価と区別している。

以上のように、外国人が使用する日本語に対する評価は、評価の主体によって、評価の対象となる事象や評価の意味も異なってくる。

## 1.5 本研究の位置づけ

本研究では、KR を接触場面の参加者として位置づけ、KR による日本語の管理は、KR の外来性によるものとする。とくに KR の場合、外見の外来性はそれほどみられないため、言語的外来性と社会言語的外来性が強く意識されることになる。

KR の通時的な日本語の管理は、習慣化された接触場面に向かう管理だとする立場に立つ。接触場面において実施されてきた日本語の管理の蓄積の結果、KR が接触場面に対して一定の方針を持つようになり、それが習慣化されていくものとして日本語の管理をとらえる。

また、KR の通時的な日本語の管理を説明していくにあたり、ライフストーリー研究や言語バイオグラフィー研究の一部の概念および方法論も用いる。さらに、KR の社会への参加という視点から KR の日本語の使用や学習を考える際には、社会的ネットワークへの参加および Norton の投資としての日本語習得の理論を援用する。

以上のように、本研究では、接触場面における KR の日本語使用、および習慣化された日本語の管理について、基本的には Blommaert(2010)のアプローチや接触場面研究の立場にたちつつ、そこに関連する諸理論を取り入れながら分析・考察を進めていく。

## 第2章 方法論

本章では、先行研究における調査方法を概観し、問題点を指摘する。それを踏まえた上で、本調査で採用した調査方法と分析の枠組みについて詳述する。

### 2.1 調査の目的

本研究では、日本に長期滞在している韓国人が接触場面においてどのような言語管理を行っているか明らかにすることを目的とする。日本に長期滞在している韓国人は、来日前から現在まで、さまざまな学習経験や接触経験を積んできており、現在の管理はその蓄積の結果である。したがって、本研究では、韓国人が現在接触場面でおこなっている言語管理だけでなく、言語管理の通時的な側面を分析するための調査も必要とされる。また、本研究が対象とした韓国人は日本人との接触場面に日常的に参加しており、日本語能力も上級以上であることから、個々の場面の中で日本語問題が生じ、それが調整されることはそれほど多くないと予想される。むしろ、かれらの日本語使用は習慣的なもので、意識しながら日本語を話すことは少ないであろう。

本調査では、こうした日本に長期滞在する韓国人の特徴を考慮し、通時的および共時的な言語管理を分析するための方法論を検討した。以下ではまず先行研究の調査方法とその問題点をまとめ、本研究が採用した方法論および調査内容を説明する。そして、調査によって収集されたデータ分析の枠組みを提示する。

### 2.2 先行研究での調査方法と問題点

これまでの対象者を通時的観点から考察する研究としては、社会学におけるライフストーリー研究が代表的である(Denzin, 1989; 桜井、2002 など)。

ライフストーリー研究の手法としてはインタビュー調査が用いられる。従来のライフストーリー研究では対象者がインタビューにおいて「何を語ったのか」に重点が置かれ、過去に起きた出来事を再構成することに関心が寄せられてきた。しかし近年では、語り手である対象者と調査者の相互行為によってライフストーリーが構成されるという対話的構築主義アプローチが広まり、「何を語ったのか」だけではなく、「いかに語ったのか」あるいは「何のために語るのか」といった問いが重視されるようになった(桜井、2002)。

ライフストーリーの分析では、インタビューにおける個人の経験の語りからその人が歩ん

できた人生やその人を取り巻く社会の変動などを全体的に読み解こうとする(桜井、2002)。また、日本語教育におけるライフストーリー研究では、個人の語りから対象者の自己実現やアイデンティティを考察するものが多く、いずれも個人の語りの解釈や意味づけが分析の中心となっている(三代、2015 など)。

本研究では、こうした個人のライフストーリーの解釈というよりも、韓国人の現在の言語使用がそれまでの言語習得や言語管理の経験からどのように形成されるに至ったかに注目する。そのため、インタビューの語りに現れる言語習得・言語管理の経歴を記述し、分析するための枠組みが必要になると考える。

一方、対象者の言語使用を共時的な観点から考察する研究では、言語使用意識や言語生活、言語使用の実態などの研究が数多くなされている。これら研究は、質問紙調査やインタビュー調査、会話録音調査といった手法でおこなわれることが多い(真田他編、2005 など)。

接触場面研究においては、場面の参加者による実際の相互行為とそこに至るまでのプロセスが重視される。そのため、調査ではまず実際の相互行為場面における参加者の言語行動を記録する。そして、場面の参加者がそこで何を問題として認識し、それに対してどのような調整を行ったかを明らかにするため、フォローアップ・インタビュー(ネウストプニエー1994、ファン2002)が実施される。

本研究においても、まずは実際に韓国人が接触場面においてどのような言語行動をとっていたかを記述する必要があるだろう。ただし、本研究における対象者は日本語能力が高く、場面内で言語問題が生じる可能性は低い。また、接触経験が豊富で現在も日常的に接触場面に参加していることから、場面の中で個々の日本語使用について意識しながら話すことは少ないのではないかと思われる。よって、本研究の対象者にフォローアップ・インタビューをおこなっても、自身の日本語使用に対する意識や場面参加時の意識については報告されない可能性が高い。このように対象者からの十分な内省データが期待できない場合のデータ収集法を検討する必要がある。

## 2.3 本調査の概要

### 2.3.1 調査方法の検討

本研究では、日本の韓国人居住者の日本語の管理を共時的および通時的の両側面から考察するため、いくつかの調査方法を組み合わせて実施することにした。

まず、韓国人居住者の日本語使用を共時的に考察するためのデータとしては、韓国人居

住者が参加する実際の接触場面の記録が必要だと考えた。さらに、従来の接触場面研究では、会話において韓国人居住者が自身の日本語使用についてどのような管理をおこなっているかについて調査されてきたが、先に指摘したとおり、本研究が対象とする韓国人居住者は、滞日歴が長く、日常的に日本人と接触しているため、会話における個々の日本語使用について意識することはほとんど見られず、別のアプローチを検討する必要がある。そのため、本調査では会話における韓国人居住者の日本語使用について第三者から気になる部分を指摘してもらうことによって、その特徴を明らかにすることにした。

次に、韓国人居住者の現在の日本語使用の傾向を分析するため、現在の日本語使用や接触場面への参加について尋ねた。韓国人居住者が個々の日本語使用については意識することは少ないが、日常的にどのような接触場面に参加しているか、また接触場面において「このようにしている」といったパターン化された日本語使用についてはいくつか聞き出すことができると考えた。

韓国人居住者の日本語の管理を通時的な観点から考察する方法論としては、ライフストーリー研究(桜井、2002 など)と言語バイオグラフィー調査(Nekvapil, 2003)の方法を参考にした。調査方法はインタビューを採用し、韓国人居住者のこれまでの人生について語ってもらった。本研究ではとくに韓国人居住者の日本語使用や接触場面での経験に注目するため、韓国人居住者の語りに合わせて関連する質問を調査者が追加するというかたちをとった。

### 2.3.2 調査協力者

前述してきたとおり、本研究では日本に長期間滞在している韓国人居住者を対象とした。来日後、ネットワークや生活が安定し、自分なりの日本語使用のスタイルを持つようになるには5年程度経過した頃だと考え、滞在期間を5年以上とし、日常的に日本人との接触場面に参加して日本語を使用していることを条件とした<sup>1</sup>。調査協力者は調査者の知人に紹介してもらい、さらにその知人を紹介してもらう雪だるま式(スノーボール・サンプリング)の方法で収集した(片桐、1997)。その結果、12名の韓国人居住者の協力を得ることができた。

以下の表1にそれぞれの韓国人居住者(以下、KRとする)のプロフィールを示す。なお、本調査は2010年5月から2014年5月の間に実施され、各KRの在日期間は調査時から数えた期間をさす。

---

<sup>1</sup> KR5とKR12は調査中に5年未満であることが判明したが、他の調査協力者と大きな差は見られず、調査データを見ても本研究への影響は少ないと考え、調査協力者としてそのまま採用することにした。

表 2.3.2. 調査協力者 (KR)

	性別	年齢	出身地	来日時期	在日期間	身分	調査時期
KR1	男性	30代	韓国・釜山市	2002年	7年	大学院生	2010年5月
KR2	女性	40代	韓国・ソウル市	2002年	7年	主婦	2010年5月
KR3	女性	20代	韓国・ソウル市	1999年	11年	会社員	2010年8月
KR4	女性	20代	韓国・ソウル市	2005年	5年	大学生	2011年5月
KR5	女性	20代	韓国・ソウル市	2007年	4年	大学生	2011年6月
KR6	女性	20代	韓国・ソウル市	2006年	5年	大学院生	2011年7月
KR7	女性	20代	韓国・ソウル市	2007年	5年	大学生	2011年7月
KR8	女性	30代	韓国・ソウル市	2001年	12年	韓国語教師	2014年1月
KR9	女性	30代	韓国・釜山市	2001年	12年	主婦・翻訳業	2014年1月
KR10	男性	20代	韓国・ソウル市	2008年	5年	大学院生	2014年2月
KR11	女性	30代	韓国・ソウル市	2009年	5年	大学院生	2014年5月
KR12	女性	20代	韓国・京畿道安養市	2009年	4年	大学生	2014年5月

上記調査協力者のうち、男性は KR1、KR10 のみで大部分は女性であった。年齢は 20 代から 40 代と若い世代が多かった。出身地をみると、全員が都市部で生まれ育っており、12 名中 9 名がソウル市、2 名が釜山市、1 名が京畿道安養市であった。来日時期については、KR3 を除いたほぼ全員が 2000 年代に日本に来ている。日本滞在期間は最短で 4 年、最も長い人で 12 年だが、全体的には 5 年前後の人が半数を占めていた。また、現在の身分は、若い世代が多いこともあり、12 名のうち 8 名や大学生もしくは大学院生であった。KR2 は主婦、KR3、KR8、KR9 は職に就いており、KR8 と KR9 は韓国語を生かした仕事をしている。

会話データの第三者評価をおこなう協力者については、会話参加者とバックグラウンドが近い人が適当だと考え、日本人と日本に長期滞在する韓国人を対象とした。日本人に関してはとくに条件は設けなかった。韓国人については、KR と同様に 4、5 年以上日本に居住している韓国人に依頼した。第三者評価協力者も知人の紹介から雪だるま式で選ばれ、日本人 9 名、韓国人 7 名の協力を得ることができた。第三者評価への協力者は以下の通りである。なお、調査期間は 2011 年 7 月から 2017 年 6 月であった。

表 2.3.3. 第三者評価協力者 (日本人)

	性別	年齢	身分
JT1	女性	20代	大学生
JT2	女性	30代	大学院生
JT3	男性	30代	大学院生
JT4	男性	30代	会社員
JT5	女性	20代	大学院生
JT6	女性	20代	大学生
JT7	女性	20代	大学生
JT8	女性	20代	大学生
JT9	女性	20代	大学生

表 2.3.4. 第三者評価協力者 (韓国人)

	性別	年齢	日本滞在歴	身分
KT1	女性	20代	8年	大学院生
KT2	女性	30代	15年	会社員
KT3	女性	30代	10年	主婦
KT4	女性	30代	6年	会社員
KT5	女性	20代	5年	大学生
KT6	男性	20代	4年	大学生
KT7	男性	20代	8年	大学生

### 2.3.3 調査の手順

調査開始時、調査者と KR は初対面であったため、調査を始めるにあたってまず調査者と KR が会い、調査者の自己紹介と調査の説明を行った。ここでは KR に調査の説明をすることのほかに、調査者に韓国居住経験があり、韓国語や韓国の文化的知識を持っていることを伝えた。それによって、できる限り KR との人間関係を構築し、その後のインタビューで話しやすい環境をつくることを心がけた。その後の調査は以下のような流れで行った。

#### (1) 調査協力者(KR)による会話の録音

## (2) 調査協力者(KR)に対するインタビュー調査

### (3) 第三者による会話データの評価

#### (1) 調査協力者(KR)による会話の録音

最初に調査の説明をおこなった際、KRにICレコーダーを渡して親しい日本人との会話を録音するよう依頼した。録音時間は15分程度とし、自由に雑談している場面を録音してもらうようにした。

会話の相手を親しい日本人としたのは、協力者がもっともリラックスして参加する接触場面であると考えたからである。このような場面では、日本語の正確さよりも自分らしさを表出することが優先され、KRの多様な外来性が現れると考えた。相手との「親しさ」については調査者から具体的な条件は提示せず、KRにとって親しい関係で気楽に話すことのできる相手を選んでもらった。

#### (2) 調査協力者(KR)に対するインタビュー調査

(1)の会話録音後、調査者はその録音データを受け取り、内容を確認した。その後、調査者とKRとの一対一のインタビュー調査を実施した。

インタビューは半構造化インタビューを採用し、おもに2つのポイントで進められた。

まず最初に、KRの通時的な側面について韓国にいるときから調査時までのライフストーリーと言語学習や日本語使用について時系列に沿って話してもらった。インタビューでは基本的にはKRが自由に話し、調査者は必要に応じて質問をして、詳細な情報や具体的な経験などを聞いていった。

ライフストーリーの語りの後は、現在の生活に軸を移した。(1)の会話データにおいてKRの日本語使用で特徴的であった部分を中心に、現在の日本語使用や日本語学習に対する意識、接触場面への参加の状況などについて尋ねた。このパートは調査者からの質問を中心に進められたが、KRからの自発的な発言も妨げなかった。

インタビューの所要時間は約60分から120分であった。インタビューの基本的な質問は統一しようとしたが、KRが自由に話すスタイルをとっていたため、協力者によって回答の内容にも量にも差が見られた。各協力者の語りの特徴については後述する。

### (3) 第三者による会話データの評価

(1)で収録された会話に参加していない第三者に対し、会話における KR の日本語について評価してもらった。評価者は1つの会話につき、日本語母語話者3名、韓国人2名が担当した。日本語母語話者を3名と韓国人より多く設定したのは、韓国人は同じ日本語学習経験者ならびに日本の長期滞在者という立場にあることから、ある程度同じ方針で評価されることが予想できたのに対し、日本語母語話者は個人差が大きく、より多くの人の視点を入れた方が良いと判断したからである。

評価者は同じ評価者がすべての会話を評価することが望ましい方法であったが、本調査では実現しなかった。本研究ではあくまで会話参加者である KR の視点から考察することに焦点を当てており、第三者評価については当事者以外の視点を取り入れることを目的としていたため、すべての会話で評価者を統一することを必須にはしなかった。

各会話を評価する評価者の組み合わせは、可能な限り会話参加者と属性に近い人が評価するように選定した。

それぞれの会話の KR に対する評価者の組み合わせは以下の表のとおりである。

表 2.3.5. 評価者の組み合わせ

評価対象	日本人評価者			韓国人評価者	
KR1	JT1	JT3	JT4	KT1	KT2
KR2	JT1	JT2	JT4	KT1	KT2
KR3	JT1	KT2	JT3	KT1	KT2
KR4	JT1	JT3	JT4	KT2	KT5
KR5	JT6	JT7	JT8	KT5	KT6
KR6	JT6	JT7	JT8	KT5	KT7
KR7	JT6	JT7	JT8	KT4	KT6
KR8	JT6	JT7	JT8	KT3	KT4
KR9	JT5	JT6	JT7	KT3	KT4
KR10	JT5	JT6	JT7	KT5	KT6
KR11	JT5	JT6	JT8	KT4	KT6
KR12	JT6	JT7	JT8	KT5	KT7

評価は、調査者と第三者の評価者 1 人が一緒に会話を聞きながら行った。会話については「韓国人と日本人の会話であること」だけを伝え、2 人の話者のうちどちらが KR であるか、また KR のバックグラウンドなどについては知らせなかった。また、会話の文字化資料も提示しなかった。評価では「外国人の日本語で気になったところがあったら自由に話して欲しい」と依頼し、評価者に自由に気がついたことをコメントしてもらった。また、会話が 5 分程度進んだ時に調査者が会話を一時停止し、それまでで気になるところがなかったかも尋ねるようにした。調査の所要時間は、一つの会話につき約 30 分から 50 分であった。

### 2.3.4 資料の文字化

#### 2.3.4.1 会話資料の文字化

調査(1)で収集した会話資料はすべて文字化した。調査では IC レコーダーの録音のみをおこなったため、音声データのみが記録された。そのため、本研究において非言語行動は分析対象には含めなかった。文字化する際に用いた記号は、西阪他(2008)に掲載されていた記号一覧を参考に設定した。以下に文字化資料で使用した記号を示す。

#### <会話データ凡例>

- [ 2 人の話し手が発する音声の重なるの始め。
- [ ] 重なるの終わりが示されることもある。
- [[ 2 人の話し手が同時に発話を開始する。
- = 2 つの発話が途切れなく密着している。
- ( ) 聞き取り不可能な場所。
- (m.n) 音声途絶えている状態。その秒数が( )内に示される。
- (.) 0.2 秒以下の短い間合い。
- 言葉:: 直前の音の引き延ばし。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応。
- 言葉- 言葉が不完全なまま途切れている状態。
- h 呼気音。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応。
- .h 吸気音。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応。
- 言(h) 呼気音の記号は笑いを表すのにも用いられる。特に笑いながら発話が産出される時、そのことは、呼気を伴う音のあとに(h)または h を挟むことで示す。

- ¥¥ 発話が笑いながらなされているわけではないが、笑い声でなされているとき。
- 言葉 言葉の強さは下線によって示される。
- ° ° 音が小さいことは、当該箇所が° で囲まれることにより示される。
- .,? 語尾の下がりやピリオド(.)で示される。音が少し下がって弾みがついていることは(.)で示される。語尾と音が上がっていることは疑問符(?)で示される。
- > < 発話のスピードが目立って早くなる部分。
- < > 発話のスピードが目立って遅くなる部分。
- (( )) 発話の要約やその他の注記。

#### 2.3.4.2 インタビュー資料の文字化

本文中に KR のインタビューの語りを引用する際、短い場合は「 」で、長い場合はインデントをつけた斜体で示した。また、引用中、下線を引いた部分は、分析のポイントとなる語りの部分である。なお、インタビュー中の R は調査者を指す。

## 2.4 調査データ

### 2.4.1 収集された調査データの概要

2.3 の(1)から(3)の調査を通して、本研究では以下の 3 種類のデータを収集することができた。

- ① 接触場面の会話データ: KR によって録音された日本人との会話のやりとり
- ② 第三者に評価された KR の外来性の特徴: 会話中の KR の日本語使用に対して第三者が評価した外来性
- ③ KR の言語バイオグラフィー: KR によって語られたライフストーリーと日本語学習や日本語使用、接触場面の経験

以下では、それぞれのデータの特徴について述べる。

#### 2.4.2 接触場面の会話データ

調査の結果、各 KR によって、10 分～25 分の会話が録音された。会話は調査者依頼したとおり、親しい日本人(J)との雑談場面であった。KR によって「親しさ」のとらえ方が異なる

ることもあり、会話の相手となった日本人との関係は友人に限定されず、ペアによっては「です・ます体」をベースに会話をしているケースもあった。以下にそれぞれの会話の詳細を記す。

表 2.4.2. KR が参加した会話場面

	会話の相手				会話場所	収録時間 (分:秒)
		性別	年齢	KR との関係		
KR1	J1	男性	20代	同じ研究室の大学院生	大学研究室	27:11
KR2	J2	女性	60代	同じ教会の中心メンバー	教会	24:17
KR3	J3	女性	20代	同じ韓国系教会のメンバー	教会	16:44
KR4	J4	男性	60代	同じ韓国系教会の中心メンバー	教会	25:48
KR5	J5	女性	20代	同じ大学の同級生	大学内	21:17
KR6	J6	女性	20代	同じ大学院の同級生	飲食店	26:44
KR7	J7	女性	20代	同じ大学の同級生	飲食店	15:17
KR8	J8	女性	40代	かつて韓国語を教えた学生で現在は友人	飲食店	18:26
KR9	J9	女性	30代	子どもが同じ幼稚園に通う母親同士	飲食店	11:29
KR10	J10	女性	20代	同じ韓国系の教会のメンバー	飲食店	15:22
KR11	J11	女性	20代	同じ大学院で研究分野も近い院生	大学内	15:05
KR12	J12	女性	20代	同じ韓国料理店のアルバイト店員	飲食店	13:52

上記の表をみると、会話の相手となった日本人(J)は、同じ大学・大学院、教会、アルバイト先など同じコミュニティのメンバー同士であるケースが多く、これらのコミュニティはKRの現在の生活の中心であると報告された。また、日本人(J)は韓国系の教会や韓国料理店アルバイトのメンバー、韓国語学習者であったりすることが多く、韓国人との接触経験や韓国についての知識を持っている可能性が高い。つまり、ここで収録された会話は、KRが日常的に参加する接触場面で、日本語の規範が比較的緩められやすい場面であったと言える。

会話の内容をみると、すべての会話は円滑に進行しており、問題が生じてコミュニケーションが破綻するような様子は観察されなかった。KRからもこの会話の中でコミュニケーション問題を抱えたり、意識的に調整をおこなったという報告はなかった。KRとJとの間

では親しい関係が築かれ、それが維持されていることから、KR と J とが参加する接触場面の会話は全体として成功していたと言える。

このように、本調査における接触場面の会話データでは、現在の KR の具体的な日本語使用を観察することができる。そしてそこでは、場面における KR の日本語への意識が弱まっており、現在の KR が使用する日本語のベースとなっている部分が現れると考えられる。その日本語は、日本語の規範よりもより個人的な規範にもとづいており、KR の外来性も現れることが多いと予想される。つまり、この会話データによって KR の外来性のさまざまな特徴が共時的な側面から分析することが可能になる。

#### 2.4.3 第三者に評価された韓国人居住者の逸脱

会話データにおける日本語使用は、会話参加者に意識されることは少ないが、第三者から見ると KR のさまざまな要素が「気になる点」として指摘された。このような要素は、KR の日本語使用において有標であるという点で逸脱として捉えることとした。

第三者によって留意され、評価の対象となった KR の逸脱は、日本語の誤用から会話のやりとりに関わることまでさまざまな要素が指摘されたが、具体的な発話について指摘される場合だけでなく、ある話題やひとまとまりのメッセージ、会話全体に対してコメントされることもあった。さらに、KR による言語管理の調整行動も逸脱として評価された。逸脱の評価については、日本語の誤用や不自然さといった否定的な評価だけではなく、日本語能力の高さや自然な日本語使用など肯定的に評価される逸脱もあった。

この第三者評価によって KR の逸脱を客観的に観察することで、共時的な KR の日本語の特徴を分析することが可能となった。ただしここで留意された逸脱は、会話の当事者である KR と J との間では日常的・習慣的なものとしてすでに共有されており、第三者の評価と会話参加者による評価は異なっていた。

#### 2.4.4 韓国人居住者の言語バイオグラフィー

インタビュー調査における KR の通時的な語りには、KR のこれまでの全体的なライフストーリー、日本語学習のきっかけと現在までの習得状況、接触場面の経験に関するエピソードなどが含まれていた。

これらについて、KR の通時的側面についてさまざまな観点から分析することが可能となった。本研究ではとくに言語使用に焦点を当てるため、KR の言語バイオグラフィー

(Nekvapil, 2003)を分析し、KRの日本語使用や接触場面への参加に対する通時的な管理を考察することにした。ただし、KRの語りには個人差が大きく、KRによって人生における日本語の位置づけは異なっていた。そのため、必要に応じて日本語使用に関わらないKRのライフストーリーの語りについても分析データとして加えることにした。

さらに、通時的な文脈の流れで現在の日本語使用や日本語学習に対する意識、接触場面への参加の状況などについても質問を行った。その結果、KRが抱えている日本語問題や日本語を使用に関する個人的なストラテジー、そして今後の日本語習得の方向性について聞くことができた。また、日本生活において、どのようなネットワークをもち、どのような場面に参加するかといった接触場面への参加の仕方について語るKRもいた。

ここで語られた内容は、KRが接触場面において使用する日本語1つ1つについてなされる管理ではなく、KRが日本で生活するにあたって日常的におこなっているものだった。よって、インタビュー調査におけるKRの共時的な視点からの語りの分析は、現在のKRが習慣的にこなしている日本語使用や接触場面への参加に対する態度を明らかにするものであった。

## 2.5 分析方法

### 2.5.1 分析の手順

本調査で収集されたデータをもとに、本研究ではKRの日本語の管理について共時的および通時的観点から以下の手順で分析をおこなった。

#### (1) 共時的観点からの分析

○会話におけるKRの日本語の逸脱の管理

- ・第三者による逸脱の評価
- ・当事者による逸脱の調整

#### (2) 通時的観点からの分析

○KRの言語バイオグラフィーからみた通時的な日本語の管理

- ・これまでの日本語習得のプロセス
- ・現在の日本語の使用・学習の原則
- ・想像のアイデンティティ獲得のための日本語習得

#### (3) 通時的観点＋共時的観点からの分析

## ○類型論的アプローチにもとづく習慣的な日本語使用・原則の管理

- ・会話における KR の日本語の使用・学習のストラテジー
- ・通時的な KR の日本語の使用・学習の原則とストラテジー

まず、共時的観点からの分析では、収集されたデータから、会話において現れた KR の日本語の逸脱について、第三者および当事者の双方の視点から分析をおこなった。通時的な観点からは、言語バイオグラフィーの分析をおこなった。KR の語りにはあらわれた言語バイオグラフィーから KR の日本語習得の過程とそれによって形成された現在の日本語使用・学習の原則を抽出した。さらに、今後目指している日本語習得を想像のアイデンティティ獲得のための投資として捉え、その特徴を明らかにした。最後に、共時的な日本語の管理と通時的な日本語の管理をあわせて、KR の接触場面に向かう習慣的な日本語の管理を類型論的アプローチから考察した。

### 2.5.2 会話における日本語の逸脱の分析

会話における KR の逸脱については、第三者からの評価コメントによって分類をおこなうことにした。先にも述べたとおり、KR は会話において日本語の問題に直面することはなく、当事者間で問題が認知されることはなかった。そのため、会話に関わりのない第三者の視点からみたほうがより分析的な視点が加わると考えた。本研究では第三者の評価コメントから、言語管理理論(Neustupný, 1985; Fan, 1994)の枠組みにもとづき、KR の日本語のどのような要素が逸脱として留意され、どのように評価されたのかを分析した。特定された逸脱は、ファン(2006)にもとづいてさらに言語的逸脱、社会言語的逸脱、社会文化的逸脱に分類した。

#### (1) 言語的逸脱

言語能力は、文法、語彙、発音、メッセージの伝達、メッセージの受信などの特徴をもつという(Neustupný, 1987)。フェアブラザー(2003)では言語的逸脱をメッセージの伝達に関する逸脱とメッセージの形式に関する逸脱とに分類している。本研究では、これらを参考に、第三者からの評価であることを考慮に入れ、メッセージの形式について発音、韻律、語彙、文法の4つに大きく分類することにした。

これらのうち、発音と韻律は音声に関わる要素である。発音では長短音の区別、促音、「ツ」

や「ザ」行の発音など、韓国人日本語学習者の特徴とされる項目(松崎、1999)が含まれていた。韻律に関しては、アクセントやイントネーション、リズム、スピード、高さなどが挙げられ、韓国人に特徴的な句末イントネーションも含まれていた(佐藤、1995; 高村、2009など)。語彙に関しては、不自然な日本語表現のほか、専門的な語彙や表現、漢字語などが留意された。文法に関しては、品詞と活用、接続表現、文末表現にさらに分類したところ、動詞の活用や指示詞、接続表現、使役や受け身、「ノダ」表現、授受表現などが留意された。

## (2) 社会言語的逸脱

ファン(2006)が指摘するように、狭い意味での言語能力が高くても、社会言語的な能力がなければコミュニケーションは達成されない。こうした社会言語学的な要素にかかわるルールは、Hymes(1974)の SPEAKING モデルが代表的である。Hymes は、コミュニケーションに必要なルールを①状況設定(Setting)、②参加者(Participants)、③目当て(Ends)、④行為の連鎖(Act Sequence)、⑤表現の調子(Key)、⑥媒介(Instrumentalities)、⑦相互行為と解釈の規範(Norms of Interaction and Interpretation)、⑧ジャンル(Genres)の 8 つの要素に分類した。

またネウストプニー(1982)は Hymes のモデルを発展させ、接触場面の適用する文法外コミュニケーションのルールを提唱した。本研究で分析対象とする場面も接触場面であることから、分析では以下の 8 つのルールをもとに分類を行った。

- 1) 点火ルール
- 2) セッティング・ルール
- 3) 参加者ルール
- 4) バラエティ・ルール
- 5) 内容ルール
- 6) 形のルール
- 7) 媒体のルール
- 8) 操作のルール

点火ルールは、「どのような場合にコミュニケーションを始めるか」(ネウストプニー 1995:13)に関わるルールである。つまり、話すかどうか、どれくらい話すかについての問題は、このルールに含まれる。本研究では、発話や話題の量が逸脱として留意されていた。

セッティング・ルールは「いつ、どこでコミュニケーションを行うか」(ネウストプニー、1995:13)に関わるルールである。本研究ではセッティングは会話参加者によって設定されおり、評価の対象は会話のやりとりに限定されたため、留意されることはなかった。

参加者ルールは、「誰とコミュニケーションをするか」(ネウストプニー、1995:13)に関わるルールであるが、これもセッティング・ルールと同様に評価の対象にはならなかった。

バラエティ・ルールは、「どの言語、方言、スタイルなどを使うか」(ネウストプニー1、1995:13)に関わるルールである。接触場面においてどの言語が適切なのか、フォーマルなスタイルが適切な場面なのかどうか、標準的な日本語を使うべきかどうかといった選択がこのルールに関係する。接触場面の研究では、コード・スイッチング(ナカミズ、2000; 郭、2005; 山下、2016 など)やスタイル・シフト(伊集院、2004; 田所、2015 など)をはじめとした言語バラエティに関する研究が幅広くなされている。本研究においてもスピーチ・スタイルやジェンダーに適切なスタイル、人物呼称などバラエティに関わる逸脱が留意された。

内容のルールは「どのような内容を伝えるか」(ネウストプニー、1995:13)に関わっている。どのような話題を提示するか、どのような内容の発話をするかがここに含まれる。接触場面における話題選択については、三牧(1999)、Wipha・加藤(2010)、関崎(2016)などがある。本研究においても話題の種類と発話の内容に関する逸脱が留意された。

形のルールは、「内容項目をどのようにメッセージの中で並べるか」(ネウストプニー、1995:13)を支配する逸脱である。本研究では、会話をどのように組み立てていくか、発話意図を提示するにはどのような順序で構成していくかといった要素はこのルールに分類した。接触場面における会話管理については、近年、長谷川(2005)、楊(2005)、宮永(2013)、大場(2013)など盛んに研究がおこなわれている。また、発話意図の提示については、発話行為に関してこれまで対照研究を中心に多くの研究が蓄積されているが(鄭、2006; 金、2007; 尾崎、2008 など)、接触場面を考察した研究も増えている(武田、2006; 今田、2015 など)。

媒体のルールには「メッセージをどのように具体化するか、非言語的コミュニケーションのチャンネルのことなど」(ネウストプニー、1995:13)が含まれる。本研究で分析するデータは音声データのみで非言語行動は観察できないため、留意の対象にはならなかった。

最後に、操作のルールは「コミュニケーションをどのように評価したり、評価の結果直したりするか」(ネウストプニー1995:130)を指す。つまり、会話の参加者が言語に対してどのように行動するかが関わっている。本研究では、会話の参加者が実施した調整行動が第三者に留意されていた。

以上の 8 つのルールのうち、本研究では会話データでは観察されないルールを除いた点火ルール、バラエティ・ルール、内容ルール、形のルール、操作のルールの 5 つのルールに社会言語的逸脱を分類した。

### (3) 社会文化的逸脱

考える行動、食べる行動、物を作る行動といった非コミュニケーション的な行動に関わる要素がここに含まれる。ネウストプニー(2002)によると、社会文化能力の適切な「文法」はないが、認知プロセスと表層のプロセスに分けることができるという。たとえば、認知プロセスはイデオロギー、態度、ニーズなど、表層のプロセスには日常生活、仕事、娯楽などの領域での行動が挙げられる。本研究においてもこの 2 つの分類をもとに社会文化的逸脱の分析をおこなった。

以上の分類にしたがって、本調査の会話における KR の日本語使用について第三者に留意された逸脱を整理した。

次に、留意された逸脱の評価の分析をおこなった。評価には、おもに肯定的評価、否定的評価、中立的評価の 3 種類があるとされている(Marriott, 1990)。また、フェアブラザー(2003)は、外来性の評価に適用される規範は日本語の内的規範が適用される場合と接触規範(contact norms: Marriott, 1990; フェアブラザー、2003; Neustupný, 2005)を指摘している。先に述べたように、本研究においても、逸脱が否定的に評価される場合だけではなく、肯定的に評価されるケースも多く見られた。これは、第三者が KR を評価する規範として、「正しい日本語」かどうかだけではなく、「外国人・韓国人が使う日本語」としてどうかという視点も含まれていたためであると考えられる。日本人評価研究では、こうした評価について、日本人がおこなう評価のプロセスや評価観に焦点を当てて分析をおこなっている(野原、2011; 宇佐美、2015 など)。しかし、本研究ではあくまで KR の外来性の管理を明らかにすることを目的としているため、評価をした第三者の評価プロセスは分析の枠組みには含まなかった。

以上を踏まえ、本研究では留意された逸脱について肯定的評価、中立的評価、否定的評価の 3 つの尺度でとらえることとした。

## 2.5.3 言語バイオグラフィーの語りの分析

### 2.5.3.1 語りの分類

ライフストーリーや言語バイオグラフィー調査において、語りのモードは単一ではなく、複数の種類があることが多くの文献で指摘されている(Denzin, 1989; 桜井・小林, 2005; 太田, 2010 など)。Nekvapil(2003)によると、言語バイオグラフィーでは事実レベル、主観レベル、そしてテキスト・レベルの三つのレベルのデータ収集が可能であるとしている。

- (a) 事実レベル: 語り手の意図は含まれない実際の出来事・事実
- (b) 主観的なレベル: 経験した出来事についてどのように思っていたか
- (c) テキスト・レベル: インタビューでどの出来事を語るか、または強調するか

たとえば、KR の出生地や家族構成といったバックグラウンドやいつ来日し、日本で何をしたか、どのような出来事に遭遇したかといった語りは事実レベルの語り、個々の出来事についてどのように感じたか、どのようなことを考えたかについては主観レベルの語り、さらにインタビューにおいて調査者にどんな経験や出来事を語るか、または語らないかということについてはテキスト・レベルの語りということになる(今, 2012)。

本研究の KR の日本語の使用や学習に関わる語りは、さらに以下の枠組みで分析した。

表 2.5.3. 言語バイオグラフィーの語りの分類

語りのレベル		語りの内容
(a) 事実のレベル		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 当時の社会的状況、時代背景</li> <li>・ KR の個人の情報、背景</li> <li>・ KR 自身による行動、関わった出来事</li> </ul>
(b) 主観のレベル	通時的な語り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ KR 自身による行動や関わった出来事に対する評価や態度、意見</li> <li>・ KR 自身による行動や関わった出来事をきっかけに考えた一般的な態度や理解</li> <li>・ KR が一貫してもっている一般的な態度や理解</li> </ul>
	共時的な語り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在の日本語問題</li> <li>・ 習慣的に行っている日本語の管理とその理由</li> </ul>

(c) テキストのレベル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自発的な語りか質問に対する回答か</li> <li>・何度も詳しく語るか、詳しく語らないか</li> </ul>
--------------	--

本研究では、上記の枠組みをもとに KR の語りを分析した。そして、それぞれのレベルの語りを分析のデータとして、以下の手順で分析を進めた。

- (1) KR の個人的背景の分析: 事実のレベル、テキストのレベル
- (2) KR の日本語使用・学習のプロセス: 事実のレベル、主観のレベル
- (3) KR の日本語使用・学習の原則: 事実のレベル、主観のレベル、テキストのレベル

以下では、それぞれの項目についての分析方法を説明していく。

### 2.5.3.2 韓国人居住者の個人的背景の分析

KR の個人的背景の分析は、事実レベルのデータとテキストのレベルのデータをもとにおこなった。事実レベルのデータからは、KR の基本的情報として経歴が抽出された。さらに、KR がこれまで接触した日本に関わる社会的ネットワークを分析した。社会的ネットワークは、日本語や日本人との接触にとどまらず、日本文化や日本の歴史など日本に関わる知識も含めることにした。これは、KR の語りから、日本語学習や日本人との交流など直接的な接触だけではなく、メディアや書籍を通じた間接的な日本との接触も多く、KR の日本への移住や日本語の管理に影響を及ぼしていることが予測されたからである。

テキストのレベルのデータからは KR のインタビューにおける語り方の特徴が分析された。これによって、KR がインタビューにおいて自分自身について表現するときに、どのような語り方で伝えるかについて、KR の個人的な特性を理解しようとした。

### 2.5.3.3 日本語習得プロセスにみられる転機分析

KR の日本語使用・学習を通時的に考察するにあたり、KR がどのようなプロセスをたどって日本語を習得したかについての分析を行った。この分析は、事実レベルのデータおよび主観レベルの通時的な語りのデータをもとに行われ、日本語習得が進んだ転換点をポイントがあることが予測された。そこで、こうした転換点を日本語習得の転機として以下のように定義づけ、詳しい検証を行った。

日本語習得の転機：KR の「日本語能力に対する否定的評価の語り」が「肯定的評価」に変換した転換点

たとえば、以下のような語りから日本語習得の転機を取り出すことができる。

KR1: (研究生のときは) 日本語が本当に下手だったので  
(中略)

KR1: (修士課程に入ってから) いまの日本語の上達度を考えてみますと、あのときは急激に上がったと思います

上の語りでは、KR1 が「研究生のときは日本語が下手だった」と自身の日本語能力を否定的に評価している。その後、「修士課程に入ってから（日本語能力が）急激に上がった」と肯定的な語りに変化している。こうした日本語能力に対する評価の変化から KR の日本語習得の転機を抽出することができる。

## 2.5.4 類型論的アプローチによる原則とストラテジーの分析の枠組み

### 2.5.4.1 類型論的アプローチの枠組み

本研究のデータからは KR の日本語の管理に関してさまざまなレベルの方針が分析される。こうした異なるレベルの方針は相互に関係しており、何らかの階層性によって関連付けられる。こうした階層性による関係性を説明するために、本研究ではネウストプニー(1989)、村岡(2010)の類型論的アプローチによる枠組みを用いて考察をおこなう。

ネウストプニー(1989)では、相互依存関係にある現象のセットを以下の4つのレベルで区別している。

- ①決定要因：もっとも一般的な原理
- ②マクシム(大原則)：決定要因ほど一般的ではないが、広範囲の行動に影響を与える
- ③ストラテジー：マクシムよりも一般性が低く、ある特定の領域の行動に固有のもの
- ④普通規則・併記規則：行動の区切れ(segment)のいくつかの特徴を支配しているもの

これらのレベルについて、村岡(2010)は日本に住むブルガリア出身の外国人居住者の日本

語の管理を例に挙げ、彼女が決定要因として「外国語は母語話者の能力まで習得することを目標とする」、これに関連するマクシムのレベルでは「日本語母語話者の規範を尊重する」、ストラテジーのレベルでは「知人との会話場面があれば、footing において言語ゲストを表示し、言語的支援を受ける」、さらに規則のレベルとして、ディスコースにおける褒めと謙遜の隣接ペアの生成とその確認要求の言語管理が相互依存関係をもっていることを示している。

本研究ではこの 4 レベルのうち、②マクシムと③ストラテジーのレベルを取り上げ、それぞれ「原則」と「ストラテジー」として分析を行う。本研究における基本的な位置づけは、以下の通りである。本論文における「原則」および「ストラテジー」はいずれもこの意味をもって使用される。

原則： KR による日本語学習・日本語使用に対する基本的な態度

ストラテジー： 相対的に限定された場面で適用される習慣化された事前管理としての日本語学習・日本語使用

#### 2.5.4.2 言語バイオグラフィーからの原則の分析

先に示した類型論的アプローチの枠組みを踏まえ、本研究では言語バイオグラフィーにおける事実のレベル、主観のレベル、テキストのレベルのデータをもとに KR の日本語使用・学習の原則の分析をおこなった。

まず、KR の日本語使用・学習に対する一般的な態度や理解、一貫して持っている態度を示す通時的な主観レベルの語り、またテキストのレベルで、自発的または複数回語られる語りを抽出した。これらの語りを分析し、日本語習得の転機を軸に、原則として以下の 2 つのタイプを認定した。

- a) 日本語習得の転機の前後で変化した語りによる原則
- b) 日本語習得の転機に関わらず、KR の経歴や接触経験によって形成されてきた原則

それぞれの原則は以下のような語りによって認められる。

- a) 日本語習得の転機の前後で変化した語りによる原則

以下のインタビューでの語りでは、KR4 がアルバイトを通して日本語能力が向上したエピソードを語っている。この経験をきっかけに、KR4 は外国語学習について以下のような一般的な原則を形成していた。

*KR4: それで友だちが、日本語を書くとか聞くとかそれすごくうまかったんですけども、しゃべりがあまりそんなに、それでちょっと苦労した。私はそれでちょっと良かったなっていう感じ。最初からバイトが、言語を勉強するときに重要、環境とか*

上の語りでは、KR4 は飲食店でアルバイトをしたことで日本語を話す機会が増えて、それが転機となって日本語が上達したと考えている。この経験を通して KR4 は外国語学習について「言語を勉強するには環境が重要」という一般的なレベルで理解していることを示しており、日本語学習の原則として認定される。

b) 日本語習得の転機に関わらず、KR の経歴や接触経験によって形成されてきた原則

日本語習得の転機に関わらず、KR が一貫してもっている原則も語りから抽出できる。これは KR のそれまでの言語使用の経験や接触場面への参加の経験にもとづいて形成される。

*KR2: もう9年になってもうすぐ10年だから一、この10年ぐらいの日本語がうまくな  
らないといけないんでないの？っていうことが自分の中にはあるんですね*

上の語りは KR2 が「自分の中にある」一般的な原則として語っている。これは、KR2 自身がもともと持っていた態度であると同時に、長い間語学留学をして外国語の習得を目指した生活を過ごしてきた経験なども影響していると考えられることができる。

## 2.6 本論文の構成

以上の分析と考察によって、本研究では KR の日本語の習慣的な管理の諸相を明らかにしていく。

第3章では、言語バイオグラフィーの分析から KR の個人的背景を12名の KR についてまとめる。そして日本に移住する KR の特徴を個人・社会的要因から考察する。

第4章は共時的な観点から、接触場面会話における KR の実際の日本語使用の分析をおこ

なう。KR の日本語において留意される逸脱を第三者と当事者の視点から分析し、KR の日本語使用の特徴をまとめる。さらに、KR が相手の日本人との相互行為によって日本語の逸脱を調整するストラテジーを明らかにする。

第5章では、言語バイオグラフィーによる通時的なKR の日本語の管理について分析する。KR の日本語習得のプロセスとそれによって形成される日本語使用・学習の原則を明らかにする。さらに、KR の現在の日本語問題を取り上げ、それがどのような意味をもつのかを考察する。

第6章では、第4章および第5章で分析されたストラテジーと原則をもとに、KR の習慣化された日本語の管理について、類型論的アプローチから考察を行う。それによって、KR が習慣的におこなっている日本語の管理の基本的なフレームワークを提示する。

## 第3章 言語バイオグラフィーからみた韓国人居住者の個人的背景

本章では、KR の個人的背景について述べる。まず、KR の日本語学習歴や接触場面の経験を中心とした KR の経歴をまとめる。次に、KR の社会的ネットワークについて述べる。最後に、インタビューにおける KR の語り方の特徴から KR が自身の言語バイオグラフィーをどのようにとらえていたかを分析する。

### 3.1 韓国人居住者の個人的背景

KR の個人的背景は言語バイオグラフィー・インタビューのデータをもとに分析をおこなった。まず、インタビューにおける事実レベルの語りを中心に、KR の経歴と社会的ネットワークにかかわる事柄が抽出できた。このうち、KR の経歴は、抽出された語りを時系列にそって構成しなおした。社会的ネットワークは、日本語をはじめとした日本人や日本文化など日本にかかわるものとの接触について語った事柄をもとにまとめられた。

KR の語り方の特徴については、インタビューの語りのうちテキスト・レベルの事柄の側面から分析をおこなった。一般的に、インタビュー場面では調査者の質問に答えるという形式がベースになるが、本研究のような非構造的なインタビューでは、調査者の質問に回答するだけでなく、KR が自発的に伝えたい事柄を語ることもできる。そのため、KR の語り方は個人によってバリエーションが見られ、大きく4つの傾向に分けることができた。1つは、自分でライフストーリー全体を構成するスタイル、2つめは、調査者への質問に対してストーリーを構成して回答するスタイル、3つめは調査者の質問1つ1つに対して回答していくスタイル、そして最後は、調査者との相互行為によって語るスタイルである。この4つのスタイルを中心に、KR の語り方の特徴をまとめた。

### 3.2 KR1 の背景

#### 3.2.1 KR1 の経歴

1976年に釜山で生まれ、大学卒業まで過ごす。子供のころは日本のアニメや歴史に興味があった。大学の軍隊前に福岡へ、除隊後は新潟と東京に見学旅行に行く。そのときに新潟で訪れた大学の建築デザインに衝撃を受けて、留学を決心する。

2002年に来日し、旅行で訪れた新潟県にある大学に研究生として入学した。当時同大学は留学生のための支援システムはまだ整備されていなかったが、その地域で外国人が珍し

かったこともあり、周囲のサポートを得ることができた。また、公民館が主催する韓国語学習会に講師として参加し、日本人と日常的に交流していた。研究生の後は、同じ大学の大学院修士課程に進み、ビジュアルデザインを専攻した。その後、同じ大学院の博士課程に進学したが、大学の事情で研究を進めるのが困難になったため、首都圏の C 大学の博士課程に入学しなおした。C 大学に来てからは交友関係を広げることに消極的になり、現在まで研究中心の生活をしている。

### 3.2.2 KR1 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

来日するまで KR1 は韓国で日本人とのネットワークはほとんど報告されなかった。一方で、中学校、高校の頃にはメディアを通じた日本文化への接触が確認された。先述したとおり、日本のアニメやマンガが韓国語に翻訳されたものやテレビ番組や新聞のコラムで日本の歴史をテーマしたものをよく読んでいたという。

KR1 の留学が決まってからは、大学の指導教員が日本の大学との仲介ネットワークになっていた。指導教員は韓国人で自身も日本に留学した経験を持っていた。そのため、日本の大学との手続きから日本生活のアドバイスまで支援をしたという。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日後、新潟県で暮らすことになった KR1 は、多くの日本人ネットワークを形成していた。大学では日本人チューターをはじめ、同じ研究室の日本人の先輩によく誘われていた。また、中越地震が起きたときには、指導教員が留学生を気にかけて、日本人学生に支援物資を届けさせたことがあるという。大学内では日本人学生のほか、韓国人留学生ネットワークも形成されていた。また、大学外では市の公民館で開催される韓国語学習会に講師として参加し、そこでも日本人ネットワークが認められた。そこに参加した日本人は年配者が多く、全員が 50 代以上であった。その他、市内の業者からポスター作成などを依頼されることがあり、仕事に関わる日本人ネットワークも形成されていた。

首都圏に移動してからは KR1 のネットワークは抑制されている。おもなネットワークは大学の研究室の大学院生と指導教員であった。大学院生は韓国人留学生、韓国以外の出身の留学生、日本人学生が挙げられた。また、研究調査のために新潟県フィールドワークをすることもあり、調査協力者との関係が構築されているとの報告もあった。

### 3.2.3 KR1 の語りの特徴

KR1 のインタビューは、調査者への質問に対してストーリーを構成して回答するスタイルであった。中学校、高校、大学、日本への進学、そして首都圏への移動などの時系列にもとづいた出来事について主観的なコメントを加えながら語られた。とくに、新潟にいたころの話題は詳しく取り上げられ、日本人との交流については具体的な接触場面のやりとりとそれに対する肯定的なコメントが何度も語られた。

## 3.3 KR2 の背景

### 3.3.1 KR2 の経歴

KR2 は 1964 年にソウルで生まれ、大学卒業まで暮らした。大学卒業後、オーストラリアに語学留学し、さらにその後日本に語学留学をした。留学中にはたびたび体調を崩し、最終的には留学の目的が達成されないまま韓国に帰国したが、日本で出会った日本人男性と結婚することが決まり、再び来日した。

来日後は機関での日本語学習はおこなわなかったが、銀行や市役所での手続きなど生活でのやりとりを通して日本語を習得することに成功し、それがきっかけで日本での生活に自信を持ち、さまざまな場面に参加するようになった。現在は教会の中心メンバーとして活動をしつつ、趣味領域での交友関係も維持している。

### 3.3.2 KR2 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

結婚来日前の日本に語学留学について、そこでの KR2 のネットワークは日本人、韓国人ともにほとんど語られなかった。しかしその中で、日本で暮らしている KR2 の親戚のネットワークが挙げられた。その親戚は地方で飲食店を経営しており、KR2 もその店を訪ねることがあった。そこには日本人の常連客が通っており、KR2 と接触する機会もあった。

#### (2) 来日後のネットワーク

日本人の夫と結婚して来日してからの生活で形成されていたネットワークは、おもに公共施設、教会、趣味の領域において形成されていた。公共施設では、銀行や役所において手続きを行う際に対応した窓口の担当者以外に、その場で KR2 の支援をした周囲の日本人ネットワークも挙げられた。教会は日本系の教会で、通っていた人は自分よりも年上の日

本人が多く、教会活動に加え、日本の主婦生活についての知識も教わったという。趣味領域では、スポーツ・ジムなどに通っており、そこで新たな日本人の友人ネットワークがつけられていた。そしてその中には、韓国ドラマに興味を持つ日本人女性も含まれていた。

### 3.3.3 KR2 の語りの特徴

KR2 のインタビューは、自分でライフストーリー全体を構成するスタイルで語られた。KR2 の場合、結婚来日後の接触場面の経験とそれによる日本語能力の向上が人生のエピフアニーとなっており、これを核にしながらストーリーを構築していた。ストーリーでは出来事や経験などの事実も語られたが、主観レベルの語りのほうが目立っていた。

## 3.4 KR3 の背景

### 3.4.1 KR3 の経歴

KR3 は 1980 年にソウルで生まれ、高校卒業まで過ごした。幼い頃から外国語に興味があった。KR3 が小学生の頃、両親が日本留学し、さらに父親はその後も仕事で日本を行き来していた。高校卒業後、いったん韓国の大学に入学したが、すぐに退学して 1999 年に日本に留学した。

来日後は日本語学校に通い、日本の大学受験の準備をした。同時に、飲食店でアルバイトを始め、客と日本語やりとりをする機会をもった。合格した大学は志望大学ではなかったが入学することにした。大学入学後は、日本人の友人とよく遊んだ。また新しく始めたアルバイト先でも仲間ができた。この頃、両親と弟が来日し、家族全員が日本に住むことになった。その後、再び大学受験をして 2 年次編入で志望の大学に入学した。大学ではアジア経済のゼミに入った。ゼミの担当教員は韓国に興味を持っており、韓国訪問時の通訳や資料の翻訳などをよく手伝った。その後、日本の一般の大学生と同じように就職活動をして現在の会社に就職した。IT 関係の会社で、現在転職を考えているが、日本経済が安定しないことから、行動には移せないでいる。

### 3.4.2 KR3 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

KR3 は来日するまで日本人ネットワークも日本語との接触もほとんどなかった。一方で、父親が日本で仕事をしており、日本と韓国とを行き来していたこと、日本に母親の知り合

いの韓国人が住んでいたことなどから、間接的に日本と接触しており、KR3 にとって日本は「なじみやすい国」であったという。

## **(2) 来日後のネットワーク**

来日してからの KR3 のネットワークは、教会、アルバイト、大学、職場の領域で形成されていた。KR3 のアルバイト先は複数あり、そこでの同僚や上司、来客などの日本人ネットワークが確認された。大学においては、最初に入学した大学での日本人学生ネットワーク、2 回目に入學した大学の日本人学生のネットワーク、日本人の指導教員とのネットワークが挙げられた。さらに現在の職場では同僚の日本人とのネットワークがあったが、接触には消極的であった。現在の生活でおもに接触があるのは、アルバイト先で出会った日本人の友人と 2 回目に入學した大学での日本人の友人、そして教会の韓国人の牧師、韓国人留学生や日本人などである。その中でも、アルバイト先で出会った日本人の友人とは積極的に接触しており、友人が個人で経営している飲食店を定期的に訪れ、そこで友人をはじめ日本人の常連客と過ごすことは、KR3 にとってリラックスできる場となっている。

### **3.4.3 KR3 の語りの特徴**

KR3 のインタビューは、調査者の質問 1 つ 1 つに対して回答していくスタイルで進められた。とくに大学受験の話題になると、大学受験の状況や自分の行動、そこでいかに苦労したかが詳しく語られた。また、KR3 の語りでは「自分で(調べた)」、「自分の日本語は(発音が)なまっていて地方の人のようだ」、「国籍(は関係ない)」というコメントがキーワードとして繰り返し話されていた。

## **3.5 KR4 の背景**

### **3.5.1 KR4 の経歴**

KR4 は 1985 年にソウルに生まれた。高校生のおきまでは外国語には興味がなく、苦手とされていた。高校 2 年生のおきに母親が日本人男性と結婚して山形に移住したことにもない、KR4 も高校卒業後に日本に留学することになった。2005 年に東京に移住し、日本語学校に通った。来日 3 ヶ月後には飲食店でアルバイトを始めた。アルバイト先では仕事以外に日本語を学んだり、大学受験に関する情報を教えてもらったりした。2007 年に映像関係の専門学校に入學した。専門学校生のおきに韓国系の教会に通い始めた。その後、就職活

動に失敗したが、教会の教えに導かれ、大学進学を決意する。大学では国際コミュニケーション学科を選択し、英語学習に挑戦している。現在は大学生活と教会の活動を中心とした生活を送っている。

### 3.5.2 KR4 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

来日前の KR4 は、日本人ネットワークや日本語との接触はほとんどなかった。高校 2 年生の時に母親が日本人男性と結婚したことで、高校 2 年生の時に日本の大学に進学することが決まると、民間の日本語学校で日本語学習を開始した。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日してからの KR4 のネットワークは、おもに日本語学校、アルバイト先、専門学校、教会、大学の領域において報告された。このうち、日本語学校と専門学校では韓国人ネットワークが中心で、接触には消極的であった。アルバイト先では店長の夫人で「おかみさん」と呼ばれる日本人女性、同僚の中国人留学生や韓国人留学生、来客とのネットワークが挙げられた。現在の生活ネットワークの中心は教会と大学で、教会は韓国系の教会で、韓国人の牧師のほか、同じ通訳班に所属する在日韓国人や日本人、韓国人留学生などのネットワークが報告された。さらに大学では、韓国人留学生のほか、同じ学科の日本人学生 5 人くらいの親しいグループが形成されているという。

### 3.5.3 KR4 の語りの特徴

KR4 のインタビューは、調査者への質問に対してストーリーを構成して回答するスタイルであった。とくにアルバイトの経験と教会に関する話題については、具体的なエピソードをもちいながら詳しく伝えられた。また、KR4 の語りでは、ある経験とそれに対する主観的な語りに加え、その経験を通して思い至った個人の一般的な理解についても語られた。

## 3.6 KR5 の背景

### 3.6.1 KR5 の経歴

KR5 は 1981 年にソウルで生まれた。高校 2 年生のときに第二外国語として日本語を学び始めたところ、教師に褒められ、またひらがなもすぐに覚えられたため、自分には日本語

が向いていると思って興味を持ち始めた。また、当時流行していた日本のポップスやアイドルが好きで、愛好会のような集まりにも参加していた。この時代の韓国では日本文化は禁止されていたが、逆に日本の音楽を趣味とする人たちの間にはルール違反をしているという特別感があったという。高校卒業後は一度就職したが、友人が日本語学科に通っているのに憧れ、仕事を辞めて大学の日本語学科に入学した。大学在学中に旅行や研修で何度か日本を訪れた。

大学卒業後、2007年にワーキングホリデービザで来日した。1年目はアルバイト生活を送り、翌2008年に日本語学校に入学し、大学進学に備えた。2009年には首都圏にある大学に入学した。入学後は友人関係が思うように構築できず、日本語習得にも消極的になっている。

### 3.6.2 KR5のネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

KR5は高校2年生のときに高校の第二外国語の授業で日本語と初めて出会った。同時に、日本のポップカルチャーに興味を持ち、日本のアイドルや歌に接し、韓国内で結成されていた日本の歌が好きな人が集まる会にも参加していたという。また、日本語を学習している韓国人の友人と日本語スタディを行い、一緒に日本の歌を聞き取る練習や試験勉強をしていた。さらに、メディアとの接触では、日本語の本を読んだり、インターネット上のコミュニティサイトで日本人の特徴についての記事を読んだりしていた。

進学した専門学校の日本語学科では学生の半数が日本に留学しており、日本との間接的な接触があった。またKR5自身も旅行やホームステイで何度か日本を訪問している。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日当初はワーキングホリデーでの在住だったため、おもなネットワークはアルバイト先での店長、同僚、来客であった。その後、日本語学校に通い始めてからも韓国人留学生とのネットワークは抑制されており、アルバイト先での日本人ネットワークに積極的に参加していた。KR5のアルバイト先は複数あったが、とくに個人経営の居酒屋で働いていた同年代の男性店員、チェーン店の居酒屋でアルバイトをしていた男子大学生と親しくなり、冗談を言い合っていたという。

一方、大学入学後のネットワークはあまり語られなかった。入学当初はネットワーク形

成がうまくいかず、その後も抑制される傾向にあったが、大学 2 年の時に専攻が分かれてから親しい友人ネットワークが形成されつつある。

### 3.6.3 KR5 の語りの特徴

KR5 のインタビューは調査者の質問 1 つ 1 つに対して回答していくスタイルで進んだ。詳しく語られた話題は友だちづくりに関する内容で、来日 1 年目から 2 年目のアルバイト先での友人関係と大学入学後の友人関係について、それぞれ具体的なエピソードを比較しながら話していた。また、KR5 は主観的なコメントは少なく、事実レベルの出来事を中心に語りを組み立てていた。

## 3.7 KR6 の背景

### 3.7.1 KR6 の経歴

KR6 は 1987 年にソウルで生まれた。小学校 5 年生のころから父親が仕事で日本と韓国を頻繁に行き来しており、日本は身近なところにあった。大学は日本語学科を選ぶつもりだったが、妹がすでに日本に留学しており、父親に留学を勧められたことから、自分も日本の大学に進学する決意をした。

2006 年に来日し、外国語専門学校に入学して日本語を学んだ。来日直後は親戚の在日韓国人と一緒に暮らしたが、彼女が韓国語だけではなく日本語も同程度使うことに違和感をもっていた。その後、大学に入学し、現在は他大学の大学院に進学した。大学院に入ってから中国人やインドネシア人などの韓国以外の出身の留学生と接するようになった。

### 3.7.2 KR6 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

KR6 の場合、家族が日本と韓国との移動を繰り返しており、KR6 も父親が買ってくる日本のキャラクター商品などを通して間接的に日本と接していた。また、高校生 のときに第二外国語の授業で日本語を選択してから日本語との接触が始まった。また、高校生 のときには旅行で日本を訪れている。

#### (2) 来日後のネットワーク

KR6 が来日した時にはすでに韓国人ネットワークが存在していた。父親や妹、親戚とい

った家族のネットワークに加え、父親が経営していた会社で働く在日韓国人と接することも多く、在日韓国人とは日本語を使用する機会があった。家族以外の領域では、専門学校、その後進学した大学、アルバイト先、そして現在通っている大学院と学校中心のネットワークが報告された。専門学校では韓国人が多かったが、大半が年上の人だったこともあり、積極的なネットワーク形成には至らなかった。一方、大学では同じ学科の日本人学生と親しくなり、積極的な接触がみられた。アルバイト先はいずれも短期間のもので、所属する大学以外の学生と接触する機会となったが、継続的なネットワークは形成されなかった。現在の KR6 のネットワークの中心は大学院である。そこでは日本人学生に限らず、韓国人留学生、また中国やインドネシアなど韓国以外の出身の留学生とのネットワークも形成されており、大学での日本人中心のネットワークとは異なっている。また、最近では日本人の友人や他の出身国の留学生に韓国語を学んでいる人もおり、韓国人ネットワーク以外でも韓国語に接触するようになったという。

### 3.7.3 KR6 の語りの特徴

KR6 のインタビューは、調査者との相互行為によって語るスタイルで、KR6 から調査者の韓国語使用や韓国での経験について質問する場面もよく見られた。KR6 の語りで詳しく取り上げられた話題はおもに日本語のバリエーションに関わるもので、在日韓国人が使っていた日本語と韓国語の混交スタイルや日本人学生が使っている日本人の若者言葉やスラングなどが取り上げられた。

## 3.8 KR7 の背景

### 3.8.1 KR7 の経歴

KR7 は 1987 年に麗水市で生まれ、小学校 3 年生のときにソウルに引っ越してきた。4 歳上の姉が日本語を勉強しており、その影響で自分も興味を抱いた。姉は日本語のほかに英語と中国語も勉強して堪能だった。小学生のときから独学で日本語学習を始め、中学生からは長期休暇の間に姉と一緒に日本語の塾に通い、やがてプライベートレッスンを受けるようになった。また、日本の音楽が好きで、日本のアイドル雑誌を買っていた。また姉の日本人の友人がたびたび韓国を訪れ、交流する機会をもった。高校では第二外国語で日本語を選択した。高校 2、3 年生のころは日本のドラマに夢中になった。日本語の学習も進み、日本のテレビ番組を視聴したり、アイドル雑誌の翻訳をするようになった。大学進学の際、

一度美術大学に進もうとしたが、将来性を考えて日本語の道に進むことを決意した。

2007 年に来日した。来日の時点で日本にはすでに姉の恋人をはじめ韓国で知り合った日本人の友人が多くいた。来日後は日本語学校に 1 年通い、大学に進学した。大学では所属学科に加え、サークル活動や留学生会にも参加している。さらにアルバイトや地域との交流もおこなっており、さまざまな場面に積極的に参加してネットワークを広げている。

### 3.8.2 KR7 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

経歴でも述べたとおり、KR7 は姉の影響で日本語や日本人と多くの接触をもってきた。姉の友人である日本人、また日本語学校では日本人教師から個人レッスンを受けていたという。また、KR7 はメディア接触にも積極的であった。小学生の頃から日本の歌を聞いたり、日本のアイドル雑誌を入手したりしていた。日本語学習が進むと、歌を聞いて書き取ったり、アイドル雑誌の日本語記事を読んで韓国語に翻訳したりする勉強もしていた。さらに、日本のテレビ番組もドラマやニュースなど様々なジャンルの番組を視聴していた。また、韓国のインターネットサイトの中で、日本の雑誌やドラマの韓国語訳や日本文化・日本人についての記事が見られるサイトを読み、日本語や日本についての知識を得ていたという。KR7 自身で日本に関する書籍を購入し、読むこともあった。高校生のときには第二外国語として日本語を選択し、授業を受けていた。

また、日本に住む姉の友人を訪ねて、複数回日本旅行も経験している。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日後、KR7 は積極的に日本人とのネットワークを拡大している。まず、姉や姉の恋人、姉の友人、インターネットサイトで知り合った日本人の友人など、韓国で暮らしている時から形成されていた日本人ネットワークがあった。また、来日初期に通った日本語学校では、韓国以外の出身の留学生と多く接していた。大学に入学し、現在の KR7 のネットワークはさらに広がっている。先に挙げたもともとの日本人ネットワークのほか、大学の同じ学科の日本人の友人、アルバイト先の上司や同僚の日本人、大学の国際交流サークルで出会う日本人学生や留学生、大学の留学生会、自治体が主催する地域住民との国際交流会などのネットワークが報告されていた。KR7 はすべてのネットワークに積極的に参加しており、ネットワークの管理に対する意識の強さがうかがえる。

### 3.8.3 KR7 の語りの特徴

KR7 のインタビューは、調査者への質問に対してストーリーを構成して回答するスタイルで進行した。とくに、ある出来事を経験した後で、それをきっかけに自分が考えた日本人や日本語学習に対する理解を述べることが多く、日本人の特質への一般的な理解や日本語学習に対するあるべき態度などについて意見が主張された。

## 3.9 KR8 の背景

### 3.9.1 KR8 の経歴

KR8 は 1973 年にソウルで生まれた。大学生までは日本に興味がなく、むしろ嫌いな国であった。大学の時に映画サークルで外国映画を見るときに、日本字幕付きのものを見ることが多く、日本語に興味をもつようになった。また戦争を題材にした日本映画を見たときに内容に矛盾を感じ、直接日本語で見ると理解できるのではないかと考え、日本語学習を始めた。日本語学校に通い、大学卒業後も継続した。日本語学校では褒められることが多く、教師に勧められて日本語能力試験を受験したところ 1 級に合格した。翌年には会社を辞めて日本語に専念し、大学院に進んだ。大学院では日本文学を専攻し、修士課程を修了した。その後、大学教員などの紹介で日本語のプライベートレッスンや語学学校、公立中学校での日本語授業を担当し、日本語教師として仕事をした。しかし、語学スクールの校長に日本語の学位を持っていないことを指摘され、日本の修士学位を取得するため 2001 年に来日した。

来日後は日本語学校に入学し、日本語の授業以外に日本語教員養成講座も受講した。その後、ある大学院の研究生となったが専門性が合わず進学には至らなかった。次に研究生となった大学院は専門も合致し、そのまま修士課程に進んだ。またここで同年代の日本人の親しい友人ができた。現在は韓国語教師として語学学校や大学で教鞭をとりながら、博士課程で研究をおこなっている。

### 3.9.2 KR8 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

KR8 はもともと日本とは距離を置いていたが、それでも外国映画を見るときに日本語字幕がついているなど、メディアを通じた日本語との接触があった。日本語学習を初めてからは、日本語に関わる韓国人のネットワークが広く形成されており、日本語学校の教師や

受講生、大学院に関わる人などとの接触がみられる。日本人とのネットワークとしては、韓国語を学びに韓国に来ていた日本人留学生と言語交換を行っていた。さらに、街を歩いている日本人観光客に日本語で話しかけたりもしており、偶発的なネットワークも形成していた。

## (2) 来日後のネットワーク

来日して初期のころは、日本語学校とアパートの隣人とのネットワークが中心であった。日本語学校では校長がアパートを借りるときの保証人になったり、無料で日本語教師養成講座の受講を認めるなど、KR8 の日本生活を支えるキーパーソンとなっていた。また、アパートの近所には老夫婦が暮らしており、日常的に互いの部屋を訪れたりしているという。また、この頃は日本語学校で出会った韓国人留学生とのネットワークも積極的に形成していた。

研究生として最初に所属した大学ではネットワーク形成に消極的であったが、その後、入学した大学院では積極的にネットワークが形成されており、親しい日本人の友人も挙げられた。現在中心となっているネットワークとしては、大学院での日本人の友人や指導教員、またアパートの隣人のほか、韓国語を教えている日本人とのネットワークも挙げられた。

### 3.9.3 KR8 の語りの特徴

KR8 のインタビューは自分でライフストーリー全体を構成するスタイルだった。KR8 の語りには主観的なコメントが少なく、経験や出来事を語ってメタメッセージを伝えていた。たとえば、日本のアパート探しに苦労したことについて、直接「苦労した」とは言わず、「留学斡旋所は探してくれなかった」「保証人が見つからなかった」「不動産屋に外国人だという理由で断られた」といった事実を語ることで、その苦労を伝えていた。

## 3.10 KR9 の背景

### 3.10.1 KR9 の経歴

KR9 は釜山出身で、幼いころから町に日本人観光客がいることが当たり前の環境で育った。高校卒業後、二年制大学の観光通訳学科に進学し、日本語を学び始めた。卒業後は釜山の旅行会社に勤務していたが、友人がオーストラリアに留学した話を聞き、自分も留学

を決めた。当時韓国は経済状況が悪く、会社からの収入も安定していなかったため、韓国で働き続けるよりも日本に行って勉強したほうが役立つと考えた。

2001年に語学留学のために来日し、日本語学校に留学した。当初は1年ほど日本語を学んで帰国するつもりだったが、予定を変更し、大学に進学した。大学卒業後は大学院修士課程に進み、在学中に日本人男性と結婚した。修士課程修了後は翻訳・通訳の仕事をしたが、出産を機に一度辞めて子育てに専念した。現在は子どもが幼稚園に通うようになり、仕事を再開している。

### 3.10.2 KR9のネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

来日前、KR9は個人の日本人ネットワークには参加していなかったが、町には日本人観光客が多く、間接的な接触はあった。また、大学で日本語の学習を始めてからは、日本のドラマもよく見ていたといい、メディアを通して日本語や日本文化と接していた。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日初期の頃のおもなネットワークは、日本語学校に通っていた韓国人と後に夫となる日本人男性であった。その後、進学した大学では親しい日本人の友人が1人できたが、それ以外の日本人ネットワークはあまり形成されなかった。また当時のアルバイト先には韓国料理店を選び、韓国人ネットワークを保持していた。現在のネットワークの中心は、日本人の夫と子ども、また子どもが通う幼稚園での母親同士の日本人ネットワークである。加えて、通訳の仕事領域において接触する日本人ネットワークや韓国人ネットワークも存在する。

### 3.10.3 KR9の語りの特徴

KR9のインタビューは、調査者の質問1つ1つに対して回答していくスタイルであった。とくに、子どもの幼稚園で母親同士の付き合いが始まった時期の出来事は詳しく語られた。その際、友人ができたことについて語る際には、大学時代に日本人との付き合いに難しさを感じていたエピソードを出して比較したり、幼稚園が楽しいと語る際には、他の幼稚園の状況と比較したりして語りを強調していた。

## 3.11 KR10 の背景

### 3.11.1 KR10 の経歴

KR10 はソウル出身で、高校生まで同市で過ごした。高校3年生の時に「日韓共同理工系学部留学生事業<sup>1</sup>」の存在を知り、韓国の大学受験と並行して準備を始める。最終的に自分の利益になるのは日韓プログラムだと考え、日韓共同理工系学部留学生として2008年に来日した。

大学入学前後の1年間、韓国で6ヶ月間、日本で6ヶ月間予備教育として日本語を学んだ。予備教育終了後は日本のある国立大学に入学した。もともとクリスチャンで大学入学後も韓国系の教会に通い始めたが、2ヶ月ほど経つと足が遠のいた。その後、大学2年生の時にスランプに陥り、心のよりどころを求めて同じ教会に通い出した。大学卒業後は同じ大学院の修士課程に進学した。修士1年の時には、かねてから役職に就いていた韓国人留学生会の会長を務めた。現在は日本で就職するための準備を始めている。

### 3.11.2 KR10 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

来日前のKR10は日本留学を決めるまで、日本や日本語との接触はほとんどなかった。高校2年生の時に学校の旅行で一度日本を訪れたのみであった。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日後してからのKR10の生活は大学と教会の領域が主となっている。大学では、来日初期には日本人チューターがいたが、それ以降は同じ学科・研究室の日本人学生とのネットワーク、KR10と同じ日韓プログラムで留学している韓国人ネットワーク、さらに韓国人留学生会での韓国人ネットワークが形成されていた。また、大学外では教会のネットワークが挙げられ、韓国系の教会であることから、韓国人留学生や在日韓国人、日本人とのネットワークが確認された。

---

<sup>1</sup> 日韓の青少年交流を促進するため、両国政府の共同予算負担により、文部科学省国費学部留学生待遇で、韓国からの優秀な理工系学生を毎年100人ずつ選抜して日本の国立大学に受け入れ、将来日韓のカケハシとなる人材を育成しようという教育プログラム。1998年に日韓共同宣言に基づいて創設され、2000年から受け入れが開始された(太田、2014)。KR10はこのプログラムの第9期生にあたる。

### 3.11.3 KR10 の語りの特徴

KR10 のインタビューは、調査者の質問 1 つ 1 つに対して回答していくスタイルで進められた。KR10 の語りには、「日本人になる」がたびたび現れ、キーワードとなっていた。さらに、インタビューの最後の部分で自発的に自分の日本語に対する自己評価の語りを加えており、「日本人らしくなったと思う」こと、就職説明会で日本人に間違えられてうれしかった経験が語られていた。

## 3.12 KR11 の背景

### 3.12.1 KR11 の経歴

KR11 はソウル出身で、高校卒業後に一度就職した後、退職してソウル市内の大型書店でアルバイト店員として働き始めた。あるとき書店で日本語勉強会が開催されることになり、そこに毎回参加して日本語を学んだ。その後、書店での業務が事務から日本輸入書籍売りに移動になり、仕事で日本語が必要になったため、民間の日本語学校に通い始めた。その後、売り場の責任者になったときに日本語の専門ではないことがコンプレックスとなり、韓国の通信制大学の日本学科に編入した。職場では日本語能力以上に日本文化が必要であったため、大学でも日本の文化を専攻にした。その後、退職を決意し、韓国語教師の資格を取るために大学の国語学科に編入、卒業した。書店で勤めていたころは、たびたび日本を旅行し、日本に知り合いもいた。その後、知人の紹介で日本の大学の研究生に合格し、2009 年に来日した。

来日後は、研究生を経て大学院修士課程に入学した。幼いころから教会に通っていたこともあり、現在は宗教社会学を専門として研究をおこなっている。

### 3.12.2 KR11 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

KR11 は来日前からさまざまな形で日本や日本語と接触していた。最初に日本語に触れたのは高校の第二外国語での受容であった。その後、社会人になってからは、メディアを通して当時流行していた日本のドラマをよく見ていた。また、勤務していた書店で開催されていた日本語勉強会に参加し、日本語の知識がある韓国人教師を通じた日本語学習が始まった。勤務先の書店では、輸入された日本書籍コーナーがあり、そこに配属されてからは、日本と関わりのある来客と接触することになった。おもに訪れるのは、韓国在住の日本人、

日本から帰国した在日韓国人、日本文化に関心のある韓国人で、さらに他の出身からの外国人もいたという。また、日本文学の知識が必要とされたため、韓国語に翻訳された日本の小説を読み、職場で開かれる読書会で発表することもあった。

職場以外では、働きながら通った民間の日本語学校や大学の日本学科が挙げられる。日本語学校では日本人の教師による授業を受講したり、日本のドラマやニュースなどメディアを活用した日本語の授業を受けていた。また大学では日本文化を専攻し、日本に関する資料に接してきた。さらに、韓国を訪れている日本人観光客に声をかけて案内するなど偶発的なネットワークも見られた。

また、KR11 は来日前にも旅行で複数回日本を訪れていた。

## (2) 来日後のネットワーク

来日後は大学院と教会中心の生活を送っている。大学院では同じ研究室の学生とのネットワークとクリスチャンサークルのネットワークに参加している。同じ研究室の学生では日本人学生や中国やモンゴル出身の留学生とのネットワークが挙げられ、頻繁に接触していることが報告された。またクリスチャンサークルでは日本人ネットワークが中心となる。一方、教会でも KR11 は日本系の教会に通っており、ネットワークも大部分が日本人であるという。

### 3.12.3 KR11 の語りの特徴

KR11 のインタビューは、自分でライフストーリー全体を構成するスタイルだった。ストーリーの途中で本筋から外れるときに「これは別の話ですが」と前置きを入れていたことからわかるように、ストーリーの構成を強く意識していた。来日後の話になると、日本語使用について「ずっと悩んでいる」というキーワードが繰り返されており、具体的なエピソードとともにその苦悩が語られた。

## 3.13 KR12 の背景

### 3.13.1 KR12 の経歴

KR12 はソウル市近郊の京畿道安養市で生まれ、高校までを過ごした。母親は日本人だったが、家庭言語は韓国語だった。幼少期には 3 年に 1 回ほど日本に行く機会があった。高校の時は母親が日本人であったことからいじめられていたが、高校 2 年の時の担任教員は

理解があり、自分に自信を持つように励ましてくれた。高校卒業後に留学したいと考え、母親に相談した。自分では欧米を希望していたが、母親の判断で日本に留学することになった。

2009 年に来日し、ホームステイをしながら日本語学校に通った。1 年後からはゲストハウスに引っ越し、韓国料理店でアルバイトを始めた。アルバイト先には日本人も韓国人もスタッフとして働いており、友人をつくる場にもなった。2011 年に大学に入学した。大学は国際ファッション学科でファッションと英語が学べて留学制度も充実しているところが決め手だった。現在はイギリス留学を目指して励んでいる。

### 3.13.2 KR12 の社会的ネットワークの特徴

#### (1) 来日前のネットワーク

KR12 は日本人の母親をもっており、日本に親戚がいる。この家族の日本人ネットワークにより、KR12 は幼い頃から日本文化や日本語と接触する機会を持っていた。また、日本人の母親が作る日本料理などを通して、日本文化に触れることもあった。日本語は高校の第二外国語の授業で学習を始めた。

#### (2) 来日後のネットワーク

来日時に KR12 は母方の親戚や母親の友人などすでに日本人ネットワークをもっており、来日してから 1 年間は母親の友人宅にホームステイをして日常的に接触していた。ただ年齢が離れていることから、このネットワークへの接触は消極的であった。来日初期に通った日本語学校には韓国人留学生は少なく、韓国出身以外の留学生とのネットワークが形成され、とくに台湾出身の留学生と親しくしていた。一方、KR12 はアルバイトでは韓国ネットワークを選択しており、最初のアルバイトは韓国系の美容院、2 回目のアルバイトは韓国料理店で働いている。現在のネットワークの中心はこの韓国料理店でのアルバイトで、積極的にネットワークを形成しており、日本人社員、韓国人のアルバイト店員、来客との接触がみられる。一方、通っている日本の大学では積極的なネットワーク形成は見られず、日本語の授業が日本語習得の場となっているのみであった。

### 3.13.3 KR12 の語りの特徴

KR12 のインタビューは、調査者との相互行為によって語るスタイルであった。会話に近

い形で KR12 から調査者に韓国での経験や大学時代のことについて尋ねたり、調査者の意見を求めたりすることもあった。KR12 からは、高校時代のいじめや留学直後の経験、アルバイト探し、大学のカリキュラムについては具体的なエピソードを追加して詳しく語られた。

### 3.14 本章のまとめ

本章では KR の言語バイオグラフィーからみた個人的背景をそれぞれまとめた。KR の背景は個人によって異なるが、いずれの KR も日本と何らかの接点があったことがわかる。

もともと家族が日本や日本人とつながっていた KR はもちろん、直接の人的ネットワークがない KR1、KR8 においても、幼い頃からメディアを通して間接的に日本語や日本文化に触れる機会がたびたび見られた。また、日本に関する書籍や新聞記事、インターネット記事が日常的に流通しており、KR は容易に日本の知識を得られる状況にあった。さらに、韓国では日本語学習環境が充実しており、KR は日本語を学習しようとするときさまざまな方法で勉強をすることができた。そこには、高校の第二外国語の授業や民間の日本語学校といった教育機関だけでなく、インターネットサイトや日本語を学習している韓国人同士でのコミュニティが形成されていることもあった。

現在の KR のネットワークには日常的に接触する日本人ネットワークが形成されていた。留学生の場合は、大学とアルバイトがおもな生活領域となり、社会人の場合は職場の領域、子どもがいる場合は幼稚園での領域が語られ、それぞれの領域で日本人ネットワークが確認された。一方で、教会のネットワークに参加している KR も多く、日本系の教会では日本人ネットワーク、韓国系の教会では日本人以外にも韓国人や在日韓国人など韓国と関わりのある人とのネットワークがつくられていた。

語り方の特徴をみると、自分でストーリーを組み立てて語るタイプの KR と調査者からの質問に答えていくスタイルの KR の 2 つの傾向がみられた。質問に回答するスタイルの KR の場合にも、強調したいキーワードを繰り返し語る、重要なエピソードは出来事を具体的に語る、一般的な思想として語るなど語り方にはバリエーションがあり、そこに KR がもっている日本語使用や日本語学習に対する態度が示されていた。

以上のように、KR は韓国で暮らしているながらも直接的または間接的に、多様な日本語や日本文化のリソースに接触することが可能な環境に置かれていた。さらに、日本では日本人との接触が増えることで、さまざまな日本語の管理が経験されてきたことが語りの特徴からわかる。移動しやすい地域の 1 つであったと考えることができる。これらのことから、

KRにとって日本は身近な国であり、移動しやすい地域であったと言える。

## 第4章 会話における韓国人居住者の逸脱の管理

本章では、実際の会話においてKRが使用する日本語の特徴を明らかにするため、KRの日本語使用に対して留意された逸脱について検討する。

本研究で収集された会話はKRと親しい日本人(J)との雑談場面で、KRにとっては日本語の丁寧さや正確さは求められない、リラックスした日本語使用の場面である。そのため、KRの日本語への規範も緩められ、逸脱が出現しやすい状況であった。ただ、親しい関係ではすでに誰がどのように話すかといったことは共有されている場合が多く(大場、2012)、逸脱が出現したとしても認識されない可能性が高い。

よって、本研究ではKRの逸脱を第三者による視点と当事者である当事者によるやりとりという2つの観点から考察することにした。そして、第三者に留意・評価される逸脱と当事者間でやりとりされている逸脱がどのような意味を持つのかを明らかにする。

### 4.1 第三者によるKRの逸脱の評価

#### 4.1.1 評価の主体と逸脱の認定

本研究ではまず、会話に参加していない第三者に留意された逸脱と評価について考察をおこなう。

第2章で述べたとおり、本調査では第三者として日本語母語話者(JT)と日本に長期滞在する韓国人居住者(KT)に会話で話しているKRの日本語について評価を依頼した。その結果、KRの日本語の不自然さや話し方に対する違和感などが逸脱として留意、評価された。また、KRが会話の中で実施した言語調整も第三者には逸脱として留意されることがあった。

このうち、JTによる逸脱の評価は、KRの日本語が日本に住む韓国人、または外国人が話す日本語としてどうだったかという規範を基盤としておこなわれていた。つまり、日本語の文法の誤用は「日本語の間違い」として否定的に評価されるが、一方で「はっきりと意見を言う」という逸脱については「自分の考えをはっきり伝えるのは外国人らしくて良い」と肯定的に評価することもある(cf. フェアブラザー、2003)。ただし、個人のもつ規範は同じ日本語母語話者であっても、接触経験は外国語の学習経験などが影響しているため、まったく同じ規範で評価しているわけではない。

KTによる逸脱の評価は、同じ日本語学習者、日本に住んでいる韓国人としてどうかという観点からおこなわれた。たとえば、韓国人が苦手とする「ツ」の発音を厳しく評価した

り、韓国に帰国することを「韓国に帰る」ではなく「韓国に行く」と表現したことについて違和感をもったりするといった指摘があった。これらの規範は、KT が認識している韓国人の一般的特徴や KR 自身が経験した日本語学習や日本人との接触によるもので、これらもまた個人によって異なる。

本研究では、KR の日本語使用の多様性をより広く考察するため、JT および KT の個人差を認めた上で、1 人でも JT または KT が評価した逸脱はすべて KR の逸脱として認め、分析の対象とすることにした。

#### 4.1.2 評価された逸脱の概要

第三者によって留意された逸脱は 496 件確認された。第三者による逸脱の指摘の仕方は、具体的な発話の該当部分だけでなく、会話全体に対して評価をするケースも見られた。これらを分けて、それぞれの逸脱の評価を分類した結果、個々の日本語使用の逸脱が 422 件、全体的なコメントに対する逸脱は 74 件であった。これらの逸脱をさらに言語、社会言語、社会文化の 3 種類に分類し、その評価を肯定的、中立的、否定的評価の種類に分類した。

以下の表は、これらの分類の結果をまとめたものである。

表 4.1.1 会話中の日本語使用に対する評価

	肯定的評価	中立的評価	否定的評価	合計
言語的逸脱	27	11	180	218
社会言語的逸脱	103	20	63	186
社会文化的逸脱	13	3	2	18
合計	142	34	246	422

表 4.1.2 会話全体を通しての評価

	肯定的評価	中立的評価	否定的評価	合計
音声・語彙・文法	19	1	31	51
全体の会話進行	4	0	0	4
全体的な日本語使用	14	2	3	19
合計	37	3	34	74

表 4.1.1 を見ると、第三者によって留意された逸脱は、個々の言語使用に関しては 422 件確認された。逸脱の種類を見ると、言語的逸脱が 218 件、社会言語的逸脱が 186 件、社会文化的逸脱が 18 件と、約半数が言語的逸脱であった。次に、評価の種類を見ると、逸脱全体では肯定的評価が 142 件、中立的評価 34 件、否定的評価が 246 件と否定的評価のほうが多くなっている。逸脱の種類別の評価を見ると、言語的逸脱は 218 件中肯定的評価が 27 件、中立的評価が 11 件、否定的評価が 180 件となっており、言語的逸脱の大部分は否定的に評価されていることがわかる。これは、逸脱を日本語の規範から外れた「間違った日本語」として評価した結果である。社会言語的逸脱に対する評価を見ると、肯定的評価が 103 件、中立的評価が 20 件、否定的評価が 63 件と肯定的評価の方が多結果となった。これは、コミュニケーションがなめらかに進行し、自然なやりとりとして捉えられたことが関係していると考えられる。社会文化的逸脱は肯定的評価が 11 件、中立的評価が 3 件、否定的評価が 2 件と、大部分が肯定的に評価されていた。ここでは、KR の社会文化的逸脱が第三者に「異文化」として面白く感じられたことが関連している。

次に、表 4.1.2 を見ると、会話全体に関して評価された逸脱には、音声・語彙・文法(51 件)、全体の会話進行(4 件)、全体的な日本語使用(19 件)の 3 種類が見られた。このうち、音声・語彙・文法は全体的な日本語使用言語的逸脱に関わる逸脱で、大部分を占めている。また、評価の種類に目を向けると、肯定的評価が多い。音声・語彙・文法は肯定的評価 19 件、中立的評価 1 件、否定的評価 31 件、全体の会話進行に対しては 4 件とも肯定的評価であった。また、全体的な日本語使用に対する評価は、肯定的評価 14 件、中立的評価 2 件、否定的評価 3 件と肯定的評価が多い。このように、会話全体からみた場合、KR の日本語は比較的肯定的に評価される傾向にあり、全体として自然な日本語使用としてとらえられていることがわかる。

以下では、それぞれの逸脱の種類とその評価の特徴について考察する。

### 4.1.3 言語的逸脱

言語的逸脱は、さらに発音、韻律、語彙、文法の 4 種類に細分類された。

以下の表 4.1.3(次ページ)に、言語的逸脱の分類とその評価を示す。

表 4.1.3. 留意された言語的逸脱と評価

留意された言語的逸脱		肯定的	中立的	否定的	合計	総計
発音	日本語の発音	7	1	84	92	95
	韓国語の発音	2	1	0	3	
韻律	アクセント・イントネーション	5	2	43	50	62
	リズム	1	0	0	1	
	スピード	0	6	2	8	
	声の高さ	3	0	0	3	
語彙		8	1	23	32	32
文法	品詞・活用	1	0	18	19	29
	接続表現	0	0	6	6	
	文末表現	0	0	4	4	
合計		27	11	180	218	218

留意された言語的逸脱 218 件を逸脱の種類別にみると、発音が 95 件、韻律が 62 件、語彙が 32 件、文法が 29 件となっている。このことから、KR が留意される言語的逸脱は語彙や文法よりも発音・韻律を含む音声的特徴が 218 件中 157 件と 7 割以上を占めていることがわかる。

#### (1) 発音・韻律 (157 件)

韓国人にとって、文法構造や語彙の韓国語との類似性から日本語は学びやすい言語であると言われているが、音声的側面については問題があると指摘する先行研究も少なくない(関光準、1989; 佐藤、1995; 松崎、1999; 北村、2000; 堀籠、2006; 高村、2009 など)。これらの研究では、韓国人の日本語発音を母語干渉による誤用として取り上げており、学習の障害要因としてとらえられている。本研究においても同様に、語頭・語中の無声破裂音、語頭の有声破裂音、「ツ」の発音、「ザ」行の「ズ」「ゼ」「ゾ」の発音、促音・長短音の区別といった発音の特徴、またアクセントやイントネーション、リズム、スピードや声の高さなどの韻律的特徴がすべての KR に対して逸脱として留意されていた。これらは、第三者のコメントによると「間違っている」、「韓国人の発音」としてとらえられており、「日本語の発音」に関しては 92 件中 84 件、韻律に関しては 62 件中 45 件が否定的に評価されてお

り、全体的に否定的に評価される傾向にあった。例えば、KR1 の「でんとう」が「でんどう」、「じょしゅ」が「じょす」、「しゅうまつ」が「しゅまつ」に聞こえることが評価をした第三者 5 名(JT1、JT3、JT4、KT1、KT2)に逸脱として留意され、否定的に評価されていた。

一方、韓国語の発音(3 件)については、会話中で韓国語の話題が出て料理名や地名などで韓国語が発話された場合、その発音が韓国語ネイティブの発音であることが肯定的に評価されていた(2 件)。例えば、KR7 の「짬짬방, tchim-jil-bang: 韓国式健康ランド」、KR8 の「잠실, cham-shil: 地名」が「韓国語の発音もきれい」(KT6)、「韓国語がネイティブ」(KT4)とコメントされており、肯定的に評価された。

## (2) 語彙 (32 件)

語彙については、不自然な語彙の使用や韓国語の直訳で表現した語彙・表現が逸脱として留意され、否定的に評価された(23 件)。たとえば、KR9 は「三重まぶた」を「みつえ」と表現したことが JT7 に「日本語では言わない」と否定的に評価された。また、「学級委員」を「班長(반장)」(KR2)、「授業を受ける」を「授業を聞く(수업을 듣다)」(KR5)のように韓国語の直訳で表現した語彙も「韓国語の直訳になっている」(KT2)、「不自然」(JT7)だと否定的に評価されている。

一方、肯定的に評価された語彙も見られた(8 件)。このタイプの語彙は、オノマトペや漢字熟語など外国人にとって難しいと予想される語彙が指摘されていた。たとえば、KR9 の「家がぼろぼろ」という表現、KR7 の「穀物」、KR11 の「ギリシャ正教」などが「日本人っぽい」(JT7)、「難しい日本語を知っている」(JT5、KT6)と肯定的に評価されていた。

## (3) 文法 (29 件)

文法に関する逸脱は、「品詞・活用」(19 件)、「接続表現」(6 件)、「文末表現」(4 件)が確認された。「品詞・活用」では、助詞の使い方や自動詞・他動詞の選択と活用、指示詞、また文と文をつなぐ「接続表現」や使役表現、受け身表現、ノダ表現、授受表現といった「文末表現」が挙げられ、これらに対する評価コメントは「間違っている」という評価がほぼすべてにおいてなされており、先行研究で指摘されている文法的誤用の一部と同じ傾向がみられた(許明子、2008; 若生、2010; 李賢淑、2013; 高木、2014 など)。たとえば、KR1 の「順番に」と言うところを「順番ずつ」としたこと、KR7 が「楽しめない」を「楽しめられない」と発話したこと、KR11 の「純粹ではない、だから」という表現に対して、「間違

っている」(KT2、KT4)、「上手じゃない」(JT5)などとコメントされており、否定的に評価されていた。

以上のように、KRの言語的逸脱は、その多くが否定的に評価されており、先行研究で指摘されてきた韓国人学習者の日本語の誤用と同じ傾向が示されている。

#### 4.1.4 社会言語的逸脱

社会言語的逸脱は、第2章で述べたとおり、ネウストプニー(1995)の文法外コミュニケーションのルールを枠組みとし、点火ルール、バラエティルール、内容のルール、形のルール、そして操作のルールの5つのルールによって分類をおこなった。さらに、それぞれのルールごとに逸脱の種類を細分類した結果、以下の表4.1.4のとおりになった。

表 4.1.4. 留意された社会言語的逸脱と評価

留意された逸脱		肯定的	中立的	否定的	合計	総計
点火	話題数	4	0	0	4	11
	発話の量	1	2	4	7	
バラエティ	丁寧なスタイル ・くだけたスタイル	1	1	7	9	27
	話し言葉の表現 ・固い表現	5	1	3	9	
	男性言葉・女性言葉	0	0	1	1	
	人物呼称	2	0	6	8	
内容	話題の種類	10	3	1	14	22
	発話の内容	5	1	2	8	
形	会話の進行	57	6	9	72	120
	話題の展開	6	0	6	12	
	発話意図の表示	11	3	19	33	
	韓国・韓国人に関わる表現	0	3	0	3	
操作	理解問題の処理	0	0	3	3	6
	産出問題の処理	1	0	2	3	
合計		102	20	64	186	186

社会言語的逸脱のうち、最も多く評価された逸脱は形のルールに関わる逸脱で 120 件と全体の 6 割を超えていた。その他、バラエティルールが 27 件、内容のルールが 22 件、点火ルールが 11 件、操作のルールが 6 件の順に確認された。また、社会言語的逸脱の場合、評価は全体的に肯定的評価の方が多かった。

### (1) 点火のルール (11 件)

点火のルールに関する逸脱には、「話題数」(4 件)と「発話の量」(7 件)が挙げられた。これらは会話への積極性や貢献度に関わる逸脱であり、先行研究でも母語話者評価において重視される評価基準として指摘されている(渡部、2004a、2004b; 吉田、2014)。

「話題数」に関しては、「話題を積極的に出す」ことと「話題を自分から出さない」という両方向が逸脱として留意され、いずれも肯定的に評価されていた。たとえば、KR8 が「新しい話題をたくさん出す」ことについては、JT7 と JT8 に話題の豊富さとして肯定的にとらえられていた。一方、KR3 が「自分から話題を出さない」ことについては、「日本語らしい」として KT2 に肯定的に評価された。

「発話の量」は 7 件中、肯定的評価 1 件、中立的評価 2 件、否定的評価が 4 件確認された。「発話の量」は、「発話が多いこと」と「発話が少ないこと」の両方向が逸脱として留意され、このうち、「発話が多いこと」に対しては、肯定的評価は見られなかった。たとえば、KR8 の発話の量が多いことに対して KT4 は「ものすごくしゃべる」と中立的に評価し、KT3 は「話しすぎている。相手に話させない」と否定的に評価していた。「発話が少ないこと」については、評価にばらつきが見られた。否定的に評価された事例としては、KR12 の発話量の少なさに対する「あまり話さない」という KT5 のコメントが挙げられる。また中立的な評価については、KR6 の会話について、KT7 は「日本人のほうが多く話している」とコメントしている。一方、KR10 に対しては、KT5 に「たくさん話さないのが、韓国人の男の人っぽくていい」と韓国人男性らしさが肯定的に評価されていた。このように、発話の量に関してどの程度の発話を期待するかは評価者によって評価が異なっていた。

### (2) バラエティのルール (27 件)

バラエティのルールに関する逸脱は、さらに 4 つのカテゴリーに分類することができた。まず、「丁寧なスタイル・くだけたスタイル」(9 件)については、丁寧体がベースとなってい

る会話で突発的に敬語が出現したり、逆にくだけたスタイルが使われた場合に逸脱として留意され、その大部分は否定的に評価されていた(7件)。たとえば、KR1がJ1との会話で、です・ます体で話しているところに突然「日本の方」「いらっしゃる」と敬語を使用したことについて、JT1とJT4は「(同じ研究室の)同年代の人のことを話すのに敬語を使っている」「文脈に合わない」と否定的に評価した。ただし、この場合、KT1は同じスタイルシフトを「日本人を配慮した敬語」ととらえ、肯定的に評価している。一方、KR4とJ4との会話では、KR4がJ5に「～けど」「そうなんだ」などくだけたスタイルで話すことに対し、「年上には軽すぎる」(JT3)、「年上に対して友だちっぽすぎる」(KT2)、「年上に対して敬語が少ない」(KT5)と否定的に評価されていた。

「話し言葉の表現・固い表現」(9件)については、友人同士の会話体の表現が自然な日本語会話の表現として多くが肯定的に評価されていた(5件)。たとえば、友人同士で普通体がベースとなっている会話で、「一緒に参加しよかなって」(KR5)、「やってみ？」(KR6)のような表現が「ナチュラル」(JT7)、「自然な話し言葉」(JT8)と肯定的に評価されていた。一方、否定的に評価された事例としては、KR8が使用した「やばい」という表現が、「(KR8が使うには)若すぎる」(KT3)というコメントが挙げられた。

「男性言葉・女性言葉」(1件)はジェンダーにそぐわない表現を使用していた場合に否定的に評価されていた。本調査では、KR5が使用した「しょうがねえ」という表現に対し、「女の子なのに乱暴だ」(JT7)と女性として不適切だと否定的に評価する事例が見られた。

このような発話のスタイルについて、接触場面におけるスピーチレベルのシフトが母語場面とは異なった特徴を持つことは先行研究においても指摘されている(伊集院、2004; 嶋原、2014など)。また、李吉鎔(2005:208)は、韓国語にもスピーチスタイルの切り換えがあることに注目し、韓国語を母語とする学習者が母語の社会言語的な規範をベースにして、独自体系を築きつつ、切り換え能力を習得していくことを指摘している。このように、接触場面という場面性や韓国語母語話者という属性がKRの発話スタイルの選択に影響を与え、それが第三者によって逸脱として評価されていたと考えることができる。

また、「人物呼称」(8件)については、多くが韓国語を転用した呼び方で、年上女性を「お姉さん」(KR2)、年上男性を「オッパ」(KR10)と呼んでいることが逸脱として留意されたが、「本当の兄弟でないのに変だ」という評価(6件)もあれば「面白い」という評価(2件)もあり、評価者によって異なっていた。日韓両言語の呼称表現のバリエーションの多さと呼称選択のルールの類似性は以前から指摘されており(林炫情他、2002など)、本研究のように接触場

面において両言語の呼称が混在するケースも報告されている(林炫情、2016)。呼称表現は人間関係を示すのに有用で、かつその類似性から接触場面においても転用しやすいタイプの表現であると推測される。しかしその評価は、おおむね否定的に受け止められる傾向が強く(林炫情、2016)、本調査においても否定的な評価の方が多く確認された。

### (3) 内容のルール (22 件)

内容のルールについては「話題の種類」(14 件)と「発話の内容」(8 件)が留意され、全体として大部分は肯定的に評価されていた(22 件中 15 件)。

「話題の種類」については、先の点火ルールの話数と同様に、話題の豊富さとして肯定的に評価される事例が多く見られ(10 件)、これもまた会話への積極性や貢献度が評価されたものとみられる。たとえば、「韓国の話」(KR9)、「専門の話」(KR12)をしていることが肯定的に評価された。また、KR5 や KR9 の「愚痴の話」も逸脱として留意されており、この逸脱は「日本語能力の高さ」として肯定的に評価されていた。一方、否定的に評価された逸脱(1 件)としては、KR2 の「人生についての話」が「重すぎる」(JT4)と評価された事例が挙げられた。

「発話の内容」に関しては、J の発言に対するコメントや KR の考えを述べた発話の内容に対して「日本人は言わないようなことで面白い」と肯定的に評価されていた(5 件)。たとえば、KR5 が J5 の「歯が痛い」という発話に対して「歯茎じゃなくて？」と応答した内容が「面白い」(JT7)と評価される事例や、KR9 が J9 に「日本人の平均よりも目の色が茶色い」と言われて「肌が白いからかな」と答えたことに対して、「日本人はそんなふうには言わないから面白い」(JT7)と肯定的に評価された事例が見られた。このような自分との相違が「面白い」とする評価は「相違による肯定的評価」(difference attraction: Muraoka, 2000; 村岡、2006)と呼ばれ、接触場面においても同様のケースが確認されている(フェアブラザー、2003)。一方、否定的に評価されたもの(2 件)としては、KR7 が J7 に「韓国語を勉強したほうがいい」とアドバイスしたことに対する KT4 の否定的評価が挙げられた。ここでは、KR4 がアドバイスの内容を「押し付けがましい」ととらえており、後述する形のルールの「発話意図の表示」に関わる逸脱と関連している。

### (4) 形のルール (120 件)

形のルールについては、「会話の進行」(72 件)や「話題の展開」(12 件)といった会話をど

のように進めていくかということに関する逸脱と「発話意図の表示」の仕方に関する逸脱(33件)、「韓国・韓国人に関わる表現」(3件)を逸脱としてみならず事例があった。

このうち、「会話の進行」については、「あいづちが不自然」(KR2 に対する JT1 のコメント)のような否定的な評価も見られたが、大部分は肯定的に評価されていた(57件)。具体的には、KR10 に対して「会話が途切れないで、質問したり返したりしている」(JT5)、「お互い短い話のやりとりが日本人っぽい」(JT7)、KR7 に対して「あいづちにバリエーションがあって自由に使いこなしている」(KT6)、「「えっとー」「あのねー」「なんかさー」というのが日本人っぽい」(JT8)など肯定的にコメントする事例が見られ、ターンテイキング (turn-taking: Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974) やあいづち・フィラーの入れ方が円滑であることが多くの第三者によって留意され、肯定的に評価されていた。「話題の展開」に関しては、否定的評価が 6 件、肯定的評価が 6 件と評価は半分分かれた。否定的評価については、急な話題変更や同じ話題で話し続けることが挙げられていた。たとえば、KR1 の会話で、J1 が「日の丸弁当」について説明した後で KR1 が「村上春樹の小説」について話し始めたことについて JT1 は「文脈に合っていない」と否定的に評価していた。一方、肯定的に評価された事例としては、KR9 に対して「相手の質問に答えて、話を広げて続けていく話題の変え方が自然で上手」(KT4)だと評価されたものが挙げられる。先行研究では、こうした会話進行に関する問題について否定的にとらえられるものが多く、たとえばフェアブラザー (2003) の調査結果では、接触場面において会話進行に関わる逸脱は否定的に評価されていた。また、韓国人の日本語会話を分析した研究では、韓国人学習者は日本人よりもあいづちが少ないこと(土田、2017)や話題転換における聞き手への配慮の不足(山田・堀尾、2009)などが指摘されている。これらは、本研究での否定的に評価された事例とは重なる部分があるが、全体としては KR の会話進行は肯定的に評価されており、先行研究とは異なる傾向を示している。また、原田(1998)や小池(1998)の日本人評価の研究では、一般の日本人が言語規則の正確さより円滑なコミュニケーションの遂行に関する要素に注目していること、また学習者の良い点に注目することが指摘されている。これらのことから、本研究における KR の「会話の進行」や「話題の展開」に関わる逸脱の肯定的な評価は、第三者評価という方法の特性として肯定的に評価されやすい状況であったこと、また KR が接触経験の蓄積から自然な日本語会話のスタイルを習得していたことの両方の可能性が示されていると考えられる。

一方、「発話意図の表示」は、意見の表し方や同意・不同意の示し方など KR が発話の意

図を示すことに関わる逸脱で、33件中11件が肯定的評価、19件が否定的評価、3件が中立的评价となっており、肯定的・否定的評価が分かれたが、全体としては否定的評価のほうがやや多い結果となった。このタイプの逸脱は、韓国人日本語学習者の語用論的転移 (pragmatic transfer: Tomas, 1983)として多くの研究がなされており(熊井、1992; 岡崎、1995; 李善姫、2004; 小野他、2004; 柳慧政、2006; 鄭在恩、2009 など)、依頼・勧誘や断り、不満表明などの発話行為について検証されている。これらの研究では、韓国人に見られる語用論的転移の実態やそれにもなって誤解や摩擦が生じる可能性が指摘されており、コミュニケーションを阻害する要因としてこれらの逸脱をとらえている。本研究においても、KR1の「無理だと思います」、「留学生の(中略)不満の声があるんだろうなとちょっと思っ」といった直接的な意見表明が「自分の意見を言葉で表す」(JT3)、「自分の意見を押しつける」(KT2)と指摘されたり、KR4の「全部教えてあげると、やっぱり気になるんじゃないですか」という同意の求め方が「強すぎる」(JT1、KT2)とコメントされたりと、否定的に評価されていた。ただし、本研究ではKR5がJ5の「資格を取得しなければ」と言ったことに対して「資格はたくさんあればいいというわけではない」と意見を述べたことに対する評価として、「相手に同調しないで自分の意見をはっきり言っている」と肯定的に評価される事例も確認された(JT6、JT8)。このことから、必ずしもこれらの逸脱のすべてが否定的に評価されるものではないことがわかる。

##### (5) 操作のルール (6件)

最後に、操作のルールについては、理解問題の処理と産出問題の処理に分けられ、いずれも3件ずつと逸脱の数は少なかった。

理解問題の処理(3件)は、会話中のJの発話に対してKRが理解問題を抱え、聞き返しなどの調整要求をおこなったことが逸脱として留意された。たとえば、KR1が「不愉快」が理解できずにJ1に「ふゆかい?」と聞き返したこと、KR11が「お香を焚く」を知らずにJ11に「お香を焚くってなんですか?」と説明を求めたことが第三者には逸脱として留意され、否定的に評価された。

産出問題の処理(3件)については、KRが自身の発話を産出する際に、自信のない語をJに確認したり、言い直したりしたことが逸脱として留意された。本調査では3件中2件は否定的に評価されたが、JT3は、KR4による言い直しが「日本人みたいで自然だ」とコメントしており、肯定的に評価した事例もみられた。

以上のように、社会言語学的逸脱に関しては、全体として肯定的評価が多い傾向にあったが、これは会話の進行に関わる逸脱が自然な日本語の会話として肯定的に評価された結果であった。一方、発話意図の表示については先行研究で取り上げられた逸脱と一致していた。これは従来の研究では否定的に評価され、本研究においても同様の傾向が示されたが、反対に肯定的な評価もある程度見られた。この評価はすべて日本人によってなされたもので、彼女らは留学経験のある大学生であった。そのため、自身の外国語学習や接触経験から、必ずしも日本語の規範から外れた逸脱を否定的なものとしてはとらえなかったのではないかと思われる。

#### 4.1.5 社会文化的逸脱

社会文化的逸脱は認知的プロセスと表層のプロセスに分類された(ネウストプニー、2002)。以下の表は、社会文化的逸脱の詳細を示したものである。

表 4.1.5. 社会文化的逸脱

留意された逸脱		肯定的	中立的	否定的	合計	総計
認知的プロセス	韓国についての知識	2	0	0	2	12
	日本についての知識	2	0	0	2	
	一般的な教養・知識	3	0	0	3	
	KR の思想	2	0	0	2	
	KR の個人的背景	0	3	0	3	
表層のプロセス	韓国人らしい生活行動	2	0	0	2	6
	日本人らしい生活行動	2	0	0	2	
	KR 個人の行動	0	0	2	2	
合計		13	3	2	18	18

表 4.1.5.を見ると、認知的プロセスに関わる逸脱は 12 件、表層のプロセスに関わる逸脱は 6 件確認されている。

認知的プロセスに関わる逸脱には「韓国についての知識」(2 件)、「日本についての知識」(2 件)、「一般的な教養・知識」(3 件)、「KR の思想」(2 件)、「KR の個人的背景」(3 件)が含

まれていた。これらは「KRの個人的背景」を除き、すべての逸脱が肯定的に評価されていた。たとえば、KR11が「キリスト教を信仰している」ことに対してJT2は「意外だ」とし、新しい発見として肯定的にとらえていた。また、個人的背景としては、KR4が通っている大学で日本の伝統文化の授業を受講していることに対して中立的な評価をしていた。

表層のプロセスに関しては、「韓国人らしい生活行動」(2件)、「日本人らしい生活行動」(2件)、「KR個人の行動」(2件)が確認された。このうち、「韓国人らしい生活行動」と「日本人らしい生活行動」はいずれも肯定的に評価されていた。たとえば、KR1が普段の食事でキムチを食べていることに対してJT1とJT4は「韓国人だからキムチを食べるんだ」とコメントしており、自分が期待していた韓国人の生活パターンと一致していたことが肯定的に評価されていたと考えられる。「KR個人の行動」については、KR4が大学で学んだ日本文化をJ4に披露したことがJT3とKT2に否定的に評価された。

このように、いくつかの否定的な評価はあるものの、社会文化的逸脱についてはKRの韓国人らしさ、また日本人らしさがともに肯定的に評価されていた。

## 4.2 当事者による逸脱の管理

本節では、第三者から会話に参加していた当事者に視点を移し、会話のやりとりにおいてKRの逸脱がどのように管理されていたかを考察する。

これまで述べてきたように、本調査における会話はKRとJにとっては親しい相手とのカジュアルな場面であり、当事者の2人が個々の言語使用に対して強く意識したりすることはなく、会話の中で逸脱が出現したとしても認識されない可能性が高い。そのため、当事者による管理についてはまず会話でおこなわれていた調整行動に注目する。相手の発話に対してKRまたはJが実施している調整行動を抽出し、会話の中でどのような逸脱が調整の対象となっていたのか、またそれは第三者に留意・評価された逸脱とどの程度一致しているのかについて分析をおこなう。それから、第三者によって評価されたにもかかわらず、当事者には調整されていなかった逸脱に焦点をあて、これらをどのようにとらえることができるのか会話でのやりとりから分析していく。

### 4.2.1 当事者に調整された逸脱

当事者の調整行動を分析した結果、言語的逸脱、社会言語逸脱に対する調整が実施されていた。以下の表は、これらの逸脱と当事者による調整の数をまとめたものである。また、

表には調整された逸脱が第三者の評価ではどのような結果であったかと評価された数と括弧内にその評価の種類を示した。

表 4.2.1. 当事者に調整された逸脱

調整された逸脱		当事者	総計	第三者	総計	
言語	発音	日本語の発音	3	41	3 (否定的)	25
	語彙		25		18 (否定的)	
	文法	品詞・活用	2		2 (否定的)	
	KR が J のメッセージを理解できない		2		2 (否定的)	
	KR がメッセージを産出できない		2		0	
	J が KR のメッセージを理解できない		7		0	
社会	バラエティ	くだけたスタイル	1	8	1 (否定的)	6
言語	内容	発話の内容	3		1 (否定的)	
	形	発話意図の表示	4		4 (否定的)	
合計			49	49	31	31

当事者によって調整された逸脱は合計 49 件で、そのうち言語的逸脱が 41 件、社会言語的逸脱が 8 件となっており、大部分が言語的逸脱であった。言語的逸脱では、「発音／日本語の発音」(3 件)、「語彙」(25 件)、「文法／品詞・活用」(2 件)といった個々の日本語使用に関する逸脱だけではなく、「KR が J のメッセージを理解できない」(2 件)、「KR がメッセージを産出できない」(2 件)、「J が KR のメッセージを理解できない」(7 件)といったメッセージの伝達に関わる逸脱も確認された。社会言語的逸脱ではバラエティルールの「くだけたスタイル」に関わる逸脱が 1 件、内容ルールの「発話の内容」が 3 件、形のルールの「発話意図の表示」4 件が調整されており、言語的逸脱に比べるとその数は少ない。このことから、当事者によって調整された逸脱は言語的逸脱が中心で、メッセージの伝達の問題に関わるものが逸脱として留意され、調整が実施されていると考えられる。

また、これらを第三者評価と比較すると、言語的逸脱は 41 件中 25 件、社会言語的逸脱は 8 件中 6 件が第三者にも同じ逸脱が留意・評価の対象となっている。言語的逸脱のうち、「発音」、「文法」、「KR が J のメッセージを理解できない」について当事者に調整された逸脱は、すべて第三者においても評価されたものであった。また「語彙」については調整数

の約 7 割が第三者にも評価対象となっており、いずれも否定的に評価されている。社会言語的逸脱については、「くだけたスタイル」、「発話意図の表示」の逸脱はすべて第三者に評価されたものであった。「発話の内容」については 3 件のうち 1 件が評価されており、これらもすべて否定的に評価されていた。このことから、会話において調整された逸脱はすべてが第三者によって評価されているわけではないが、6 割程度は同じ逸脱が留意されていること、また調整された逸脱はすべて第三者には否定的に評価されていたことがわかる。

さらに、第三者によって評価された逸脱の全体の傾向と調整された逸脱の傾向とを比較すると、表 4.1.1. で示したように、第三者に評価された逸脱は合計 422 件あり、そのうち言語的逸脱は 218 件、社会言語的逸脱は 186 件である。これに対し、会話で調整された逸脱は、合計で 49 件、うち言語的逸脱が 41 件、社会言語的逸脱が 8 件となっており、当事者によって調整された逸脱が大幅に少ないことがわかる。また、逸脱の種類を比較すると、言語的逸脱に関しては、「発音」、「語彙」、「文法」に関わる逸脱が双方に留意されている。これらは第三者には否定的な評価、当事者には調整の対象としてとらえられており、いずれも日本語の問題や不適切さとして処理されていた。一方、社会言語的逸脱に関しては、第三者には点火ルール、バラエティのルール、内容のルール、形のルール、操作のルールの 5 つのルールに関わる逸脱が評価されていたのに対し、調整されたのはバラエティのルール、内容のルール、形のルールの 3 つのルールのみであった。これらの結果から、逸脱の数においても逸脱のバリエーションにおいても、第三者によって否定的または肯定的に評価されていた社会言語的逸脱の大部分は調整の対象とはされていなかったことがわかる。

以上のことから、当事者によって逸脱が調整されるのは、おもにメッセージの伝達の問題につながると判断された場合であり、それ以外の逸脱については、第三者の視点からは留意され、評価されるものであっても、当事者にとっては逸脱として留意されることは少なく、むしろ別のかたちで会話の中にあらわれている可能性がある。たとえば、第三者によって日本語らしさとして肯定的に評価された逸脱は、当事者にとっては日本語で会話を進めていくためのベースとなって、2 人のやりとりを円滑にしていると推測できる。一方で、第三者によって否定的に評価される逸脱は、一般にコミュニケーションの破綻につながるものが予想され、当事者にとっても問題になるのではないかと思われる。しかし実際、当事者の親しい関係は維持されており、会話ではコミュニケーション問題が生じていない。このような一見、コミュニケーション問題となりうる逸脱が実際の会話においてどのよう

にして問題化されずに処理されているのかについてはさらに詳しく検証する必要がある。

以上を踏まえ、当事者による逸脱の管理については、まず当事者の調整のポイントとなっていた、メッセージ情報の伝達に関わる外来性の管理を考察する。次に、メッセージ伝達以外で、第三者に否定的に評価された外来性を中心に、それが当事者のやりとりにどのように現れていたかを考察する。

## 4.2.2 メッセージの理解と産出に関わる逸脱の管理

### 4.2.2.1 逸脱が問題として解決される場合

当事者がおこなっていた調整のうち、大部分は言語的逸脱の調整であった。これは、メッセージの伝達上の困難が生じた際、当事者がそれを解決を目指すべき問題(村岡、2006)としてとらえ、調整行動にうつしたと考えることができる。調整については、コミュニケーション問題を解決するための方略である意味交渉(Gass & Varonis, 1994)や聞き返し(尾崎、1992、1993)、また接触場面における調整プロセス(Miyazaki, 1998; フェアブラザー、2003)などの研究が数多くおこなわれている。また、フェアブラザー(2003)もメッセージ伝達に関する逸脱は調整される可能性が高いことを指摘しており、当事者にとって相手のメッセージを理解することが会話を進める上で基本的な問題であることを示している。以下の例では、KR10 が J10 の発話した語彙を理解できず、聞き返しをおこなっていた。

#### 例 1: 語彙の不理解 (KR10×J10)

(KR10 と J10 はスポーツジムのプールで泳ぐことについて話している。)

01 J10: あの: クロールやると、おぼれる

02 KR10: うん?

03 J10: おぼれない? クロール

04 KR10: おぼれる?

05 J10: あの: 沈む、からだか

06 KR10: あ: あ: なんかわかし水泳やってたとか言ってたじゃん

上記の会話において、KR10 は、J10 が「クロールで泳ぐとおぼれる」(01)と言ったことに対して「おぼれる?」(02)と聞き返しをおこなっている。ここで KR10 は、J10 の「おぼれる」に対する不理解を逸脱として留意し、「おぼれる?」と J10 に聞き返すことで調整を実

施している。この種の調整は自己マーク自己調整(宮崎、1999)として従来の研究でも多数取り上げられており、本研究においてもこうした接触場面における特徴的な調整の1つが実施されていたことがわかる。

#### 4.2.2.2 会話の進行が優先される場合

メッセージ伝達に関わる逸脱が留意されても、それが会話の進行に影響しないと判断された場合、当事者によって調整よりも会話を進めることが優先される。第三者評価において、文法・語彙・発音など個別の言語要素よりも円滑なコミュニケーションに関わる要素が注目される傾向が見られたが(原田、1998 など)、当事者もまた、個々の言語問題がメッセージ伝達に影響を与えない場合には、会話の進行を優先していた。次の例では、J12 が KR12 の言語問題の調整よりも会話の進行を優先している。

例 2: 会話進行の優先 (KR12×J12)

(J12 は KR12 にアルバイト先での新人アルバイトの女性の働きぶりについて話している。)

01 J12: ((新人アルバイトの女の子が店長に怒られて)) まどうでもいいやみたいな hh

02 KR12: hh マジで::?

03 J12: ダイキくんに言ってて:

04 KR12: えどういう性格なの?

05 J12: ぜんぜん気にしてないんですよ

06 KR12: え気にしすぎでしょ、気にしな: すぎでしょう、[なさすぎ?]

07 J12: [うん、だからぜんぜん変わらないと思います、たぶん店長がいくらおこっても気にしないから、その場でだけ

08 KR12: そのままだとクビじゃないの?

この例では、J12 がアルバイトをしている韓国料理店で働き始めた新人アルバイトの女性が真面目に仕事に取り組まず、店長に怒られても「どうでもいい」と同僚のアルバイト店員であるダイキに話していたことについて話している(01J12、03J12、05J12)。これを受けて KR12 は、06KR12 で「その新人アルバイトの女性は気にしなさすぎだ」と応答しようとしたが、うまく産出することができずに、何度か言い直し、さらに J12 に対して「なさすぎ?」と調整を要求しようとしている。これに対し、J12 は、07J12 で KR12 の調整発話に割り込

んで自分の発話を開始しており、KR12の産出問題に対する調整はおこなわなかった。

この会話断片は、おもにJ12がアルバイト先でのエピソードをKR12に伝えているやりとりであり、KR12の産出問題はそれを妨げるものではなかった。よって、ここではJ12のエピソードを語る事が優先され、KR12の産出問題はJ12に逸脱として調整されることはなかったのだと考えられる。

#### 4.2.3 メッセージの受容と産出以外の要素に関わる逸脱の管理

村岡(2006)では、接触場面における問題は解決を目指した問題だけでなく、解決できない問題、インターアクションを促進するリソースとしての問題として認知されることを指摘している。本研究においても、メッセージの情報伝達以外の要素に関わる逸脱は、会話の中で解決を目指した逸脱ではなく、解決できない逸脱、インターアクションを促進する逸脱として処理される傾向にあった。以下では、こうした逸脱をめぐって、当事者が具体的にどのようなやりとりをおこなっていたかを検証する。

##### 4.2.3.1 逸脱が管理の対象にならない場合

会話中のKRの発話が第三者には逸脱として否定的に評価される場合でも、なんらかの要因で、その逸脱が当事者に調整されないまま会話が進行することがある。このとき、当事者は逸脱以外のことを強く意識しており、逸脱そのものには注意が向けられなくなっている。

##### a) 話題の内容に集中している場合

当事者が話題の内容に集中しているため、第三者によって否定的に評価された逸脱には注意が向けられない場合がある。当事者がことばの誤用よりも話の内容に集中する態度はこれまでも指摘されており(フェアブラザー、2003; 村岡、2006など)、接触場面での問題を潜在化するストラテジーの1つとして機能していると言われている。次の例では、第三者がKR1の直接的な発話に対して否定的に評価したが、当事者間では問題化されていなかった。

例3: 話の内容に集中している (KR1×J1)

(この日、J1は新しく買った曲げわっぱに詰めた弁当を持参した。KR1は曲げわっぱに興味を示

し、弁当の内容について質問している。)

01 J1: ごはんだけですよ, いれて[るもの

02 KR1: [ごはんだけ

03 J1: おかずいれてないでしょ?

04 KR1: うめぼししとごはんだけ

05 J1: うん

06 KR1: おかずは食べなかったんですか?

07 J1: おかずは, たべな, たべないです

08 KR1: 食べないですか?

09 J1: うん, ごはんとうめぼ[しだけ

10 KR1: [え::, 栄養とか, .h 大丈夫ですか?

11 J1: おかずってべつに栄養ないでしょ

12 KR1: いやいやいやいやあるんじゃないですか

13 J1: あじ, あじだけですよおかずにあるのは

14 KR1: え: うそ: いろいろ=

15 J1: ¥ハンバーグとか: ¥

16 KR1: ちゃ, いやいやいや, たとえば, つけものとか

17 J1: .hhh つけものそんなないですよ栄養

18 KR1: あ[の:

19 J1: [たまごとか: ?

20 KR1: そうですね

21 J1: .h そんな栄養ないですよたまご

上記の例では、J1 の弁当の中身がご飯と梅干しだけであることに対して KR1 が違和感を持ち、10KR1 で「栄養とか, .h 大丈夫ですか?」と疑問を投げかけている。第三者には、この発話の表現形式が直接的であることが逸脱として否定的に評価された。しかし、この一連のやりとりにおいて、逸脱となった表現形式が会話の当事者に逸脱として留意され、調整されることはなかった。

会話のやりとりを見ると、10KR1 に対して J1 は 11J1 で「おかずは栄養がない」と反論している。KR1 と J1 との会話において、J1 が自発的に発話することは少なく、さらに KR1

の意見に対して直接反対意見を述べることは珍しい。KR1 もまた、J1 の反論に対して反駁し、「栄養」についての議論が展開しており、J1 と KR1 が「栄養」についての話題の内容に注意を向けていることがわかる。つまり、当事者にとっては、10KR1 の発話はその形式よりも「弁当をおかずがなければ栄養が不足する」という内容が重要であり、直接的な表現形式には注意が向けられなかったのだと考えられる。

#### b) 話題が変更される場合

第三者によって否定的に評価された逸脱ではなく、逸脱を含む話題が変更されることで、逸脱が回避されたケースがあった。この場合、当事者は第三者に評価された逸脱に対する調整は実施しないが、その逸脱に関わる「話題」を逸脱として留意し、その話題を終了させて、新しい話題を提示するという調整を実施したと考えられる。

以下の例は、KR1 と J1 との会話の一部である。2人は大学研究室でこの会話をしているが、2人の前にはパソコンがあり、J1 は自分の作業をしながら話をしている。

#### 例 4: 話題変更により逸脱が回避される (KR1×J1)

(KR1 は研究室で行く海外調査に留学生が参加できないことに対して不満を述べている。)

01 KR1: や: ちょっと:, 行ってみたいな:

02 J1: ね: おれも行きたいですよ

03 KR1: けど今回, もう, 日本人の学生さんが中心になって

04 J1: う:ん

05 KR1: するから: .h ちっと: ¥ま: 先生も: ¥, なんかいろいろおっしゃったんすけど, 留学生の, わたしはま:, ま:別にいいかな: とは思いますけど, ¥ふ, ふまんの声が hh あるんだ[ろうなと¥

06 J1: [う:ん

07 KR1: ちょっと思ってますね h

08 J1: う:ん, そんなないんじゃない?でも, ソウさんぐらいじゃん?ソウさんとかじゃん?

09 KR1: ソウさんけっこう言ってたんですか?

10 J1: いや言いそうじゃないですか?

11 KR1: あ:hh そう hhh まあまあ

12 J1: いや積極的って[ことですよ

13 KR1: [あうんうん, そうですね, イミジが(1.0) けっこう, 言わなくても

14 J1: うん

15 KR1: ちょっと、なんで: みたいに思ってる子, いると思いますよ=

16 J1: あそうですか: ?

17 KR1: ええ. そう思います. いやみなさんの意見を聞いたことはないですよわたしは

18 J1: う:ん

19 KR1: ないけど: なんか, そんな反発ないのかな: みたいにちょっと思ったのでわたし, 話聞いたとき

20 J1: ((部屋で流れている音楽に合わせて口笛を吹く))

21 KR1: なんか大韓民国=

22 J1: =あいけねタイだ

上の例では、KR1 が研究室で行く海外調査のメンバーが日本人に限られていることに対し、不満を述べている。この KR1 の「不満を直接述べる」という直接的な発話行為が第三者によって否定的に評価されていた(05KR1、13KR1、15KR1、17KR1、19KR1)。

会話を見ると、これらの KR1 の発話内容に対して、J1 は 08J1 「そんなないんじゃない?」、16J1 「そうですか: ?」と同意・共感しないことを示している。それでも KR1 の不満の発話が続いたため(17KR1、19KR1)、20J1 では KR1 への応答をせずに口笛を吹きながらパソコンで自分の作業を始めている。これによって J1 は、KR1 が出した話題の内容に共感しないこと、これ以上この話題を続ける意志がないことを示している。KR1 は、この J1 の反応を受けて、不満の話題を放棄し、まったく関連性のない別の話題を開始している。つまり、ここで KR1 は、J1 に自分の話題が共有されないことを逸脱として留意し、話題を変えるという調整を実施したと考えられる。これによって、第三者に評価された直接的な発話行為に関する逸脱は、話題の終了にともない回避されることとなった。

この KR1 と J1 の会話では、ほかの部分でも J1 と KR1 との間で話題が共有されず、KR1 が話題を変更する事例が見られた。このことから、話題の変更という調整は、KR1 と J1 の間である程度パターン化されているのではないかと推察される。そして、この調整を習慣的におこなうことによって、KR1 と J1 は会話で逸脱が留意された場合にも、それを問題化させることなく会話を進め、2 人の関係を維持しているのではないかと考えられる。

#### 4.2.3.2 逸脱の否定的な要素が緩和される場合

第三者によって否定的に評価された逸脱のうち、留意された逸脱になんらかの言語・非言語的要素を付加することで、逸脱の否定的な要素を和らげる場合がある。

本研究では、KR5 の「はっきりと意見を述べる」という発話行為が第三者によって否定的に評価されていたが、KR5 はこの発話をおこなう際に、意見を述べるだけでなく、笑いと言語の根拠説明を補足することで、意見を直接的に述べることの強さを和らげていた。

例 5: 逸脱の否定的な要素を緩和する (KR5×J5)

(J5 は学芸員や公務員の試験を受験するため、勉強の大変さと不安な気持ちを述べている。)

01 J5: あ:どうしよう, え:や[めようかな::

02 KR5: [うちなにもしてないし, あ::

03 J5: 学芸員やめようかな::

04 KR5: でもさ:資格:は:

05 J5: うん

06 KR5: いっぱいあればいっぱいあるほどいいわけではない

07 J5: お

08 KR5: うん.h どっかに進むかによってその資格がまったくいらぬときにはまんたくなんか, 重要じゃないから

09 J5: うん, ね.

10 KR5: うん

11 J5: なんで持ってるんですかって

12 KR5: そう, みたいな

13 J5: 聞かれてなんとなくですじゃ意味がないもんね:

14 KR5: そうそう

上の例では、04KR5、06KR5 の「資格:は:」「いっぱいあればいっぱいあるほどいいわけではない」という発話に対し、第三者は「意見をはっきり言う」ことを逸脱として留意していた。

この会話断片をみると、KR5 が 04KR5、06KR5 で意見を述べると、J5 は「お」と反応を見せている(07J5)。このあと、KR5 は 08KR5 で「うん」と笑いを入れている。このやりと

りでは冗談は見られず発話の内容から笑いが生じる可能性は低い。よってここでの笑いは、KR5 が自分の意見に対して J5 が「お」とマークしたことを認知し、自分の意見表示の印象を和らげるために挿入したと考えられる。また、それに続けて、KR5 は「どっかに進むかによってその資格がまったくいらなくときにはまんたくなんか、重要じゃないから」と自分がそのような意見をもつ理由、その根拠となる事実を説明している(08KR5)。そして、それを聞いた後で、J5 は同意見であること(09J5)とその根拠を説明し(11J5、13J5)、それが KR5 に承認されていく(14KR5)。

日本人同士の会話における意見提示は、フィラーや断定しない表現によってためらいがちに示されることが多く、それを受けて聞き手もできるだけ早く発話を始め、同意見であることを積極的に表す(筒井、2012:188)。KR5 の意見提示はこれとは異なり、「～わけではない」と断定の表現を用いている。しかし、そこに笑いや根拠となる客観的な事実を付け加えることで、断定によって生じる強い印象を緩和させている。聞き手である J5 もまた、すぐに同意見であることを示さずに 09J5 「うん、ね」、10KR5 「うん」と KR5 の説明が終了したことを確認してから 11J5 で同意見であることを提示している。つまり、KR5 と J5 との会話では、KR5 による「断定による意見提示+笑い+追加説明」というひとまとまりが意見提示として示され、J5 はそれを受けて意見を承認するという連鎖が共有されていると推察される。

一方、この KR5 の意見提示に関して、「断定による意見提示+笑い+追加説明」が達成されないこともあった。この場合、J5 が自分の意見を示し、KR5 がそれに協調することで意見提示を遂行していた。

#### 例 6: 逸脱の否定的な要素の緩和が達成されない場合 (KR5×J5)

(KR5 と J5 は体調が悪いときは病名を知って原因をはっきりさせたいと話している。)

01 J5: 安心できないんだよね

02 KR5: そう、超安心できない、これでいいのかなみたいな

03 J5: ガンならガンのほうが安心するのかもね

04 KR5: え、ガンはちょっと違うね?.hh

05 J5: .hhh

06 KR5: あ:でも、ガ、うーんで[もうち-

07 J5: [なんか、原因不明のなんかよくわからない病気[よりも

- 08 KR5: [そ: あーうん
- 09 J5: なんか初期ガンですよみたいに言わ[れたほうが
- 10 KR5: [あ: だったら, う: ん
- 11 J5: あ: じゃこうすれば, よ, なおるかもしれないから=
- 12 KR5: =うんうんうん=
- 13 J5: =がんばってみようみたいに
- 14 KR5: そうか:, たしかにあるね

上の例では、J5 の「ガンであっても病名を知った安心できる」という発話に対し、KR5 が「ガンはちょっと違うね? .hh」と意見を述べている(04KR5)。この KR5 の発話では、意見を表明したあとに笑いを入れており、「断定による意見提示+笑い」までは実施されていることがわかる。しかし、その後の「追加説明」の段階になると、KR5 は「あ: でも, ガ, うーん」とすぐに発話が開始できず、話す内容が決められない様子が見え始める。これを受けて J5 は、07J5 でみずからターンをとり、「原因不明の病気よりも初期ガンだと言われたほうが治療できる可能性があるので頑張ろうという気持ちになる」(07J5、09J5、11J5)と、03J5 の「ガンならガンだとわかったほうが安心する」という意見の根拠となる説明を追加していく。この J5 の説明の間、KR5 は「そ: あーうん」(08KR5)、「あ: だったら, うん」(10KR5)、「うんうんうん」(12KR5)などを用いて同意を頻繁に示し、最終的に「たしかにあるね」(14KR5)と納得したことを示してやりとりを終了させている。

このように、KR5 が意見提示において「断定による意見提示+笑い+根拠説明」を達成できない場合、J5 がターンをとって自分の意見を提示することで、会話は円滑に進行される。その場合、KR5 は J5 の意見に対して積極的に同意を示し、J5 の意見提示に協力することで、対立が残らないようにやりとりを終わらせる。

以上の事例から、第三者に否定的に評価される逸脱であっても、当事者間では留意された逸脱になんらかの要素を付加することで、逸脱を和らげるやりとりが共有されていることが明らかになった。さらに、そのやりとりの過程で KR の発話に問題が生じた際には、J がターンをとって会話を進行させ、KR がそれに協調することでやりとりを達成させており、相互的に逸脱の処理をおこなっている様子が見え始める。

#### 4.2.3.3 逸脱がコミュニケーションのリソースになる場合

留意された逸脱が肯定的に評価される時、コミュニケーションの障害としてではなく、コミュニケーションを促進するリソースとして認知されることがある(村岡、2006)。本研究においても、留意された逸脱が会話の中でコミュニケーションを促進するリソースとして作用している事例が見られた。

##### a) 新しい話題として展開する場合

KR の発話が逸脱として留意されたことをきっかけに、新たな話題が提示され、会話が展開していく場合がある。

例 7: 新しい話題として展開する逸脱 (KR7×J7)

(KR7 と J7 は卒業旅行の話をしている。)

01 J7: 海外行きたい, 卒業旅行は

02 KR7: どこに行こう: 日本語つうじるところがいい hhh

03 J7: え::うっそ::↑

04 KR7: .hh グアムとか:, [ハワイとか

05 J7: [えなに日本人みたいなこと言ってん[のよナミ.hhh

06 KR7: [(h)英語しゃべれないもん(h)

07 J7: ナミ, えでもナミたまにフェイスブックで英語書くじゃん

08 KR7: それけっこう大変よ:hh

上の例では、J7 が卒業旅行で海外に行きたいと話したことに對し、KR7 が「日本語つうじるところがいい hhh」と言ったことが逸脱として表示されている。つまり、KR7 が日本語非母語話者であるにもかかわらず、「日本語が通じる外国に行きたい」と話した内容が J7 に逸脱として留意され、J7 の「え::うっそ::↑」(03J7)、「なに日本人みたいなこと言ってんのよナミ」(05J7)という応答にも示されている。そして、これを受けた KR7 の「(h)英語しゃべれないもん(h)」(06KR7)によって、KR7 が英語非母語話者であることが表示され、「英語学習」という新たな話題が提示されている。この後会話は、07J7 にあるようなフェイスブックで英語を使用している話から KR7 が姉に英語を教えてもらっている話、フェイスブックでよく見る英語の話へと話題は展開していく。

以上のように、KR7の逸脱が留意され、J7がそれを取り上げることによって新しい話題が生まれた。ここでJ7は、KR7の逸脱に対して「え::うっそ::↑」(03J7)と驚く態度を見せ、さらに「なに日本人みたいなこと言ってんのよナミ」(05J7)と自分が感じた内容をKR7に直接伝えている。こうした態度は、「聞き手への関心を示す」というポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(positive politeness strategy: Brown & Levinson, 1987)の1つとして作用し、新しい話題への転換を促進していたと考えられる。すなわち、KR7の逸脱がJ7による関心表明によって、会話進行を促進するリソースとして機能していたと言える。

#### b) 「遊びとしての対立」が実現される場合

本来なら対立を表す発話や行為に「これは遊びだ」というメタメッセージを発することで、発話や行為がもともと持っている「対立」の意味とは異なる「遊び」の意味が付与されることがある。大津(2004:46)はこれを「遊びとしての対立」とし、「本来は「対立する関係」で行われるはずの発話や行為が遊びで行われることによって「親しい関係」が導かれる。このようなごっことしてのフレーム付けされた対立」とであると定義づけている。さらに、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの1つである「冗談で何か言うこと」を取り上げ、友人同士が冗談で相手の悪口を言ったりわざと反論したりして一時的な対立関係をつくることも親密な関係作りに貢献することを指摘している(大津、2004)。

また、大津(2004)では、対立の発話が「遊び」だというメタメッセージを伝える合図として、(1)発話の繰り返し、韻律の操作、感動詞の使用などのおおげさな感情表現、(2)スタイル・スイッチング、(3)笑いの3つを挙げている。また、聞き手が「遊び」に気づいた時の対応として(1)笑いやコメント、(2)模倣、(3)共演、(4)対立があると指摘している(大津、2007)。

本研究では、KRの逸脱が「遊び」のメタメッセージを伝える合図として機能し、「遊びとしての対立」が実現されている事例が見られた。次の例では、第三者によって「意思表示が強すぎる」と否定的に評価されたKR2の逸脱が、会話では「遊び」のメタメッセージの働きをしていた。

#### 例 8: 遊びとしての対立 (KR2×J2)

(KR2とJ2がお互いの学生時代について話している。J2が学生時代に放送部で活躍していた話で盛り上がり、続けてJ2がKR2(スミン)の部活の経験を尋ねている。)

- 01 J2: なにやってたの？スミンさんは
- 02 KR2: わたし？
- 03 J2: うん
- 04 KR2: わたしはなんにもやりません
- 05 J2: .hhhhhh なんですかそれ hhhhh
- 06 KR2: hhhhh
- 07 J2: .hhh なにそれ: なんにもやりませんってことはどういうこと？
- 08 KR2: わたし[は:]
- 09 J2: [なんかほら、ぶ、ぶかつ
- 10 KR2: ぶかつ、あんまり
- 11 J2: きたくぶ？
- 12 KR2: やってなかった

上の例では、J2 に学生時代の部活動について質問され、それに答えた KR2 の「わたしはなんにもやりません」(04KR2)が第三者に否定的に評価された。たしかにこの発話は J2 の質問に対して非優先的な応答で、攻撃的な態度を示しているともとれるが、会話の当事者である J2 は 05J2 で「.hhhhhh なんですかそれ hhhhh」と笑い出しており、冗談として受け取っている。つまり、ここで J2 は、KR2 が発した「わたしはなんにもやりません」(04KR2)を「遊び」のメタメッセージを伝える合図として認め、それを自分の笑いによって KR2 に示したことで、2 人の間で「遊びとしての対立」が共有されたと考えられる。さらに J2 の発話の形式を見ると、05J2 で J2 は普通体を基調としたスピーチスタイルから「.hhhhhh なんですかそれ hhhhh」と丁寧体にシフトさせている。この丁寧体へのシフトは、一般的には相手と距離を置きたいという話し手の意図を表すとされているが、J2 の発話では笑いをもなっており、距離化は示されていない。むしろ、J2 はこのスタイルシフトによって別の人物の役割をもち、KR2 との「共演」(大津、2007)を実践することで、冗談のやりとりに協力していたと考えられる。

このように、KR2 と J2 の会話では、KR2 の「非優先的な応答」や「おおげさな感情表現」といった逸脱が「遊び」であることを伝えるための合図として活用されていた。今田(2015)では、留学生と日本人学生の日常会話で留学生が冗談として「からかい」をおこなうとき、過去に発話された他のメンバーの冗談の言語形式など当事者間で共有知識となっているも

のを使用したことを指摘している。本研究では他にも KR2 の「非優先的な応答」や「おおげさな感情表現」が冗談として展開した事例が確認されており、この種の逸脱が「遊び」の合図となることがすでに当事者間で共有されている可能性が高い。共有された逸脱が使用されることによって、その逸脱の言語形式が攻撃的な要素を持っていたとしても、当事者にそれが攻撃として解釈されることなく、「遊び」の合図として機能し、「遊びとしての対立」が実現されるのではないかと思われる(今田、2015)。

さらに、本研究では、J2 が自分の発話スタイルをシフトさせ、KR2 と「共演」を演じることで「遊びとしての対立」を促進させており、J2 の協力によって実現されることがわかる。今田(2015)においても、留学生が示す直接的な攻撃の発話にとられかねない発話を他の参加者が協力して「冗談」のやりとりとして展開させている事例を紹介されている。このように、KR の逸脱が「遊びとしての対立」のリソースとして機能するには、当事者間の共有と当事者の協力によるやりとりの実現が重要になっていると考えられる。

#### c) 新たな共有認識が構築される場合

KR の発話行為や発話の内容が当事者にも逸脱として留意され、その内容について 2 人で交渉を重ね、互いが共感できる内容を作り上げていくことがある。これによって、2 人の新たな共有認識が生み出され、親しい関係が強まっていく。次の例では、KR7 が J7 におこなったアドバイスの内容が第三者に否定的に評価されていた。

##### 例 9: 新たな共有認識の構築 (KR7×J7)

(J7 は韓国旅行をする予定である。KR7 と韓国旅行について話している。)

01 KR7: あとね, [韓国に行く前に:

02 J7: [うんなになに:?

03 KR7: 韓国語も勉強して: ちゃんと

04 J7: え::, ダメですか::? .hh[勉強しなければダメですか::?

05 KR7: [でも:

06 KR7: せっかくなら勉強したほうが楽しいよ:?

07 J7:ほんとに::?

08 KR7: うん

09 J7: がんばる::

10 KR7: がんばって

11 J7: そう. 韓国のドラマ大好きだから

12 KR7: じゃ: セリフとか(h)覚えてらいいんじゃない?(h)

13 J7: うちナミに言われたあれしか覚えてない

14 KR7: あ:: いい天気ですね. ちがう?.hh=

15 J7: =ちがうよちがうよちがうよちがうよ

16 KR7: なになに?

17 J7: あの::なんだっけ:

18 KR7: なんじゃ: ちょっと(h)気になる(h)

19 J7: キョヌ::

20 KR7: (0.6)キョヌ: あ::映画でね=

21 J7: =そうそうそう

22 KR7: でもあれ名前だからちょっとつうじない(h)かも.hh

23 J7: .hhhh ミヤネだよミヤネ

24 KR7: ミヤネ::

25 J7: ミヤネ::

26 KR7: ミヤネ::(1.0)でもあやまる必要ない.hh

27 J7: .hhh ごめんね, ごめん[ねって

28 KR7: [ミヤネ::

29 J7: [[ミヤネ::

30 KR7: [[そっか:: (1.0) 韓国ね:: (1.0) いいと思う

31 J7: じゃなんか買って行くよ, なんか本買って

32 KR7: あ::[韓国語

33 J7: [なんか簡単な韓国語みたいな

34 KR7: そだね, そういいと思う.hh

35 J7: 楽しそう::.hh

上の例 9 では、KR7 の「韓国旅行に行く前に韓国語をきちんと勉強したほうがいい」(01KR7、03KR7)という提案が第三者に否定的に評価された。さらに、J7 もこれに対して「え::, ダメですか::?.hh勉強しなければダメですか::?」(04J7)と強く反応していることから、

この KR7 の発話に違和感をもったと考えられる。

J7 の「え…、ダメですか…？.hh勉強しなければダメですか…？」(04J7)という応答は、笑いをともなっており、発話形式も「遊び」のメタメッセージを伝える合図として機能するものである。しかし、これに対する KR7 の応答は、「せっかくなら勉強したほうが楽しいよ:？」(06KR7)というアドバイスの継続で、冗談として承認していない。よって、04J7 の発話は冗談には展開せず、「勉強しなければダメですか」という丁寧体へのスタイルシフトは KR7 との距離化を示すことになった。そして、J7 はここから KR7 の提案の内容に対する問題と KR7 との距離化に対して処理をしていくことになる。

J7 は 09J7 で「がんばる」と KR7 の提案に理解を示した後、「韓国ドラマ大好きだから」(11J7)と韓国語学習の理由付けをおこなっている。つまり、KR7 が提示した「韓国旅行のための学習」ではなく、「趣味のための学習」として自分が納得できる韓国語学習の動機をさぐっている。これを受けて KR7 は J7 の動機付けに同意し、「じゃ: セリフとか(h)覚えたらいいんじゃない？(h)」(12KR7)と新たな提案を出している。そして、これをきっかけに、J7 は以前 KR7 に韓国語を教えてもらった共通の経験を取り上げ(13J7)、再度 2 人で協働的に思い出している(14KR7-29J7)。この共通経験の想起・共有とその過程における協働的なやりとりはポジティブ・ポライトネスの表示となり、2 人の距離が近いことが確認される。これにより、先の KR7 のスタイルシフトによって生じた距離化の問題は解消されたことになる。また、このやりとりの過程で、「ミヤネ(미안해, mianhae: ごめんね)」という韓国語表現を 2 人が発話することは(23J7-29J7)、J7 の韓国語使用の実践にもなっており、J7 と韓国語学習との距離を近づけることになったと考えられる。その後で、J7 は「韓国に行く時に簡単な韓国語の本を買っていくこと」を再提案し(31J7、33J7)、KR7 もそれに同意している(34KR7)。

この例の逸脱の交渉過程をたどると、J7 がマークした「韓国旅行に行く前の韓国語を勉強する」という KR7 の提案は、「趣味のための韓国語学習」という案を経て、最終的に「簡単な韓国語の本を持って行く」という案となって KR7 と J7 に共有されることとなった。ここで J7 は、KR7 の逸脱を話題変更によって回避したり、表面上の同意を示したりせずに、KR7 とのやりとりを通して、自分が共感できる内容を作り上げようとしている。このように、留意された逸脱は、KR と J との交渉をとおして両者が共感できる共有認識となり、2 人の親しい関係を維持・促進することに貢献していると考えられる。

#### d) ディスコース・マーカ―として機能する場合

会話を円滑に進行していく中で、発話と発話の連結や文脈を調整するために使用される要素はディスコース・マーカ―(discourse marker: Schiffrin, 1987)と呼ばれる。日本語の会話では、陳述副詞や接続の表現、間投・終助詞、助動詞、表現のスタイルなどがディスコース・マーカ―として機能することが指摘されている(メイナード、1993)。磯野・上仲(2014)では、接触場面において日本語学習者が使用するディスコース・マーカ―には中間言語的な発話があり、不適切さが感じられる場合があることを指摘している。

本研究においても、第三者によって否定的に評価された逸脱が会話の展開を示すディスコース・マーカ―として機能し、KRのある特定の逸脱を含むやりとりが話題転換を示すマーカ―となっている事例がみられた。次の例はKR10とJ10の会話の断片である。この会話では、KR10が「なるほど」を多用しすぎることに對して第三者が否定的に評価していた。

#### 例 11: 話題転換のマーカ―「なるほど」 (KR10×J10)

(KR10はこの会話のあとでスポーツジムを初めて訪れるという。J10はすでに同じジムに通っており、KR10はJ10にジムの施設や会員システムについて質問していた。)

01 KR10: なんか、コーチとかなんかあるんじゃないの=

02 J10: =そうそうそうそう=

03 KR10: =お金はらっ[て:

04 J10: [そうそうそう, [わたし

05 KR10: [そういうのもやってみようかな:と思って

06 J10: それ で: あの, なんか回数とか:, あと重さとか:

07 KR10: うん

08 J10: いろいろ教えてもらった

09 KR10: う:ん

10 J10: 使い方とか, 最初にそれを教えてもらったほうがいいかもね=

11 KR10: =そうだよね:[なんかプログラム組ん:[でもらったら

12 J10: [うん [うんうん

13 KR10: それで進めばいいし

14 J10: うん

15 KR10: (1.0)なるほど

16 J10: うん、え後輩は韓国人なの？

17 KR10: 韓国人

ここでは KR10 がこれから入会する予定のスポーツジムについて「コーチ(インストラクター)に、J10 が「最初はインストラクターについてもらってやったほうがいい」というアドバイスに KR10 が同意して、やりとりが終了する部分にあたる。06KR10 で KR10 は沈黙を挿入し、これ以上話すことがないことを示し、さらに「なるほど」と言うことで J10 の説明によって自分の疑問が解明したことを表明している(土屋、2012)。これに対して J10 は「うん」(07J10)と応答し、その直後から新しい話題を導入している。「なるほど」「うん」という表現形式は、メイナード(1993:143)がテーマ転換のストラテジーの1つとして指摘している「限られた反応(minimal response)」の一種であり、本会話例においても話題転換のリソースとして働いていると言える。

この KR10 の「なるほど」の使用は会話のほかの場面でも複数回見られ、おもに自分が提示した話題や質問についてのやりとりが終わるときに使われていた。さらに、この「なるほど」に対して J10 が「うん」を使用して受けていた場合、その直後に新しい話題が提示されることが多かった。このことから、KR10 と J10 の会話では、KR10 「なるほど」と J10 「うん」のやりとりのパターンは、進行中の話題に関するやりとりを終わらせ、新しい話題を提示することを示す習慣的な話題転換のマーカ―としての働きをしていると考えられる。

話題転換のマーカ―として機能していた逸脱には、発話行為が第三者に逸脱として留意され、否定的に評価されたものも見られた。以下の例では、KR4 の「ほめ」のやりとりに関し、「ほめられたあとに一度謙遜したあとで最終的に受け入れること」が第三者に否定的に評価されていた。

例 10: 話題転換のマーカ―「ほめの受け入れ」(KR4×J4)

(現在、J4 と KR4 を含む何人かで教会関係の書籍の日本語翻訳版を作成している。その作業の1つとして、J4 が KR4 に内容の確認を依頼した。)

01 J4: それもまたお願いしますよね、[あとでね

02 KR4: [はい大丈夫です、はいわかりま[した

03 J4: [いいですよ:

04 KR4: .hh

- 05 J4: いや:すごいな::  
06 KR4: う::ん. すごくない.hhh  
07 J4: [いやいやいや  
08 KR4: [hhhhh  
09 KR4: はい  
10 J4: あ:じゃ:そのなにか, トピックスというかね  
11 KR4: うんうん  
12 J4: なんについて:話しましょうかというの. 決めてください

上の例で、J4はKR4が自分の依頼を承諾したあと、「すごいな」と言ってKR4を褒めている(05J4)。これに対して、KR4は「すごくない」と否定している(06KR4)。J4はこのKR4の応答を否定して再度KR4に対するほめをおこなっている。この2回目のほめに対してKR4は否定することなく、「はい」とほめを受け入れている(09KR4)。

ほめの発話行為に関する研究は、これまでさまざまな観点から研究がおこなわれてきた(Pomerantz, 1978; Golato, 2005; 金庚芬, 2007, 2012; 張承姫, 2014 など)。ほめに対する応答についてPomerantz(1978)は、通常隣接ペア(adjacency pair: Schegloff & Sacks, 1973)の概念において同意は不同意に選好するが、ほめに対する反応には、そのほめに同意することと自慢を避けることのジレンマがあることを指摘している。また、金庚芬(2012)は、日本語と韓国語のほめに対する応答について、両言語ともほめを回避する傾向にあるが、日本語の場合は否定的に回避することが多いことを明らかにしている。このような特徴から見ると、KRの09KR4「はい」というほめの受け入れは、日本語のほめに対する応答としては不適切であり、それが第三者にも否定的に評価されたと考えられる。

しかし、このほめのやりとりを「ほめ」の発話行為ではなく、会話全体の文脈における配置から考察してみると、このやりとりは「書籍の日本語翻訳」についての話題の終了部分に位置し、09KR4の「はい」の後の10J4のターンからは新しい話題が開始されている。つまり、「はい」は話題転換のストラテジーの1つである「限られた反応」として会話の文脈では機能しているとも言える。

「ほめ」のやりとりは、同じKR4とJ4との会話の中でもう1例観察できたが、その場合もKR4がJ4のほめを受け入れた発話をした直後に話題が転換していた。このことから、KR4とJ4の会話では、話題の終了部にほめのやりとりが表示された場合、「KR4のほめに

対する否定の応答」→「J4による再ほめ」→「KR4による再ほめの受け入れ」というパターンが共有されており、これが実現されることによって、話題を終了させて次の話題に移行するマーカーとして機能しているのではないかと推察される。

Golato(2005)のドイツ語のほめの研究でも同様に、ほめを会話の広い連鎖的な文脈から分析し、ほめが誘いに対する「断り」の中でおこなわれたりすることが明らかにされている。また、今田(2015:123)の事例では、ほめが話題開始のリソースとして利用されていることが示されていた。このように、本研究においても、第三者に発話行為の逸脱として評価されたKR4の発話は、会話の文脈からみると参加者によって話題転換のマーカーとして活用されていたと考えることができる。

以上の2例から、第三者に否定的に評価されたKRの逸脱が会話の展開を示すディスコース・マーカーとして機能していることが明らかになった。ただし、いずれの場合も、KRの逸脱が単独で機能しているわけではない。KRの逸脱をリソースとする話題転換は、KRとJとのやりとりによって実現されており、話題の協働的転換(collaborative shifts, West & Garcia, 1988; 楊虹、2007)の1つとして会話の円滑な進行に貢献していたと考えられる。

#### 4.2.3.4 日常的に共有されている逸脱

先に指摘したように、第三者に留意されるKRの逸脱のほとんどは、会話では問題化されおらず、会話の当事者間で日常的に共有されることが多いと考えられる。つまり、KRの逸脱が何度も繰り返されることによって、その逸脱は留意または評価されなくなっており(Fairbrother, 2000)、逸脱を含むやりとりは当事者間で習慣化されていると推測される。このような逸脱には、第三者による評価の結果からもわかるように、言語的な誤用から会話の自然さ、不適切な発話行為といった社会言語的逸脱、社会文化逸脱までさまざまな要素が含まれ、それぞれのKRによって個人的な特徴をもっていると考えられる。本研究では、こうした逸脱に関して、とくに以下のような特徴を挙げることができる。

##### a) Jにも同じ逸脱が見られる場合

会話のなかでKRが留意された逸脱と同じタイプの逸脱がJにも見られる場合があった。この場合、KRの逸脱はKRの外来性によって引き起こされたものとしてではなく、KRとJが共通してもつ独自性としてとらえられることになる。そして、他の人にはない独自性を2人で共有することで、仲間の表示としても機能していると考えられる。

本研究においては、KR1 と J1 との会話、KR6 と J6 との会話でこうした特徴が顕著に見られた。KR6 と J6 との会話では、第三者には KR6 の発話のスピードが遅いことが否定的に評価された。しかし、会話を見ると、KR6 だけではなく J6 もまた同じゆっくりとしたスピードで話しており、同じテンポで会話が進行している。つまり、ゆっくりとした発話のスピードは、参加者には KR6 の逸脱とはみなされておらず、2 人の習慣的な会話のスタイルの要素となっておりととらえることができる。一方、KR1 と J1 の会話では、第三者に KR1 の「話しすぎること」、「強い意見の提示」が逸脱として否定的に評価されていた。以下の会話の断片では、J1 も会話のターン取得や意見提示に関して類似した逸脱が見られる。

例 12: 共通した逸脱の表示 (KR1×J1)

(この日、J1 は新しく買った曲げわっぱに詰めた弁当を持参した。KR1 はゼミでも曲げわっぱが話題になったことを J1 に話している。)

01 KR1: ((わっぱは中身がこぼれやすいから)) ちょっとどうかな:みたいに[言ってたんですね=

02 J1: [うん

03 KR1: =先生が

04 J1: おれ:は::, たしかにそう思いますけど, これだからこれに入れてるのごはんを梅干しだけですよ

05 KR1: うんやはり水分が少ないシンプルな[かんじで入れるんですね

06 J1: [おれ、おれ、あさ::, つくる時間ないんですよ自分で

07 KR1: あ:

08 J1: だからごはんと:

09 KR1: うん

10 J1: 梅干しだけなんです

11 KR1: あ:

12 J1: だとしたらいいじゃないですかわっぱ[で

13 KR1: [そう, そう思いますよ

この会話断片では、J1 が新しく購入した「わっぱ」が話題になっている。KR1 は大学院のゼミで教員が曲げわっぱについて話した内容を J1 に伝えている(01KR1、03KR1)。これを

受けて J1 は、ゼミの教員が語った「曲げわっぱは中身がこぼれやすいからどうか」という内容に対して、「自分は中にご飯と梅干ししか入れていない」(04J1)と反論を始めている。KR1 は J1 の反論に「水分が少ないシンプルな感じ」(05KR1)とコメントしているが、この KR1 の発話に割り込んで J1 は「おれ、おれ、あさ::, つくる時間ないんですよ自分で」(06J1)と自分のことを話し始めている。さらに「だとしたらいいじゃないですかわっぱで」(12J1)と強い意見の提示をしている。ここで J1 は、KR1 が話したゼミの教員の曲げわっぱへの否定的意見に対して反対意見をもっており、それを主張するため、ターンの割り込みや強い意見の提示がなされたと考えられる。

これらは KR1 が留意された逸脱の特徴と重なっており、同じ会話で KR1 と J1 が同じ逸脱が表示されている。この自己の発話を優先した割り込み発話や強い意見の提示は韓国語母語話者の特徴ともとらえられ(林河運、2010; 李善姫、2006 など)、第三者には押しつけがましきとして否定的に評価されていたが、会話をみても 2 人の関係が悪化した雰囲気はみられず、自然に会話が進行している。

このことから、KR1 と J1 の会話では、何かを主張したいときに割り込みによってターンを取ったり、強く意見を提示したりするやりとりが 2 人の習慣的な会話のスタイルとして共有されていると考えられる。この場合、KR1 の逸脱は KR1 の外来性として評価されるのではなく、2 人が関係を維持しながら会話を進行するリソースとして作用していると言える。

## b) 当事者間で意味づけられた逸脱

KR の逸脱が KR と J との間で意図的に共有されている場合がある。本研究では、KR2 と J2 との会話で、KR2 が J2 を「おねえさん」と呼んでいる事例が見られた。この「おねえさん」という呼称は、韓国語では女性が親しい年上の同性に対して使用する親族呼称「언니、eonni」を日本語に直訳したものである。

例 13: 当事者間で意味づけられた逸脱 (KR2×J2)

(KR2 は J2 に前日の夕食について尋ねている。)

01 KR2: ((昨日))なにをたべさせたんですか、むすめさんに

02 J2: え::つとね::, むすめは

03 KR2: あ:ん

04 J2: あの::温野菜の::

- 05 KR2: うん  
06 J2: 温野菜の(0.6)セット  
07 KR2: 温野菜のセット  
08 J2: うん=  
09 KR2: おねえさんは？  
10 J2: あたしは、だから、あの:, 豚肉のスライスと::  
11 KR2: うん  
12 J2: おなすに、おなすのあいだに豚肉のスライスがはいつて::  
13 KR2: うん  
14 J2: カツにしてある  
15 KR2: あ::カツ. そうなんだ.

上の例では、09KR2で「おねえさんは？」とJ2に語りかけているが、会話全体を通して、KR2はJ2を「おねえさん」と呼んでおり、姓名を使った呼び方は見られなかった。この呼称表現について、第三者は「家族じゃないのに不自然だ」と否定的に評価している当事者同士ではこれらの呼称は自然に受け入れられている。

韓国語と日本語の呼称に関しては、両言語とも発話者と聞き手との社会的関係、性別、場面などの違いによって、人称代名詞、地位・役職名、職業・役職名、親族名称、個人名、敬称など、多彩なバリエーションが存在している(林他、2002)。しかし、その使い分けにおいては違いがあり、日本語では非親族に対しては名前で相手を呼ぶことが多いのに対し、韓国語では目上に対しては親族名称で呼びかけるのが一般的である(林・深見、2004)。KR2の呼称使用もこの韓国語の呼称選択にもとづいていると考えられる。KR2はこの「おねえさん」の使用について、インタビューで以下のように語っている。

*KR2: 誰にでもおねえさんおねえさんって言わないんですよわたしは。(中略) 自分で、そのあの仲良くなって:, おかあさんみたいな, おねえさんみたいな, そういうふうに心が動いてる? そういう友だちに限って, であの: 相手に, あたしおねえさんって呼びたいけど: いいですか? ってちょっときいてから, それで呼んでるんですよ。(中略) 韓国の人たちは自分よりひとつより年上だったらおねえさんと呼んであげないといけないんですよ。だからそれもわたしはちょっとそれがあの違うんですね, なぜ: 必ずおねえさん*

と呼ばなくちゃいけないのかなっていうふうに思うんですよ

この KR2 の語りから、「おねえさん」という呼称がポジティブ・ポライトネスの表示という意味をもっており、KR2 が「自分が親しみを感じた相手に対して、相手の了承を得た上でこの呼称を使用している」という方針をもっていることがわかる。そしてこの方針は、韓国語の規範にもとづいたものではなく、「自分が親しいと思うかどうか」によって決められることを強調しており、個人的な日本語使用の管理の一面があらわれている。

このように、第三者に否定的に評価される逸脱が KR の個人的な管理の一部として位置づけられる場合、その逸脱は否定的なものではなく、KR が接触場面におけるコミュニケーションを促進するためのリソースとしてとらえられるようになる。そして KR によって意味づけられた逸脱が J と共有され、日常的に使用されることは、仲間意識の表示となり、2 人の人間関係を維持・促進することに貢献していると考えられる。

#### c) コミュニティで共有される逸脱

KR と J が同じコミュニティに所属している場合、KR の逸脱は、KR と J の二者間だけの問題ではなく、同様の逸脱がコミュニティ全体で共有され、日常的に使用されていることがある。本調査では、KR3 と J3、KR4 と J4、KR10 と J10 は同じ韓国系の教会に通っており、教会コミュニティのメンバーであった。また KR12 と J12 は韓国料理店のアルバイト仲間で、他の店員やアルバイト店員に韓国人も多く、日本人と韓国人で構成されるコミュニティであった。このような韓国人と日本人がメンバーとなっている場では、韓国人に関して留意される逸脱も日常的に出現し、コミュニティで共有されるようになると考えられる。

以下の KR10 と J10 の会話では、J10 は KR10 を「オッパ」と呼んでいる。この「オッパ」は、韓国語では女性が親しい年上の男性に対して使用する親族呼称「오빠, oppa」を日本語の発音で呼ぶ表現である。

#### 例 14: コミュニティで共有される逸脱 (KR10×J10)

(J10 は KR10 と一緒にスポーツジムに通う韓国人の後輩について尋ねている。)

01 J10: うん、え後輩は韓国人なの？

02 KR10: 韓国人

03 J10: うん

- 04 KR10: けっこう, しただね  
05 J10: う::ん  
06 KR10: じゅうよん  
07 J10: じゅうよん?  
08 KR10: いやちがう  
09 J10: .hh  
10 KR10: ごこしたかな?  
11 J10: う::ん(0.5) オッパがなんさいだか忘れちゃったけど=  
12 KR10: =にじゅご  
13 J10: う::ん  
14 KR10: あにじゅうよんか, にほんでは. 誕生日すぎてないから  
15 J10: あそだね

上の例では、第三者によって2つの逸脱が否定的に評価されていた。1つは11J10の「オッパ」という呼称表現が第三者には「不自然だ」と評価された。もう1つは、14KR10の「あにじゅうよんか, にほんでは. 誕生日すぎてないから」という発話内容に関して、「意味がわからない」と言われていた。

当事者から見ると、11J10の「オッパ」という呼称は会話全体で使用されており、いずれも参加者がとくに意識している様子はなかった。KR10はインタビューで、「教会では韓国語のときも日本語のときも、みんな「オッパ」「オンニ」になる。「さん」とか「くん」は使わない」と話している。このことから、こうした人物呼称の表現は、教会コミュニティ全体で共有されたもので、コミュニティのメンバーであるKR10とJ10の間でも習慣的に使われていたと考えられる。

また、14KR10の発話内容に対して、J10は「あそだね」(15J10)と自然に応答しており、この場合も参加者の間で発話の内容が理解されない、または違和感があるといった問題は生じていない。この発話内容が意味するところは、「韓国では陰暦で年齢を数えるため最初に25歳だと答えたが、日本では陽暦で数えるのでまだ24歳だった」ということであるが、J10の反応から、J10がすでに韓国の年齢の数え方に関する知識を持っていたことがわかる。

このように、韓国人と日本人がメンバーとなっているコミュニティにおいて、韓国語を転用した呼称表現や韓国の社会文化的知識など韓国語・韓国文化に関わる要素は、否定的

に評価される逸脱ではなく、メンバー内で共通認識として共有されていたと考えられる。日本語と韓国語の要素との混交については、在日コリアン・コミュニティにおける日本語と韓国語の混用コード(文内コード・スイッチングを含む発話)の使用が指摘されている(金美善、2003; 郭銀心、2005; 吉田、2014 など)。これらの研究では、二言語間の言語的な要素の切り換えを分析の対象としているが、本研究であらわれたような社会言語的な逸脱や社会文化的な逸脱も混用コードの1つになりうるだろう。とくに、従来対象とされてきた在日コリアン中心のコミュニティではなく、本研究でみられたような韓国人と日本人、在日コリアンや韓国からの帰国子女など多様なメンバーが参加するコミュニティでは、日韓両言語のさまざまな要素の逸脱が日常的に出現していると推察される。このような逸脱は、コミュニティ内で共有され、習慣的に使用されていることから、仲間意識を表示するコミュニティ・コード(真田、2006)として見なすことができるだろう。

#### 4.2.4 韓国人居住者の逸脱の調整ストラテジー

前節では当事者による逸脱の管理についてどのようなやりとりがおこなわれていたかを考察してきた。その結果、それぞれの会話では、KRの逸脱をめぐるやりとりにおいてKRとJとの間である程度決まったパターンが見られる傾向にあった。そこで本節では、KRとJとがそれぞれどのような逸脱の調整パターンを持っていたかを検討する。以下の表は、それぞれのKRとJとの会話で確認された調整の傾向を示したものである。

表 4.2.4 当事者による調整の傾向

逸脱の調整		KR 1	KR 2	KR 3	KR 4	KR 5	KR 6	KR 7	KR 8	KR 9	KR 10	KR 11	KR 12
メッセージの受容と産出	問題として解決される	○	○		○	○	○	○			○	○	○
	会話の進行を優先	○	○		○							○	○
メッセージの受容と産出以外	逸脱が管理の対象にならない	話題の内容に集中	○										
		話題が変更される	○										
	逸脱の否定的な要素が緩和される						○						
	逸脱がコミュニケーションのリソースになる	新しい話題として展開							○				
		「遊びとしての対立」の実現		○				○					
新たな共有認識の構築								○					

		ディスコース・マーカーとして機能				○							○		
日常的に共有されている逸脱		Jにも同じ逸脱がある	○												
		当事者間で意味づけられた逸脱		○											
		コミュニティで共有される逸脱											○		

上の表を見ると、メッセージの受容と産出に関わる逸脱の調整はすべてのKRによって実施されていることがわかる。一方、メッセージの受容と産出以外の逸脱に関しては、KRによって傾向に差が見られた。

KR1の場合は、KRの逸脱が管理の対象にされない傾向があった。KRの逸脱を含むやりとりでは、KR1とJ1が話題の内容に集中していたり、話題を変更するといった調整のパターンが見られ、KR1とJ1が逸脱よりも話題の管理に重点を置きながら会話を進めていたことがわかる。さらに、J1の発話にもKR1の逸脱と同じ特徴が確認され、逸脱となる要素は2人の間で共有されていたものもあると推察される。

KR2の場合は、逸脱がコミュニケーションのリソースとなり、「遊びとしての対立」が実現される傾向があった。また、当事者間で意味づけられた逸脱である「お姉さん」という呼称が共有されていた。このようにKR2とJ2の会話では、逸脱は2人の関係の親密さを強調するリソースとして活用されていた。

KR4の場合は、逸脱がコミュニケーションのリソースとなるもののうち、ディスコース・マーカーとして機能するパターンが見られ、円滑な話題転換のリソースとして活用されていた。

KR5の場合は、逸脱の否定的な要素が緩和される傾向があった。KR5が否定的に評価される可能性がある直接的な発話行為に対してメタ言語や説明などを追加することで否定的な要素を緩和し、J5もそれに応えることで協働的に発話行為のやりとりを達成していた。

KR6の場合は、逸脱がコミュニケーションのリソースとなり、「遊びとしての対立」が実現されるやりとりによって親しい関係が表示されていた。

KR7の場合は、逸脱が新しい話題として展開するパターン、新たな共有認識が構築されるパターンが見られ、逸脱を積極的にコミュニケーション・リソースとして活用したやりとりが目立っていた。

KR10の場合は、逸脱がコミュニケーション・リソースとなってディスコース・マーカー

として機能する場合、日常的に共有されている逸脱のうち、コミュニティで共有されている逸脱が確認された。

また、KR3、KR8、KR9は会話上では調整のやりとりは認められなかった。これらのKRの会話でも第三者によって否定的に評価された逸脱は出現していた。ただ、会話ではこれらの逸脱は問題とはなっておらず、参加者によってマークされることもなかった。つまり、ここでの逸脱は、すでに当事者間で共有されており、日常的に共有される逸脱としてとらえることができるだろう。

このように、会話によって見られる逸脱の調整の傾向は異なっている。ここでの調整は、KRの属性や逸脱の性質によって決定づけられるものではなく、あくまでKRとJとの関係性のなかで構築され、共有されてきたやりとりのパターンとして位置づけられる。つまり、KRの日本語使用の経験とJとの相互行為の蓄積によって時間をかけて構築されてきた結果の一部がここに現れていると考えることができるだろう。

### 4.3 本章のまとめ

本章は、会話のなかに現れたKRの留意された逸脱について、第三者および当事者の視点から考察をおこなった。

第三者が留意したKRの逸脱は、言語的逸脱が日本語の誤用として評価される一方、社会言語的逸脱では日本語らしい会話進行をおこなっていることが、肯定的に評価されていた。また、社会言語的逸脱のうち発話意図の表示は、従来研究されてきたように、否定的に評価されることが多かったが、評価者によっては肯定的に評価される事例も見られた。また、社会文化的外来性は、その外国人らしさ、韓国人らしさが文化の違いとして肯定的にとらえられる傾向にあった。このことから、KRは音声面や発話意図の表示において誤用や不自然さがある一方、会話の進行では自然な日本語使用を実現しており、外国人・韓国人らしさと日本人らしさが混在している日本語使用であると考えることができる。

当事者のやりとりから見ると、調整がおこなわれた逸脱は第三者に評価された逸脱よりも大幅に少なく、当事者間ではほとんど問題は生じていない。このうち、調整された逸脱の大部分は言語的逸脱で、メッセージの情報のやりとりに支障が生じる場合に調整がおこなわれていた。また、第三者によって否定的に評価された逸脱の多くは、当事者の間では、逸脱が問題になることはなく、逸脱は留意されていないか、留意されていたとしても評価はされていなかったと考えられる。そしてこの場合、逸脱の留意の基盤となる規範もまた

意識されていないか、曖昧にしか意識されていないことが推察される。これらの逸脱は当事者間に習慣的なものとなっており、会話のやりとりを通して逸脱を回避したり、弱めたり、リソースとして活用されたりしていた。さらに、このような逸脱をめぐるやりとりは、KR と J との間である程度決まったパターンがあり、会話を安定して進行する働きをしていた。このように、第三者からは否定的に評価される逸脱であっても、当事者の視点から見ると、2 人の間で特定の逸脱や逸脱のやりとりのパターンが共有されており、それによって逸脱は、親しさを構築・維持するためのコミュニケーション・ストラテジーとして作用していることがわかった。

以上の第三者、当事者 2 つの視点から考えると、KR の逸脱は、第三者には日本語の運用能力を測るものとしてとらえられ、当事者にはコミュニケーションを達成・促進するためのストラテジーの 1 つとしてとらえることができる。言い換えれば、KR の外来性には、日本語学習の対象という側面、場面参加のためのリソースとしての側面の両面があり、KR がこれまで日本語習得や接触場面への参加を経験してきたことが積み重なってここで表示されていると考えられる。

## 第5章 韓国人居住者の通時的な日本語の管理

本章では、現在の KR の日本語の使用や学習に対する管理がどのように形成されてきたのかを分析する。言語バイオグラフィーのデータから KR が日本語を習得する過程で経験した日本語学習や接触場面での日本語使用を分析し、それによって形成された日本語使用・学習に対する原則を明らかにする。

### 5.1 日本語の管理に対する通時的な語りの概要

KR はインタビューで自分のこれまでの人生を振り返るなかで、日本語学習の経験や日本人との接触経験についても語っていた。こうした経験を語る際、多く KR は自身の日本語能力が著しく伸びた時期があったことについて言及した。そして、この時期を経て日本語学習や日本語使用の原則が形成または変化したことが語られていた。

このことから、KR の日本語習得を通時的な観点からみると、日本語学習の開始→日本語習得の転機から日本語使用・学習の原則の構築、そして現在の日本語使用という流れをたどるのではないかと考えられる。そこで以下では、日本語習得の転機および日本語の使用・学習の原則の変化に焦点を当てて、KR の日本語の管理を通時的に分析していく。

### 5.2 日本語習得の転機

#### 5.2.1 韓国人居住者の日本語習得の転機

本研究では、ライフストーリー研究における転機概念をもとに、KR の言語バイオグラフィーの語りにあられる KR の日本語習得の転機に注目した。ここでの日本語習得の転機は、KR の日本語習得の転換点となる契機を指し、これによって、KR 個人の日本語習得や日本語使用に対する新しい方針が形成されたり、変更されたりするものである。

どのような出来事や経験を日本語習得の転機としてとらえるかについては、ライフストーリーの「苦難」→「危機(転機、エピファニー)」→「解決(変身、克服)」という3つの要素を参考にした。これを日本語習得に当てはめると、まず苦難として日本語の知識を持っていない、または不足していると感じている状況があり、それから転機となる出来事や体験を経て、日本語能力の向上を実感するという過程から転機を見いだすことができる。つまり、日本語習得の転機は、「日本語能力に対する否定的評価」→「転機」→「日本語能力に対する肯定的評価」というプロットをたどることで明らかにされると考えられる。

## 5.2.2 韓国人居住者による転機の語り

### 5.2.2.1 転機のタイプ

本研究では、KRの言語バイオグラフィーにおいて、主観レベルの語りからとくにKRが自身の日本語能力に対する評価について語っている部分を取り上げ、KRの日本語習得の転機を特定した。日本語習得の転機は、KRによって直接言語化される場合だけでなく、語りの内容を分析することによって抽出される場合も含まれる。分析の結果、12名のうち11名のKRに日本語習得の転機があることが認められた。

日本語習得の転機があった11名のうち7名は、日本語学習を開始してから初期の段階で転機があったタイプであった。一方、4名は日本語学習を始めてしばらく経ってから転機を迎えていた。これらのタイプでKRを分類すると、以下のようになる。

I 初期の転機: KR1、KR3、KR4、KR6、KR7、KR10、KR12

II 初期以降の転機: KR2、KR8、KR9、KR5

初期の転機があったタイプのKRのうち、KR7以外は来日後に本格的に日本語学習を始め、転機も日本で迎えている。一方KR7は韓国で日本語学習を開始しており、韓国在住時に転機が認められた。

初期以降に転機があったタイプは、転機にいくつかのバリエーションが見られた。KR2の転機は日本語習得の転機で、初期の転機と同じ性格をもっていた。一方、KR8とKR9は、日本語能力の習得というよりは、自身の日本語使用に対する変化のきっかけとしての意味合いが強い。また、KR5の場合は日本語能力に対する評価が肯定的な評価から否定的な評価に向かう変化が語られていた。

### 5.2.2.2 初期の転機

先述したとおり、日本語の学習を始めた初期の段階で転機を迎えたKRはKR1、KR3、KR4、KR6、KR7、KR10、KR12の7名であった。つまり、12名の対象者のうち半数以上のKRがこのタイプの転機を経験したことになる。藤崎(1991)はライフコースにおける転機が比較的初期の段階で経験されやすいことを指摘している。初期段階の経験は本人が成熟した能力が備わっていない時期の出来事であるため、原体験として強烈な印象が残りやすいのだという。本研究のKRにおいても、日本語の知識や使用経験が少ない時期に経験する出

来事は KR に強い印象を与え、その後の日本語使用に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

さらに、桜井(2002)は、転機によって古い体系が新しい意味体系に取って代わるだけでなく、それまでのカオスから新しい意味体系が確立されることも視野に入れるべきであると主張している。つまり、初期の転機は、KR の日本語の知識や日本語使用がまだ完全には確立されていない状態から新たに確立されていく過程としてとらえることができるだろう。

以下では、それぞれの KR がいかにして転機を経験したかを記述する。まず、来日後に転機を迎えた KR1、KR3、KR4、KR6、KR10、KR12 について説明する。次に、韓国で転機を迎えた KR7 について分析を行う。

### (1) KR1 の転機の語り

KR1 の転機は、来日後半年から 1 年の間に訪れた。これは、KR1 が半年間の大学院の研究生を経て、修士課程に入学した時期にあたる。KR1 は、研究生のときの日本語について「日本語が本当に下手だったのであまりしゃべることが恥ずかしいというか、ちょっと静かに 1 人で本とか見るのが多かったと思います」と自身の日本語能力を否定的に評価していた。しかし、修士課程に入学してからのことを尋ねると、KR1 は自身の日本語能力について次のように語った。

*KR1: いまの日本語の上達度を考えてみますと、あのときは急激的に上がったと思います。グラフで描くとなんかこう、坂がこう急激的に今日と明日が、例えばちょっと嘘ついたら今日と明日が違うようにレベルが上がったと思いますけど。修士 1 年修士 2 年くらいになるとこんなふうになって、あとはレベルは普通と言うんですか、あんまり上がらないみたいな。*

上の KR1 の語りから、KR1 は修士課程 1 年から 2 年の時期を急激に日本語能力が上昇した時期であるととらえていることがわかる。

### (2) KR3 の転機の語り

KR3 は来日時の日本語能力について「ほとんどひらがなとカタカナぐらいしか覚えてなくて」と話しており、ほぼ未習の状態で日本に来たことがわかる。KR3 が日本語の上達を感じたのは来日後アルバイトを始めてからだったという。

R: バイトはいつぐらいから

KR3: 日本来て2ヶ月ぐらいで

R: そっようなじんだんですね

KR3: 体仕事なんで基本あそこは。あんまり言葉は使わないんですけど、持ってって、持ってきて、これ入れて、運んでぐらい。あとあいさつぐらいですか。おはようございます、お先失礼しますぐらいですけど。細かい話はほとんどなに言ってるかわかんなかったんですけど。でも バイトすごい勉強になったんで

R: そのちょっとしたあいさつとか

KR3: まずそこで勇気をもらったっていうか。なんかこうしゃべる、なんだろう、そういうのに慣れてきたんで、そこで、そのあとうもう日本に来て5ヶ月でホールのバイトを始めたんです。レストランの。それが すごい勉強になりました

R: ホールはけっこう話しますよね

KR3: そうそうそう、すごい話しかけてくるし、話さなきゃだめな仕事じゃないですか、メニュー聞いたりだとか。だから。けっこうつまずいたりとかしつづもやっぱり。そういう状況で話すようになると 勉強になったかなという

上記の語りを見ると、KR3 はアルバイトについて「すごい勉強になった」という表現を繰り返し使っている。来日後、本格的に日本語学習を始めた KR3 にとって、アルバイトは日本語学習の場であり、日本語能力の向上が実感される経験となっていたことがわかる。

### (3) KR4 の転機の語り

KR4 は来日時の日本語能力について「あいさつとか普通の会話、簡単なお店で買うときはどのように話すのか」を勉強した程度だと話した。そして、初めて日本に来た時の状況について「やっぱり言語の壁はすごく高いなって思ったんですね、私が日本語ができるようになるかなっていう不安が」と語っており、日本語学習に対して不安を感じていた。

その後、KR4 は来日してから3ヶ月経ってお好み焼き屋でアルバイトを始めた。アルバイト先では日本語を使用する機会が増え、「バイトを行ってから、だんだんちょっと会話が、少しずつ」上達したという。このアルバイト先での経験について、KR4 は以下のように振り返っている。

KR4: 本当にちょっと良かったと思うのが、私はほんとにその日本のちゃんとしたお店で、料理屋さんやったんですけども、私のルームメイトはそんなにちゃんとした店で働いてはなかったんですよ。外国人が働いてるところで、あまり良くないんですけども、給料がいい仕事がホテルの掃除をすることなんです、それをやってたんですね。だから会話が伸びないし、聞くことは全然、上手なんだけど、しゃべり方が全然できなかつたんですね。私は1年間お好み焼き屋でしゃべりながらやってたんですけれども、友だちはホテルの掃除、掃除はしゃべりがあまり必要じゃない

R: そうですね、掃除だからね

KR4: だからそれをやって、それもやっぱり給料がいいからなかなか辞めなくて、後でそんな誰かにしゃべりながら仕事ができることが怖くなったみたいで、あの人が。(中略) 私はずっとしゃべる、接客をするバイトをどんどんやってたんですけれども、友だちはそれをあまりやってなかったですよ

上の語りにおいて、KR4 はルームメイトの友人と比較しながら日本語の上達について言及している。KR4 の友人は日本語使用の機会のないホテル清掃のアルバイトを続けた結果、「会話が伸びない」、「しゃべり方が全然できなかつた」といい、結果として「しゃべりながら仕事ができるのが怖くなった」という。KR4 はそれに比べて、「お好み焼き屋でしゃべりながらやってた」ため、会話力が伸びたことが示されている。さらに KR4 は、アルバイトの仕事について、以下のように語っている。

KR4: あの店が面白いのがレベルアップっていうか、ちょっと期間が経ったら「ちょっと来て」って言って、最初お好み焼きを作るやり方を教えるんですよ。それがすごく、最初は鉄板だけをずっと洗ったりするんですけども、料理を教えてくれる

上記の語りから、KR4 がアルバイトをしたお好み焼き屋では、アルバイト店員に対して新人のころは洗い物を担当させ、時間が経つと調理担当に昇格していくという体制になっていると推測できる。KR4 もこの店で働き続けることで、洗い物からお好み焼き作りへの昇格を経験することとなった。すなわち、KR4 にとってこのアルバイトは、日本語能力の向上と仕事での昇格を同時に経験するステップアップの場としての意味を持っていたと考

えることができる。

以上の3名のKRは、日本語能力の転機について自ら認識しており、語りにも直接現れている。一方で、明示的な語りがない場合でも、語りのなかでその前後の日本語使用やそれに対する意識の変化することで転機が認められるKRもいた。

#### (4) KR6の転機の語り

KR6は来日時の日本語能力について「カタコト的なことが多かった」と、それほど高くなかったことを示している。その後の来日してからの語りの中で、KR6から直接転機について言及されることはなかった。しかし、来日後の節目となる時期にそれぞれ日本語について質問していったところ、日本語に対する語りが変化した時期があった。

KR6はまず来日してすぐに通った外国語専門学校の英語科で学んでいた日本人女性(T)と仲良くなったエピソードを語った。彼女には若い人が買い物に行くような店などを教えてもらったり、一緒にプリクラを撮ったりしたという。この女性が使用する日本語について調査者(R)が尋ねたところ、KR6は以下のように答えている。

R: 話してて、うまくいかなかったこととかありましたか？

KR6: はっきり覚えてないんですけど。単語が日本語でなんて表現するのか分からなくて、まわりくどく話してたり、そしたらTさん(日本人女性)が勘で当てて

R: これって

KR6: そうそう、みたいな。

上のインタビュー断片では、調査者が日本人の友人Tと話すときに何か問題が生じていたかという質問に対し、KR6はまず「はっきり覚えてないんですけど」と前置きしてからエピソードを語っており、それほど大きな印象を持つものではなかったと思われる。また、Tの日本語の話し方についての質問には以下のように答えていた。

R: 話し方で、日本語でこういふうに話すんだってTさん(日本人女性)の話し方だとか聞いて覚えていますか？

KR6: それはいま、覚えてないですね。普通の学部のとときの友だちと話してた時を考えて

みると、語尾を波に乗ってる感じでしゃべっているか

KR6の「それはいま、覚えてない」という発話から、Tが使用した日本語は、現在のKR6の日本語使用に対して与えた影響は少なかったのではないと思われる。これに続く発話でKR6はTの話し方の特徴を思い出しているが、そこではその後進学した大学の日本人の友人の日本語使用を基準として特徴を判断している。これらのことから、Tとの接触経験とKR6の日本語習得との関連性はそれほど高くないものと思われる。

一方、先の語りで基準となっていた大学の日本人の友人たちとの日本語使用については、以下のように語られていた。

KR6: みんな個性あるし、しゃべり方が荒い子もいれば、本当に丁寧にしゃべってる子もいるし。だから、たまにあまりにも若者言葉を使っている子だと、どういう意味なんだろうってずっと思ってたんですけど、しゃべってるなかで繰り返していく。で、いつの間にか

R: こういう意味かって

KR6: はい。いつの間にか私もしゃべってる

このKR6の発話から、KR6が日本人の話言葉のスタイルを意識していたこと、理解できない表現も繰り返し使用されることで理解できるようになったこと、そしてそれが自分自身の日本語使用にも反映され、実際に日本語の使用が可能になったことが読み取れる。これはTとの日本語使用とは明らかに異なっており、KR6が大学進学後にできた日本人の友人たちとの接触経験がKR6の日本語使用に大きな影響を及ぼしていたことがわかる。

さらに、先のKR6の「普通の学部のとときの友だちと話してた時を考えると」という発話からわかるように、KR6は大学の友人を基準に振り返りをおこなっている。インタビューの他の部分でもKR6は「Tは学部の友だちとつき合う前まで一番関わった人」と表現しており、「学部の友だちとの付き合い」がKR6の語りにおいて基準となっていることがわかる。

これらの語りから、直接の語りはなかったが、KR6にとって大学の日本人の友人との接触経験が日本語習得の転機となっていたと考えることができるだろう。

### (5) KR10 の転機の語り

KR10 の転機もまた、大学入学後に訪れていたが、直接的には語られなかった。

KR10 は来日後、日韓プログラムの予備教育学生として日本の大学に通い始めた。その後、大学の学部に入學し、同じ学部の学生の一人と「結構親しい親友」となったという。そして、彼との接触が KR10 の日本語にも影響を与えることとなった。KR10 は当時の日本語能力について次のように語っている。

*KR10: 日本語も最初は当然うまくなくて発音ももちろんいまは結構うまくなったと思うんですけど、昔は本当にもう韓国人がやってる日本語っていう感じでしたね*

このように、KR10 は日本語能力について発音に言及していた。そして、現在の日本語の発音がいかにして習得されてきたかを以下のように語った。

*KR10: 日本人がやってる日本語聞いて、あーなるほどそんなふうに発音するんだねみたいな。男がこう発音するじゃないですか、それをまねしようっていう、ちょっと覚えて。*

*R: それってどういうテレビとかですか？それとも学校で話しているのを聞いたりとか。*

*KR10: 学校ですわ彼の一番、彼が一番やっぱり自分に役立ったのは日本語ですね、日本語の発音。*

上の KR10 の発話の「彼」とは先の同じ学部の親友を指している。KR10 は日本人の親友の日本語の発音をまねることで日本語の発音の習得を実践していた。そしてそれが「一番役立った」と振り返っていることから、この親友との接触経験を KR10 の日本語習得の転機として考えることができよう。

### (6) KR12 の転機の語り

KR12 は来日時に受けた日本語のテストが「全然わからなかった」と話しており、日本語能力の低さが語られている。来日後も日本語が話せず、電車に乗り間違えて駅員に尋ねるときも「Where this」と言って教えてもらったという。また、日本人との接触についても、「集まりがあるんですよ、新大久保に、100 円出して 1 時間日本人としゃべる、でもそれ怖

くて行けなかったです」と語っており、日本語使用に対して消極的であったことが示されている。ところがその後、チェーンの韓国料理店(H屋)でアルバイトを始めると、否定的な語りが変化した。そのアルバイト先でKR12は日本人社員や同僚、客と日本語で話すようになったという。以下はKR12がアルバイトでの日本語使用について語っている部分である。

R: じゃあそこでけっこう日本語使うように。

KR12: そう、勉強になったし。そこで会った社員がいるんですよ。で、いまもH屋だから、たまたま会うんですよ社員だから。遊びに来たり、池袋とか行ったら、「KR12 一、日本語うまくなった、すごいな」「そうなんですか」「最初すいませんしかおまえ言わなかっただろ、何でもすいません、すいません」

上の語りでKR12は、アルバイトでの日本語使用が「勉強になった」と自身の日本語習得につながったことを示している。さらに、アルバイトを始めた初期のころと一緒に働いていた社員に会うと、当時と比較して「日本語が上手になった」と言われるというエピソードも語っている。つまり、ここではアルバイト経験がKR12の日本語習得を進展させたことが示されており、KR12の日本語習得の転機として捉えることができるだろう。

以上述べてきたように、KR6、KR10、KR12の場合は、本人によって日本語習得の転機を明示的に伝える語りはなかったが、日本語に関わる語りから、日本語習得の転機があることが認められた。

これまで分析したKRは明示的、非明示的なケースを含め、いずれも転機は来日後に訪れていた。これは、KRが来日後に本格的に日本語学習を開始したことが関係していると思われる。一方で、KR7は韓国で日本語学習を開始し、日本語習得の転機も来日する前に確認された。

#### (7) KR7の転機の語り

前に述べたとおり、KR7は小学生のころから日本語の学習を始めた。KR7の姉も日本語を学んでおり、日本人の友人もいたという。KR7が初めて日本人と接したのは中学1年生のときで、姉の友人が日本から遊びに来て話したのだという。このときのことについてKR7は「あんまりしゃべれなかった。本当にあいさつ言葉ぐらい」と振り返っている。ただ、

その後も KR7 の姉の友人や知り合いがよく韓国を訪れており、KR7 も接する機会があったという。そして、KR7 が高校 2、3 年生になったころ、周りで話している日本語が理解できるようになったという。

R: ちょっと聞いて周りの人がお姉さんとか日本の人が話してるの聞いてわりとわかってなっているのは？

KR7: 高校の 2、3 年ぐらいにちょっと落ち着いて自覚しました。

R: じゃあけっこう聞いてわかるし言ってることわかるし話せるし

KR7: そのときけっこうドラマにはまってたんで 聞き取れるようになりましたね

さらに、KR7 は自身の日本語能力の向上について以下のように語っている。

KR7: やっぱり聞くのが最初発達して聞き取れたら話せるようになって話せることが漢字で読めるようになって読めるようになってから書けるようになってっていう順番ですね

この発話から、KR7 は自身の日本語能力が聞く・話す・読む・書くという順序で段階的に発達してきたと感じていることがわかる。これらの語りから、KR7 の日本語習得は段階的に進められており、その中で高校 2、3 年生のころに「聞いてわかる」ようになったのは、最初の段階の転機にあたると思われることができる。

このように、KR7 は韓国にしながら、日本人との接触経験や他の日本語使用の経験を重ねることが可能なネットワークを持っており、その過程で日本語習得の転機も迎えていたと考えられる。

以上、日本語の学習を始めた初期の段階で転機を迎えた KR、KR1、KR3、KR4、KR6、KR7、KR10、KR12 の 7 名について、転機の語りを分析してきた。その結果、KR によって転機の語り方はさまざまで、明示的に語る場合もあれば、本人からは強調されない場合もあった。また、KR7 のように複数の転機があるうちの 1 つが語られる場合もあった。このように、KR の転機にはバリエーションがあり、KR によってその重みも異なっていると考えられる。

また、ここで語られた日本語能力の向上は、すべての KR において「聞くこと」と「話すこと」の上達を意味していた。つまり、「日本語で会話ができること」が KR にとって自身の日本語能力を評価する基準になっていると考えられる。こうした日本語の上達に対する意識は中山(2007)の韓国人留学生についても同様の傾向が指摘されており、韓国人が日本語を学習する上で重視する観点の一つになっているのかもしれない。

### 5.2.2.3 初期以降の転機

本研究でインタビューした KR には、日本語学習を始めてから初期の段階で日本語習得の転機を迎えた KR のほかに、日本語学習や日本語使用を始めてからしばらくの期間を経て転機を迎える KR もいた。高(2010)でも、日本に長期間在住した韓国人があるときから日本語の規範を一方的に受け入れる形の日本語使用からバイリンガルの言語使用に変化する事例が見られたが、これも転機としてとらえることができるだろう。本研究では 4 名の KR からこのタイプの転機の語りが確認された。

#### (1) KR2 の転機の語り

KR2 はオーストラリアへの語学留学の後、最初に日本を訪れたが、それは留学を目的としたものであった。その時には日本語学校に通っていたが、なかなか成果が出ないまま、体調を崩したこともあり、一度韓国に帰国している。その後、日本人男性と結婚することになり、今度は生活者として日本に移住することになった。

結婚来日時の日本語能力について KR2 は「日本語しっかり覚えたっていうか、勉強したっていうか、そーれは言えないぐらい？ほんとうにもう情けないぐらい」と否定的に評価している。しかし、KR2 はこの結婚来日後に日本語能力が著しい向上を経験した。

KR2: いつの間に自分も知らないうちに、あれ？わたしこんなに日本語しゃべってたの？  
こんな日本語知ってたかな？って自分でも思うぐらい、ちょっと 日本語が？ぐんっ  
て

R: ぐんと、そこできて色々やってるうちに、気がついたらもう

KR2: そうですね。それであれーと思って、そのときわたし自分で考えたのは、わたし留学何年行ったんだろうなーって、学校で何年日本語覚えたんだろうなーって考えてみたらー、ほんとにもう、長い間、しゃべろうと思って一生懸命したことを、たっ

たこの1年間で、結婚して日本に住みながら1年間で、もう前より何倍は日本語がうまくなったんじゃないかなーって

上の語りからわかるように、KR2 は長期間、語学学校で日本語を学んできたが、そこで達成されなかったことが結婚来日後1年間で実現したことを強調している。このように KR2 は、教育機関での留学生としての日本語習得の失敗から、国際結婚をきっかけとした生活者としての日本語使用による日本語習得の成功という転機を迎えており、KR2 自身によっても強く認識されている。

## (2) KR8 の転機の語り

KR8 の場合、日本語能力の向上というよりは、日本語能力に対する評価や日本語使用に関する転機として認められる語りが見られた。

KR8 は韓国で日本語学習を開始した。1年後には日本語能力試験1級を取得、さらに韓国の日本語学校では「日本語が上手な女の子2人」のうちの1人であったと言い、日本語能力に自信あったことを強調している。ところが来日後、大学院の研究生になり日本の音声学を専攻した際、周囲に日本語の発音を厳しく矯正されるようになり、自信をなくしたという。しかし、悩んだ末、間違った日本語でもかまわないと開き直り、新しい専攻の研究を始めている。この経緯について、KR8 は以下のように語っている。

*KR8: 日本語しゃべれないってことになって、日本に住んでるのに。日本語がすごく嫌いとかっていうことだったんですけど、それまではけっこう日本語好きだったのになって思っ。なんですけど、ある日突然、いいんじゃないわたし外国人だからってう開き直り (R: 開き直りが) 別にいいじゃない、結局日本人にはなれないから間違ってたっていう開き直りの技を覚えたらちょっと気が楽になった かな。*

このように、KR8 は周囲からの否定的な評価によって日本語能力の自信をなくしていた。しかし、自分で「開き直り」をすることで、他者から押しつけられた否定的な評価をみずから変更している。ここでは、KR8 自身が直接「開き直り」という転機を語っており、その後の KR8 の日本語能力に対する評価や日本語の使用に対する原則が変化している。

### (3) KR9 の転機の語り

KR9 の場合、日本語習得の転機は見られなかったが、日本人とのコミュニケーションに関わる日本語使用の転機の語りが確認された。

KR9 は韓国の二年制大学で日本語を専攻し、その後留学生として来日した。来日後は日本語学校、日本の大学および大学院に進み、修士課程を修了した。その後、通訳の仕事をしていたが、この数年は出産をして子育て中心の生活を送っている。

KR9 は他の KR のように自身の日本語能力に対する評価や日本語使用についての語ることとはなかった。一方で、日本人に対する意識やコミュニケーションについては変化が語られた。以下の語りは、KR9 が大学在学中のものである。KR9 は日本人学生が授業中に教師の質問の答えがわかっているにも関わらず、自発的に発言しない様子を見て感じたことを語っている。

*KR9: 日本人はわかっているのになんで言わないのって。韓国わかんなくても言っちゃうんで、一応言ってみるみたいな、そういう感じなんですけど、そのへんが 実はこの人いろいろ考えてるのに口に言わないかもしれないって言うことを気がついたんですね、日本人は。韓国人は思いをすぐ口に出しちゃうんですけど、日本人はもしかして言わないかもしれないってことで、そうすると探り探りですね、付き合いが。*

上記の語りからわかるように、KR9 は「日本人は考えていることを言わない」ということを否定的に評価しており、さらには別の部分で「日本人は考えていることがわからない」という発話もあった。そして、KR9 は日本人に対して気を遣うようになったといい、「一生友だちとしてつき合うのは難しい」とも話している。

ところが、子どもが幼稚園に入園し、母親同士の付き合いが始まると、その意識は変化していく。

*KR9: ある日、幼稚園の行事があつて行かなきゃいけなくなつたんですけど、メールが来てるんですけど、5 人ぐらいが私と一緒にいかないかっていうメールが来たんですね、別々で。日本人って寂しいんだなって、実はみんな寂しいんだなって。*

この語りでは、KR9 が幼稚園行事に行く際、同じ幼稚園に子どもが通う母親からそれぞ

れ個別に誘いのメールが届いたことから、「日本人は寂しい」ということに気づいたことを報告している。また、KR9 はある時、まったく知らない母親から子どもを連れて遊びに来るよう誘われ、自宅を訪ねた時のエピソードも語った。KR9 は最初なぜまったく知らない母親に誘われるのか疑問に思っていたという。

KR9: お茶をしたら、ふっと見たら本棚に韓流のいろいろあったんですね。こういうこと  
かってことで声をかけてみたんですね。実はなにになが好き?とか聞いてみたら、  
そこでもうがっつききて、実は自分は韓流のドラマの大ファンなのよってことで、  
私に興味があったんでしょ、韓流ドラマ普段見てるので

R: 話したくって呼んじゃった

KR9: 話したくて呼んじゃった。直接的に言わなかったんですけど、いま考えるとそうい  
うことだなと思って。

このエピソードでは、直接 KR9 を誘った理由を言わない母親が、実は韓国ドラマが好きで自分に興味を持っていたことに気づき、KR9 から声をかけたことが語られている。そして、これらの幼稚園の母親とのエピソードとともに、KR9 は日本人との付き合いについて次のように語った。

KR9: 積極的にやっぱ声かけて仲良くなってるんです。

R: 仲良く。それはなんで積極的に

KR9: 日本人はシャイなので。

上記の語りは、大学在学中に語った「日本人は考えていることがわからない」、「一生友達としてつき合うのは難しい」という評価とは異なっている。このことから、KR9 は幼稚園での母親同士との接触経験から、日本人に対する否定的な評価が緩和され、日本人とのコミュニケーションに対する意識も変化したことから、一つの転機を迎えていたと考えることができるだろう。

以上、日本語学習初期以降の転機について、KR2、KR8、KR9 の3名の転機を考察してきた。その結果、KR2 のような日本語習得の転機だけでなく、KR8 や KR9 のように自身の日

本語使用や日本人とのコミュニケーションに関わる転機も確認された。これは、ある程度日本語の習得が進んだ KR の場合には、こうした日本語学習以外の要素に意識が向けられ、転機につながる可能性があることを示している。

一方、本研究が転機として分析してきた「日本語能力に対する否定的評価」→「転機」→「日本語能力に対する肯定的評価」という方向とは逆に、日本語能力に対する肯定的な評価から否定的な評価に向かう変化が語られる場合もあった。

#### (4) KR5 の転機の語り

KR5 は、来日前から日本に憧れ、韓国の二年制大学で日本語を専攻し、卒業した後、ワーキングホリデーのビザで来日し、翌年には大学進学を目指して日本語学校に通った。この間、KR5 はアルバイトをしており、そこで日本人の友人と良好な関係を築いた。その後、念願だった大学入学を果たすが、大学では人間関係を築くことができずにいる。自身の日本語能力に対して KR5 は、アルバイトをしていたころは「自信があった、おーなんか大丈夫みたいな感じ」と肯定的に評価をしている。しかし、現在の大学生活ではその評価は否定的になっている。

*KR5: 前はけっこう頑張ればできるって思ってたんですけど、いまは そんなにうまくいってないんですよ、日本語的に。私が十分言いたいのが言えなくてとか、簡単な文法とか間違っちゃったりするんですよね、話しているときに。それで 自信なくなっちゃって、なくなってるから どんどん話したくなくなって、そしたらめっちゃカタコトになっちゃってみたいな感じになるんで*

このことから、KR5 のプロットは、「日本語能力に対する肯定的評価」から「日本語能力に対する否定的な評価」となっており、本研究における「転機」とは逆の方向に向かっていく。KR5 は大学入学前には、日本に憧れて日本語を努力して学び、その結果としてアルバイト先でのコミュニケーションが成功するという経験をした。ところがその後、期待をもって入学した大学では、友人関係をうまく築くことができなかつたといい、期待していた大学生活が実現できていない。村岡(2017)では、望ましいアイデンティティが獲得できない社会参加が続くことが日本語能力の評価に影響を与えることが指摘されているが、KR5 についても大学生活において望ましいアイデンティティが獲得されていないことが現在の

日本語能力に対する否定的な評価につながっていると推察される。

このように、KR の日本語能力や日本語使用に対する評価は、常に否定的な評価から肯定的な評価に上昇しつづけるわけではなく、現実的には KR5 のように上昇と停滞を繰り返しながら転機を迎えるのではないかと考えられる。実際、KR5 は大学2年生になってから「私が私であり得る、何でも話せる」日本人の友人ができたことを報告している。この友人との接触経験が積み重なることで、KR5 の評価が再び変化する可能性は十分ありうるだろう。

### 5.2.3 韓国人居住者の日本語習得の転機の分析

KR の語りから、日本語習得の転機には、KR の社会的ネットワークへの参加とネットワークを通じた日本語のインプットが大きく関わっていることが予想された。そこで本節では、KR の日本語習得の転機がいかにして訪れたのか、その要因を検証する。

#### 5.2.3.1 社会的ネットワークの概要

##### (A) ネットワークの種類

前節で述べたとおり、日本語習得の転機が認められた KR は、KR11 をのぞく 11 名であった。そのうち、KR5 は否定的な評価への転換であり、また KR8 は転機があったことは語ったが、転機に関わる経験については語られなかったため、この 2 人を除いた 9 名の KR の転機について分析をおこなった。その結果、転機となった社会的ネットワークは、個人ネットワーク、組織ネットワーク、メディア・ネットワークの 3 つに大別することができた。以下の表は、それぞれの KR の転機ネットワークを示したものである。

表 5.2.4. KR の転機となった社会的ネットワーク

ネットワークの種類		KR
a. 個人ネットワーク	a-1. 大学の先輩 (日本人)	(1) KR1
	a-2. 大学の友人 (日本人)	(1) KR1、(2) KR6、(3) KR10
	a-3. 家族の友人 (日本人)	(1) KR7
b. 組織ネットワーク	b-1. アルバイト	(1) KR3、(2) KR4、(3) KR12
	b-2. 韓国語学習会	(1) KR1
	b-3. 子どもの幼稚園	(1) KR9
	b-4. 公共施設	(1) KR2

c. メディア・ネットワーク	c-1. テレビ	(1) KR1、(2) KR3、(3) KR7
	c-2. インターネット	(1) KR7

上の表を見ると、個人的ネットワークには大学のチューター、先輩、友人などの大学内のネットワークと家族の友人が挙げられている。組織ネットワークはアルバイト、子どもの幼稚園、また公共施設にいる日本人との接触も確認された。一方、テレビとインターネットを含むメディア・ネットワークも挙げられた。

以下では、それぞれのネットワークに関する KR の語りから、参加した行動ネットワークの特徴を明らかにする。

#### a. 個人ネットワーク

大学内のネットワークが転機となっていたのは KR1、KR6、KR10 である。いずれも留学の目的で来日し、日本の大学・大学院に入学しており、転機のあった時期は大学がおもな生活領域となっていた。

##### a-1. 大学の先輩

###### (1) KR1 の場合

KR1 は、大学の先輩とのネットワークについて「日本人の先輩たちわざわざ来て夕食一緒に食べようとか。今日お酒でも飲むとか誘ってくれて」と語っており、日本人の先輩からの働きかけで行動ネットワークが形成されていたことがわかる。ここでの主な行動ネットワークの内容は「お酒を飲む」ことで、これらのネットワークは日本語学習よりも親密化が目的であった。しかしこのネットワークに対して KR1 は「学校では学ぶことができないいろんなことをいろいろ教えてもらった」、「日本人の生活の中にすぐ入ることができた」と評価しており、日本人ネットワークを通じて日本語も含めた日本に関する知識が伝達されたと考えられる。

##### a-2. 大学の友人

###### (1) KR1 の場合

KR1 は日本人の友人ネットワークについては「(大学院に)同じ年度に入った同期は仲良くしていて専攻が違った人たちもちょっと知り合いになってちょっと遊んだりお酒飲んだり

して」と報告している。このネットワークもまた、a-1.で挙げた大学の先輩と同様に、親密化を目的としていたものであると考えられる。

## (2) KR6 の場合

KR6 は大学1年生のときに英語のクラスで出会った日本人と仲良くなったことを報告し、このネットワークを「本当に人に恵まれてるという感じだった」と肯定的にとらえている。ここでの行動ネットワークについては、「学校の中で遊んでるときは日本人の友だちと遊んでて」、「毎日会ってる感じでした」と話しており、日常的に大学で接触していたことがわかる。

## (3) KR10 の場合

KR10 は大学の友人ネットワークを「1人けっこう親しい親友」とし、「ずっと授業となり座ってご飯も一緒に食べたり宿題の情報交換したりしました」と話している。KR10 はこのネットワークに対して「彼が一番やっぱり自分の役に立ったのは日本語ですね日本語の発音」(既出)と報告しており、日本語の知識を得る機会としても活用していたと考えられる。

## a-3. 家族の友人

### (1) KR7 の場合

家族の友人ネットワークはKR7によって提示された。KR7の場合、姉が先に日本語を学んでおり、韓国にいながら日本人ネットワークを形成していた。その影響で、姉を仲介者としてKR7とKR7の姉の日本人の友人とが出会う機会もあったという。なかでも具体的に報告された行動ネットワークは、KR7が中学生のときに日本から韓国を訪れた日本人との接触であった。姉の代わりにKR7が日本人の相手をするのがあったといい、「あんまり本当に(日本語が)話せなかったんですけど分厚い辞書を持って通じなくてもなんとかなるって思って話して付き合っていました」と話している。

以上のように、個人ネットワークでは、おもに参加した行動ネットワークは交友場面が大部分で、KRにとっては日本語を使用する場としてだけでなく、日本生活・大学生活に関する情報が伝達される機会にもなっていた。つまり、日本語学習を目的とした行動ネットワークではないところに参加することで、日本語を含めたさまざまな知識がKRにもたらさ

れていたと考えられる。

## **b. 組織ネットワーク**

組織ネットワークにはアルバイト、韓国語学習会、子どもの幼稚園、公共施設が挙げられた。

### **b-1. アルバイト**

アルバイトは3人のKRに転機として報告された。3人とも日本語学習のために意図的に日本人が経営する店を選択したと話しており、KRの社会的ストラテジーとして管理されたネットワークであった。

アルバイトでの行動ネットワークは、大きく分けて日本人上司との接触、同じアルバイト店員との接触、客との接触の3つが挙げられた。言い換えれば、このネットワークにおいてKRは目上の相手との接触、同僚もしくは親しい間柄の相手との接触、初対面の形式的な場面における日本人との接触と異なるタイプの接触場面に参加していたことになる。さらに、参加者の数からみても、1対1の場面だけではなく、複数の参加者による接触場面への参加も想定される。このことから、組織ネットワークにおいてKRは、多様な接触場面への参加を経験することが可能であったことが推測される。

### **(1) KR3の場合**

KR3は、来日2ヶ月後にはまず基本的に仕事では日本語の必要のないアルバイトを始めたという。ここでは日本語を使用する必要性はなく、使った日本語は「挨拶程度だった」という。その後、KR3はレストランでの接客アルバイトを始め、「話さなければいけない仕事で、つまずいたりしながらも話すようになった」と報告している。このことから、KR3は日本語習得の社会的ストラテジーとしてネットワークを管理しており、まずは日本語の場面への参加を達成できるネットワークを選び、その後で本格的な日本語使用場面に参加できるネットワークを選択していたと考えられる。

アルバイト店員とのネットワークについては、アルバイト店員は皆日本人だったが上の年代の人が多かったと言い、直接接触したエピソードは報告されなかった。ただKR3は客と日本人のアルバイト店員とのやりとりを観察しており、自分の接客の参考にしていたと話しており、日本語使用のリソースの一部としてKR3に伝わっていたと考えられる。

## (2) KR4 の場合

KR4 のアルバイト先は個人経営のお好み焼き屋で、社長の夫人が「おかみさん」として店を取り仕切っていた。彼女は外国人アルバイト用にマニュアルを作成し、「お飲み物いかがでしょうか」など接客で使用する日本語を 1 つ 1 つ書いて教えてくれたという。このようにアルバイト先の上司にあたるネットワークでは、業務に関わる知識が KR4 に伝えられていたが、そこには日本語の知識や日本人に期待される行動に関する知識も埋め込まれていたと考えられる。さらに KR4 は社長夫人との接触について、「新人アルバイトには厳しかったが、ある時期を過ぎるとすごく優しくなった」、「ある期間になったら「ちょっときて」と言われて、お好み焼きの作り方を教わった」エピソードを語った。さらに、転機の語りでも述べたとおり、「1、2 ヶ月経つとまた「ちょっときて」と言われて、もんじゃ焼きの作り方を教わった」と言い、「レベルアップするのが面白かった」と振り返っている。アルバイトを辞めるときには引き留められたエピソードも話しており、アルバイト先で KR4 が上司である社長夫人に認められたことが示されている。つまり、KR4 の場合、アルバイト先の上司ネットワークからは、日本語の知識に加え、業務上のスキルが伝えられ、達成感が得られていたと推測することができる。

アルバイト店員とのネットワークについては、日本の大学に通う中国人留学生との行動ネットワークが取り上げられた。当時 KR4 は大学進学を目的に日本語学校に通っており、中国人留学生は自分よりも先に大学進学を果たした先輩でもあった。KR4 は「わたしも大学に行きたかったから、どうすれば日本語が上手になるんですかとか、大学の試験とか勉強どうしたんですかとか、それを聞くといろいろなことを教えてくれて」と語っており、中国人留学生から日本語学習者および日本留学の先輩として知識を得ていたことがわかる。さらに、このネットワークは日本語使用の機会としても機能しており、「役に立った」と報告している。

## (3) KR12 の場合

KR12 は、まず日本人上司との行動ネットワークについて、アルバイト先の店長に「謝るときには顔にも気持ちを出しなさい」と言われたエピソードを報告しており、その後は「申し訳ない顔をして謝るようになった」という。

また、KR12 のアルバイト先は韓国料理店だったため、アルバイト店員には韓国人も多か

ったという。中でも KR12 は日本人と国際結婚をした韓国人男性に注目し、彼の日本語使用を観察していたと話している。さらに KR12 のアルバイト先では、来客にも韓国に好意的な日本人が多いという。客との行動ネットワークについて KR12 は「お客さんも話してくれる」と報告しており、接客が日本語使用の機会になっていることがわかる。また、客にメニューにある料理「ハーブサムギョプサル」の発音が理解されずに客に「え？」と聞き返されて言い直したというような日本語問題のエピソードも語っており、日本語習得の進行の一端も示されていた。

このように、アルバイトのネットワークは、日本人の上司が教授者として、アルバイト店員の仲間が手本として、そして客とは日本語実践の相手として KR に関わっており、複数の経路を通じて KR に多様な知識や仕事の技術を伝達していたと考えられる。

## **b-2. 韓国語学習会**

### **(1) KR1 の場合**

韓国語学習会のネットワークは KR1 によって報告された。KR1 は来日後居住した N 市の公民館が主催する韓国学習会にボランティア講師として毎週参加していた。学習会の後は毎回、飲み会が開かれて一緒にお酒を飲んだという。このネットワークについても KR1 は大学のネットワークと同様に「学校では学ぶことができないいろんなことを日本人の友だちからいろいろ教えてもらった」、「日本人の生活の中にすぐ入ることができた」と振り返っており、日本語や日本生活の知識が伝達されたと考えられる。

KR1 の場合、先に挙げられた大学の個人ネットワークや韓国語学習会のネットワークなど複数のネットワークが転機に関係しており、地域全体のネットワークの特性が影響を及ぼしていたのではないかと思われる。

## **b-3. 子どもの幼稚園**

### **(1) KR9 の場合**

子どもの幼稚園のネットワークは KR9 に確認された。KR9 は子どもが通っている幼稚園で知り合った母親同士の付き合いについて、韓国ドラマが好きな人で韓流会を結成して一緒に出かけていることや幼稚園の行事と一緒に参加する友人がいることを報告した。

転機の語りでも述べたとおり、KR9 は幼稚園の母親との接触をとおして、「日本人は本当

は寂しい」、「日本人はシャイだ」といったことに気がつくようになり、それに基づいて自分の行動ネットワークを調整していた。具体的には、友人に対して自分の恥ずかしい話や夫の愚痴を積極的に話すことが多く、日本人もまた「旦那さんの愚痴とか言うんですけど、それは私にだけだと思っんです。他の日本人には言わないと思います」といったことが報告されていた。

このことから KR9 の場合、日本語習得はある程度達成されており、このネットワークではむしろ、日本人の考え方や感情といった心情的な内容が理解され、日本人との付き合い方に変化をもたらすことにつながったと考えられる。

#### **b-4. 公共施設**

##### **(1) KR2 の場合**

公共施設でのネットワークについては、KR2 の転機として語られた。KR2 は市役所や銀行で必要な手続きを日本語を使って 1 人でおこなったことを転機として報告した。ここでの行動ネットワークについて以下のように語っている。

*KR2: 銀行とか市役所に行ったときに、なんかこうやることがあって、(R:はい) ぜんぜんまるっきり知らない、でぜんぜん行って、これ一助けてくれますかとか、本当にへったくそな(笑い)、簡単な日本語で、あのもう助けてくださいって教えてくださいって」と周囲の日本人に働きかけたことを報告している。これに対して日本人は「最初から、楽しく? 教えてもらったりして、自分でこれしないといけないあれしないといけないって言うことが、1 つ 1 つ解決できた」と言う。*

このように、KR2 は公共施設のネットワークでの接触を通して、必要な手続きの知識やそれに伴う日本語の知識を得ていたと考えられる。

以上のように、組織ネットワークで KR が参加した行動ネットワークは、仕事場面や公共場面など日本社会に参加する場面となっており、日本語の知識に加え、日本人の行動パターンや考え方に関する知識、仕事や手続きに必要なスキルが伝達される場となっていた。また、このような場面には目的があり、それが達成されることで KR には成功体験ももたらされていた。

### c. メディア・ネットワーク

メディア・ネットワークは KR1、KR3、KR7 に認められた。いずれも KR が日本語学習の戦略の1つとして採用し、能動的に接触しており、KR1 と KR3 は日本でのテレビ視聴、KR7 は韓国のインターネット上で日本の歌やドラマを見ていたという。

#### c-1. テレビ

##### (1) KR1 の場合

KR1 もまたテレビでドラマやバラエティ番組、ニュースなど複数のジャンルを視聴していた。このうちバラエティ番組に関しては、「字幕が一番役に立ちました」と語っており、バラエティ番組には友だちに使う表現がよく出てくるので、それをメモして実際に友だちに使用してみていたという。また、ドラマは真面目な日本語を勉強するため、ニュースは専門用語や経済関連など社会人が使う言葉を勉強するために見ていたと報告しており、学習する日本語のバラエティに応じて視聴する番組を選択していたことがわかる。

##### (2) KR3 の場合

KR3 はもともとテレビが好きで、「ネイティブに近い」日本語を勉強しようと思い、テレビを見ていたという。おもにドラマやバラエティ番組を選び、ドラマでは話の内容が気になるのもっと日本語を知りたいと思う動機付けになったと報告している。またバラエティ番組については、「ノリツッコミがどうのこうのって言うのを見てて、いま笑うとこなんだとか、なるほどなと思いついて感じですかね」と話しており、日本語の知識だけでなく、日本人のコミュニケーションのスタイルに関する知識も得ていたと推察される。

このように、KR1 も KR3 も複数のジャンルのテレビ番組を視聴することで、多様な日本語のバラエティやコミュニケーション・スタイルに関する知識が伝達されていたと考えられる。KR1 の場合はさらにそれを実際場面で実践しており、テレビを通じたインプットが実際の場面でアウトプットされるという習得過程を実践していたと思われる。

## c-2. インターネット

### (1) KR7 の場合

KR7 は韓国にいながら日本のメディアに接触していた。インターネットを通して、日本の音楽を聞き、自分で歌うために歌詞を書き取ったり、映画やテレビのケーブルテレビで放送される日本のドラマを見たりしていたという。これらのメディア接触について KR7 は「趣味で」やっていたとしながらも、「字幕を見たらわかったり、字幕なしでみたりもするんですよねわざと。そしたらすごく上達が早くなるんですよ」と話しており、学習ストラテジーの1つとしてメディアを活用し、日本語の知識を得ていたと推測することができる。

このように、メディア・ネットワークにおいて、KR はドラマやニュース、バラエティ番組など複数のジャンルに接しており、多様な日本語のバリエーションが伝達されていた。これらはメディアを楽しむという娯楽機能をもつと同時に、KR による日本語学習のストラテジーとしても作用しており、KR は自分が習得したい知識を選択して得ていたと考えられる。一方で、メディア・ネットワークは単独では転機とはなっておらず、個人ネットワークや組織ネットワークと組み合わせあって転機となっていた。つまり、日本語習得の転機としては個人ネットワークや組織ネットワークというパーソナル・ネットワークへの接触が前提となっていると言えよう。

以上のように、KR の転機となったネットワークにおいて、KR が接触した行動ネットワークを見ると、日本語の知識をはじめとした日本生活や日本人に関わるさまざまな知識が伝達されていたことがわかる。さらにこうした行動ネットワークは、日本語習得そのものよりも交友や仕事といった実質行動を目的としたものであり、ネットワークに接触することによって KR は相手との楽しみの共有や仕事の達成感を得ていた。このことから、転機となった社会的ネットワークにおいては、日本語の知識が伝達されるだけでなく、日本語を使用する接触場面への参加の実現が KR にもたらされていたと考えることができる。

### (B) ネットワークの性質

前節で述べたネットワークを質的な観点からみると、定期性と継続性が特徴として挙げられる。

個人ネットワークにおいて挙げられた大学の友人は KR と同じ学部の同級生で、受講する

授業も共通のものが多く、定期的かつ継続した接触が可能となっていた。たとえば KR6 は、大学入学時に知り合った日本人の友人について以下のように語っている。

*KR6 : 英語のクラスが、リーディングのクラスとリスニングのクラスが同じで、だいたい入っているみんなが。それでそのまま1年間そういう英語のクラスをやって、そこで仲良くなって (中略) 毎日会ってる感じでしたね*

また、家族の友人ネットワークを挙げた KR7 もまた、その接触が単発的ではなく、KR7 が日本を訪れた際にはその友人の家に泊めてもらうなど継続的な接触があったことを報告している。

組織ネットワークでは、アルバイトや韓国語学習会などさらに定期性・継続性が強くなる。韓国語学習会について KR1 は、「毎週1回」開催されていたといい、自分は「ほぼ一緒に毎週参加してた」と報告している。また、アルバイトについて KR3 は週に6日はアルバイトをしていたといい、KR4 は1年ほど同じアルバイトを続けたことを報告している。

このように定期的・継続的なネットワークへの接触はその頻度の高さにもつながり、強いネットワークが形成されていると考えられる。

また、これらのネットワークのうち、大学の友人ネットワークやアルバイト、韓国語学習会の場合は、ネットワークに属する人びとの大部分が知り合いであることが多く、密度の高いネットワークになっていると推測される。密度の高いネットワークでは、直接的な関係の結びつきがあるため、類似した行動をとる傾向にあると言われている (安田、1997)。

このようなネットワークの強さや密度の高さによって、KR のネットワークへの参加が保障され、日本人による知識の伝達が促進されていたと考えることができるだろう。

### 5.2.3.2 社会的ネットワークへの参加管理

転機に関わる要因には、KR による社会的ネットワークへの参加の管理も関わっていた。つまり、KR がどのような立場で参加していたか、ネットワークにおいてどのように位置づけられていたかが関連している。そして、こうした参加の管理において、KR が非日本語母語話者以外の役割をもって場面に参加していたことが日本語習得の転機につながったと思われる。本研究では、具体的に以下のような要因が考察された。

#### a. 対等な立場による参加

KR は社会的ネットワークにおいて、非日本語母語話者もしくは外国人といった言語ゲスト(Fan, 1994)というよりも、そのネットワークの参加者の 1 人として自分を位置づけることがあった。

##### (1) KR6 の場合

KR6 は大学の友人ネットワークの関係を「(大学の友だちは) 私と 1 個しか違わなかった。88 年生まれでみんな (中略) 普通に違和感なかったし」と語っており、留学生というより、年齢の近さやともに大学 1 年生だという身分の近さによって自分を位置づけている。

##### (2) KR9 の場合

KR9 は子どもが幼稚園に通い始め、韓国人だったことで大変なことがないのかという質問に対し、「そういうのはなくて、むしろ解放された」と答えている。これに続けて、それまでずっと子どもと 2 人きりだったが「いまは幼稚園の友だちがたくさんいるので、この子がだめだったらこの子って次々声かけると色々言うてくるので、一緒に遊んだりできるので」と理由を語っており、KR9 が子どもの母親の 1 人として幼稚園の付き合いに参加している様子がうかがえる。

こうした年齢の近さや身分の近さによる関係について内海・吉野(1999)は、ネットワークの参加者間の対等性の条件の 1 つとなることを指摘し、このような関係性では情報交換や助け合いの双方向性が見られるとしている。このように、KR が社会的ネットワークにおいて正式な参加者として対等な立場にたつことによって、参加の負担が軽減され、さまざまな情報交換が促進されていたと考えることができる。

#### b) 正統的周辺参加 (Lave & Wenger, 1991)

正統的周辺参加(Legitimate Peripheral Participation)はレイヴとウェンガーが提唱した概念で、学習を「知識の伝搬」ではなく、社会的実践への参加によってとらえようとしたものである。レイヴとウェンガーは、徒弟制において熟達者から新入りに技術が伝承されていくプロセスを観察した研究をもとに、学習者が実践者の共同体に参加し、周辺的な位置から中心的な役割を果たすようになっていくプロセスを「学習」としてとらえた。この理論

によれば、学習は実践共同体への参加によってなされ、それによって学習者は特定の知識や技能を獲得するのではなく、「一人前になる」というアイデンティティが形成されるのだという。つまり、学習を実践場面への参加であるという点、知識獲得ではなく、社会的実践の一部であるという点が特徴として挙げられる。

本研究における KR の社会的ネットワークのうち、もっとも特徴が重なるのは、アルバイトをはじめとした組織ネットワークへの参加であろう。KR はまず「新人」としてアルバイト先の共同体に参加する。それからアルバイト業務の実践を重ねることで、「一人前」のアルバイト店員としての役割を獲得していく。

### (1) KR4 の場合

前述したとおり、KR4 はアルバイトをしたお好み焼き屋で新人のころは鉄板の片付けや洗い物の仕事をしていたが、1 年後には新人アルバイトに仕事の指示をする立場になったと話しており、周辺の参加から徐々に十全的な参加へと位置づけが変化していったことがわかる。

### (2) KR12 の場合

転機の語りでも述べたとおり、KR12 は韓国料理店でアルバイトをしていたが、新人の頃に一緒に働いた社員に会うと、「日本語うまくなった。すごいな」、「最初、すいませんしかおまえ言えなかつただろ」と言われると話しており、アルバイト店員として十全的な参加者になるのと同時に日本語能力も向上していたことが示されていた。

また、アルバイト以外のネットワークにおいても大学生としての大学生活の実践、韓国を訪れた家族の友人に対するホストの実践、公共施設における市民としての実践など、行動ネットワークへの参加を社会的実践としてとらえることが可能だと思われる。そしてそれらの実践はいずれも日本語の知識の伝達だけではなく、その場面における役割や目的の達成がなされていた。つまり、本研究における日本語習得の転機ネットワークへの参加は、KR が日本社会のメンバーとなる正統的周辺参加のプロセスとして位置づけることができるだろう。

### c) 文化資本としての参加

KRの社会的ネットワークの中には、韓国語や韓国文化に関心を持つメンバーが参加していることがある。このような場合、KRは韓国語母語話者もしくは韓国文化保持者といった文化資本(Bourdieu, 1986)として参加されることが期待される。

#### (1) KR1の場合

KR1は組織ネットワークの1つに挙げられた韓国語学習会に参加していたが、そのネットワークは韓国や韓国語に興味があり、韓国語を学ぼうとする日本人のネットワークで、KR1は韓国語講師という役割で参加していた。そこでは、韓国語はもちろん、韓国語の歌を歌ったりすることも多く、韓国語の母語話者で韓国文化の保持者でもあるKR1は文化資本としてそのネットワークに参加していた。

#### (2) KR9の場合

KR9もまた、子どもが同じ幼稚園に通う母親の中で韓国ドラマが好きな人が多いという。あるときから韓国ドラマが好きな母親が集まって「韓流会」を結成し、KR9を中心に食事に行くようになったという。

#### (3) KR7の場合

KR7は韓国で日本人ネットワークを形成している。それは、KR7の姉と姉妹高校にあった日本の学生やインターネットなどを通じて知り合った日本人で、いずれも韓国に関心を持っている日本人であると考えられる。こうした日本人が韓国を訪れた際に、KR7は韓国のホストとして案内をしており、韓国の文化資本としてネットワークに参加している。

このように、ネットワークの参加者が理解志向者であった場合、ネットワークの強化が促されることが指摘されているが(内海・吉野, 1999)、本研究においてもネットワークが強まることにより、KRが行動ネットワークに参加しやすい状況が整えられていたと思われる。

#### 5.2.3.3 言語的インプットの管理

KRは、多様なネットワークを通じて、日本語のインプットを得ていた。

メディア・ネットワークに関しては、先述したとおり、ドラマやバラエティ番組など視聴するジャンルを選択することで、KR自身が学習したい日本語のバラエティに接触してい

たことが明らかにされた。一方、個人ネットワークや組織ネットワークに関しても、KRは特定の日本語の要素に注目している様子がうかがえた。

### (1) KR10 の場合

KR10 は日本人の友人の「日本語の発音」が役立つことを報告している。KR10 によれば、「イントネーションはネイティブからしか聞けない」ため、日本人の発音を聞いてまねしようとしていたという。また、KR12 は同じアルバイト先で働いている韓国人男性の日本語の発話行為に注目していた。KR12 は韓国人男性が日本人に話すときには遠回しな表現を使う様子を観察し、「韓国人はストレートに言う、でも日本人にはちょっと礼儀がある」ことに気がつき、自分も日本人に対してはストレートな話し方をすることは避けるようにしているという。

### (2) KR3 の場合

KR3 は飲食店アルバイトで一緒に働いていた日本人の中年女性の日本語について、中年男性客に対応するための言い回しを若干参考にしたところがあると言う。しかし、こうした言い回しは無条件に学習していたわけではなく、「ちょっとその言い方はおばさんっぽいなっていうのがあるんですけど、そういうのはなるべくまねしないように、口癖になるとやっぱり、出るとやだなと思って」と否定的にも評価し、使用を回避する場面もあった。

このように、KR は接触する日本語をすべて受け入れるのではなく、その日本語が自分にとって有用かどうかを評価した上で、自身の使用につなげている。こうした日本語知識のインプットの選択は、学習ストラテジーの1つである自己モニター(Oxford, 1990)ともなっており、KR の日本語習得を促進する要因の1つになっていたと推察することができる。

以上のように、KR の転機を分析した結果、転機には KR の社会的ネットワークが大きく関わっており、とくに強いネットワーク、密度の高いネットワークが形成されていた。また、それぞれの行動ネットワークにおいては、KR が正統的周辺参加を含め、場面の正式な参加者としての役割をもって参加していた。さらに、言語的インプットに関しては、KR によって有用なインプットが選択的に得られていた。つまり、KR が社会的実践となる接触場面に正式な参加者として社会的ネットワークに参加し、多様な日本語使用の経験を積むこ

とができたことが、KR の日本語習得にも大きな影響を及ぼす転機になったと考えることができる。

また、こうした社会的ネットワークでは、KR は知識の獲得だけではなく、アルバイトの仕事がレベルアップしたことや公共施設で手続きができたといった達成感や日本人ネットワークに対する好意的なコメントが語られ、全体として KR の評価は肯定的であった。つまり、ここでの語りは、KR の日本語習得の成功の物語であり、成功の要因を転機の語りによって説明しているととらえることができる。

### 5.3 日本語の使用・学習の原則の形成

#### 5.3.1 日本語の使用・学習の原則とストラテジー

前節で分析したとおり、KR の日本語能力に対する評価が肯定的に変化した日本語習得の転機には、社会的ネットワークへの参加が関わっていた。その際、KR は接触場面への参加を通して日本語習得が達成されたことだけでなく、日本語の使用や学習に対して得た知識や考えたこと、習慣的に行っている言語行動について語ることもあった。そこで本節では、転機を経験した後から現在まで、KR が日本語学習や日本語使用に対してどのような態度や意識をもって接触場面に参加しているのか、またどのような習慣的な管理を実施しているのかについて考察を行う。

KR の言語バイオグラフィーから取り出された日本語の使用や学習の管理に関する語りにはさまざまなレベルがあり、広く一般的な範囲に適用される態度から特定の場面において適用される習慣化された日本語使用まで含まれている。本研究ではこれらの現象をネウストプニー(1989)、村岡(2010)の類型論的アプローチにもとづき、原則とストラテジーの 2 つの階層によって分析を行う。原則は、広い範囲に適用される日本語使用・学習に対する基本的な態度、またストラテジーはより限定された場面で適用される習慣化された事前管理としての日本語使用・学習を示すものとする。

#### 5.3.2 KR1 の原則の語り

KR1 の日本語習得の転機は、来日 1 年後、大学の先輩・友人や韓国語学習会のネットワークにおいて生じていた。KR1 は転機を「急激に日本語が上達した」時期だと語ったが、そこで習得した日本語能力に対しては否定的で、現在はさらなる日本語の高い目標があると考えられる。インタビューの語りでは、3 つの原則が提示されていた。

**(1) KR1 の原則 1 「日本語は母語話者のレベルまで上達しなければならない」**

KR1 は、調査者の上手な日本語に対する考えを質問され、以下のように答えている。

R: いま日本語について、なんでしょう、レベル的にはじゃあやっぱりもうちょっと上手じゃなければいけないっていう気持ちは

KR1: いつも。入学してからいままでこれは考え方変わったこと一切ないですね。 もうちょっと上達しなければならない という

このように KR1 は来日してから一貫して「日本語の上達しなければならない」という原則を持ちつづけているという。KR1 は現在の日本語能力に関しては否定的に評価しており、それは、日本語が急激に上達した転機の頃にしていた「気になる日本語をメモしておき、辞書で調べる」という勉強をしていないからだと反省している。

さらに、KR1 が上達する日本語については、「日本のスラングとか汚い言葉も理解できるようになってほしいなと思います」「総合的に言いますと日本語のこと全てのこと把握して理解したい」と話しているように、その目標は非常に高い。また、日本語習得の転機となった日本人ネットワークのある環境に比べて、現在は「あまり日本語の会話実力上達ができる環境ではない」と述べている。

KR1: (大学の研究室は) ほとんど中国の、台湾とか中国の留学生が多いんですね。彼たち日本語にするとわたし彼たちみたいにちょっと申し訳ないけどわたしの日本語がちょっと上がるのではなくてちょっと下がってくみたいな感じが

R: 日本語で話して

KR1: お互いに間違った日本語でずっとしゃべるみたいな気がして

上記の語りにおいて、KR1 は留学生同士で日本語を話すことで、自分の日本語能力が下がってしまうと感じている。つまり、KR1 のいう「日本語の上達」は、日本語母語話者を目指した極めて高いレベルの日本語を目指すことを示していると考えられる。実際、KR1 は「メールや手紙は必ず日本人の友だちにチェックしてもらい、日本語の間違いを確認する」というストラテジーを報告しているが、これもこの原則に基づいたストラテ

ジーとして位置づけることができるだろう。

## (2) KR1 の原則 2 「きれいな日本語を話す」

KR1 は日本語母語話者を目標とした高い日本語能力を目指すなかで、「きれいな日本語を話したい」「品のある会話をしたい」ということが繰り返し言及されていた。KR1 がどのような日本語を「きれいな日本語」だと想定しているかは、いくつかのものが考えられる。

KR1 は自身の日本語について「間違った日本語をしゃべってたりとか、こんな癖が出るんですよね」と、誤用が多いと自覚している。さらにその理由は「本当に真面目な文法を勉強していないからだ」とし、「また会話の勉強とか真面目にやってみようかなとそう思います。本当はきれいな日本語しゃべりたいので」と続けている。つまり、「間違いのない日本語」が KR1 にとって「きれいな日本語」として認識されているのである。

一方、KR1 は「きれいな日本語」として敬語にも言及していた。

*KR1: 韓国でもしっかりした敬語のシステムがあるじゃないですか、あれとほぼ同じ段階にあると思いますね。なので同じ感覚で使いたいと思いますし。できれば 敬語を気をつけながら使っててきれいな日本語使いたいなと思ってるんですね。*

このように、KR1 は「間違いのない日本語」および「敬語を使った日本語」を「きれいな日本語」として意識している。これは原則 1 の「日本語の上達」とも重なっており、日本語の規範を志向している様子がうかがえる。

ただ、敬語使用に関しては、KR1 は「きれいな日本語」として意識的に使用する一方で相手との距離化のストラテジーとして使用することもあった。例えば、大学研究室で中国人留学生が後輩の立場であるにもかかわらず自分に敬語を使わないことを KR1 は否定的に評価しており、距離を置くために自分はその後輩に対して敬語を使っているという。

## (3) KR1 の原則 3 「日本語と韓国語とは共通性を見いだす」

KR1 は韓国語の表現をそのまま日本語に直訳してみることもあるという。とくに慣用句やことわざ、冗談を日本語に訳して試してみる場合があると話している。これは、KR1 が以前「つまらない」という比喩として日本語の「さむい」と韓国語の「쌀렁하다, ssöl-lông-ha-da」という同じ語義の語彙が使用されることを知って驚いた経験からきている。

KR1: これはそのまま訳しても通じたから、ちょっとびっくりしましたね。日韓の間にこんなに似てるものが結構あるんですよ。直接に影響されなくても違う地域で生まれたものなのに似てるものがあるんですよ。これを発見したときにはすごくびっくりして、きっと日韓の間はもともと、より密着な関係ではなかったかという気が最近になってもっとしますね

このように KR1 が韓国と日本の共通性を意識していることがわかる。これは KR1 が地方都市である N 市に住んでいたことも関連しているだろう。KR1 は、来日前は「日本人はすごく狭いところでちょっとだけ食べる」生活をしていると聞いていたが、実際、N 市は土地が広くて平屋の広い家屋が多く、コンビニの駐車場も広がったという。また N 市の若者たちは食べる量も多く、パーティでも「食べる雰囲気だった」と振り返っている。このような生活はむしろ韓国に近く、「韓国でも日本でも同じだと思ったんです」と話している。このように、言語的にも社会文化的にも共通性があることを意識する経験をしたことから、KR1 は日本語習得とは別に、日本語には韓国語とそのまま置き換えられるものがあるという原則が形成されたと推測される。とすると、先に挙げた「慣用句やことわざ、冗談を日本語に訳してみる」という戦略は、KR1 が単に韓国の規範を志向しているというわけではなく、韓国語と日本語には共通性が多いという認識に基づいたものであると考えることができる。

### 5.3.3 KR2 の原則の語り

KR2 の転機は、結婚来日後の日本語の実践を通じた日本語能力の向上であった。これは KR2 の原則にも影響を及ぼしていた。KR2 の語りでは、3 つの原則が提示されたが、そのうち原則 1 は転機にもとづいたもの、原則 2 と原則 3 は転機以外のものにもとづいて形成されたと考えられるものである。

#### (1) KR2 の原則 1 「日本語習得のためには接触場面に参加しなければならない」

KR2 の場合、転機の後で日本語学習に対する原則が大きく変化した。それ以前の語学留学で英語習得も日本語習得も達成されなかったのに対し、なぜ生活者として日本に暮らした 1 年間で日本語が上達したのかについて KR2 は以下のように語った。

KR2: わたし何年そんなに長い間一生懸命勉強するつもりで勉強したときより、いまたった1年間の、日本の、その生活しながらやったほうが、もっと自分にはもう勉強になったってことで自分で気がついて、あれそうだねってあの日本語って自分の国の言葉じゃないから、やっぱりいっぱい聞いて、人から人のことを聞いて、自分がしゃべってみないと、なかなかうまくならないんだなって思ったんですよそのとき

KR2 は大学を卒業してから結婚するまで、オーストラリアと日本に語学留学をしており、語学学習中心の生活を長い間送ってきた。そしてそれは思うように達成されなかった。このような KR2 にとって、語学学習を目的としない生活の中で日本語習得が成功したことは大きなインパクトを与える出来事であったと考えられる。そしてこの転機での出来事は、KR2 は外国語(日本語)学習について深く考える契機となり、結果として新たな日本語学習の原則が構築されることになったのだと思われる。

## (2) KR2 の原則 2 「日本に長く住んだ年数だけ日本語も上達しなければならない」

KR2 はこれからの自身の日本語能力について、次のように語っている。

KR2: 最近、不安なんです。なぜならば、また1年2年3年、5年の前、のときには、わたしまだ5年もなっていないから、このぐらいでいいじゃないかなって自分が自分に一大丈夫だ大丈夫だって言い聞かしながら、ちょっとあれしたんですけども、もう9年になってもうすぐ10年だから、この10年ぐらいの日本語がうまくなるといけないんでいないの？っていうことが自分の中にはあるんですよ

上の語りからわかるように KR2 は、滞在年数が長くなるにつれてそれに見合った日本語能力が必要で、現在の KR2 の日本語能力はそこからみると不足していると感じている。さらに、こうした日本語能力の不足による問題について、より具体的なエピソードを挙げている。

KR2: 教会で、先生の説教とか専門的な言葉に入ったら、ちょっとえ？って

R: あれは特別な日本語ですもんね

KR2: そうですねー、それ、だから、テレビでもニュースを見るときも、ちゃんとわかってるつもりでいるんですけども、裁判の、そのこととかなんか専門的なことが出た場合はわかんないんですよ、そうしたらば、自分がまだ10年まだっていかもう10年になるだけけれども、そんなことまだわかんないんだなーってことで、ちょっと悲しい

このほかにも KR2 は「友だちに深い感情を伝えることができない」という問題も挙げ、自分の日本語能力が不足していることを否定的に評価している。長い間、言語学習を課題とした人生を送ってきた KR2 にとって、語学能力の向上はいまなお日本語習得の大前提になっているものと推測される。

### (3) KR2 の原則 3 「自由で気楽な人間関係が望ましい」

日本語習得について言及したわけではないが、KR2 は友人とのコミュニケーションについて、「自分と会う人は、自分と会うときは、ほんとに楽に、リラックスで会ってほしい」「自由にしてほしい」「気楽につき合いたい」といった表現を何度も使用している。

KR2: やっぱりー、自分の中では 楽に？ほんとに気楽にしたいんですね。それをー、あのまー、例えば韓国の (中略) このお姉さんが私に一生懸命やってくれるけれどもー、私がもう必ずこのお姉さんが私を呼んでるときにー、行かなくちゃいけないってあれはー、あんまり好きじゃないんですよ。それにー、特にまた、私なりの、用事があるときには、これとこれを比べてー、まーこっちのほうが優先だと思えば、あのねー、申し訳ないけどー、こういうわけで私ちょっといけませんから、私こっちに行きますから今度、また会いましょうねっていう話 気楽に、話ができる人

R: はいはい

KR2: それを聞いて、あの理解してくれる人っていうか、そういう関係が好きなんです

上の語りで KR2 は、相手に誘われても断りたいときには気楽に断ることができる関係を望ましいと思っていることを伝えている。加えて、それが年上の韓国人(お姉さん)に対してはできないことを述べており、韓国人との人間関係をやや否定的に評価している。KR2 が

幼少期から「性格が日本的だっていうことを、もう韓国らかもう皆さんからしょっちゅう言われた」経験があることから、KR2 が「韓国人」に対して距離を取ろうとしていることがうかがえる。実際、KR2 は「いまいちばん仲良くしてる人が韓国人じゃなくて日本の方かもしれない」とも話しており、日本人との接触場面が KR2 が望ましいと考える人間関係が実現される場面になっていると考えられる。

また、この原則に関連して KR2 からは「親しい年上女性の日本人を「おねえさん」と呼ぶ」という戦略も提示された。第4章でも分析されたが、KR2 はインタビューで、日本人の年上女性に対して韓国語の呼称表現を転用した「おねえさん」という呼称を使用していることを述べている。

*KR2: 誰にでもおねえさんおねえさんっては言わないんですよわたしは。(中略) 自分で、そのあの 仲良くなって、おかあさんみたいな、おねえさんみたいな、そういうふうに心が動いてる？そういう友だちに限って、であの一相手に、あたしおねえさんって呼びたいけどーいいですか？ってちょっときいてから、それで呼んでるんですよ。(中略) 韓国の人たちは自分よりひとつより年上だったらおねえさんと呼んであげないといけないんですよ。だからそれもわたしはちょっとそれがあの違うんですね、なぜ: 必ずおねえさんと呼ばなくちゃいけないのかなっていうふうに思うんですよ  
(既出)*

この KR2 の呼称表現は、韓国語の規範でも日本語の規範でもなく、KR2 個人の規範で親しさを表示する戦略として管理している。単に年上だからといって「おねえさん」と呼ぶのではなく、「心が動いている友だち」に対して親しみを表示するために使用する「おねえさん」は、「自由で気楽な態度」を望ましいとする KR2 の人間関係の原則に基づいた戦略として位置づけることができるのではないだろうか。

#### 5.3.4 KR3 の原則の語り

KR3 の転機は、来日後のアルバイト経験であった。KR3 の語りからは2つの原則が提示されたが、いずれも転機にもとづいて形成されたと思われる。

##### (1) KR3 の原則1 「日本語習得のためには接触場面に参加しなければならない」

前述のとおり KR3 は転機をとおしてこの原則を形成したと考えられるが、さらにそれは「接触場面でまず日本語を使ってみる」段階、そして「接触場面で日本語を本格的に実践する」段階という 2 つの段階を経て実現されていた。KR3 は来日後 2 ヶ月で最初のアルバイトを始め、そこでは「仕事では基本的に言葉は使わず、「おはようございます」「お先に失礼します」などの挨拶程度だった」と話している。

*KR3: まず最初はそこで勇気をもらった っていうか、なんかこうしゃべる、なんだろう、なんか そういうのに慣れてきたんで、そこで、その後もう、日本に来て 5 ヶ月でホールのバイトを始めたんです*

上の語りからわかるように、KR3 はまず最初のアルバイトを通して日本語を話すことの「勇気をもらった」、「慣れてきた」と話しており、日本語能力を向上させるというよりも、まずは接触場面に参加して日本語を話すことに重きを置いていた。そしてそれが達成されたことで次の段階に進み、飲食店のホールのアルバイトを始めている。ホールでのアルバイトについては次のように語っている。

*KR3: すごい話しかけてくるし、話さなきゃだめな仕事じゃないですか、メニュー聞いたりとか。だから、けっこうつまずいたりとかしつともやっぱり、そういう状況で 話すようになると勉強になったかな という*

ここでホールでのアルバイトで KR3 は「話すことが勉強になった」と振り返っており、接触場面において日本語を使用することが日本語習得につながったことが示されている。

## (2) KR3 の原則 2 「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」

この原則の語りは、まず転機となったアルバイトでの日本語使用の経験の語りから読み取れる。

*R: 個人的になんか話しかけてくる人とかもいました？*

*KR3: そうそう、それそうなんですよね、「日本に来て何年？」とか、なんかそういう、よく声をかけてきたりとか。「おねえさんはいくつ？」とかっていうおっさんもいま*

すし。こういうの流せばいいのか、「日本語よくわかりません」みたいな。そこで使  
うんだっていう。「その日本語わからないです」みたいな。わかってるんだけど(笑)

R: 「ちょっと聞こえなかった」って

KR3: 「すみません、わかりません」って言い訳しつつ。流す方法、ああなるほどなって

この語りから、KR3は、日本人の日本語をそのまま話そうとするのではなく、「日本語よくわかりません」のような外国人として日本人と話すときのストラテジーを使用しようとしていることがわかる。つまり、KR3にとって「日本語を話すこと」とは、「日本語母語話者の日本語を話すこと」ではなく、「その場で日本人と適切にやりとりをすること」を意味し、それを習得することが目指されてきたのではないかと推察される。

また、現在の日本語については、次のように語っている。

KR3: なまってるように聞こえるんだろうなぐらいは気になりますけど、それ以外は。(中  
略) 前よく「出身東北です」って、「どこ出身」って、ちょっと「ちょっと北かな」、  
「でしょう」って言われて、「そうなんですよ、ばれました？ちょっとなまります  
よね」って言ってこう流します

上の語りをみると、KR3が日本語のアクセントが「なまってる」ことが気になっていると話している。しかし、それを修正しようとする意識はなく、むしろ、「出身はどこか」と聞かれて「ちょっと北です」とわざと答え、相手が「でしょう」と信じてしまうという冗談のやりとりを楽しんでいるというエピソードを語っている。このことからKR3が「日本語母語話者の日本語を話す」のではなく、「その場でのやりとりをするための適切な日本語」を志向していることがうかがえる。そして、そのためには外来性をリソースとして活用していることも示されている。

ただし、「日本語母語話者の日本語」を目標としていない一方で、KR3は自分の発音が外国人ではなく、日本の地方の人の言葉として受け取られることが「うれしい」とも述べている。

KR3: うれしいですね。なにげなくこう、ちよっとうまいかなみたいな

R: ちょっと私もうまくなったかなと

KR3: 思いますよね、そう言われると。ほんとに。私も「出身どこ？」って言われるときでも、実は内心、よしっ、よしっ、まだ腐ってないわたしって思います

この語りから、KR3 が自身の日本語能力の高さを意識していることがうかがえる。KR3 は「日本語母語話者の日本語」を目指しているわけではないが、「うまい日本語」を話したいと考えている。ここで対象となっている「うまい日本語」とは、日本の地方の人が話す方言なまりのある日本語のことである。つまり、KR3 は「標準的な母語話者の日本語」を話さなくてもよいが、まったく日本語能力の高さを意識しないというわけではなく、日本の方言という日本語のバリエーションの 1 つになりうる日本語を話せることが望ましいと考えているのではないだろうか。

### 5.3.5 KR4 の原則の語り

KR4 もまたアルバイトでの経験が転機につながっていた。KR4 の原則は 3 つ提示されたが、原則 1 と原則 2 はこの転機をきっかけに形成された原則である。

#### (1) KR4 の原則 1 「日本語習得のためには接触場面に参加しなければならない」

KR4 は転機について、自分の日本語習得の成功と友人の日本語習得の失敗を比較しながら語っていた。そしてその要因は選んだアルバイトにあると考えている。KR4 の友人はホテル清掃のアルバイトをして会話をする機会がなく、日本語を話すことが怖くなってしまったのに対し、自分は接客アルバイトを通して会話ができるようになったと話している。

KR4: それで友だちが、日本語を書くとか聞くとかそれすごくうまかったんですけども、しゃべりがあまりそんなに、それでちょっと苦勞した。私はそれでちょっと良かったなっていう感じ。最初からバイトが、言語を勉強するときに重要、環境とか

上の語りで「言語を勉強するときには環境が重要だ」と結論づけているように、KR4 は言語習得においては、その言語を使う環境に身を置く必要があると主張している。つまり、ここで接触場面に参加して日本語を使用することが日本語習得には重要であるという原則が形成されたことがわかる。

## (2) KR4 の原則 2 「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」

KR4 は日本語習得の転機を経験して、原則 1 の接触場面に参加する重要性のほかに、日本語使用について新たに気がついたことも語っていた。

KR4: やっぱり 間違っても、わたし、外国人だから理解してくれるし、あまりそれは恥ずかしいことではないっていうことがすごくわかるようになってって。でも友だちはそれができないと考えたらあんまりしゃべんないって感じ。それがあるとやっぱり伸びないんですよ

KR4 は、アルバイト先での接触経験から、規範的な日本語を使用しなくても問題にはならないこと、接触場面には参加できることに気づくようになった。KR4 の友人が「できない」と思って日本語を話さずに習得に失敗したこともまた、自分の日本語習得が適切だったと自信をもつきっかけとなり、KR4 のこの原則が形成されていったと推測される。

## (3) KR4 の原則 3 「日本語では上下関係をそれほど気にして話さなくてもよい」

KR4 からは、アルバイト先での転機とは別に形成された原則も提示された。それは、日本語では年上に「タメ語」を使ってもよいというものである。

KR4: 日本語を使うときはタメ語を使ってもいいって感じ、私にあります

R: そっか、日本語で話すんだもんね

KR4: 韓国で話すときは、絶対的に尊敬語を使わなければならない。でも日本語はタメ語を使ってもいいかもっていう、親しくなったらみんな、タメ語使うじゃないですか、先生にも

この語りから、KR4 が周囲の日本人の日本語使用を観察し、日本語では目上であっても尊敬語を使う必要がなく、タメ語を使ってもよいという原則を形成してきたことが推測される。ここで KR4 は韓国語の敬語使用を取り出しており、「絶対的に～使わなければならない」という表現から、韓国での厳しい上下関係や敬語使用のルールに堅苦しさを感、否定的に評価していることがうかがえる。そして、日本語の場合には韓国語よりも上下関係のルールが厳しくないことに気がついた KR4 が、韓国語の規範を緩めたかたちで日本語に

適用されていると考えられる。

### 5.3.6 KR5の原則の語り

KR5からは日本語の原則に関する語りは提示されなかった。先にも述べたとおり、KR5は大学入学してから現在までの日本生活および日本語使用に対して否定的な評価をしており、それに対する原則を言語化して語ることはできなかったのではないと思われる。

KR5の日本語使用に関する語りをみると、大学入学前の東京でのアルバイト先における接触経験と大学入学後の接触経験とが対比して語られている。つまり、アルバイト先での経験や日本語使用は肯定的に評価されており、大学入学後は否定的に評価されていた。

KR5は東京の居酒屋でアルバイトをしていたが、その時に客に「発音が山形とかすごい北とかすごい南側の日本人みたいだ」と言われたという。「日本人みたいだ」と認められたことで、KR5は当時の日本語に自信があったという。また、当時はアルバイト仲間に対して、呼び捨てにしたり、はっきりとした言い方をしていたところ、「はっきり言うKR5ちゃん」というニックネームをつけられ、KR5の個性として認められていたことを話している。さらに、変なことを言ったり、日本語を間違っても冗談として受け取られ、笑われていたという。KR5はそれを「楽しかった」と振り返っている。つまり、アルバイト先ではKR5の外来性は周囲によって認められ、場合によっては冗談のリソースとなっていたのである。

ところが、大学入学後、そうした環境は一変し、KR5の外来性は承認されなくなってしまった。KR5は入学直後に所属学部の飲み会に参加したことについて、次のように語っている。

*KR5: たぶん、みんな思ってるのは留学生って興味ないです。(中略) 頑張ってる話したんですけど、留学生ってことがばれるじゃないですか。あいづちとか反応が違うから。すると、あーみたいな感じに変わって見えるんですよ。距離を置くってのが*

この語りから、アルバイト先では承認されてきたKR5の日本語使用や外来性が大学では認められなかったことがわかる。こうした経験を通して、KR5は大学で友人を作ることを放棄したという。この時期の日本語使用に関しては、「留学生であることをなるべく出さないようにする」、「「マジで」のような男の子が使う俗語は使わない」、「相手呼び捨てにしない」など、周囲の否定的な評価にもとづいており、アルバイト先で認められてきた日本

語使用を修正するものであった。

しかし、大学 2 年生になって所属学部の中で専門分野を選択するようになると、KR5 の環境が変化する。同じ専門分野を選んだ学生たちは共通した専門授業やゼミに参加するため、学生同士の接触も頻繁になる。こうした変化をきっかけに、KR5 も同じ専門を選択した友人と出会うこととなった。そのうちの 1 人は「私が私であり得る、何でも話せる」人で、現在まで親しい関係を築いている。この友人に対しては、東京のアルバイト先で使っていたような日本語の規範を緩めた日本語使用をするというストラテジーが多く報告された。具体的には、「あいづちを打たない」、「謝罪を「ごめんね」のように簡単に済ませる」、「言いたいことを一気に話す」、「話題を急に変更する」、「上品な姿勢をとらない」、「わからない日本語を質問する」などが挙げられた。

こうした経緯を見ると、KR5 の日本語使用の原則は、もともとは「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」というタイプのものであったと推測される。しかし、それが承認されない環境に置かれるようになり、この原則は適用できなくなった。ところが最近になって親しい友人に対しては同じタイプの日本語使用が実現されている様子を見ると、現在も KR5 はこの原則にもとづいた日本語使用を望ましいと思っていることがわかる。現在は特定の友人に限定されているが、こうした言語使用が積み重なることによって、今後、KR5 の原則は再び原則として適用されたり、一部変更されて適用されたりすることもあるだろう。

### 5.3.7 KR6 の原則の語り

KR6 の語りからも現在の日本語使用に関わる原則は提示されなかった。これも KR6 が現在の日本語使用を否定的に評価していたことが関係していると思われる。

KR6 は来日して日本の大学に進学し、そこで大学の友人とのネットワークを形成し、日本語の転機も迎えた。現在は大学院修士課程に進み、新しい環境での言語生活が始まり 3 ヶ月ほど経ったころであった。

*KR6: 最近、大学院の同じ韓国人の男の人に、普段私が日本人の友だちとしゃべっているときの、同じ学校の、しゃべり方をまねして、「なんすか」みたいに言ってるよって、「けっこう男の言葉使ってるね」みたいに言われて。「そうなんだ」って。*

*R: わたし、そんなに使ってたんだって*

KR6: わたし どうしよう、これ直さなきゃいけないけど、なんかもう、どうしよう っていう、最近けっこう

上の語り以外にもこの韓国人の男性は KR6 の日本語の発音の間違いについても指摘している。これらから、KR6 は転機をとおして習得した日本語が大学院に所属する韓国人男性によって否定的に評価されたことがわかる。これは、KR6 が転機をとおして成功した日本語習得が否定されたことを意味しており、KR6 が戸惑っている様子うかがえる。

これをうけて KR6 は「発音を気をつけて話す」こと、またこれまでは本当に褒めたいと思ったときにした相手を褒めることがなかったが、周囲がやっているように「わざと褒める」ことも意識するようになったという。そして、KR6 は自分の日本語について「学部の友だちとはまた別の感覚が必要」だとも語っており、新たな原則を構築していこうとしている様子うかがえる。今後、KR6 の大学院生活が進むにつれて、日本語使用の原則も大学の学部のころとは違ったものになる可能性が高い。

### 5.3.8 KR7 の原則の語り

KR7 は韓国にいながら日本人との接触経験をもつ機会が多く、日本語習得の転機を経験した。KR7 の日本語使用の原則は 3 つ提示されたが、いずれも日本語習得の転機を通して形成されたものではなかった。

#### (1) KR7 の原則 1 「日本語は完璧になるまで勉強し続けなければならない」

KR7 の語りからは「新しい言葉は表現にぶつかるようにする」、「間違ふことは 1 つずつ覚えていくこと、それでだんだん道が開ける」などの日本語習得のための戦略が多く見られ、KR7 の高い習得意識がうかがえる。日本の大学に入学したときにも「1、2 年まではレポートの文法の添削は頼みましたし、3 年でも発表、プレゼンのときにはイントネーションとか文法とか気になってそのときにも友だちにちょっと見てもらったりもしました」と、必ず母語話者のチェックを受けていたことを話している。そしてその時のことについて以下のように語っている。

KR7: まだまだ知らない世界っていうか日本語の勉強はまだまだ終わってないと思ってちょっと低姿勢でいってきましたね、もっと謙虚に

KR7 のこうした高い目標設定は、KR7 の姉の存在が影響していると推測される。KR7 の 4 歳年上の姉は、KR7 が日本語学習を始める前から日本語を学んでおり、ほかにも英語と中国語が話せるという。KR7 が韓国にいる間に中国に留学をしたこともあるといい、常に KR7 の先をいく存在であった。KR7 は姉について「言語才能があって 4 カ国語話せる」と話しており、その語学能力を高く評価している。このように、身近に言語習得の成功者がいることも KR7 の高い日本語能力獲得の目標に向かわせている要因になっている可能性もあるだろう。

## (2) KR7 の原則 2 「日本の規範を理解して受け入れる」

KR7 は中学生のころから日本語学習を始め、豊富な日本人との接触経験やメディアを通してさまざまな日本人独特のコミュニケーションのスタイルや日本の文化に触れてきた。その中には、日本人の本音の建前のあるコミュニケーションや自分の感情を直接表現しないなど他の KR には否定的にとらえられることの多い特徴についても KR7 は否定的に評価していない。

KR7: (日本人の) 何があってもあんまり (感情を) 表に出さないところとかも、それが苦手な人もいるだろうけど、私は見習いたいところであるしいいなと思いましたね、ある意味では

R: そんなにダメっていう感じではなくてこういうことがあるんだなって

KR7: そうですね。 基本的には理解しようと思ったので

また、日本語の習得において KR7 は日本人同士の会話を意識し、日本人の日本語使用のパターンを覚えるという戦略を選択しており、これも「日本の規範を理解する」という原則にもとづくものとしてとらえられる。

KR7: 日本人同士だったら 日本人としてのマインドでの話し言葉 とかも聞けて、こういうときにはこういう行動をとる、こういう言葉を言うのが通常のパターンかなとか覚えていきましたね

このような KR7 の態度は、中学生のころから日本人と親しい関係をもち、日本文化を肯定的に評価してきたことが影響していると考えられる。KR7 は初めて日本人が訪ねてきたときに持ってきたお土産が韓国のもものよりも「工夫されている感じ」があり、刺激になったとその印象を語っている。また、その後韓国に日本人が遊びに来た際、公園を歩いているときに、日本人が自分が使ったティッシュを道に捨てずに自分のバッグに入れた様子を見て、「すごく感心しました」「日本人のそういう一面を見られる刺激になりました」と、ここでも「刺激」という表現を使って肯定的に評価している。こうした評価の蓄積が、日本語や日本文化に対する態度に影響し、否定的に捉えるよりも理解して受け入れるという原則が形成されているのではないかと思われる。

また、このような「本音と建前」などの日本語の特徴を覚えておくことを KR7 は「言葉を覚える上でそういう概念を置いといて覚えたら覚えやすいかなってこともありましたし」とも語っている。これは原則 1 の「日本語は完璧になるまで勉強し続けなければならない」とも関連し、「完璧な日本語」を習得するためには「本音や建前」といった否定的な日本語の要素も含めて習得する必要があると考えていることがわかる。

### (3) KR7 の原則 3 「外国では自分で積極的に取り組まなければならない」

KR7 は日本に来てから、学内外でさまざまなネットワークに積極的に参加している。KR7 はネットワークを限定することが日本語の上達を制限してしまうことに言及し、外国では活動的になることを重視している。

*KR7: 大学に入ったとたんそこで入ったって思ったり、あとは自分の母国の友だち同士で  
つるんでしまったら上達に限られてよくない。せっかくだから もっと活動的にした  
ほうがいい*

また、KR7 のこうした態度は KR7 が留学した経緯も関わっている。もともと KR7 は韓国では美術の専門学校に通い、デザイナーを目指していた。韓国の美術大学にも合格していたが、それを諦め、日本語を専門に学ぶために日本に留学している。KR7 の語りからは、こうした進路変更が KR7 の日本での行動のスタンスに影響を与えていることが示されていた。

KR7: 韓国のときは美術やってたんで、やっぱりまー、明るい性格ではあったんですけど、ずっと座って絵描いてました。だから自然に外に出るっていうよりもインドアっていうか室内で静かにいるほうでしたね。

R: いま留学してきた

KR7: やっぱり 外国にいたら環境も変わるし言葉も変わってるわけですから、どうしても自分で積極的に取り組まないと進まない んですよ

このように、KR7 はもともとの目標を諦め、日本語の道に進んできており、現在の留学生生活を充実させ、日本語習得を成功させることが、自分の進路選択を肯定的に評価するためには必須なのではないかと考えられる。こうした背景もまた、KR7 の高い日本語習得の目標へと意識を向かわせている一因となっているのだろう。

### 5.3.9 KR8 の原則の語り

KR8 は日本に留学してから、周囲に日本語能力を否定的に評価され、自信を喪失した。しかし、そこから自身の日本語使用への態度を変化させ、自身の日本語を肯定的にとらえるようになったという転機を経験した。KR8 の語りから提示された原則は、まさにこの転機にもとづいたものである。

#### (1) KR8 の原則「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」

前述のとおり、転機の前 KR8 は、大学の研究室のメンバーに「日本語の発音やアクセント」が正しくないことを指摘され、「日本語恐怖症になった」といい、自分の日本語を否定的に評価していた。しかし、あるときそれは大きく変化し、転機を迎えることとなった。

KR8: 日本に住んでるのに日本語が嫌いとかっていうことだったんですけど、それまではけっこう日本語好きだったのって思って。なんですけど、ある日突然、いいんじゃない、わたし外国人だからっていう開き直り

R: 開き直りが

KR8: 別にいいじゃない、結局日本人にはなれないから間違ってたってっていう開き直りの技を覚えたらちょっと気が楽になったかな

これをきっかけに KR8 は自分の日本語を否定的に評価した研究室も「もうこれは私とは合わないと思って。アクセントぐらい間違ってもいいんじゃないと思って」辞めることを決意し、別の大学院に進学した。

また、インタビューでは年賀状送付の話題も提示されたが、そこでもこの原則にもとづいたストラテジーが語られていた。KR8 は友人や先生、韓国語を教えている学生などに毎年 100 通近くの年賀状を送っているという。しかし、その送り方は日本の規範にしたがったものではなかった。実際、本インタビューは 1 月末に実施されたが、その時点で KR8 はまだその年の年賀状を送っていなかった。

*KR8: 結局年賀状が書けてないまま韓国に行っちゃって戻ってきて書こうと思ったらまた戻ってきたで忙しくて送れてないんですね。調べたら寒中見舞い 2 月 4 日までは大丈夫っていうから今日書くんです*

*R: まだいける*

*KR8: まだ大丈夫だと思う*

*R: 大丈夫です*

*KR8: それに韓国式でいうとまだまだ旧年なので*

*R: そうですね、これからです*

*KR8: これからなので今年はまだ、これも開き直り。もう知らない。*

このように、KR8 は年賀状を出すにあたって、その時期を日本の規範どおりにしようとはせず、自分の判断で送る時期を決めていることがわかる。そして「これも開き直り」と言っているように、転機において形成された原則がここでも適用されていたと推測できる。このように KR8 は転機以降、この原則にもとづいて日本語使用を管理し、個人的な日本語使用のストラテジーを使用していると考えることができる。

### 5.3.10 KR9 の原則の語り

KR9 は日本語習得・使用の転機は見られなかったが、子どもが通う幼稚園での母親同士との接触をきっかけに、日本人とのコミュニケーションに関わる日本語使用の転機があった。KR9 の原則は 2 つ確認されたが、そのうち原則 2 がこの転機によって形成されたもの

である。

### (1) KR9 の原則 1 「日本語を極めるために勉強を続ける」

KR9 は日本の大学に入学するときの動機として「日本語を極めたかった」ことを述べており、それは現在も変わっていないという。

R: 日本語を極めたいっておっしゃって、それはいまでも変わらないですか

KR9: 勉強しなきゃいけないんです。もちろん、そういう気持ちはあります。運転免許終わったら 次は漢字検定を受けてみよう とか、そういう気持ちにはなってます

また、自身の日本語については、「なるべく日本人のようにしゃべりたい」と話しており、普段からイントネーションや敬語など気をつけていると言う。

KR9 がこのような高い目標をもつ背景には、KR9 が現在通訳の仕事をしていることが大きく影響していると考えられる。KR9 自身も「プロとしてみんな見てくれるので、ちゃんとした日本語をしゃべらないとっていう意識はあります」と語っている。

また、転機となった子どもの幼稚園の母親とのコミュニケーションにおいても他の母親同士の会話についていけないときがあると話している。「たまに主語が抜けたりすると言っている意味がわかんなかったりする場合があります」という語りからも、日本語の問題が生じていることがわかる。これに対して、周囲の日本人は「たいてい私が知っていると思って全部話すんですけど」、「外国人だからそんなぜんぜん気遣わないで、方言だろうが何だろうがもうしゃべってます」と報告しているように、KR9 の問題には気づかず、調整もされていない。このような問題も KR9 が日本語の勉強を続けようとする要因の一つになっていると考えられる。

### (2) KR9 の原則 2 「日本人には自分からアプローチする」

KR9 の転機ですでに指摘したとおり、KR9 は転機によって「日本人はシャイだ」という認識を持つようになった。それまでは日本人が何も話さないことについて「何を考えているかわからない」と思っていたが、何も話さない理由が「シャイだ」ということを理解するようになり、自分から日本人にアプローチすることによって、接触場面への参加を実現し、日本人との人間関係を構築していく原則が形成されたと考えられる。

KR9: 積極的にやっぱ声かけて仲良くなってるんです。

R: 仲良く。それはなんで積極的に

KR9: 日本人はシャイなので。(既出)

さらに KR9 は、「日本人は自分のことあんま言わないんで、私から積極的に言う部分がある」とも話しており、コミュニケーションを開始するところだけでなく、自己開示についてもまずは自分から始めるという態度を示していた。

### 5.3.11 KR10 の原則の語り

KR10 は大学入学後に日本人の友人との接触をとおして日本語習得の転機を経験した。KR10 の場合、日本語使用に対する原則の語りは、転機によって形成されたものではなく、来日前から一貫した態度が示されていた。

#### (1) KR10 の原則「母語話者と同じ日本語を習得する」

KR10 は来日してから現在まで一貫して日本語習得に対して高い目標を持っている。

KR10: 日本人にならないと日本語もあんまりうまくならないし、生活も外国人で見られるのが好きじゃなかったですよ。日本人に扱われたいとかそういう気持ちがあったんで。

この語りから、KR10 が日本生活において外国人として見られることを否定的に評価していることがわかる。よって、高い日本語能力を目標として掲げているのは、自分を外国人として見せないために、外来性を取り除こうとしているためであると考えることができる。なぜ KR10 が日本人として扱われることを望んでいるかについては、KR10 の留学の目的が関連していると思われる。

KR10: 留学した目的を考えてやっぱりチャレンジして外国で技術を学んで国に帰ろうっていう目的があったんですよ。それを実践するためには 日本企業に入って日本人みたいに働いて、化学企業はけっこう日本が技術力を持っているんですよ。それ

でちょっと働いて帰ろうかなという気持ちですね。

この語りから KR10 の留学の目的は、韓国にはない高い技術力を日本で身につけて帰国し、韓国で活躍するためであるということがわかる。高い技術力を身につけるためには日本企業で日本人と同等に働くことが必要だと考えており、KR10 にとって日本語習得は、その目標を達成するために必要な能力であると位置づけられていると考えられる。つまり、日本人と同等に働くためには日本人と同じ日本語を習得する必要があり、そのためには自身の外来性を除去していかなければならないのである。

このことから、KR10 の転機は、KR10 の大きな目標を達成するための最初のステップであったと考えられる。

### 5.3.12 KR11 の原則の語り

KR11 には日本語習得の転機は認められなかった。KR11 からは 1 つの原則が提示されたが、これは、現在 KR11 が抱えている日本語の課題にもとづいたものであった。

#### (1) KR11 の原則「きれいな日本語で論理的に話したい」

KR11 は韓国で長年、働きながら日本語を学習した後で留学のために来日し、修士課程で研究を行っている。KR11 の日本語の課題はおもにアカデミック場面の日本語を指しており、「学術な用語を使って、難しい漢字を使って、それで論理的に話すのは難しい」と話している。

*KR11: 私の場合、本当に きれいな日本語 を使いたっていうことですよ。論理的に、やさしく、そんな感じですよ*

KR11 は自身の日本語使用について上記のように語っているが、それは日本語母語話者のレベルを目指したものではないという。

*KR11: 日本人ぽっていうより、(中略) 日本人にちゃんと伝えられるように言いたいんですけど、それが 日本人になりたいっていう感じ ではないことじゃなくて、話ちゃんとできるようにっていう感じで、レベルって言うかそれを気をつけるんですよ*

このように、KR11 の場合は、現在抱えている日本語の問題から、「日本語を論理的に伝えること」に焦点が当てられており、それが母語話者のレベルを目指すのかどうか、今後とも日本語学習を続けるのかといった点には目が向けられていない。

### 5.3.13 KR12 の原則の語り

KR12 は来日後、アルバイト先での接触経験から転機を迎えた。しかし、KR12 に提示された原則は、転機によって形成されたものではなかった。

#### (1) KR12 の原則「日本語の規範を習得する」

KR12 は現在の日本語について、「自分をもっと勉強したほうが良いかな。やっぱり漢字とか、手紙が来ても読めないとかそれがあるから」、「コミュニケーションは早口だと分かりづらい。電話だと難しい」、「文法が一番難しい」といった課題を挙げており、まだ自分が習得途中であることを自覚している。KR12 から直接言語化された日本語使用の原則は語られなかったが、現在の日本語使用のストラテジーについては、大学の日本語の授業で習ったことにもとづいたストラテジーが中心に報告された。

*KR12: (筆者注: あいづちについて) 大学で勉強して、「共感、日本人はこれで表すよ」って。そうなんだ、じゃあやったほうがいいねって。意外と単純なんです。*

大学の日本語の授業では、あいづちのほか、謝り方、誘い方なども習ったと言い、これらはアルバイト先で実践されていた。これらの語りから、現在の KR12 は日本語の授業で習ったことをよいものとして受け入れていることがわかる。つまり、KR12 の現在の日本語使用は、授業で学んだような日本語の規範にしたがって実践されている段階であると推察される。

以上、KR の日本語の使用・学習の原則について分析してきた。抽出された KR の原則のうち、「日本語習得のためには接触場面に参加しなければならない」という原則は日本語習得の転機後に形成されたもので、転機の経験をもつ KR が共通してもっていた。一方、日本語をどこまで上達させるかについては、「母語話者のレベルまで勉強を続ける」という KR

がいる一方、「日本人と同じ日本語を話さなくても良い」と考える KR もいた。さらに、KR によっては日本人とのコミュニケーションに関わる原則も提示された。

これらの原則は、転機によって形成されたものもあるが、それ以外の要因で形成されたものもあった。それには、KR が来日前から繰り返してきた言語使用・学習の経験の蓄積によって形成された原則、日本滞在または留学に対する強い目的意識と関係づけられた原則、さらに現在抱えている日本語の問題と関連付けられる原則などが含まれる。とくに、現在の日本語問題について語る KR は多く、それは KR が将来に向けて目指している日本語習得と関係づけられていた。次節からはこうした KR が抱える日本語の課題と日本語使用・学習の原則との関係について分析を進める。

## 5.4 アイデンティティ獲得のための投資と原則

### 5.4.1 投資としての日本語使用・学習の管理

前節で示したように、KR の通時的な日本語使用・学習に関する語りはおもに KR の日本語習得の成功物語として語られたが、同時に多くの KR は継続して日本語を学習する必要性を述べていた。とくに現在の自身の日本語の課題を指摘し、日本語能力が不足しているためにさらなる日本語学習が必要だと考えている KR が多く見られた。こうした課題は、単に日本語能力が低いということではなく、「自分がこれから〇〇になるために必要な日本語能力だが、今の自分は持っていない」という文脈で語られており、KR が日本社会においてこれからどのようなアイデンティティを獲得したいか、そのために必要な日本語能力は何かということに焦点が当てられていた。つまり、現在の KR が行っている日本語の管理の一部は、KR がこうなりたいと思うアイデンティティの獲得のための投資として理解することができる(Norton, 2000)。

本研究の KR12 名のうち、アイデンティティ獲得のために継続して投資をおこなっていたのは 9 名であった。残りの 3 名は、現在はとくに日本語への投資はおこなっていなかった。

投資継続: KR1、KR2、KR4、KR6、KR7、KR9、KR10、KR11、KR12

投資なし: KR3、KR5、KR8

投資をしていない 3 名からは現在の日本生活において獲得したい想像のアイデンティティが確認されなかった。このうち KR3 と KR8 は、現在の日本生活におおむね満足しており、

望ましいアイデンティティが実現されている状況であった。そのため、新たなアイデンティティを獲得しようとする段階にはいなかったのではないと思われる。KR5 は大学に入学してからネットワークを思うように築くことができずにいる。現在の日本語使用にも否定的で、日本語習得を回避していることから、獲得したいアイデンティティも構築しておらず、投資としての語りはあられなかったものと見られる。

本研究では、日本語習得への投資を継続している KR9 名に注目して分析をおこなう。まず、KR が獲得しようとしている想像のアイデンティティの特徴をまとめる。そして、それぞれの KR がもつ想像のアイデンティティ獲得のための投資が日本語の使用・学習の原則とどのような関わりをもっているか検証していく。

#### 5.4.2 韓国人居住者の想像のアイデンティティの概要

KR が現在の課題として挙げた日本語能力は、具体的な社会的場面との関連が強いものであった。このことから、KR の想像のアイデンティティは「日本社会とどう関わりあうのか」という、より社会的な役割を意識したもので、日本社会において自分が活躍できそうな領域において、自分が望ましいと思う役割やアイデンティティの形成をもって投資をおこなっているものとみられる。このような想像のアイデンティティはおもに以下のような特徴を持っていた。

##### (1) 専門家としてのアイデンティティ

KR の中には、もともと日本語の専門ではなく、韓国にいる時から日本語とは別の専門分野をもっている人がいる。KR1 は、韓国の大学でデザインを専門とし、実際にデザインを請け負った経験もあった。KR7 もまた韓国在住時は美術専門の高校に通い、来日せずに美術大学に進むことも考えていた。また、KR には教会に通っている人も多く、中には教会コミュニティの中心的なメンバーとしての役割を持っている KR もいた。KR2 は通っている教会の中心メンバーとして運営に携わっている。KR4 もまた教会の中心的なメンバーで、教会の中にいくつか班があるうちの通訳班に所属している。さらに KR9 は、子育てをするかたわら、通訳・翻訳の仕事も再開させている。

このように、KR が日本語以外の専門を身につけていた場合、来日して日本語習得の転機を迎えたあとは、こうした専門性を実現するアイデンティティが望まれるようになることがわかる。

## (2) 人生のステージを進めるためのアイデンティティ

KR は日本に長期滞在するうちに、進学や就職、結婚といった人生のステージを進めることになる。人生のステージが上がると、KR の社会的ネットワークも大きく変化するため、新たなアイデンティティが形成されることが予想される。たとえば KR6 の場合、日本の大学を卒業した後は、別の大学の大学院に進学し、新たな人生のステージを迎えることになった。また、KR1 は留学生として来日したが、現在は大学院の博士課程を修了し、これから研究者として新たな人生のステージを迎えることになる。KR10 もまた大学院の修士課程を修了し、日本企業への就職を控えている。

このように、日本への長期滞在によって KR の人生のステージが変わると、これまでの社会的ネットワークも使用される日本語も変化すると予想される。そして、KR は新しいステージにおいて期待される役割にふさわしい日本語を使用することが求められるようになり、そこで適切な日本語使用をすることが KR の人生のステージを進めるためのアイデンティティの獲得につながっていくと考えられる。

## (3) 日本社会の正式なメンバーとしてのアイデンティティ

(1)、(2)のように特定の新しいアイデンティティを形成するものではないが、日本に住む 1 人の市民として、日本社会の情勢や出来事などを理解したり、個人的な人付き合いをしたりすることで、より深く日本社会に入り込もうとするケースもある。たとえば KR2 は、日本の社会状況を理解したり、日本人との人間関係を深めたいという意識が強く、日本の住民の 1 人として日本社会に定着しようとしている姿勢がうかがえる。

### 5.4.3 韓国人居住者による投資と原則

#### 5.4.3.1 KR1 の投資と原則

##### (1) 研究者としてのアイデンティティ

KR1 の想像のアイデンティティは語りから 2 つ抽出されたが、その 1 つは研究者としてのアイデンティティである。KR1 は現在大学院博士課程に在籍しており、まもなく修了する予定である。KR1 はこのまま日本にとどまって研究を続けることを希望しており、そのためには KR1 の研究資料となる古文書を読む必要があると感じている。

KR1: すごくさらに思ったのが古文書とか読みたいと。(中略) 一番は国立歴博ですね。あそこの先生に見せて読んでもらったりするんですね。(中略) それか同じ古文書が有名なものであれば必ず現代文として訳された本があるので。これ図書館で調べてちょっと読んでみたりとか。これはこの能力は自分で解決したいので、もし私が家印一本の道で行くのであれば、やらなければならないことかなと今ちょっと実感しています。

上の語りからわかるように、KR1 は研究に必要な古文書などを読むときに、これまでは専門の先生に解説してもらったり、現代語訳を利用したりしていたが、今後は自分で読まなければいけないと感じている。大学院生から本格的な研究者として研究を続けていくにあたり、古文書など日本語の古語を読む能力が必要だと KR1 は考えているのである。

さらに、KR1 は今後の日本語学習について以下のように語っている。

KR1: けっこう本屋さんで見ると読む方法とか崩し字ですか、あれを読む辞書とか色々あることも見たので、あと購入してやってみたいなど思っています

この語りから、KR1 はすでに書店に赴き、勉強できる書籍などがあるかを探し、古文書を理解するために、まず崩し字を読むための辞書を見つけたことがわかる。そしてこれを購入することで、「古文書を読む」という課題達成に近づこうとしている。

これは、KR1 が研究者としてのアイデンティティを獲得するための投資の1つであるが、同時に日本語学習のストラテジーにもなっている。さらにこの投資は、KR1 の原則1「日本語は母語話者のレベルまで上達しなければならない」と関連付けられる。この原則は KR1 が来日してから一貫して持ち続けているものであるが、現在の KR1 の管理においては、想像のアイデンティティを獲得するための投資としての意味をもっているのではないかと考えられる。

## (2) デザインの専門家としてのアイデンティティ

前述のとおり、KR1 は韓国の大学でビジュアルデザインを専攻しており、来日後にもデザインの仕事を引き受けることがある。この専門であるデザインの仕事について、KR は次のように話している。

KR1: 仕事はやはり N 市では数年かけてデザインができるということは周りの人が知るようになったのでいろいろ頼まれたんですけど、C 市に来てからはまた 私の実力はわからないじゃないですか。(中略) ちょっと広がって、その中で例えばある財団から東京の仕事もきたりとかするようになったんですけど

この語りから、KR1 が自分のデザインに自信を持っていることがわかる。そしてこの語りのあと、仕事場面での日本語使用について次のように語っている。

R: そういう仕事の打ち合わせするときって結構話す機会ありますか

KR1: そうですね。重要なミーティングとかあるときが。私も参加して。いまみたいに話聞いたり 私も意見出したりとかするんですけど

R: そういのでちょっと難しいなと思うことって今もありますか?

KR1: そうですね。緊張しますね。なんか、下手な日本語しゃべりたくないみたいな

上の語りからわかるように、KR1 はデザインの実力には自信を持っているが、ミーティングでの日本語使用については否定的に評価しており、問題を感じている。さらに KR1 は「論文が終わったらまた会話の勉強とか真面目にやってみようと思います」と話しており、自身の日本語の問題が日本語学習への動機付けにつながっていることが推察される。つまり、ここで語られた KR1 の日本語学習は、デザインの専門家としてのアイデンティティを獲得するための投資であると考えることができる。そして、この投資は、KR1 の日本語使用・学習の原則 1「日本語は母語話者のレベルまで上達しなければならない」、原則 2「きれいな日本語を話す」といった態度と関連付けられ、KR1 の日本語学習・使用の管理の一部にもなっていると捉えることができる。

#### 5.4.3.2 KR2 の投資と原則

##### (1) 日本社会の正式なメンバーとしてのアイデンティティ

来日して 8 年が経過したいまも、KR2 は自身の日本語の課題を自覚していた。以下の語りでは、KR2 が具体的な日本語の問題を挙げている。

KR2: テレビでもニュースを見るときも、ちゃんとわかってるつもりですけど  
も、裁判の、そのこととかなんか専門的なことが出た場合はわかんないんですよ、  
そうしたら、自分が (中略) もう10年になるんだけれども、そんなことまだわか  
んないんだなーってことでちょっと悲しい

KR2 は現在の日本語問題の1つにニュースで使用される専門的な語彙などの知識が足り  
ないことを挙げている。これは、KR2 が日本社会の一員として日本の社会情勢を把握しよ  
うと努力していることを示している。これをKR2の現在の日本語の管理として考えると、  
KR2の「日本に長く住んだ年数だけ日本語も上達しなければならない」という原則と関連  
づけられる。

また、個人の人間関係に関しては次のような課題を語った。

KR2: 日本語が下手で悲しいなって思うときは、友だちとのなかで、友だちのその深い、  
感情のことを伝えたくって、一生懸命こう、わたしはね、(中略) あなたのこ  
好きだからいいんだよーっていうのは簡単なんですけれども、そうじゃなくて、  
そのありがたさっていうか、その自分が、こと、友だちに関してそのあの、深い  
こう、感謝の気持ち？(R: うんうん) を伝えるときに、あなたこう、感謝だよ、あ  
りがとねっていうあれがなくて、私がどのぐらいいまあなたに感謝してるかって  
いうのを伝えたいときがあるじゃないですか、それがなかなかできないときはやっ  
ぱり悲しい

これはKR2が友人に対して深い感情が伝えられないことを日本語の問題として取り上げ  
ている。KR2には、「自由で気楽な人間関係が望ましい」とする原則があり、親しい日本人  
の年上女性に限って「おねえさん」という特別な呼称を使用するストラテジーも報告され  
ていることから、日本人と望ましい人間関係を築くことを強く意識している。ここで取  
り上げられた日本語の課題もこうした人間関係の原則に関わっており、日本語学習の動機  
付けになっていると考えられる。

## (2) 宗教家としてのアイデンティティ

KR2 はもともとクリスチャンで、日本でも来日してから教会に通い、教会婦人会のメン

パーとして教会活動の中心にいる。この教会は日本系で、礼拝もすべて日本語でおこなわれる。

*KR2: 教会で一、先生の説教とか、専門的な言葉に入ったら、ちょっとえ？って*

上の発話から、KR2 は教会で礼拝での牧師の語りを理解することに困難を感じていることがわかる。日常生活で問題が生じることがなくなっても、こうした宗教活動に関わる特殊な日本語を理解し、使用することは難しいのだという。とくに KR2 の場合は、教会活動の中心的なメンバーにいることから、習得の必要性を強く感じていたと考えられる。こうした日本語学習の動機もまた、KR2 の「日本に長く住んだ年数だけ日本語も上達しなければならぬ」という原則と関わりをもっていると考えられることができるだろう。

#### 5.4.3.3 KR4 の投資と原則

##### (1) 宗教家としてのアイデンティティ

KR2 と同様に、KR4 も教会に通っており、現在は教会中心の生活を送っている。KR4 の日本語の課題もこの教会活動に関連して報告された。

*KR4: 教会の通訳の班でも 1 週間の交わり、1 週間なにをしたかとか私の気持ちとか、しゃべるんですけど、日本語でしゃべるんですね。それでけっこう、日本語でできないものが多くて。*

*R: それは難しいかも*

*KR4: 私はこう考えたんだけど、やっぱりそうにはいかない、その場面を説明したいんだけど、それがなかなかちょっと難しいなっている。それがやっぱりある*

このように、KR4 は教会の「交わり」で、自分の出来事や感情を説明することに困難を感じている。このような状況に対し、KR4 は「このままじゃダメで、もっと成長したい」と話しており、この日本語問題を想像のアイデンティティ獲得のための課題として位置づけていることがわかる。さらに、KR4 は自身の日本語の問題は具体的に「語彙が不足していることだ」と考えている。

KR4: 日本人的にじゃなくて、やっぱり、もっと多い語彙が増えればいいなっていう感じ

KR4 の語りから、KR4 にとって語彙を増やすことは、アイデンティティ獲得のための投資であることがわかる。しかし、これと関連する KR4 の原則は確認できず、この投資は KR4 の管理としてはまだ一般化されていない状況にあるのではないかと考えられる。一方で、KR4 の語りの冒頭の「日本人的にじゃなくて」という部分は、KR4 の原則 2「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」と関連付けられる。すなわち、この投資と大きく関わる原則は形成されていないが、その一部には現在の KR4 の原則が関わっているものと思われる。

## (2) 通訳者としてのアイデンティティ

先の KR4 の語りにもあったとおり、KR4 は教会で「通訳班」に所属しているという。この教会は韓国系の教会で、韓国語と日本語が使用される場であるため、通訳の役割も必要とされると予想される。KR4 はこの通訳班のリーダーに日本語の問題を指摘されているという。

KR4: 発音はちょっと気になってるところがあって、私がいま、教会で通訳班に入って、  
(中略) よく私に言われるのが、(中略) なんか、私は「しょう」と「しょう」があるじゃないですか (中略) 小さい「よ」で「しょう」とか「しょう」とか、「しょ」とか長くするやつ、全然できてないって言われて

こうした指摘に対し、KR4 はこれが普通に話すときなら気にしないが、通訳に関しては自分が外国人であるのは関係なく「ちゃんとした文章を話さなければならない」と考え、現在は通訳をするときには意識して話しているという。つまり、KR4 が普通に話している状態は、現在の原則 2「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」に基づいた日本語使用であるが、通訳班に参加する場面ではこの原則にもとづいた日本語使用では問題が生じており、異なるストラテジーを使用していると解釈することができる。

## (3) 大学生としてのアイデンティティ

KR4 はインタビュー時、大学 2 年生に進級して間もない頃であったが、KR4 がもう一つ

挙げた日本語の課題は、敬語の使い方であった。これは、KR4 が現在通っている大学の教員と話すときに問題が生じたことから意識されるようになった。

KR4: 尊敬語はやっぱり、ちょっと苦手 だから、なので、けっこう気にして話しています。  
(中略) 授業の時、授業を残したいと思って、先生に書いているときに言ったんですね。「先生、この授業の講義、録音させていただいてもよろしいでしょうか」って言って、それがあまり通じなくて

さらにこの問題について、KR4 は次のように考えている。

KR4: 私がやっぱり、この敬語が バイト先で学んだ敬語が多くて、仕事の敬語っていいか、さしていただきますとか、普通の先生に言うか言わないかな、よくわかんない

KR4 にとってアルバイトは日本語習得の転機となったネットワークである。上の語りから KR4 には、初期の転機で参加したネットワークにおいて習得した日本語が、そのネットワークの外に出たときにも適用できるのか、また新たなネットワークで適切な日本語は何であるのかという課題が生じていることがわかる。この敬語使用について現在の KR4 の原則では、原則3「日本語では上下関係をそれほど気にして話さなくてもよい」がある。これにもとづいて考えると、KR4 は大学に入学するまで敬語に対する意識が低かったことが予想され、大学に入学してはじめて KR4 はこうした課題に直面することになったと考えられる。

#### 5.4.3.4 KR6 の投資と原則

##### (1) 大学院生としてのアイデンティティ

本調査のインタビューをした時は、KR6 が大学院修士課程に入学して3ヶ月ほど経ったころであった。生活環境が変わったことで、KR6 には新しい課題が生じていた。

KR6: 同じ韓国人の先輩から、男の人なんですけど、なんか「おまえは言葉遣い汚いね」みたいに言われて

(中略)

KR6: いまだに「さ」の発音と「が」と「じゃ」の発音がうまくできなくて、私はこっちで言ったつもりだけど、こっちでこう聞こえたり。こっちで言ったつもりだけど、こっちになったりしてて

R: 指摘されたりするんですか？

KR6: それは韓国人の先輩に指摘されて

(中略)

R: その韓国人の先輩はKR6さんの日本語をいつ聞くんですか？

KR6: 勉強会のときとか、研究室でふつうにしゃべってるときとか。勉強会でしゃべってたときに、なにになにしよ、なにっすか、みたいなふうにしやべてるよってそこで言われ。勉強会の時はさっきのこの2つの区別があんまりできてないとか、高低アクセントの違いとか、そこを結構指摘されますね

上のインタビューからわかるように、KR6は大学院の韓国人の先輩から省略形のくだけた会話表現が「言葉遣い汚い」と否定的に評価されたり、発音の間違いを指摘されたりしている。このエピソードについてKR6はインタビューで複数回語っており、KR6にとってこの問題がいかに深刻かがうかがえる。とくに、KR6は日本語習得の転機で大学の友人ネットワークの影響を受けているが、友人が使う日本語を「いつの間にか私もしゃべってる」と表現していたように、意識的にその日本語を学んだというよりは、受動的に習得した意味合いが強い。そのため、今回の課題への直面は、KR6の日本語使用においてより強いインパクトを与えていると思われる。先の語りにもあったように、現在KR6は「どうしよう」と戸惑いながらも、「発音を気をつけて話す」、日本人がやっているように「わざと褒める」といった日本語使用の戦略を実践している。これは、大学院生のアイデンティティを獲得するための投資として捉えられるが、原則の形成までには至っていない。

#### 5.4.3.5 KR7の投資と原則

##### (1) ネットワークの正式メンバーとしてのアイデンティティ

先の原則でも述べたとおり、KR7は学内外でさまざまなネットワークに参加している。ここで挙げられたのはおもに日本人ネットワークで、KR7はこれらのネットワークへの参加を「留学生にしては幅広く友だち付き合いしましたね」と肯定的に評価している。

KR7: 外国人だとしたらいろんな種類の人はいらるんですけど、気を遣っちゃって仲良くしない人もいらるんですよねたぶん、ほかの外国留学生の友だちの場合に。どうやって気づくとしたら、最初にゆっくりしゃべってくれる人もいれば、易しい言葉でかけてくれる人もいれば、でも友だち本当に私だけ留学生だったんで (中略) みんな気を遣わずに日本語でしゃべるんですよ

上の語りでは、自分以外の外国人や留学生は日本人に「ゆっくりしゃべってくれる」などフォリナー・トークが使用されて、人間関係に距離があるのに対し、KR7 の場合はそうした調整はされず、外国人として距離を置かれることがないことが示されている。つまり、KR7 は自分が他の留学生とは異なり、さまざまな日本人ネットワークに言語ゲストとしてではなく、メンバーの 1 人として参加していることを肯定的に評価し、望ましいアイデンティティを形成していると考えられることができる。そして、その実現のためには日本人に日本人と同様の日本語を使用されることが必要だと KR7 はとらえている。つまり、日本人と同等の日本語を理解し、使用することが KR7 の習得の目標となっており、これは原則 1「日本語は完璧になるまで勉強しつづけなければならない」、原則 2「日本語の規範を理解して受け入れる」にもとづいた日本語の管理として捉えることができる。

一方で、KR7 は未習の語彙や表現による日本語問題に直面したときには、日本人に聞き返して教えてもらうという戦略も使用している。これは、原則 1 にもとづいた日本語の管理として関連づけられるが、一方でこうした「聞き返し」の戦略は自身の外来性を示すことになるため、日本人のフォリナー・トークを引き起こし、言語ゲストとしての参加になる可能性もある。この戦略の使用について KR7 は次のように語っている。

KR7: たまに聞き取れない部分とか知らない言葉とかあったら 10 人もいればその中で仲良くなった子にこっそり「あれってなんだっけ？」って言ってくれたり、遠慮なく途中で「あれってなに？」ってボケて言ったら言ってくれたりして

(中略)

KR7: 聞いてその人も教えてくれることも、もしかしたら嬉しいかもしれないし、お互いのコミュニケーションになることかもしれない と思ってちょっと遠慮しなかった

りもします

上記の語りから、KR7 は聞き返すときには「ボケる」と言い、冗談の文脈にして尋ねていることがわかる。冗談の文脈にすることによって、KR7 の聞き返しは非母語話者の言語問題ではなく、その場を盛り上げるために意図的に行う間の抜けた発話として意味づけられるようになるため、KR7 の参加も言語ゲストの役割が与えられることはなくなる。また、「聞き返し」を実施することについて KR7 は「(相手も) 嬉しいかもしれない」、「お互いのコミュニケーションになることかもしれない」と肯定的に評価している。これは、「聞き返し」が会話に参加するための戦略の 1 つとして KR7 にも周囲の日本人にも認められ、機能していることを示している。以上のことから、KR7 による「聞き返し」は、日本語習得のための調整であると同時に、KR7 の外来性をリソースとした会話参加の戦略にもなっており、これらの組み合わせが KR7 の望ましいアイデンティティの獲得のための投資になっていたと考えることができる。

さらに、KR7 の「聞き返し」と関連して、KR7 は新しい語彙を習得することを日本語の課題としており、「積極的に新しい言葉にぶつかること」や「本を読むこと」などの戦略が挙げられた。これは、「聞き返し」と同様に、「日本語は完璧になるまで勉強しつづけなければならない」という原則にもとづいている。そして、KR7 は日本語の勉強のために KR7 は、新しい言葉や表現に積極的に触れ、間違っても良いのでそれを使うことが重要だということを強調している。

KR7: よくわからないときとか、あと わざと日本語で話してこれ間違ってるかもってちよっと戸惑って使うかどうか迷ってるときにそれを 避けて他の表現を言ってしまったら間違う機会を失ってしまうので、間違うことをすごく楽しんでます。間違ったら1つずつ覚えていくことだし、そしたら道が開くっていうか

こうした積極的な姿勢は、KR7 の原則 3 「外国では積極的に取り組まなければならない」にもとづいた日本語使用として理解される。

このように、KR7 のアイデンティティ獲得には 3 つの原則が関わっており、これらの原則にもとづいた戦略の実施が KR7 の望ましいアイデンティティ獲得のための投資になっていることがわかる。

#### 5.4.3.6 KR9の投資と原則

##### (1) プロの通訳者としてのアイデンティティ

先述したとおり、KR9は「日本語極めるために勉強を続ける」原則を形成している。これはKR9が来日した当初から持ち続けている原則ですが、現在のKR9にとってそれはプロの通訳者になるための投資として捉えることができる。

*KR9: いま、仕事も通訳っていう仕事をやっているんで、言葉としてプロとしてみんな見てくれるので、そのぶんもありまして、ちゃんとした日本語をしゃべらないといけないっていう意識はあります*

また、KR9は今後漢字検定を受検するつもりだとも話しており、その時のKR9の状況に応じて、具体的で継続的な投資をおこなっていると考えられる。

#### 5.4.3.7 KR10の投資と原則

##### (1) 社会人としてのアイデンティティ

KR10はインタビュー当時、大学院の修了が決まり、就職活動をしている時期であった。そして、これから始まる社会人生活について、次のような課題を持っていた。

*KR10: いまちょうど就活行ってますので、エントリーシートや履歴書書くんですけど、そのときにやっぱりちゃんとした表現で正式な表現、普通の表現じゃなくてそういうことですね、書くので、これから会社で働かないといけないんで、働くにしても日本語ちゃんと会社として公的な表現を書くのが一番心配とか困っているところ*

このように、KR10は会社で使用されるような公的な書き言葉の表現を習得することを課題として取り上げている。KR10はもともと「日本企業に就職して技術力を身につけること」が日本語習得の動機付けとなっており、現在KR10が挙げているアイデンティティは大学生から社会人にステップアップするためのものとして位置づけられる。

この高い目標は、KR10の原則1「日本人と同じ日本語を習得する」原則と強く結びつい

ている。これは KR10 が来日してから一貫して変わらず持ち続けている原則で、KR10 の高い上昇志向と「日本で高い技術力を身につけて国に帰る」という来日の明確な目的意識が反映されている。そしてそれは KR10 の人生のステージが変化しても変わることがなく、社会人の場合には「日本の社会人と同じ日本語を習得する」ための投資を行っているものと考えられる。

#### 5.4.3.8 KR11 の投資と原則

##### (1) 研究者としてのアイデンティティ

KR11 がインタビューで言及した日本語の問題は、大部分が大学院での研究に関わるものであった。

*KR11: 自分が話したい簡単なことはできるんですけど、学術な用語を使って、難しい漢字を使って、それで論理的に話すのは難しいですね*

ここで挙げられた日本語の問題は、KR11 の「きれいな日本語で論理的に話す」という原則にもとづいている。先にも指摘したとおり、KR11 のインタビューでは「論理的」という表現がたびたび使用されており、アカデミックな場面での日本語使用を強く意識している。インタビュー時、KR11 は修士論文執筆中で、修了後は博士課程に進むことを希望していた。そのため KR11 の大学院での研究は生活の中心となっており、アカデミックな日本語を習得することがアイデンティティ獲得の投資にもつながっていると考えられる。

#### 5.4.3.9 KR12 の投資と原則

##### (1) 日本語の使い手としてのアイデンティティ

KR12 は現在の日本語について「もっと勉強した方がいい」と話しており、漢字、文法、手紙などの読み書き、電話会話などを課題として挙げていた。そのため、KR12 の想像のアイデンティティは社会的な役割を持つことではなく、まずは「日本語の上手な話し手」になることだと考えているのではないかと思われる。日本語使用・学習の原則も「日本語の規範を習得する」とされており、現在の KR12 は、日本語のインプットをそのまま受け入れる形での習得を進めていると推察される。

## 5.5 本章のまとめ

本章では、KR の日本語学習と日本語使用を通時的な観点から考察してきた。その結果、KR の日本語習得のプロセスには、日本語能力に対する否定的な評価から肯定的に評価した変化の転機が存在していることが明らかになった。この転機は KR の日本語学習初期の段階で訪れる場合と初期以降に訪れる転機があり、多くの KR は初期の転機を経験していた。

日本語習得の転機には、KR の社会的ネットワークが深く関わっていた。KR は社会的ネットワークを通じて日本語の知識や日本生活に関する知識を獲得していた。それは、知識そのものが伝播されるのではなく、社会的ネットワークにおける実践場面への参加によって伝えられた知識の中に埋め込まれるという形で伝わっていた。さらに、社会的ネットワークをとおして伝えられたのは知識だけでなく、実践課題の遂行や接触場面への参加による達成感や成功体験が付加価値として KR にもたらされていた。また、転機となった社会的ネットワークにおいて KR は一時的なゲストではなく、役割をもった正式な参加者として、継続的もしくは定期的に参加しており、KR はネットワークのメンバーに参加者として認められる場面において多くの接触経験を蓄積することができる環境にあった。このように、KR の日本語習得の転機は、KR が社会的ネットワークにおいて正式な役割をもって社会的実践をおこなうこと、接触場面に参加することが条件となって実現されるのではないかと思われる。

また、日本語習得の転機は KR の日本語の使用や学習の原則の形成もしくは変化にも関わっていた。こうした原則は接触場面への参加が前提とされており、日本語習得の転機が社会的実践や接触場面への参加によってなされたことで、「場面への参加」が KR の原則を形成するベースになったと考えることができる。また、日本語習得の原則には転機以外の要因にもとづいて形成される場合もあり、そこには KR の日本生活全体に対する目標や現在の日本語の課題などが関わっていた。

さらに、KR の語りには、現在 KR が抱えている日本語の課題が取り上げられることがあった。これらの課題は、KR がこれから日本社会でどのようになりたいかという想像のアイデンティティが想定され、それを獲得するための課題として提示されていた。KR の日本語使用・学習の原則の中には、KR が想像のアイデンティティ獲得のために行っている投資と関連付けられるものもあり、日本語使用・学習の通時的な管理は、過去の経験だけではなく、今後の KR の日本語使用や学習も含むものとして捉えることができる。

以上のように、KRは日本語を学習しはじめた時から今後の日本語使用に至るまで、どのような日本語を習得し、どのように使用していくかという管理を継続して行っている。こうした管理は、その時その時のプロセスにおける日本語学習や接触場面での日本語使用において管理した経験が蓄積されることによって習慣化され、KRの原則や戦略として形成されていく。言い換えれば、KRは何度も自身の日本語によって外来性がいかに表示されるかについて管理の経験を重ねることで、接触場面に個人としてもっとも望ましいかたちで参加するための外来性の出し方を習慣的に管理するようになるのである。

## 第6章 類型論アプローチからみる韓国人居住者の 習慣的な日本語の管理

本章では、KRの接触場面における習慣的な日本語の管理を類型論的アプローチから論じる。第4章のKRとJとの会話における戦略の分析、第5章で分析したKRの日本語習得の原則と戦略の分析をもとに、レベルの異なる日本語の管理がどのように相互依存的な関係性をもっているのかを考察する。

### 6.1 韓国人居住者の日本語の管理の階層性

本研究のこれまでの分析結果から、KRが参加する会話場面においてJとの相互行為によって実現される習慣的にパターン化された戦略が存在すること(第4章)、KRのこれまでの日本語学習や接触場面参加の経験や個人的背景によってKRが個人的にもっている日本語学習・使用に対する原則や戦略が形成されていること(第5章)が明らかにされた。第2章で述べたとおり、これらの原則と戦略はそれぞれ個別につくられているのではなく、KR個人のなかで、レベルが異なる階層的な関係性をもって存在しているとすることができる(ネウストプニー、1989; 村岡、2010)。

KRの接触場面に向かう日本語の管理を検証するにあたり、本研究では村岡(2010)にもとづき、類型論的アプローチにおける原則および戦略によって考察を行う。まず、本研究で分析された原則と戦略を以下のように定義づける。

KR個人の原則：

KRが個人的にもつ日本語学習・日本語使用に対する基本的な態度

KRの戦略：

相対的に限定された場面で適用される習慣化された事前管理としての日本語学習・日本語使用

KR個人の戦略：

相対的に限定された場面で適用されるKR個人による習慣化された日本語学習・日本語使用に対する事前管理

相互行為における戦略：

KRとJとの相互行為によって共有される習慣化された日本語使用のパターン

上記のうち、原則は KR によって語られた KR 個人がもつ日本語学習・日本語使用に対する基本的な態度で、ストラテジーよりも広い領域で適用される態度を指す。ストラテジーは基本的な概念は、原則よりも限定された領域で応用される習慣化された事前管理としての日本語学習・日本語使用とする。そして、本研究のインタビューでの語りから抽出されたストラテジーを KR 個人のストラテジー、また日本人との会話で見られたストラテジーを相互行為におけるストラテジーとする。KR 個人のストラテジーは、KR の共時的な文脈での語りにおいて報告されたストラテジーで、KR が現在の日本語使用に対して個人的に使用しているストラテジーである。一方、相互行為におけるストラテジーは、実際の接触場面の会話において使用された日本語使用のパターンで、会話の当事者である KR と J との間で共有され、習慣的に行われている日本語使用を指す。

これらの原理を相互依存関係のある階層性としてあらわすと、もっとも基本的な形は以下の図 6.1.1. のように捉えることができる。

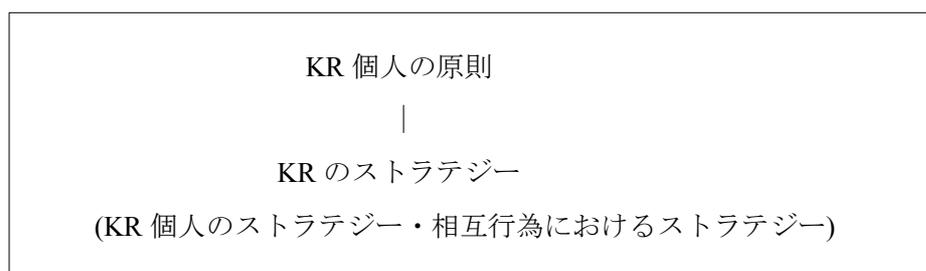


図 6.1.1. 原則とストラテジーの相互依存関係

上記の図に示したように、「KR 個人の原則」、「KR 個人のストラテジー」、「相互行為におけるストラテジー」は階層的な関係をもって理解される。

たとえば KR2 の事例に当てはめると、まず KR2 個人の原則に「自由で気楽な人間関係が望ましい」という態度が確認された。そして、この原則に関連した KR2 個人のストラテジーとして「親しい日本人に限って本人に了承を得て「お姉さん」と呼ぶ」が挙げられた。さらに実際の KR2 と J2 との会話では、J2 を「お姉さん」と呼び、それは J2 にも自然に受け入れられている相互行為のストラテジーが確認された。このように、より一般性の高い態度の原則から限られた場面に適用されるストラテジーと実際の会話におけるストラテジーまで、原則とストラテジーの 2 つの原理は、階層性をもった関係として捉えることができる(図 6.1.2.)。

**KR2 個人の原則**

「自由で気楽な人間関係が望ましい」

|

**KR2 個人の戦略・相互行為における戦略**

「仲良くなった日本人に限って、本人の了承を得た上で「お姉さん」と呼ぶ」

図 6.1.2. KR2 の原則と戦略の一部

またこれらの3つの原理のうち、本研究において分析された KR 個人の原則は、KR の語りから取り出されたもので、KR の語りにはあらわれない、または言語化されないような潜在化された原則は、ここには含まれていない。また、KR 個人の戦略は共時的な文脈において報告されたもので、KR が自発的に提示した戦略と調査者から質問されたことがきっかけで提示された戦略とが含まれる。過去のある時期に行っていた戦略も語られたが、現在の日本語使用において適用されていると見なされるもの以外は取り上げていない。さらに、相互行為における戦略は、KR による語りではなく、KR と J との会話において当事者間で習慣化していたやりとりのパターンを指しており、KR には意識されていない戦略も含まれる。本研究は、これらの原理の特徴から、KR に語られなかった原則や戦略も存在していることを前提とし、ある戦略について考える場合には語られた原則だけではなく、語られない複数の原則と関係をもちながら作用していると捉える。

本研究では、この原則と戦略との関係について考察を進める。KR 個人の原則と KR 個人の戦略、もしくは KR 個人の原則と相互行為における戦略という関係を考察することによって、原則と戦略の関係性を探っていく。

## 6.2 原則と戦略の相互依存関係

原則と戦略の関係性を考察した結果、いくつかのパターンがあることが明らかになった。それは、大きく分けて共時的な文脈でみられる原則と戦略の関係性と通時的な文脈でみられる原則と戦略の関係性の変容として捉えることができる。以下ではそれぞれの文脈において確認された管理のパターンについて考察を加える。

## 6.2.1 共時的にみた原則とストラテジーの関係性

原則とストラテジーの関係を考えたとき、KR の通常の日本語使用や日本語学習が実現されていれば、原則とストラテジーは自然な相互依存関係を示すことが想定される(村岡、2010)。しかし、実際に KR が個々の場面に参加する際には、場面の状況や参加者の言語使用などさまざまな事情が関係してくるため、KR 個人の原則のみにもとづいた日本語使用は認められない可能性もある。

以下では、まず原則とストラテジーが自然な相互依存関係を示す事例の考察から始める。そして、次に原則とストラテジーが矛盾しているように見える事例、またははっきりとした関係性がみられない事例を取り上げ、そこではどのような管理が行われているのかを考察していく。

### 6.2.1.1 原則とストラテジーが自然な相互依存関係をもっている場合

先にも述べたとおり、原則とストラテジーの相互依存関係について、KR が通常の状態日本語を使用するときには、これらの関係は自然な相互依存関係が見られると考えられる。

たとえば、KR1 は「日本語は母語話者のレベルまで上達しなければならない」という個人の原則をもっており、それと整合したストラテジーを挙げている。

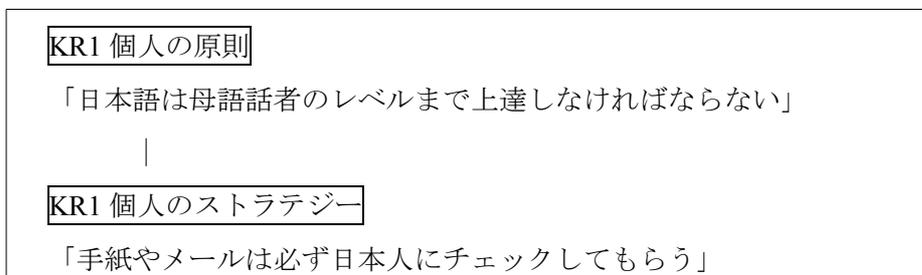


図 6.2.1. KR1 の原則とストラテジー (1)

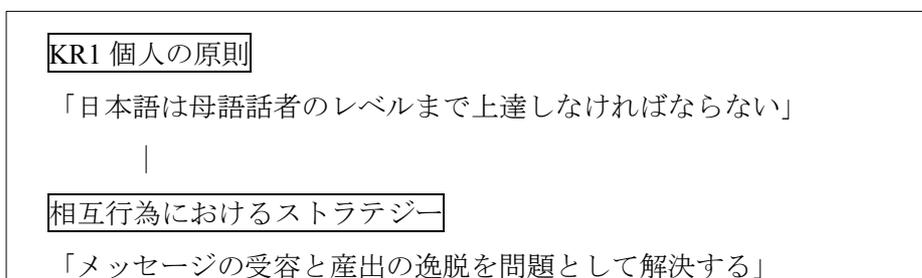


図 6.2.2. KR1 の原則とストラテジー (2)

上の図 6.2.1.では、KR1 個人の原則「日本語は母語話者のレベルまで上達しなければならない」と相互関係にある KR 個人の戦略「手紙やメールは必ず日本人にチェックしてもらおう」が示されている。また、図 6.2.2.では同じ原則に対して「メッセージの受容と産出の逸脱を問題として解決する」という相互行為における戦略が使用されていた。このように、KR1 の原則は、書き言葉においても、会話場面においても広く適用され、それぞれの場面で戦略を形成している。

また、KR7 の場合には、同じ方針を示した原則が複数語られており、これらが相互に影響し合うことにより、原則と戦略の関係性が強くなる傾向が見られた。KR7 の語りにあらわれた原則は、以下の 3 つであり、いずれも日本社会に入り込み、日本の規範を習得しようとする方向性をもっていた。

#### **KR7 個人の原則**

- 原則 1 「日本語は完璧になるまで勉強し続けなければならない」
- 原則 2 「日本語の規範を理解して受け入れる」
- 原則 3 「外国では自分から積極的に取り組まなければならない」

また、KR7 からはこれらの原則に関わりをもつ戦略も多く語られた。

#### **KR7 個人の戦略**

- 戦略 1 「レポートやプレゼンテーションは必ず日本人に添削してもらおう」
- 戦略 2 「友だちに会話の時に間違った日本語やイントネーションを直してもらおう」
- 戦略 3 「わからない言葉は辞書やインターネットを使って調べる」
- 戦略 4 「友だちとの会話で、わからないことは積極的に聞く」
- 戦略 5 「友だちとの会話で聞き返すときには「なんだっけ？」とぼけたふりをして会話に入る」
- 戦略 6 「話しているときに日本語が思い出せないときは、友だちに教えてもらう」
- 戦略 7 「初対面の人にも必要ならわからない言葉を質問する」
- 戦略 8 「話しているときに自信がない日本語も避けないであえて使って間違おう」
- 戦略 9 「日本人同士の会話を聞き、日本人のマインドや使う言葉や行動パターンを覚える」

ストラテジー10「留学生でかたまらないで、色々な場所に行って色々な人に接する」

ストラテジー11「新しい話題や言葉に触れる」

#### 相互行為におけるストラテジー

相互行為ストラテジー1「メッセージの受容と産出の逸脱を問題として解決する」

上に挙げたストラテジーは、いずれも単一の原則との関わりから形成されたものというよりは、3つの原則と関係性をもって形成されていると考えることができる。このように、KR7の原則とストラテジーは、同様の方針をもった複数の原則が存在し、ストラテジーも複数の原則にもとづいて形成されていることから、ここで示されている原則とストラテジーにより強い関係性があると考えられる。また、KR7の場合、語られた原則とストラテジーに不整合と見られる事例は認められなかった。このことから、KR7の原則とストラテジーが強い関係性をもち、KR7が安定した日本語の管理を維持していることがわかる。

KR7がこうした管理を行っている背景には、KR7の日本留学に対する強い動機付けが関係していると考えられる。KR7は韓国ではもともと美術を専門的に学んでおり、高校も美術専門の学校に通っていた。大学も美術大学への進学を目指したが、将来を考えたときに「日本語を生かしたほうがいい」と考えるようになり、反対する両親を説得して日本留学を決めたという経緯がある。そのため、KR7にとって日本ででの生活をいかに充実させ、成功させるかがKR7の日本での行動を決定づけるもっとも大きな要素になっていると予想される。こうした日本での生活に対する強い動機付けにもとづいて、KR7の原則とストラテジーは強い関わりを持ちながら維持され、安定した管理につながっているとも言えるのではないだろうか。

以上のように、KRによって原則とストラテジーが自然な相互依存関係が示される場合には、その原則が比較的安定して実際の場面に適用されていると考えることができる。

#### 6.2.1.2 原則とストラテジーに自然な相互依存関係がみられない場合

先にも述べたとおり、原則とストラテジーは階層的な相互依存関係にあると常に自然な関係があらわれるわけではない。村岡(2010)においても、経験してきた場面や状況によって原則とは異なるストラテジーを形成せざるをえなかった場合などがあることを指摘している。本研究においても、語られた原則とストラテジーとに自然な関係性が認められない事

例が多く観察されており、KR 個人の原則がある場面においてそのまま適用できない何らかの事情が生じていたことが窺える。コミュニケーション場面に参加するには、その場面の参加者やコミュニケーションの目標や内容などが大きく関わるため、KR 個人のもつ原則よりもその場面のコミュニケーション要素と関わる原則や戦略が優先して適用されることも考えられる。

以下では、こうした原則と戦略にはっきりとした相互関係がみられなかった事例について、そこでどのような管理が行われていたのかを考察していく。

### (1) 日本人を尊重する原則が適用される場合

KR 個人の原則のうち、12 名中 7 名の KR は「日本語は母語話者のレベルまで上達しなければならない」といった日本語能力の向上を目指した原則を語っている(KR1、KR2、KR7、KR9、KR10、KR12)。この原則にもとづいた管理をすると、KR が接触場面において日本語の不理解や産出上の問題が生じた場合には、KR に調整を求めたり、自分で調べたりするなどして日本語の問題を解決し、日本語の能力向上につなげるという戦略が選択されることが予想される。実際、KR からは「わからない日本語を質問する」「辞書で調べる」といった KR 個人の戦略、また実際の接触場面で聞き返しなどの調整要求を行う「メッセージの受容と産出に関わる逸脱を問題として解決する」戦略が観察された。しかし一方では、KR の日本語問題の解決よりも母語話者の日本語使用が優先されるケースもみられた。

以下の例は KR12 と J12 との会話で、言語問題の調整よりも会話の進行を優先している。

#### 例 2: 会話進行の優先 (KR12×J12)

(J12 は KR12 にアルバイト先での新人アルバイトの女性の働きぶりについて話している。)

01 J12: ((新人アルバイトの女の子が店長に怒られて)) まどうでもいいやみたいな hh

02 KR12: hh マジで::?

03 J12: ダイキくんと言ってて:

04 KR12: えどういう性格なの?

05 J12: ぜんぜん気にしてないんですよ

06 KR12: え気にしすぎでしょ、気にしな: すぎでしょう、[なさすぎ?]

07 J12: [うん、だからぜんぜん変わらないと]

思います、たぶん店長がいくらおこっても気にしないから、その場でだけ

08 KR12: そのままだとクビじゃないの？

この例で KR12 は、06KR12 で「その新人アルバイトの女性は気にしなさすぎだ」と発話しようとしたが、うまく産出することができずに、何度か言い直し、さらに J12 に対して「なさすぎ？」と調整を要求しようとしている。これに対し、J12 は、07J12 で KR12 の調整発話に割り込んで自分の発話を開始しており、KR12 の産出問題に対する調整はおこなわなかった。

インタビューにおいて語られた KR12 の原則は、「日本語の規範を習得する」であり、「日本語の勉強がもっと必要」だと感じていると報告している。実際、上記の会話においても、KR12 は「気にしなさすぎ」という言語形式の生成に不確かさを感じ、J12 に確認要求をしている(06LR12)。ところが、J12 は調整を実施せずに会話を進行している(07J12)。しかし、これに対して KR12 は再び調整要求をして不確かさを確認しようはせずに、J12 の 07J12 の発話に続けて会話を進行しており(08KR12)、自身の日本語問題の解決よりも J12 の日本語使用を優先していることがわかる。

同様の事例は他の原則においても確認できた。たとえば KR9 は「日本人には自分からアプローチする」という原則を語っていた。そしてこれと相互関係をもつ戦略として「友だちには自分の恥ずかしい部分や不満に思っていることを話す」戦略が挙げられたが、その一方で、「日本人の話がわからなくても、聞き返したり質問したりしない」という消極的な戦略も報告された。インタビューでは次のように語っている。

*KR9: (話の意味がわからない時には) 聞いてるだけ*

*R: 待機って感じですか*

*KR9: それなにとか聞かないですねさすがに、会話を途中で切ることになるので*

この語りからわかるように、KR9 はみずから日本語の不理解を表明して聞き返すことによって日本人の会話を中断させることを否定的に捉えている。そのため、自分の日本語の不理解を解決するために自分から切り出すことは避けて、聞き手に徹している。このように、非母語話者として日本語問題を解消することよりも母語話者の発話を妨げないという態度もまた、母語話者を尊重する原則がはたらいた事例として考えることができるだろう。

## (2) コミュニティで共有されている日本語使用の特徴がある場合

KR 個人の原則と KR が参加しているコミュニティで使用されている言語規範が異なる場合、参加しているコミュニティの規範が優先されることがある。KR10 は、来日してから一貫して「母語話者と同じ日本語を習得する」という原則をもっており、強い習得意識が示されていた。しかし実際には、日本語の規範とは異なる言語使用が語られていた。

R: 教会の人はみんな (オッパという呼称を) 使うんですか？

KR10: うんみんなオッパって使います

R: 日本の

KR10: さんづけじゃなくて、はい、たとえばキムくんとか言うんじゃないですか、学科の友だちキムくんとかって言うんですけど教会ではオッパって呼ばれてます

この語りから、KR10 は人物呼称について、通常は日本語の規範に従った「キムくん」と君づけで呼ばれているが、教会では韓国語の年上男性を示す「オッパ」という呼称で呼ばれていることがわかる。そしてそれは、自分が個人的に行っているのではなく、教会内のメンバー全員が使うもので、共有されていることが示されている。実際、この「オッパ」の使用は会話の場面にもあらわれていた。

例 14: コミュニティで共有される逸脱 (KR10×J10)

(J10 は KR10 と一緒にスポーツジムに通う韓国人の後輩について尋ねている。)

01 J10: うん、え後輩は韓国人なの？

02 KR10: 韓国人

03 J10: う:ん

04 KR10: けっこう、ただね

05 J10: う::ん

06 KR10: じゅうよん

07 J10: じゅうよん？

08 KR10: いやちがう

09 J10: .hh

10 KR10: ごこしたかな？

11 J10: う::ん(0.5) オッパがなんさいだか忘れちゃったけど=

12 KR10: =にじゅご

13 J10: う::ん

14 KR10: あにじゅうよんか、にほんでは、誕生日すぎてないから

15 J10: あそだね

上記の例では、同じ教会のメンバーである J10 が KR10 を「オッパ」と呼んでおり(11J10)、それが二者間で自然に共有されている。KR10 によると、この教会は韓国系の教会で、日本人だけでなく、在日韓国人とその家族、韓国人留学生なども多く通っており、日本語を使用していても人物呼称は韓国語が選ばれるという。つまり、この教会では韓国語の人物呼称がコミュニティ内の言語使用として共有されており、KR10 はこのコミュニティの言語使用に従っていると考えることができる。その際には、KR10 自身がつもつ原則は適用されず、参加する場面に適切な言語生成が優先される。

一方で、KR10 はこの教会への参加はあえて韓国系の教会を選択したと話しており、ネットワーク選択の管理も関わっている可能性がある。KR10 は、日本で「外国人に見られるのが好きじゃなかったですよ、日本人に扱われたいかそういう気持ちがあった」といい、そのため「ある程度日本人になろうっていう気持ちがあった」と話している。そしてそれが強い日本語の習得意識につながっていると考えられる。一方で KR10 は自分の性格について「自分が責任をもって誰かの前に出て引っ張ることが好き」だとも話しており、インタビューでは高校時代に学級委員長を務めていたこと、また日本では大学の韓国人留学生会の会長に就いていたことを報告している。これらの語りから、何らかのステイタスをもった立場にいることが KR10 の望ましいアイデンティティの 1 つになっており、そのためのネットワーク選択の管理を行っていることがわかる。KR10 は自分がステイタスを持つことが可能なネットワークを常に選択しようとしており、それが日本では韓国人留学生会のような韓国人ネットワークであったと考えられる。そしてこの韓国系の教会に参加するという選択も、この管理の 1 つとして解釈できる。KR10 はこの教会のメンバーについて自分よりも年下の人が多いとし、「やっぱり年下なんでオッパとして話す、相談にのったり」している。ここで KR10 のいう「オッパ」とは年上の立場というステイタスを指標しているだろう。すなわち、KR10 は日本でステイタスをもつというアイデンティティを実現するため、日本において韓国ネットワークである韓国系の教会を選択し、そこで年上の人間というステイ

タスをもって参加しているのである。このように考えると、KR10の「オッパ」という呼称は、コミュニティ共有の言語使用というだけでなく、年上のステイタスをもった役割を実現するための戦略としても作用していることがわかる。

このように、KR10の「オッパ」という呼称表現には、複数の原則と戦略が関わっており、その場面のKR10にとってもっとも適当な原則と戦略を優先させながら実際の日本語使用を生成していると考えられる。

### (3) 日本人ネットワークでKRの外来性が認められている場合

KR個人の原則と異なる戦略が形成されるとき、参加する場面の役割や目標が優先されている場合がある。本研究でみられた事例は、原則が「日本語を極めたい」、「きれいな日本語で論理的に話したい」といった日本語の向上を目指しているもので、それが個々の場面の戦略では規範的な日本語からは離れる方向性をもったものになっていた。

たとえば、KR11は、「きれいな日本語で論理的に話したい」という原則を語ったが、教会や大学内のクリスチャンのサークルでは、少し異なる戦略を語っている。

*KR11:* いろんな聖書の御言葉も言うし、いろんな自分の感情の気持ちを深く言う立場になるんですけど、そっちでも私が言うのは、(中略) 自分の感情をちゃんと表現するっていうことは、そっちはけっこうはっきり言う など思ってるみたいですね。日本人の場合は、自分の心っていうと、ちょっと客観、なんか他の人のような感じで言うみたい (後略)

*R:* でもそこが感情出すことがだいじなんですよ

*KR11:* そうですよ (中略) 相手が迷惑って、そっちが不快っていう感じを受けるんだっ  
たらしないんですけど、そうじゃなければそのまま続けるっていう感じ ですよ

上のKR11の語りから、KR11が教会やクリスチャン・サークルのような宗教場面では自分の感情をはっきり話しており、周囲にもそのように受け取られていることがわかる。さらにKR11はそれが相手に不快を与えなければ続けると話しており、「相手に受け入れられるなら、宗教場面では自分の感情をはっきり話す」という戦略を形成していると言える。つまり、KR11は、宗教場面という深い感情を表現することが求められる場面においては、それが受け入れられるなら、日本人の規範から離れて、個人の感情の出し方を優

先していると考えることができる。

また、KR9は来日時から「日本語を極めたい」という原則をもっており、「漢字検定の勉強をする」、「敬語に気をつける」といったストラテジーを語ったが、同じ幼稚園に通う子どもの母親と話すときには正しい語彙を選ぶ意識はまったくないという。母親同士の会話の話題はつねに子どもや夫の話で、とくにKR11は相手と親しくなるためには自分の感情を出す必要があると考え、夫に対する不満や愚痴をよく話すという。また、仲の良い日本人の「ママ友」もまた、他の日本人には話さないような夫の愚痴を自分だけに話すのだと報告している。このように、KR9は母親同士の場面では、母親としての話題や人間関係構築のための話題の管理が行われており、規範的な日本語使用には意識が向けられていない。さらにKR9は、相手の日本人もKR9の規範的ではない日本語を受け入れていると話している。

*KR9: 1つの個性として、私がしゃべってる日本語はこういう個性として受け入れているみたいで、外国人だからこそ、こういうにほんごしゃべってるんだじゃなくて、KR9っていう人はいつもこんな感じでしゃべるんだっていうふうに思ってる人たちです*

上のKR9の語りから、KR9の周囲の友人たちは、KR9の話す日本語を「外国人の日本語」としてではなく、1つのKR9の日本語のバラエティとして認めていることが読み取れる。このように、KR9の同じ母親同士が参加する場面においては、それが相手にも受け入れられている場合、規範的な日本語使用よりも母親同士特有の話題や親しさを示す話題の選択が優先されていると解釈することができる。

以上の2つの事例はいずれもKR個人の日本語能力の向上に向かう原則よりも、その場面における役割や目的が優先されていた。これらの事例で共通していたのは、いずれもKRの規範的ではない日本語が場面に参加する日本人にも受け入れられ、認められていたことである。つまり、KRの日本語規範から離れる日本語使用のストラテジーが選択されるには、それが相手に認められ、共有されていることが条件になっていることがこれらの事例に示されている。

#### (4) 日本人もKRと同じ日本語使用のストラテジーを使用する場合

会話において当事者であるKRとJの間で共有されているストラテジーがある場合、KR

個人の原則よりも優先される場合がある。会話で KR が使用するストラテジーを J も自身のストラテジーとして使っている場合、二者間の共有パターンとして作用することがある。

たとえば、KR1 と J1 の間では、二人とも日本語の規範から逸脱する「強い意見の提示」をストラテジーとして実施していた。KR1 個人の原則は「母語話者のレベルまで日本語を上達させる」、「きれいな日本語を話す」といった日本語の規範に向かうものであるため、この原則とストラテジーとはやや方向性が異なる。しかし実際の会話では共有されたストラテジーが使用されており、KR1 は自分の原則よりも J と共有されている日本語使用を優先させたことがわかる。以下ではまず、KR1 が直接的な表現形式によって自分の意見を提示した事例を挙げる。

### 例 3: 話の内容に集中している (KR1×J1)

(この日、J1 は新しく買った曲げわっぱに詰めた弁当を持参した。KR1 は曲げわっぱに興味を示し、弁当の内容について質問している。)

01 J1: ごはんだけですよ、いれて[るもの

02 KR1: [ごはんだけ

03 J1: おかずいれてないでしょ?

04 KR1: うめぼししとごはんだけ

05 J1: うん

06 KR1: おかずは食べなかったんですか?

07 J1: おかずは、たべな、たべないです

08 KR1: 食べないですか?

09 J1: うん、ごはんとうめぼ[しだけ

10 KR1: [え::, 栄養とか, .h 大丈夫ですか?

11 J1: おかずってべつに栄養ないでしょ

12 KR1: いやいやいやいやあるんじゃないですか

13 J1: あじ、あじだけですよおかずにあるのは

14 KR1: え: うそ: いろいろ=

15 J1: ¥ハンバーグとか: ¥

16 KR1: ちゃ、いやいやいや、たとえば、つけものとか

17 J1: .hhh つけものそんなないですよ栄養

18 KR1: あ[の:  
19 J1: [たまごとか:?  
20 KR1: そうですね  
21 J1: .h そんな栄養ないですよたまご

上の例で KR1 は、「おかずを食べなければ栄養が不足するのではないか」という意見を KR1 に示している。10KR1 の「栄養とか、.h 大丈夫ですか？」から始まり、12KR1 の「いやいやいやあるんじゃないですか」、14KR1 の「え: うそ:」など、相手の意見に強く反対を表明していることがわかる。その一方で、J1 もまた、KR1 の意見を否定し、自分の意見を提示している。以下の例でも、J1 が相手の話に割りこんで、強い意見提示をしていることが示されている。

例 12: 共通した逸脱の表示 (KR1×J1)

(この日、J1 は新しく買った曲げわっぱに詰めた弁当を持参した。KR1 はゼミでも曲げわっぱが話題になったことを J1 に話している。)

01 KR1: ((わっぱは中身がこぼれやすいから)) ちょっとどうかな:みたいに[言ってたんですね=

02 J1: [うん

03 KR1: =先生が

04 J1: おれ:は::, たしかにそう思いますけど、これだからこれに入れてるのごはんを梅干しだけですよ

05 KR1: うんやはり水分が少ないシンプルな[かんじで入れるんですね

06 J1: [おれ、おれ、あさ::, つくる時間ないんですよ自分で

07 KR1: あ:

08 J1: だからごはんと:

09 KR1: うん

10 J1: 梅干しだけなんです

11 KR1: あ:

12 J1: だとしたらいいじゃないですかわっぱ[で

13 KR1: [そう, そう思いますよ

上記の例からわかるように、J1 の発話の 06J1 「おれ、おれ、あさ::, つくる時間ないんですよ自分で」、12J1 の「だとしたらいいじゃないですかわっぱで」、によって、J1 が KR1 の発話に割り込み、強い意見表明をしていることが示されている。このように、互いが日本語の規範から外れた日本語使用の特徴をもち、共有している場合、KR1 は J1 と話すときには、KR1 個人の原則よりも共有された特徴をもつ日本語を優先的に使用するのではないだろうか。

KR7 と J7 との間でもまた、類似したストラテジーが使用されていたと考えることができる。KR7 と J7 との会話では、相互行為のストラテジーとして、「KR の逸脱をリソースにして新しい話題として展開する」、「逸脱をリソースにして新たな共通認識を構築する」がみられた。KR7 の原則は、原則 1 「日本語を完璧になるまで勉強し続ける」、原則 2 「日本語の規範を理解して受け入れる」、原則 3 「外国では積極的に取り組む」の 3 つが語られたが、このうち原則 1 と原則 2 は日本語の規範に向かうもので、相互行為において逸脱をリソースとして活用しようとするストラテジーはややずれている。ところが、この会話で相互行為のストラテジーが適用されている場面を見ると、このストラテジーのやりとりを開始したのは J7 であることがわかる。

#### 例 7: 新しい話題として展開する逸脱 (KR7×J7)

(KR7 と J7 は卒業旅行の話をしている。)

01 J7: 海外行きたい, 卒業旅行は

02 KR7: どこに行こう: 日本語つうじるところがいい hhh

03 J7: え::うっそ::↑

04 KR7: .hh グアムとか:, [ハワイとか

05 J7: [えなに日本人みたいなこと言ってん[のよナミ.hhh

06 KR7: [(h)英語しゃべれないもん(h)

07 J7: ナミ, えでもナミたまにフェイスブックで英語書くじゃん

08 KR7: それけっこう大変よ:hh

上の例の 02KR7 「日本語つうじるところがいい hh」という発話は、日本語非母語話者の発言としては有標なものである。J7 はこの KR7 の発話に対して、03J7 「え::うっそ::↑」と驚いた反応を見せ、05J7 「えなに日本人みたいなこと言ってんのよナミ.hhh」と笑いをとも

ないながら日本人ではない KR7 の発話の期待から外れていることを示し、KR7 の外来性を顕在化させている。このように、この相互行為のストラテジーを開始したのは J7 のほうで、KR7 がそれに協調することによってストラテジーが成立していることがわかる。そこで、J7 の側から日本語使用をみると、J7 が KR7 の外来性を取り上げ、興味をもって話題を広げる態度は、KR7 の原則 3 「外国では積極的に取り組む」態度と類似していることがわかる。J7 は会話のほかの箇所においても、KR7 の発話の中でわからないことがあると、自分から質問をしていた。

例 15: J7 によるストラテジー (KR7×J7)

(KR7 は韓国旅行を計画している J7 に韓国の情報を提供している。)

01 J7: エエステは↑エステは↑

02 KR7: エステ, あエステはする[ね

03 J7: [するっしょ

04 KR7: えっとエステはするけどー, チンジルバンっていうところがあって::=

05 J7: うんうんうん

06 KR7: あそこは予約しなくても行けるの

07 J7: (1.0) どこ↑

08 KR7: チンジルバン, えっとね::

09 J7: チン=

10 KR7: =チンジルバン

11 J7: 難しい::hh

12 KR7: え::つとね::

13 J7: チンジル↑

14 KR7: <チン, ジル, バン>

15 J7: チンジルバン

16 KR7: そ. でもかわいい発音

17 J7: え::難しい=

18 KR7: =なんかね:: 24 時間営業して[て

19 J7: [えすごいすごい

20 KR7: そう.えっと::

21 J7: なにそれそんなところあるんだ

上の例では、KR7 が韓国に「チンジルバン (짬질방、tchim-jil-bang)」という韓国式の健康ランドがあることを提示している。J7 はこの施設名を初めて聞いたため、07J7 で「どこ↑」と聞き返している。さらに、09J7 から 15J7 にかけて「チンジルバン」を繰り返し発音しようと試みており、発音ができたところで 18KR7 からどのような施設なのか具体的な説明が始まっている。これに対して J7 は 19J7 「すごいですごい」、21J7 「なにそれそんなところあるんだ」と興味をもった反応をしている。このように、J7 は未知の韓国語や韓国文化に対して自発的に聞き返し、韓国語の発音を試み、その内容に興味を示している。このような態度は先に挙げた KR7 の原則 3 「外国では積極的に取り組む」態度、そして KR7 がインタビューで報告した「わからないことは聞き返す」、「新しい話題や言葉に触れる」ストラテジーと重なっている。

以上のように、KR 個人の原則からみると原則から異なってみえるストラテジーには、相手の日本人 J と共有されていることがあり、その場合には原則よりも共有されているストラテジーを使用することが優先される。先の(3)のように、KR の日本語の外来性が J によって認められるだけでなく、J 自身にも同様の特徴をもった日本語使用がストラテジーとして実施されることで、KR の日本語の規範に向かうタイプの原則はより潜在化しやすくなっているものと見られる。

以上、KR 個人の原則とストラテジーとが自然な相互依存関係をもたない事例について考察を行ってきた。ここで挙げられた事例は、多くが KR の日本語の規範に向かうタイプの原則で、なんらかの事情によって、その原則とは異なる方向性のストラテジーが適用されているものであった。こうしたストラテジーが形成された背景には、KR が参加する場面におけるコミュニケーション要素の特徴や相手の日本人との関係性、相手の日本人との外来性の共有度などが関係しており、これらがストラテジーを決定づける条件になっていると考えられる。つまり、いくつかの原則のうち、その場の条件によって適用される原則や優先されない原則が決められ、それにもとづいてストラテジーが形成されていると考えることができる

。

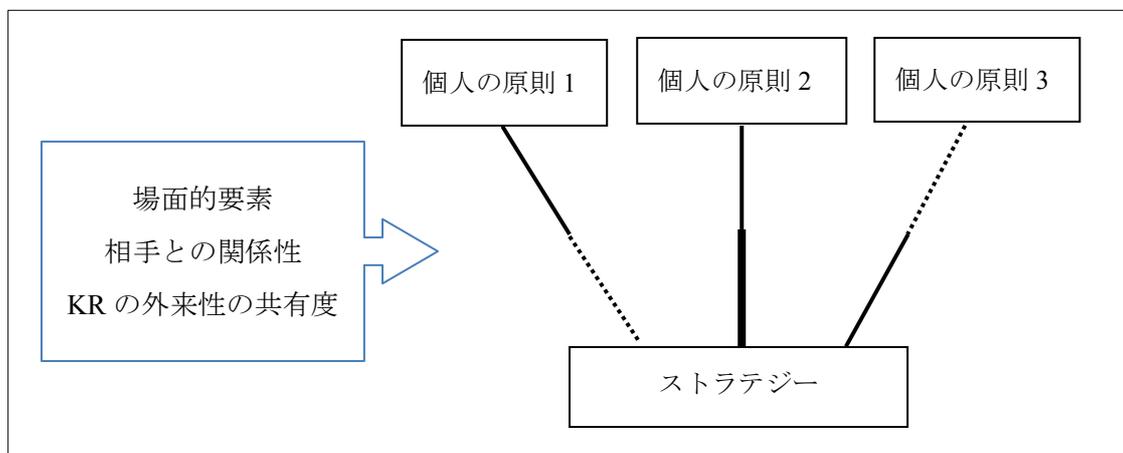


図 6.2.3. KR の接触場面に向かう日本語の管理

上の図のように、KR は顕在化された知識としての原則から言語化されない原則まで複数の原則を形成していると考えられる。そして、場面に参加する際には、その場面の特徴や参加者との関係性、さらに KR の日本語の外来性がどれくらい場面内で共有されるかといったことが考慮され、優先的に適用する原則が決められ、それにもとづいてストラテジーが選択されると考えられる。そのため、原則とストラテジーはそれぞれゆるやかな関係性をもって存在するが、参加する場面によっては関係性が強まったり、あるいは矛盾してみえるような関係性が示されることになる。そして、これらは KR によって習慣化されており、それぞれの場面での適用のパターンは KR の接触場面に向かう管理として捉えることができるだろう。

なお、本研究において KR の日本語の規範に向かうタイプの原則がストラテジーと異なる事例が多く見られたのは、会話調査で設定した場面が親しい友人との雑談場面であったからであると考えられる。KR によって語られた原則には、日本語の規範に向かうタイプと自分らしい日本語を志向するタイプの両方が確認されているが、親しい友人との会話では、より規範が緩和された日本語が使用されるのが通常であり、ストラテジーも自分らしい日本語を志向するタイプの原則にもとづいたものが相互依存関係をもって選択されていたと考えられる。反対に、仕事場面や形式的な場面に参加するときには、日本語の規範に向かうタイプの原則とストラテジーが相互関係を強める可能性がある。また、こうした場面では、考慮すべき要素が多くなるため、KR が適用する原則やストラテジーも親しい友人との

場面に比べて制約されることも予想される。

## 6.2.2 通時的にみた原則とストラテジーの関係性

ある日本語使用の特徴について考えたとき、ある時期にはそれが一般的な態度として広く適用されることが多いが、またある時期になると、適用範囲が狭まり、限定された場面において適用されるようになるといったことが起こりうる。つまり、ある日本語使用の現象について、原則のレベルで広く適用されていたものが、あるときから適用される場面が限定され、ストラテジーのレベルで使用されるようになるという通時的な変化があるのではないかと考えられる。

以下ではまず、KR 個人の原則が形成されるまでのプロセスをまとめる。そして、形成された原則が、日本滞在が進むにつれて変容していく様相を考察し、KR の日本語の管理を通時的な視点から明らかにしていく。

### 6.2.2.1 原則の形成に関わる言語管理

先行研究でも指摘されているとおり、KR の原則が接触場面に向かう管理として捉えられるようになるには、それまでの直面した言語問題に対する処理が何度も繰り返されることでパターン化し、習慣化された管理として形成されていく(村岡、2010)。本研究で分析された原則についても、こうしたプロセスをたどって形成されてきたと考えられる。

KR3 の場合、日本語はほぼ未習の状態で来日、それから日本語習得の転機を迎えた。そしてそこで原則として、原則 1「日本語習得のためには接触場面に参加しなければならない」、原則 2「日本人と同じ日本語を話さなくてもいい」が形成されたことがわかっている。KR3 の語りからは、これらの原則が形成されるまで、つまり日本語の転機を迎えるまで、日本語学習のためにさまざまなストラテジーを用いていたことや接触場面に参加することでさまざまな管理があったことが読み取れる。

R: *なんか自分で勉強した方法と違ってありますか、自分なりにやったこと*

KR3: テレビを見ます。面白い番組を自分のなかで見つけて。それにはまるとやっぱり聞きたいって思う気持ちがあるから。興味を持ってるその番組をよく見るようにしたりとか

上の語りでは、KR3 が自分の日本語学習法について興味のあるテレビ番組を見つけて視聴するという KR3 の日本語学習のためのストラテジーが報告されている。KR3 はテレビ視聴のほかに、アルバイトを日本語能力の上達の要因として挙げている。KR3 はまず、日本語能力がそれほど必要とされないアルバイトを選んで始めたことを話しており、そこで話されている日本語はほとんどわからなかったが、日本語であいさつをするという日本語使用があったことを報告している。

KR3: でも バイトですごい勉強になったんで

R: そのちょっとした挨拶とか

KR3: まず最初はそこで勇気をもらった っていうか、なんかこうしゃべる、なんだろう、そういうのに慣れてきたんで

第 5 章でも触れたとおり、KR3 はまず最初のアルバイトでは接触場面に参加して日本語を使うことを意識しており、「接触場面に参加する」ストラテジーを形成していたと考えられる。さらに、滞日期間が進むと、今度は日本語使用が求められるレストランのホールでのアルバイトを始め、日本語を使用する機会を増やしていった。そしてそれが「勉強になった」と語っていることから、このストラテジーが KR3 にとって有効だったことがわかる。

このようなストラテジーの実施とその成功を通して、KR3 は「日本語習得のためには接触場面にしなければならない」という原則が形成されていったと解釈できる。

また、KR3 からはさらにレストランでのアルバイト中の具体的なエピソードがいくつか語られており、接触場面に参加している間に様々な日本語の管理を行っていたことがわかる。

R: 個人的になんか話しかけてくる人とかもいました？

KR3: そうそう、そうれなんですよ、「日本に来て何年？」とか、なんかそういう、よく声をかけてきたりとか。「おねえさんはいくつ？」とかっていうおっさん もいますし。こういうの 流せばいい のか、「日本語よくわかりません」 みたいな。そこで使ったっていう。「その日本語わからないです」 みたいな。わかってるんだけど(笑)

R: 「ちょっと聞こえなかったって」って

KR3: 「すみません、わかりません」って言い訳しつつ、流す方法、ああなるほどなって。

上のエピソードからは、KR3 がアルバイト中にある日本人男性客に話しかけられ、そこでの会話において言語管理があったことがわかる。KR3 は中年の男性客に滞在歴や年齢を質問されることについて、「おっさん」という表現を通して否定的に評価したことを示している。そしてその調整として、「流す」ことを選択し、「日本語よくわかりません」のような日本語表現を使用したと話している。さらに KR3 は、大学在学中の大学の友人たちとのエピソードも語っていた。

R: 韓国人だからどうか、そういうことってありました？

KR3: あんまないですね。飲むときとか食べる時「からいもの好きでしょ、韓国人だから」とかっていう、そういう「韓国人だから飲めるでしょ」という話はあるんですけど (後略)

R: 言われたときとかどうしてました？

KR3: 「ああ好きだよ、飲むの好きだよ弱いけど」みたいな。そんなノリですね。あんまり自分が韓国人って意識がないっていうか、そういう意識を持って話したりとか友だちと、そんなにしないので

この語りの断片では、KR3 が大学の友人によって韓国人であることが顕在化され、「韓国人だから(お酒が)飲めるでしょう」というステレオタイプによる質問をされ、それに対して「飲むの好きだよ、弱いけど」と答えたというエピソードが語られている。この KR3 の応答は、韓国人であることを認めつつも「弱いけど」と付け加えることによって、自分が典型的な韓国人ではなく、個人としてお酒を飲むことが好きなのだということを伝え、ステレオタイプを否定している。これも先の「日本語わかりません」と同じタイプの「流す」ストラテジーの 1 つに含まれると捉えられ、KR3 が最初はアルバイト先で形成したストラテジーを適用範囲を拡大し、大学の友人場面でも実施していたことがわかる。ただ、KR3 の「そんなノリ」という表現や「あまり自分が韓国人だという意識をもって話していない」と話していることから、この KR3 と友人とのやりとりについては、深刻なものではなく、友人同士の軽い冗談のようなものであったと推測できる。つまり、KR3 と友人は「韓国人」であることを意識しない個人的な関係が構築されており、そこで KR3 の韓国人性がリソー

スになってステレオタイプの質問のやりとりを「遊び」として行っていたと思われる。また、この断片では、この友人が KR3 の日本語をどのように評価していたかについても語られていた。

*KR3: (友だちは自分の日本語を) なんかなまってるけど日本のどっかのなまりみたいなイメージで聞いているじゃないかなと思うんですけど (中略) ほんとに日本のどこ出身っていう感じでみんな話してくれたんで*

この語りからは、KR3 が自身の日本語を「なまっている」と外来性が表れていることを評価していること、そしてそれが日本人の友人に認められており、否定的には評価していないことが示されている。これらのエピソードから、KR3 は日本人との接触場面に参加する際、日本人と同じ日本語を使用するのではなく、相手とのやりとりにおいて自らの外国人性を活用した「流す」戦略を使用したりして、その場に最適な日本語のやりとりを実現していることがわかる。さらに、自身の日本語が母語話者とは異なることを自覚しているが、それは周囲にも認められていることも知っており、否定的な評価はしていない。こうした接触場面における日本語の管理による戦略の使用の習慣化や、日本語使用に対する評価の蓄積が KR3 の「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」という原則の形成を促したのではないかと推察される。

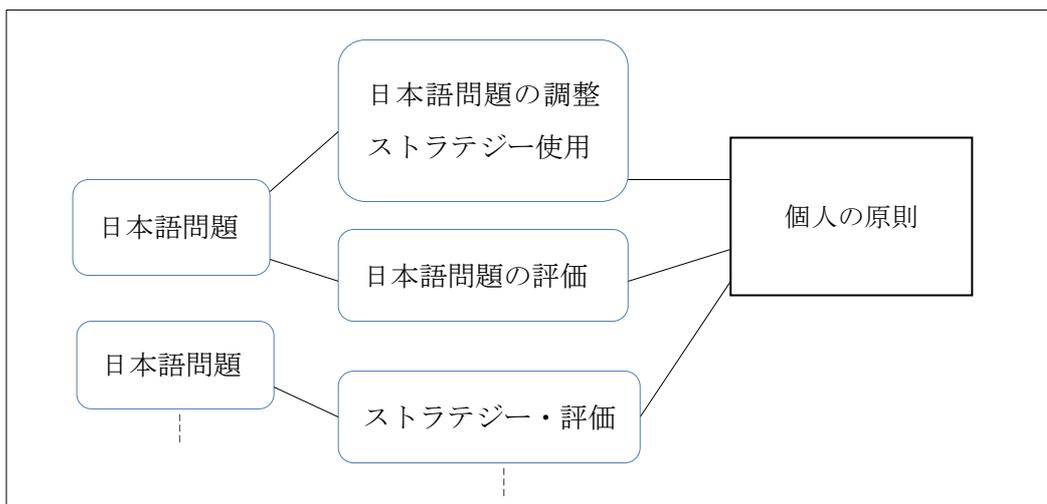


図 6.2.4. 原則の形成プロセス

以上のように、KR の日本語使用・学習の原則は、何らかの日本語問題に対する言語管理が繰り返され、そのストラテジー使用や他者評価・自己評価が蓄積されることで形成されていくと考えることができる。

#### 6.2.2.2 原則の変容に関わる原則とストラテジー

形成された KR の原則は、そのまま永続的に維持されることはない。KR の日本滞在が長期化し、参加するネットワークや周囲の環境が変化すると、それまでの KR の原則が適用されなくなっていくこともあるだろう。場合によっては、新たな日本語問題に直面し、接触場面における日本語の管理が行われることも考えられる。そして、それらが相互に影響して、KR のそれまでの原則が適用されなくなる代わりに、別の原則が形成されるといった原則の変容が起こりうる可能性がある。

本研究では、現在、KR が日本語の問題を抱えているケースに注目し、これらの管理の特徴から、原則がいかに変容していくかを明らかにしていく。

##### (1) 原則にもとづいた日本語使用が新たな言語問題を引き起こしている場合

日本社会において新しいネットワークに参加したり、新たな役割をもつようになったとき、それまでの日本語使用・学習の原則を適用すると、それが日本語問題につながることもある。そして語りにおいては、その問題に対する調整としてのストラテジーが提示されることになる。

KR4 の場合、来日後、日本語習得の転機を迎え、インタビューから 3 つの原則が抽出された。

#### **KR4 個人の原則**

原則 1 「日本語習得のためには接触場面に参加しなくてはならない」

原則 2 「日本人と同じ日本語を話さなくてもよい」

原則 3 「日本語では上下関係をそれほど気にしなくてもよい」

上の 3 つの原則のうち、原則 1 は日本語習得の転機を迎えて習得が成功したため、共時的な文脈では取り上げられることはない。現在の KR4 の日本語使用に適用されていたのは原則 2 と原則 3 であったが、参加する場面によっては、これらの原則にもとづいた日本語

使用が問題につながっていた事例もみられた。KR4 によって挙げられた現在の日本語問題は以下の通りである。

#### **KR4 の日本語問題**

問題 1 「教会の通訳班のリーダーに発音の間違いを指摘された」

問題 2 「教会で自分の気持ちを話すときに、適切な語彙が浮かばなくて説明が難しい」

問題 3 「大学の先生に敬語で話したら通じなかった」

このように、KR4 は教会で通訳をする場面、自分の気持ちを伝える場面、大学教員とのコミュニケーションにおいて日本語問題に直面している。これらの問題は、問題 1 と問題 2 は KR4 の原則 2 にもとづいた日本語使用、問題 3 は原則 3 にもとづいた日本語使用によって引き起こされたと推測される。つまり、問題が生じた場面では、現在の KR4 個人の原則にもとづいた日本語使用は通用しなくなっていることがここで示されている。

KR4 のこれらの場面への参加は、インタビューの 1 年ほど前から始まったもので、KR4 にとっては、教会で通訳班に新たに所属することや大学進学は新しいステップであった。それまではアルバイト先で日本語を話すことが生活の中心であったが、現在は環境の変化によって参加する場面が異なり、そこで期待される日本語使用も異なる。そのため KR4 は新たな日本語問題に直面し、それに対処しなければならなくなっているのである。

KR4 はこの問題に対して、回避する問題としては捉えていない。むしろ、これからその場面における役割を果たせるようになりたい、つまり想像のアイデンティティとして獲得したいと考えており、問題を解決するための調整ストラテジーが使用されている。たとえば、上記の問題に対しては、次のようなストラテジーが実施されていた。

#### **KR4 の問題に対する調整ストラテジー**

ストラテジー1 「会話で、受容と産出に関わる逸脱を問題として解決する」

ストラテジー2 「プレゼンテーションのときは発音を読んで練習する」

ストラテジー3 「わからない言葉を聞き返す」

ストラテジー4 「あらかじめ単語を調べてから話す」

ストラテジー5 「先生には尊敬語を気をつけて話す」

実際には他のストラテジーも実施されていると予想されるが、インタビューで挙げられただけでも KR4 が問題の解決のためにさまざまなストラテジーを実施していることがうかがえる。この KR4 の原則の状況をあらわすと、以下の図のように捉えられる。

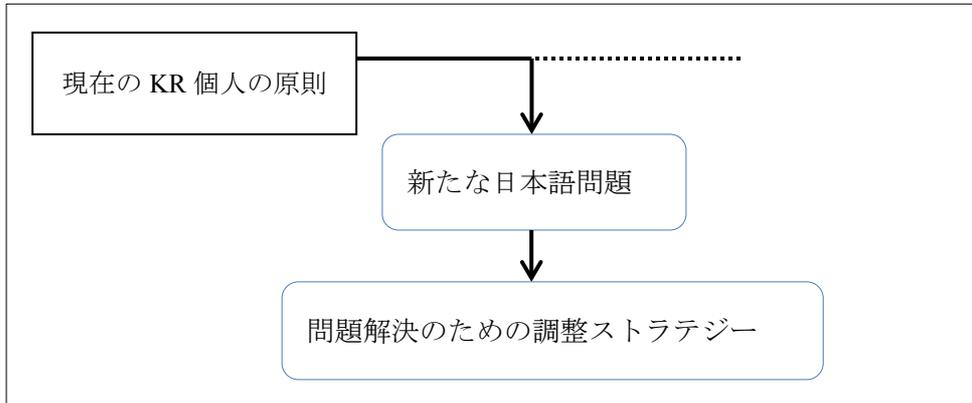


図 6.2.5. KR の原則が新たな日本語問題を引き起こす場合

以上のように、ある日本語使用の原則は、KR の参加するネットワークが変化したり、拡大することによって、ある場面では問題を引き起こすようになる。KR4 の場合はそれが想像のアイデンティティ獲得に関わる問題であったため、原則の適用を弱め、日本語問題の調整をするためのストラテジーを意識していたと考えることができるだろう。

## (2) 過去の原則が現在のストラテジーに影響を及ぼしている場合

現在の語りには原則としてあらわれていないが、語られたストラテジーが KR の経歴からみて、過去に形成された原則と関係性があるように見える場合がある。これは、過去に形成された原則が、その後の KR の変化によって適用されない場面が増えたため、共時的な文脈では限定された場面で使用されるストラテジーとして語られたのだと思われる。

KR1 のケースでは、さまざまに語られたストラテジーのうち、1 つに「韓国のことには相手に聞かれたら長く話す」というストラテジーがあった。これについて、KR1 は次のように語っている。

*KR1: 来たばかりときはこの規模がすごい大きかったですけど、なんか韓国を紹介したいよみたいな。だんだんだんだん減るんですよね、だんだんだんだん減って (中略) 気持ち的にはちょっと少し減ってるかな (中略) けど自分の国の良い面を見せてあ*

げたいという気持ちは当然あると思いますので

この語りから、「韓国のことを話す」ことについて、KR1 は来日当初は現在よりもその意識が強く持っていたことがわかる。これは、当時の KR1 のネットワークから見ても認められる。来日してから 5 年間 KR1 が暮らした町では、「外国人が少ないのでみんな興味を持ってくれた」という。さらに、KR1 は韓国や韓国語に興味をもつ日本人がつくった韓国語学習会に招かれ、講師として参加してきた。つまり、当時の KR1 は自身を文化資本として位置づけ、接触場面に参加していたと思われる。このような時期においては、KR1 の「韓国のことを話す」管理は一般的な態度として作用していたと考えられる。しかし、現在 KR1 が在籍している大学に移ってから、KR1 はその大学には留学生が多く、友だちができなかったと話しており、文化資本としての参加する機会もほとんどなくなったのではないかと推測される。こうした変化に伴い、KR1 の「韓国のことを話す」という原則も適用されなくなり、限定された場面においてのみ使用されるようになったと理解することができる。

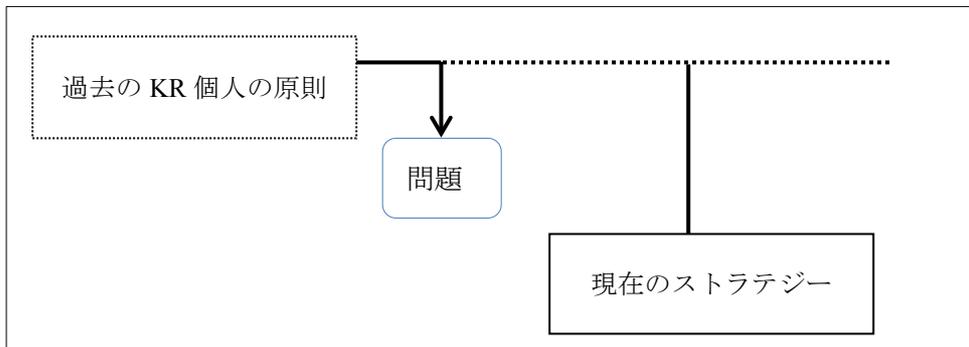


図 6.2.6. 過去の原則にもとづいたストラテジー

以上のように、ある日本語使用の事象について、原則として捉えられるか、ストラテジーとして捉えられるかは、その時の KR の状況やネットワークの特徴によって異なってくる。ある日本語使用の原則が受け入れられなくなったときに、単純に消滅するのではなく、その時の状況に合わせてレベルを変えて適用させることもありうるのである。

### (3) 過去の原則と現在の日本語問題の両方がストラテジーに影響を及ぼす場合

本研究の調査協力者のうち、KR5 と KR6 の語りからは原則は抽出されなかった。これは、

第 5 章において両者とも現在の日本語使用を否定的に評価していたことが関係していると説明された。一方で、KR5 と KR6 の場合、ストラテジーは多く提示されていた。さらにストラテジーの内容を見ると、現在の日本語問題に対する調整としてのストラテジーと、それまでの肯定的に評価していたころの日本語使用に関わるストラテジーとの両方向のタイプに大別することができた。これはつまり、これまでの原則にもとづいたストラテジー使用による日本語使用が行われているのと同時に、原則から生じた日本語問題の解決が図られていることを示しており、原則としては潜在化されているが、ストラテジーのレベルでさまざまな管理が行われていると言える。

KR6 の場合、調査した時期は、大学を卒業して、他大学の大学院に進学して 3 ヶ月が経った頃であった。KR6 の日本語の転機は大学での友人ネットワークが大きく影響しており、現在の KR6 の日本語のベースとなっていると考えられる。ところが、それが大学院に進学して否定的に評価されることになり、KR6 は新たな日本語問題に直面していた。具体的には、大学院の先輩に KR6 の日本語の発音が正確ではないこと、日本語表現が乱暴で「汚い」と言われたエピソードが報告された。

こうした問題に対し、KR6 は大学院では「新しいモードが必要」だと考え、調整するためのストラテジーの使用が語られた。

#### **KR6 の問題に対する調整ストラテジー**

ストラテジー1「会話でメッセージの受容と産出の問題を解決する」

ストラテジー2「日本人がしているように意識して相手を褒める」

一方では、これとは反対の方向性をもつストラテジーが語られた。

#### **KR6 の現在のストラテジー**

ストラテジー1「会話で自分の外来性を「遊びとしての対立」の実現に活用する」

ストラテジー2「相手の性格を見て、大丈夫そうなら自分の意見をはっきり言う」

ストラテジー3「仲の良い友だちには厳しい言い方をする」

ストラテジー4「友だちには本当に褒めたいと思ったときに褒める」

ストラテジー5「相手が年下で相手がタメ語を使ったら、自分も使う」

上に挙げられた戦略は、日本語の標準的な規範を緩めるタイプの戦略であり、否定的に評価された日本語の正確性や「汚さ」を調整するものではない。むしろ、日本語習得の転機である大学の友人ネットワークで形成された原則と関係性があると考えたほうが自然であろう。また現在、これらの戦略は、使用する相手が限定されており、親しい友人かどうか、または相手の性格や反応によって受け入れられるかどうかで使用を決定づけている。つまり、この戦略と相互関係をもつ原則は、これまで KR6 の日本語使用のベースとなっていたものであるが、現在は適用されなくなっており、適用範囲を限定した戦略が示されていると考えられる。

このように、KR6 からは日本語問題を調整するタイプの戦略と、これまでベースとなっていた日本語の原則の適用範囲を限定した戦略とが語られた。これらに加え、KR6 からは両方の特徴を備えた戦略が挙げられた。

#### **KR6 の問題に対する調整戦略**

戦略3「日本人をわざと褒めるときは、冗談のように言う」

この戦略は、KR6 が日本人のように本当は褒めたい気持ちがなくても、意識的に相手を褒めようとするときに、冗談のようにして話そうとするものである。この戦略の「意識的に相手を褒める」という部分は調整戦略として位置づけられる。一方、「冗談にする」要素は、現在の戦略に挙げられた「遊びのしての対立」との関連性が強い。すなわち、KR6 は問題を調整するための日本語の規範に従った「意識的に相手を褒める」という行為を、そのまま日本語規範を適用するのではなく、自分のこれまでベースとしてきた日本語使用の戦略を組み合わせ、「冗談にして相手を意識的に褒める」戦略を形成したと推測される。このように、KR6 は問題解決のための戦略に、自分のベースとなる日本語使用の要素の一部を取り入れることによって、個人の日本語使用を実現しようとしているのではないかとと思われる。

また、KR5 の場合は、調査した時期は KR5 が大学3年生の時であった。KR5 は大学に入学する前は日本語を肯定的に評価していたが、入学後はさまざまな問題に直面し、否定的に評価するようになった。入学前の KR5 の日本語使用は、外来性が周囲に認められ、リソースとして活用するタイプのものではなかった。例えば、「はっきり言う KR5 ちゃん」というニ

ックネームをつけられたように、はっきりとした意思表示をしていた。また相手呼び捨てにして呼んだり、間違った日本語を使っても冗談として周囲に受け入れられ、KR5自身もそれを楽しんでいた。ところが、大学入学後はこうした外来性が大学の同級生に受け入れられなくなり、距離を置かれるようになったという。それでも現在は少数ながら親しい友人ができて、そこでは「自分らしくいられる」と話している。

KR5によって提示された戦略は、大きく分けて、日本語の規範に従うタイプと外来性を表示していくタイプもので、前者は大学で否定的評価された日本語使用に対する調整、後者は肯定的に評価されていた過去のKR5の日本語使用にもとづいたものであった。

#### KR5の問題に対する調整戦略

- 戦略1「会話では急に話題を変えないようにする」
- 戦略2「会話では相手の話に1つ1つあいづちをうって聞く」
- 戦略3「俗語や男の子っぽい表現を使わない」
- 戦略4「相手呼び捨てにしない」
- 戦略5「わからない日本語があっても質問しない」

上の調整戦略は、「〇〇しない」という自身の日本語使用を制限しようとするものである。おそらく急に話題変更することや聞き手としての行動を意識しないこと、俗語や男性らしい表現を使うこと、相手呼び捨てにすることは、それまでのKR5が自然に行っていた日本語使用であったと推測され、それは先のインタビューで「はっきり言う KR5ちゃん」と言われていたころの日本語使用の傾向とも一致する。つまり、ここで挙げられた戦略は、それまでのKR5のベースとなっていた日本語使用が否定的に評価され、その問題を調整しようとする戦略であると理解される。

#### KR5の現在の戦略

- 戦略1「友だちと話すときは話題の流れは考えないで話す」
- 戦略2「友だちと話すときはいちいちあいづちは打たない」
- 戦略3「友だちには言いたいことをはっきり言う」
- 戦略4「友だちには謝罪を簡単にすませる」
- 戦略5「友だちの前では韓国語が出ても気にしない」

ストラテジー6「友だちの前ではだらっとした姿勢で話す」

ストラテジー7「友だちとの会話ではわからないことは質問する」

KR5 に語られた現在のストラテジーは、すべて友人との場面に限定して報告されている。ストラテジーの内容は、先の調整ストラテジーとは反対の方向性が示されていることから、もともと KR5 が形成していた日本語使用の原則と関係したものであると考えることができる。すなわち、この KR5 のストラテジーの語りは、KR5 がそれまで KR5 のベースとなっていた日本語使用が否定的に評価されたため、現在はその一部を友人場面に限定して使用していることを示している。

ただ、実際の会話で見られた KR5 のストラテジーには、上のストラテジーとは異なる特徴をもつものがあつた。

ストラテジー8「自分の逸脱の否定的な要素を緩和させる」

これは、KR5 が友人 J5 との会話の中で、自身の考えを示すときに、直接的に意見を述べるが、それに笑いやその意見をもつ根拠の説明を付加することによって、意見表明の強さを緩和させようとするものである。

例 5: 逸脱の否定的な要素を緩和する (KR5×J5)

(J5 は学芸員や公務員の試験を受験するため、勉強の大変さと不安な気持ちを述べている。)

01 J5: あ:どうしよう, え:や[めようかな::

02 KR5: [うちなにもしてないし, あ::

03 J5: 学芸員やめようかな::

04 KR5: でもさ:資格:は:

05 J5: うん

06 KR5: いっぱいあればいっぱいあるほどいいわけではない

07 J5: お

08 KR5: うん.h どっかに進むかによってその資格がまったくいらなくときにはまんたくなんか, 重要じゃないから

09 J5: うん, ね.

10 KR5: うん

11 J5: なんで持ってるんですかって

12 KR5: そう, みたいな

13 J5: 聞かれてなんとなくですじゃ意味がないもんね:

14 KR5: そうそう

上の例を見ると、KR5 は「資格:は:」「いっぱいあればいっぱいあるほどいいわけではない」(04KR5、06KR5)と自分のもつ意見を断定的に表明している。しかし、単に意見を表明するだけでなく、08KR5 の「うん」と笑い、それに続く意見の根拠に関する説明(進路によっては資格は重要ではなくなる)を加えることで、その強い印象を和らげている。

このストラテジーのうち、「意見をはっきり表示する」要素は、現在のストラテジー3「友達には言いたいことをはっきり言う」と合致する。またそれを和らげる要素は、「はっきり話す」ことを否定的に評価されたことに対する調整として作用しており、調整のためのストラテジーとして捉えられる。このことから、KR5 はそれまでの自身の日本語使用を友人場面に限定して実現させているが、それは当時のままではなく、否定的な評価に対する調整の要素を取り入れた日本語使用を実現しており、これまでのストラテジーを変容させていると解釈することができる。

以上のように、KR6、KR5 のストラテジーを考察すると、現在の日本語使用が否定的に評価されていて安定した原則が語りにあらわれない段階にいる場合、KR は否定的に評価された日本語問題に対する調整を実施する一方で、これまでの自分の日本語使用が適用できる範囲でそれを実現することも行っており、さらに、両方向の特徴が融合した新しいストラテジーが作り出されることもある。言い換えれば、KR は自身の日本語使用の原則が安定している時期よりも、参加する個々の場面をより意識した日本語使用を行っており、自身の日本語使用について模索している時期にいると言える。

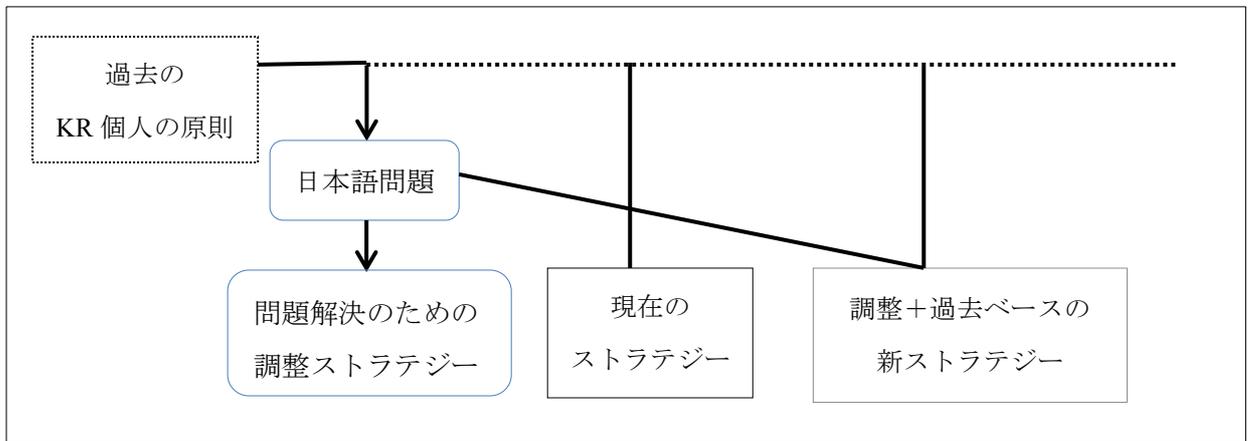


図 6.2.7. 原則とストラテジーの変容

上の図を見ると、ある日本語使用が受け入れられなくなった場合、その事象に対して多様なストラテジーが形成されていることがわかる。本研究のデータからは確認できなかったが、さらに時間が経ってこうしたストラテジーによる日本語使用が蓄積されていくと、過去の原則が変容したり、新たな原則が形成される可能性もあるだろう。

### 6.3 本章のまとめ

本章では、KR の接触場面に向かう日本語の管理について、KR の原則とストラテジーの関係性をさぐることによって、管理がいかんして実現しているかを考察してきた。KR の原則とストラテジーを階層性をもった開かれた系としてとらえることによって、KR がもっている複数の原則がどのような関係性をもってストラテジーの適用につながっているかを明らかにすることを試みた。その結果、共時的な観点からみた場合、KR があるストラテジーを選択するとき、関係性のある原則のうちのいくつかを優先的に適用したり、ある原則との関係を弱めたりした結果、そのストラテジーが選ばれたと考えることができる。そしてその原則の適用を決定づけるのは、KR が参加する場面性や相手との関係性、さらに自分の外来性がどれくらい共有されているかという要素であった。これは、KR が日本で長く暮らす過程で多様な接触場面に参加してきたこと、日本人と外国人または非母語話者という関係だけではなく、様々な役割をもった関係性を構築してきたこと、さらには自身の外来性

が相手に共有される経験をしてきたことで、こうした管理が可能になっていると考えられる。

通時的な視点から見た場合、ある日本語使用の原則を形成しても、それが変わらず適用されていくわけではなく、参加する場面や環境が変化することで、一般的な態度としては捉えられなくなり、適用される場面が限定されていくことも起こりうるようになった。とくに自身の日本語使用が承認されない状況に置かれた場合、KRはその問題に対する調整も含め、さまざまなストラテジーを形成していく。これは、KRがもつストラテジーのバリエーションが拡大されていることを示しており、それはKRの管理のバリエーションも増やすことにつながっているだろう。

以上の考察から、KRは接触場面に参加するにあたり、その場面にもっともふさわしいと考える原則を適用し、ストラテジーを選択していることが確認された。こうしたKRによる習慣的な管理の様相は、KRが個々の場面に自分の望ましいアイデンティティをもって参加するために、自分の日本語の外来性をその場におけるもっとも適切なやり方で表示しようとしていることを示唆している。

## 第7章 結論

本研究では、日本に長期滞在する韓国人が自身の日本語をどのように管理しているのかを共時的・通時的側面から考察した。本章ではまず本研究のおもな調査結果をまとめ、KRによる日本語の管理の特徴について考察する。最後に、本研究の課題と日本語教育に対する提案を示す。

### 7.1 KRの社会的ネットワークと日本語接触

第3章で明らかになったように、本研究のKRは、韓国で暮らしているときから、本人が意図していなくても直接的、間接的に日本との接触する機会があった。家族や親戚が日本に滞在した経験をもっていたり、日本に移住しているケースも珍しくなく、来日時にすでに日本に知り合いがいたというKRも多かった。また、人的なネットワークがない場合でも、韓国ではメディアで日常的に日本の歴史や文化について取り上げられており、KRは日常生活のなかでそれらに自然に接触し、日本に対する知識を得ていた。

日本語学習についても、KRは勉強したいと思ったときには気軽に学習できる環境にあったことがわかった。公的機関としては、高校の第二外国語科目で日本語が選択できるようになっており、大学の教養科目にも日本語が含まれていた。また、民間の日本語学校も多く、留学準備をはじめ、趣味として日本語を習い始めたKRもいた。KRのインタビューからは、日本語学校にはオーソドックスな日本語の授業だけでなく、ニュースやドラマなどメディアを活用したクラスや日本語能力試験対策のクラスなどさまざまなコースが提供されており、KRの多様なニーズに対応していたことがわかる。一方、教育機関以外でも、KRは日本語を学習する環境に恵まれていた。とくにインターネットサイトはよく利用されており、日本のドラマや雑誌の韓国語訳が公開されているため、趣味として楽しむだけでなく、日本語学習の教材としても活用されていた。さらに、日本の歌や文化について共通の趣味を持つ人が集まっていたという報告もあり、こうしたコミュニティへの参加も日本語を学ぶ機会になっていたと考えられる。

このように韓国人にとって日本や日本語は身近なものであり、そのアクセスのしやすさが日本への移住を促していたと考えることができる。

一方、KRが来日してからは、日本では韓国文化が流行しており、韓国に親しみをもつ日本人との接触があったことが特徴的であった。こうした日本人の韓国人に対する肯定的な

評価は、KR が日本人との接触場面に参加し、日本社会において社会的ネットワークを拡大させていくことを容易にさせていただこう。

以上のような日本と韓国の関係、および両国の社会的状況により、本研究で対象となった 2000 年前後に来日した KR は、比較的日本語学習環境が整ったところで日本語を学び、日本人との接触場面に参加しやすい環境に置かれていたと考えることができる。

## 7.2 韓国人居住者による外来性管理の特徴

### 7.2.1 会話における韓国人居住者の日本語使用

第 4 章では、KR が親しい日本人と会話している接触場面において、KR の日本語にどのような特徴が見られるかを第三者および会話参加者の視点から考察をおこなった。その結果、留意された逸脱は、会話参加者よりも第三者によるものが圧倒的に多く、その評価は否定的なものが優勢であった。第三者によって留意された逸脱は、第二言語習得や語用論研究において韓国人の誤用やコミュニケーション問題の要因となる韓国人の特徴と重なる部分が多く、KR の日本語の特徴が示されていた。一方、会話の参加者からみると、コミュニケーション問題は生じておらず、逸脱は留意されていないか、留意されていたとしても評価はされていなかったと考えられる。会話の参加者にとって逸脱は習慣的なものとなっており、会話のやりとりを通して逸脱を回避したり、弱めたり、リソースとして活用されたりしている様相がみられた。さらに、逸脱をめぐるやりとりは、KR と J との間である程度決まったパターンがあり、会話を安定して進行する働きをしていた。このように、第三者からは否定的に評価される逸脱であっても、当事者の視点から見ると、2 人の間で特定の逸脱や逸脱のやりとりのパターンが共有されており、それによって逸脱は、親しさを構築・維持するための戦略として作用していることがわかった。

このように考えると、会話における KR の逸脱は、第三者には日本語能力を測るものとして捉えられ、会話の参加者にはコミュニケーションを達成して良好な人間関係を維持・促進するための戦略として捉えられていたことがわかる。つまり、KR の日本語使用の管理は、第三者の視点からは日本語学習ための評価、会話参加者には場面参加のための調整となっていたことが明らかにされた。

### 7.1.2 韓国人居住者の習慣的な日本語の管理

第 5 章では、KR が現在までどのような過程をたどって日本語を習得してきたのかを言語

バイオグラフィーから分析し、KR が日本語の使用や学習に対する原則を形成していることを明らかにした。KR の日本語習得のプロセスには、日本語能力に対する評価が肯定的に変化する転機が存在が発見されたが、そこには接触場面への参加が大きく関わっていた。こうした転機をきっかけに形成された KR の原則は、「日本語習得のためには接触場面に参加しなければならない」、「日本語母語話者と同じ日本語を話さなくてもよい」という接触場面への参加が意識されたタイプのものが形成されていた。一方、KR の多くは、「日本語は母語話者のレベルまで勉強し続けなければならない」、「日本語の規範を習得する」といった、日本語の標準的な規範に向かうタイプの原則も語っていた。高民定(2016)では、日本の外国人移住者のうち、出身地域での言語環境が単言語中心で、日本では母語と日本語の 2 言語を主として使用するグループの外国人移住者は、日本語の規範意識が強い傾向があることを指摘している。本研究における KR も同じグループに属しており、こうした管理の傾向があらわれていたと言えよう。

また、第 6 章では第 5 章で分析した日本語使用・学習の原則と戦略、第 4 章で分析した逸脱の調整戦略を類型論的アプローチによって階層的な関係性を考察し、習慣化された日本語の管理のフレームワークを提示した。KR は日本語の使用や学習に対して複数の原則と複数の戦略をもっており、KR は習慣的に参加する場面において適切な原則を優先させ、戦略を選択している。この戦略の選択や原則の適用は、場面性や相手との関係性、また相手との KR の外来性の共有度などが関わって決定づけられる。また、こうした原則や戦略は固定されたものではなく、KR の参加する場面や言語環境が変わることで、適用される場面が限定されたり、変容していくこともありうる。その過程において、KR は新たな日本語問題に直面することになるが、それに対する調整戦略を新たに形成していくことは、管理のバリエーションを増やすことにもつながる。つまり、KR が日本社会においてさまざまな場面やネットワークに参加しようとする、なんらかの日本語の問題に直面し、調整していかなければならない状況に置かれるが、それは KR の管理のバリエーションが増えることにもつながる。そしてそれによって、KR が参加できる場面が拡大され、日本人との関係性も深まっていくのではないかと考えられる。

以上のような KR の習慣的な日本語の管理は、いかに正しい日本語を話すかという管理ではなく、どのくらい日本語らしい日本語を話すか、または自分らしい日本語を話すかという管理であった。つまり、KR は参加する場面のさまざまな要素を考慮し、その場面にもつ

ともふさわしいやり方で外来性を表示して、望ましいアイデンティティを実現しようとしているのである。こうした管理の仕方は、KR が自身の外来性を前提として接触場面に参加することが可能になっていることを示唆しており、KR の外来性が接触場面に参加するリソースとして価値づけられていることを示している。

### 7.3 移民に対する言語政策と日本語教育への提案

本研究で対象とした KR は、全員が来日後は日本語教育機関で学ぶ機会をもっていた。しかし、KR はこれらを大学進学のための予備校や試験対策のための場として利用しており、個人の日本語習得の場面としてはとらえていなかった。KR は自分自身で社会的ネットワークを構築し、みずから日本人との接触場面に参加することによって、日本語能力の獲得を実現していた。

生活者としての外国人移民のケースを考えた場合、KR のように日本語教育機関で学ぶ機会をもたない人も多いと思われる。こうした人びとは、ボランティアの日本語教育を受けていることも考えられるが、基本的には仕事や周囲の日本人とのやりとりを通して自然習得で日本語を身につける人が多いと予想される。社会的実践が学習に有効であることはレイヴとウエンガーですでに論じられているが、日本語学習者の場合には、そこに接触場面という要素が加わることになる。かれらは接触場面においてさまざまな問題に直面すると考えられ、接触場面への参加の経験が浅いときには、その問題を 1 つ 1 つ評価し、調整計画を立て、調整を実施していくことになる。こうした接触場面における日本語問題の管理の蓄積が、本研究で明らかにしたような習慣的な日本語の管理を形成すると考えるならば、日本語教育においては、外国人移民の日本語の管理をサポートすることが有用であり、伝統的な日本語教育がしているような、教師が必要だと判断した日本語の知識を学習者に提供し、教室で練習するという方法はあまり現実的ではないだろう。

近年、外国人移民を含め日本語を学習する人のバックグラウンドは多様化しており、滞在期間も 1、2 週間の短期留学から長期滞在の人までさまざまである。また、仕事や学校の勉強は英語でおこない、日本語は生活で使用するのみという人も多い。こうした移民や留学生は、必ずしも日本語の 4 技能をバランスよく学ぶ必要性はない。実際の接触場面においては、日本語で聞いて英語で話す、または、会話は日本語で行うが書き言葉では他の言語を使うといった日本語能力の不均衡も認められる。こうした学習者の多様化や日本語能力の不均衡さを前提として考えると、かれらにできる日本語の支援は、単なる日本語知識

の伝達や日本語使用の練習というよりもむしろ、接触場面において日本語の問題に直面したときに行う管理をサポートすることにあるのではないかと思われる。たとえば、移民や学習者が実際に直面した日本語の問題を解決しようとするときに、有効な日本のリテラシーを伝えたり、調整計画の可能性を一緒に考えられるような学習支援ツールのようなものを提供し、移民や学習者が自律的に学ぶことができるような環境を整えるといったことが検討できるだろう。日本が正式には移民を認めていない限り、移民に対する言語政策が実施される可能性は低い。しかし、現実的に外国人移民は増えている。今後は、移民が自律的に日本語が学習できる環境を整え、接触場面への参加とそこでの言語管理をサポートする体制を検討していくことが必要であると考えられる。

#### 7.4 今後の課題

本研究では、KRの日本語の管理を共時的および通時的な観点からさぐることを目的とし、KRの習慣化された日本語の管理のフレームワークの可能性を提示することができた。しかし、このフレームワークは大まかなもので、さらに厳密化させていく必要がある。たとえば、原則の優先性や適用を決定づける要素とそのプロセスはさらに考えていく必要があるだろう。これらの考察を進めるためには、より詳しい分析データが必要となる。言語バイオグラフィーの語りの内容だけでなく、インタビューを相互行為としてとらえ、インタビュー場面でのKRの日本語の管理を分析したり、会話における日本語使用をより多様な場面のバリエーションにおいて記録し、分析することも考えられる。今後はこうした方法論を検証し、理論的枠組みをさらに精緻化させていくことが求められる。

## 参考文献

- 安龍洙 (1996). 韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について: 非現場指示の場合 東北大学文学部日本語学科論集 6, 1-12 東北大学
- 伴紀子・宮崎里司他 (1997). インドネシア人日本語学習者のインターアクション行動: 学習ストラテジーの観点より アカデミア文学・語学編, 63, 33-43 南山大学
- Blommaert, J. (2010). *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blommaert, J. and Backus, A (2013). Superdiverse repertoires and the individual. In I. de Saint-Georges and J. J. Weber (eds.) *Multilingualism and Multimodality: Current Challenges for Educational Studies*. 11-32. Rotterdam: Sense Publishers.
- Bourdieu, P. (1986). The forms of capital. In Richardson, J. (Ed.) *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*. 241-245. New York: Greenwood Press.
- Burt, K.M. and C. Kiparsky. (1974). Global and local mistakes. In J.H. Schumann and N. Stenson (eds.) *New Frontiers in Second language Learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- 趙南星 (1991). 韓国人の日本語の誤りの評価: 日本人話者と韓国人話者による誤りの重み付け 日本語と日本文学 19-30.
- 鄭加禎 (2006). 謝罪表現義務感 - 日本と台湾の対象研究 - 社会言語科学, 8(2), 43-52.
- Clyne, M. (1990). *Community Language: The Australian Experience*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 崔文姫 (2012). 日本語学習者に対する日本語母語話者の評価: 共分散構造分析モデルに基づいて 人文学報 458, 23-48.
- Corder, S.P. (1967). The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics*. 5, 161-170.
- Denzin, N. K. (1989). *Interpretive Biography, Applied social research methods series 16*. Sage Publication. (デンジン N. K. (1992). エピファニーの社会学: 解釈的相互作用論の核心 マグロウヒル出版)
- 遠藤知佐, 宮崎里司 (2003). 日本語による相互行為の機会と場を実現させる要因について - 日本語習得を目指した家族滞在資格の夫人たちの事例 留学生教育, 8, 221-240.
- Fairbrother, L. (2000). Analysis of Intercultural Interaction Management within a Party Situation.

- 社会言語科学 2(2), 33-42.
- フェアブラザー, リサ (2003). 接触場面と外来性-日本語母語話者のインターアクション管理の観点から-千葉大学大学院博士学位論文
- Fan, S.K.C. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13(3), 237-252.
- ファン, サウクエン (2002). 香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション 日本研究所紀要 3, 21-35. 神田外語大学
- ファン, サウクエン(2006). 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所 (編)日本語教育の新たな文脈ー学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性 - 120-141. アルク
- ファン, サウクエン (2017). 外国語使用のバリエーション:「母語・非母語」を超えた言語行動の多様性 ことばと文字 8, 73-83.
- 黄鎮杰 (1994). 在日韓国人の言語行動: コード切り替えに見られた言語体系と言語運用 日本学報 13 大阪大学
- Ferguson, C. (1959). Diglossia. *Word*. 15, 325–340.
- Fishman, J. (1967). Bilingualism with and without diglossia; diglossia with and without bilingualism. *Journal of Social Issues*. 23(2), 29–38.
- Gass, S. M. & Varonis, E. M. (1994). Input, interaction, and second language production. *Studies in Second Language Acquisition*. 16, 283-302.
- Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gumperz, J. (1964). Linguistic and social interaction in two communities. *American Anthropologist*. 66(6), 137-153.
- 春原憲一郎 (1992). ネットワーキング・ストラテジー-交流の戦略に関する基礎研究- 日本語学 11, 17-26. 明治書院
- 長谷川紀子 (2005). 日本語学習者の割り込み発話 日本文化論叢 6, 105-190 千葉大学
- 長谷川典子 (2011). 韓流ドラマ視聴による韓国人イメージの変容: 日本人学生への PAC 分析調査結果から 北星論集 48(2), 13-33.
- Haugen, E. (1966). *Language conflict and language planning : the case of modern Norwegian*. Harvard University Press.
- 原田朋子 (1998). 一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか 北海道大学留学生センター紀要 2, 57-167.

- 許明子 (2008). 韓国人日本語学習者の「(ら)れる」の使用に見られる誤用分析 文藝言語研究 言語篇 53, 51-61. 筑波大学
- 堀籠未央 (2006). 韓国語の重複閉鎖と単一閉鎖について  
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/3/3-14.pdf> (2017年8月11日取得)
- 藤崎宏子 (1991). ライフコースにおける転機とその意味づけ 森岡清美・青井和夫(編) 現代日本人のライフコース 日本学術振興会 73-99 頁
- Hymes, D.H. (1974). *Foundations of Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania
- 飯野令子 (2009). 日本語教師の「成長」の捉え方を問う: 教師のアイデンティティの変更と実践共同体の発展から 早稲田日本語教育学 5, 1-14.
- 飯野令子 (2015). 日本語教育に貢献する教師のライフストーリー研究とは 三代純平(編) 日本語教育学としてのライフストーリー 248-273. くろしお出版
- 伊集院郁子 (2004). 母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分けー母語場面と接触場面の相違ー 社会言語科学 6(2), 12-26.
- 任榮哲 (1993). 在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態 くろしお出版
- 任榮哲 (2006). 韓国人とのコミュニケーション 真田信治(監修) 任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 7-19 おうふう
- 任榮哲・生越直樹 (2005). 日本語と韓国語・朝鮮語をめぐって 社会言語科学 8(1), 1-4.
- 今田恵美 (2015). 対人関係構築プロセスの会話分析 大阪大学出版会
- 稲熊美保 (2005). 韓国人日本語学習者による「～てあげる」「～てさしあげる」の使用について 愛知文教大学論叢 8, 107-123. 愛知文教大学
- Isabelli-García, C. (2006). Study abroad social networks, motivation, and attitudes: Implications for second language acquisition. In M. A. Dufon & e. Churchill (Eds.), *Language learners in study abroad contexts*. 231-258. Clevedon: Multilingual Matters.
- 石崎晶子 (2000). 学習者の言語行動に対する日本語母語話者の評価 第二言語としての日本語の習得研究 3, 19-35.
- 磯野英治・上仲淳 (2014). 日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴 大阪大学国際教育交流センター論集 多文化社会と留 学生交流 18, 31-39. 大阪大学国際教育交流センター
- 鄭在恩 (2009). 日韓の勧誘ストラテジーについて 言語と文化 10, 113-132.

- 全鍾美 (2010) 初対面会話における韓国人日本語学習者の自己開示の研究 小出記念日本語教育研究会論文集 18 小出記念日本語教育研究会 pp.5-22
- カドゥシン、チャールズ (2015). 社会的ネットワークを理解する 北大路書房
- 片桐隆嗣 (1997). 質的調査の技法 北澤毅・古賀正義(編著) 〈社会〉を読み解く技法—質的調査法への招待 23-44. 福村出版
- 川上郁雄・尾関史・太田裕子 (2011). 「移動する子どもたち」は大学で日本語をどのように学んでいるのか: 複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに 早稲田教育評論 25(1), 57-69.
- 金庚芬 (2007). 日本語と韓国語の「ほめの談話」 社会言語科学 10(1), 18-32.
- 金庚芬 (2012). 日本語と韓国語の『ほめ』における男女差 明星大学研究紀要-人文学部- 46, 83-94.
- キム・キョンソン (2008). 韓国人超上級日本語話者の言語管理—事前調整を中心として—村岡英裕編 言語生成と言語管理の学際的研究—接触場面の言語管理研究 vol.6— 千葉大学大学院 人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書(198) 千葉大学大学院 人文社会科学研究所
- 金美善 (1998). 在日コリアン一世の日本語 日本学報 17 大阪大学
- 金美善 (2001). 大阪市生野区周辺の在日コリアン一世の混用コード 社会言語科学会第8回研究大会予稿集 社会言語科学会
- 金美善 (2003). 混じり合う言葉-日本在住コリアン一世の混用コードについて- 言語 32(6), 大修館書店
- 北村よう (2000). 日本語の長音と促音の難しさ-ある韓国人学習者の場合- 東海大学紀要留学生教育センター 20, 27-44.
- 高民定 (2010). 接触場面の変容と研究方法の可能性を探って—韓国人が参加する接触場面の例を中心に—村岡英裕編 接触場面の変容と言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.8— 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書(228) 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 高民定 (2013). 言語教育における評価研究の課題と展望: 接触場面における当事者評価と言語管理観点からの考察 人文社会科学研究所 27, 180-191.
- 高民定 (2014). 日本の韓国人移民の言語習慣に向かう評価—語りに見られる言語習慣の通時的管理との関わりから— 村岡英裕編 接触場面における言語使用と言語態度—接触

- 場面の言語管理研究 vol.11— 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書(278) 千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 高民定 (2016a). 接触場面における言語問題と言語分析 村岡英裕・サウクエン・ファン・高民定(編) 接触場面の言語学: 母語話者・非母語話者から多言語話者へ 19-36. ココ出版
- 高民定 (2016b). 日本の外国人移住者の言語環境と言語管理: 言語バイオグラフィーの通時的・共時的語りの分析から グローバル・コミュニケーション研究 4(特別号) 169-196.
- 高暎喜 (2012) 負荷が少ない場面における韓国人日本語非母語話者の謝罪ストラテジー 外来性に関わる通時性と共時性—接触場面の言語管理研究 vol.10 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 248 集 千葉大学大学院人文社会科学研究科 pp.157-173
- 小池真理 (1998). 学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ: 初級学習者到達度試験のロールプレイに対する評価 北海道大学留学生センター紀要 2, 138-155.
- 今千春 (2011). 日本の韓国人居住者の外来性の管理—共時的・通時的分析の試み— 村岡英裕編 接触場面の変容と言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.9— 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書(238) 千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 今千春 (2012). 韓国人居住者の接触場面向かう言語管理-言語バイオグラフィーからの記述の試み 外来性に関わる通時性と共時性 接触場面の言語管理研究 10 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 248, 49-67.
- 河野俊之・松崎寛 (1998). 一般日本人と日本語教師の音声評価の差異 日本語教育方法研究会誌 5(1), 32-33.
- 熊井浩子 (1992). 外国人の待遇行動の分析 (1) -依頼行動を中心にして- 静岡大学教養部研究報告 人文・社会学篇 28(1), 1-44.
- 郭銀心 (2005). 帰国子女のコード・スイッチングの特徴-在日 1 世と韓国人留学生との比較を中心に- 在日コリアンの言語相 159—193. 和泉選書
- 郭銀心 (2006). 韓国の帰国子女の言語生活: 日本語と韓国語間のコード・スイッチングを中心に 真田信治(監修) 任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 201-222 おうふう
- Labov, W. (1972). *Language in the Inner City: Studies in Black English Vernacular*. Philadelphia: The University of Pennsylvania Press.

- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 李賢淑 (2013). 日本語の非現場指示「ソ」と「ア」における韓国人日本語学習者の指示詞選択要因 学校教育学研究論集 28, 45-64. 東京学芸大学
- 李吉鎔 (2005). 日本語学習者におけるスタイル切換え能力の発達：韓国語母語話者を対象として 大阪大学博士論文
- 李善姫 (2004). 韓国人日本語学習者の“不満表明”について 日本語教育 45, 30-40.
- 李善姫 (2006). 日韓の不満表明に関する一考察-日本人学生と韓国人学生の比較を通して 社会言語科学 8(2), 53-64.
- 李承禧 (2004). 待遇表現における意思・希望表現: 韓国人日本語学習者の失礼な表現とそれを回避する方法 早稲田大学日本語教育研究 4, 37-52. 早稲田大学
- 林河運 (2010). 日韓友人同士会話におけるポライトネス・ストラテジー-オーバーラップ発話に注目して- 外国語教育センタージャーナル 5, 43-59. 島根大学外国語教育センター
- 林炫情・玉岡賀津雄・深見兼孝 (2002). 日本語と韓国語における呼称選択の適切性 日本語科学 11, 31-54.
- 林炫情・深見兼孝(2004). 多少氏と述語にみられる待遇法に関する日韓対照研究 国際協力研究誌 10(2), 13-27.
- 林炫情 (2016). 接触場面での日本人韓国語学習者の呼称しようストラテジーとそれに対する韓国人母語話者の容認性判断 山口大学学術情報 9, 17-29.
- 前田達朗 (2005). 「在日」の言語意識—エスニシティと言語— 真田信治・生越直樹・任榮哲(編) 在日コリアンの言語相 和泉書院
- Marriott H. (1990). *Inter-cultural business negotiations: The problem of norm discrepancy. In Austrian Review of Applied Linguistics. Series S. No.7. 33-65*
- 松田勇一・金英姫・李周殷・朴銀南 (2007). 韓国人日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー: 依頼場面における韓国語の請誘形「~자」の影響について 茨城大学留学生センター紀要 5, 65-75.
- メイナード、K. 泉子 (1993). 会話分析 くろしお出版
- 松崎寛 (1999). 韓国語話者の日本語音声-音声教育の観点から- 音声研究 3(3), 26-35. 日本音声学会
- 三牧陽子 (1999). 初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分

- 析 日本語教育 103, 49-58.
- 関光準 (1989). 韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価  
日本語教育 68, 175-190.
- Milroy, L. (1987). *Language and Social Networks*. New York: Blackwell.
- 宮永愛子 (2013). 日本語学習者の相槌表現の分析：接触場面の雑談データをもとに 金沢大  
学留学生センター紀要 16, 31-43.
- Miyazaki, S. (1998). *Communication Adjustment between Native Speakers and Non-Native Speakers  
of Japanese*. Unpublished Ph.D thesis, Monash University, Melbourne.
- 宮崎里司 (1999i). 第二言語習得とコミュニケーション調整モデル『日本語研究と日本語教  
育—森田良行先生古稀記念論文集』(pp.368-380) 明治書院.
- 三代純平 (2008). 専門学校におけるクラス・コミュニティへの参加の意味：日本語支援の目  
的と方法の転換 WEB 版リテラシーズ 5(2).
- 三代純平 (2009). コミュニティへの参加の実感という日本語の学び：韓国人留学生のライ  
フストーリー調査から 早稲田日本語教育学 6, 1-14.
- 三代純平 (2015). 日本語教育学としてのライフストーリー—語りを聞き、書くということ  
くろしお出版
- Muraoka, H., Fan, S.K. and Ko, M.(2013). Ethnographic analysis of evaluation diversity in language  
management: A methodological consideration for the study of migrants in societies of early  
globalization. 3rd International Language Management Symposium. Charles University, Prague,  
13-14 September, 2013.
- Muraoka, H. (2000). Management of intercultural input: A case study of two Korean residents of  
Japan. *Journal of Asian Pacific communication*. 10(2), 297-311.
- 村岡英裕 (2006). 接触場面における問題の類型 多文化共生社会における言語管理—接触  
場面の言語管理研究 vol.4— 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト  
報告書 103-116.
- 村岡英裕 (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか：  
類型論的アプローチについて— 接触場面の変容と言語管理—接触場面の言語管理研  
究 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228, 47-59.
- 村岡英裕 (2016a). 接触場面研究のパラダイム 村岡英裕・サウクエン・ファン・高民定(編)  
接触場面の言語学：母語話者・非母語話者から多言語話者へ

- 村岡英裕 (2016b). 言語使用の評価を通してみる習慣化された言語管理の軌道: 言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性をめぐって *グローバル・コミュニケーション研究* 4(特別号), 141-168.
- 村岡英裕 (2017). 移動する人々の言語レパトリーに関する研究ノート: 日本語の自己評価の語りはどのように構築されているのか 村岡英裕(編) 接触場面における儀礼的相互行為: 接触場面の言語管理研究 vol.14 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 309, 62-83.
- 村岡英裕 (2018). 移動する人々の言語レパトリーと言語的アイデンティティに関する研究ノート: 豪州在住日本人の事例 村岡英裕(編) 移動する人々のアイデンティティと言語使用: 接触場面の言語管理研究 vol.15 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 334, 74-88.
- ナカミズ、エレン (2000). 在日ブラジル日系人若年層における二言語併用-文内コードスイッチングを中心として- 変異理論研究会(編) 20 世紀フィールド言語学の軌跡- 徳川宗賢先生追悼論文集 67-77.
- 中山亜紀子 (2007). 韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴: 「自分らしさ」という視点から 阪大日本語研究 19, 97-127.
- 中山亜紀子 (2008). 韓国人留学生のライフストーリーにみる留学の満足 阪大日本語研究 20, 197-223.
- 中山亜紀子 (2016). 「日本語を話す私」と自分らしさ—韓国人留学生のライフストーリー—  
ココ出版
- Nekvapil, J. (2003). Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language*. 162, 63-83.
- ネウストプニー, J.V. (1981). 外国人場面の研究と日本語教育 *日本語教育* 45, 30-40.
- ネウストプニー, J.V. (1982). 日本語研究のパラダイム 杉本良夫, ロス・マオア(編) 日本人論に関する十二章 55-76. 学陽書房
- Neustupný, J.V. (1985) Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (ed.) *Australia, meeting place of languages*. pp.161-170. Pacific Linguistics.
- Neustupný, J.V. (1987). *Communicating with the Japanese*. Tokyo: The Japan Times
- ネウストプニー, J.V. (1989). 日本研究のパラダイム: その多様性を理解するために 世界の

- 中の日本 1, 79-96.
- Neustupný, J.V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. pp.50-69, Singapore: Academic Press
- ネウストプニー, J.V. (1994). 日本研究の方法論：データ収集の段階 待兼山論叢 28 日本語学篇 1-24.
- ネウストプニー, J.V. (1997). 日本語教育とネットワークの考え方—ネットワーク研究のためのガイド— 国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究 最終報告書 181-196. 日本語教育学会
- ネウストプニー, J.V. (2002). データをどう集めるか 言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために— 15-33. くろしお出版
- Neustupný, J. V. (2005). Foreigners and the Japanese in Contact Situations: Evaluation of Norm Deviations. *International Journal of the Sociology of Language*. 175(6) MOUTON DE GRUYTER. 307-323.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008). 特集「相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究」について *社会言語科学* 10(2) 13-15
- 野原ゆかり (2011). 言い直しが聞き手の評価に及ぼす影響—中国語・韓国語を母語とする中上級日本語学習者の発話を対象に— *留学生教育* 16, 117-124.
- Norton, B. (1995) Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29 (1),
- Norton, B. (1997). Language, identity, and the ownership of English. *TESOL Quarterly*, 31(3), pp. 409-429.
- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity, and Educational Change*. London: Longman.
- 大場美和子 (2012). 話題開始者と受け手間以外の応答の発話の分析—内的場面と接触場面における三者自由会話を対象に— 村岡英裕(編) 外来性に関わる通時性と共時性—接触場面の言語管理研究 vol.10— 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 248, 1-29.
- 大場美和子 (2013). 接触場面における三者会話の研究—話題開始と応答の発話に着目して— *日本語学* 32(1), 30-42.
- 小張順弘 (2014). 「外国にルーツを持つ」日本人大学生のアイデンティティ形成過程: こと

- ばとアイデンティティの関係から 国際関係紀要 23, 1・2 合併号, 155-180. 亜細亜大学  
生越直樹 (2005). 在日コリアンの言語使用意識 真田信治・生越直樹・任榮哲(編) 在日コリアンの言語相 和泉書院
- 太田裕子 (2010). 日本語教師の「意味世界」: オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー ココ出版
- 大津友美 (2004). 親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス: 「遊び」としての対立行動に注目して 社会言語科学, 6 (2), 44-53.
- 岡崎敏雄 (1995). 多言語・多文化共生をパースペクティブにもつ日本語教育 中国四国教育学会教育研究紀要 40, 527-532.
- 小野由美子・森まどか・安田春子 (2004). 韓国人日本語学習者に見られる「断り」方略の特徴: 異文化コミュニケーションの視点から 鳴門教育大学研究紀要(人文・社会科学編) 19, 25-32.
- Oxford, R. (1990). Language learning strategies: What every teacher should know. Boston: Heinle & Heinle
- 尾崎明人(1992). 「聞き返し」のストラテジーと日本語教育 日本語研究と日本語教育 251-26.3 名古屋大学出版会
- 尾崎明人(1993). 接触場面の訂正ストラテジー -「聞き返し」の発話交換をめぐって- 日本語教育 81, 19-30.
- プラマー, ケン (1998). セクシュアル・ストーリーの時代—語りのポリティクス 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳 新曜社 (Plummer, K. (1995). Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds. London and New York: Routledge.)
- 柳慧政 (2001). 依頼談話の日韓対照研究 談話の構造・ストラテジーの観点から 笠間書院
- 酒井アルベルト (2008). 在日南米コミュニティにおけるシンボル化された言語 日本オーラルヒストリー研究 4, 85-105.
- 佐藤友則 (1995). 単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較 世界の日本語教育. 日本語教育論集 5, 139-154
- 高木南欧子 (2014). 韓国人留学生の自然発話に見られる誤用 神奈川大学言語研究 36, 141-158.
- 高村めぐみ (2009). 韓国人日本語学習者の聞きにくいスピーチの特徴についての一考察-ポーズ、速さ、リズムを視点に- 桜美林言語教育論叢 5, 1-16.

- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 田中里奈 (2011). 「日本語=日本人」という規範からの逸脱: 「在日コリアン」教師のアイデンティティと日本語教育における戦略 リテラシーズ 9, 1-10.
- Rampton, B., Maybin, J. & Roberts, C. (2014). Methodological foundations in linguistic ethnography. Working Papers in Urban Language & Literacies, Paper 125.
- Sacks, H. Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*. 50(4), 696-735.
- 真田信治・生越直樹・任榮哲編 (2005). 在日コリアンの言語相 和泉書院
- 真田信治編 (2006). 社会言語学の展望 くろしお出版
- 桜井厚 (2002). インタビューの社会学--ライフストーリーの聞き方 せりか書房
- 桜井厚 (2012). ライフストーリー論 弘文堂
- 桜井厚・小林多寿子編 (2005). ライフストーリー・インタビュー せりか書房
- 猿橋順子 (2016). アイデンティティの語りと継承言語の位置付け : ある在日コリアン二世女性のライフストーリーのポジショニング理論分析 ことばと社会: 多言語社会研究 18, 35-60.
- ソシュール, F. 小林英夫訳 (1972). 一般言語学講義 (Saussure, F. (1916). Cours de linguistique générale)
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening Up Closings. *Semiotica*. 8, 289-327.
- Schiffrin, D. (1987). Discourse Markers. Cambridge: Cambridge University Press.
- 関崎博紀 (2016). 接触場面初対面会話における話題スキーマ: 日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集 31, 17-32.
- 高村めぐみ (2009). 韓国人日本語学習者の聞きにくいスピーチの特徴についての一考察: ポーズ、速さ、リズムを視点に 桜美林言語教育論叢 5, 1-10.
- 武田加奈子 (2006). 接触場面における勧誘談話管理 千葉大学博士論文
- 田所希佳子 (2015). スピーチレベルの選択に伴う場面認識に関する考察——韓国人留学経験者へのインタビューから 社会言語化学 18(1), 50-59.
- 土田明穂 (2017). 韓国人日本語学習者のあいづちとうなずきに関する研究-日本語母語話者との比較を通して- 昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究 11, 15-22.

- 土屋菜穂子 (2012). 日本語学習者の口頭能力レベル別言いよどみ使用-『日本語学習者会話データベース』の n-gram 分析をもとにして- 日本語教育学会秋季大会予稿集 日本語教育学会 253-254.
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版
- 宇佐美洋 (2014). 「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか: 評価プロセスの多様性をとらえることの意義 ココ出版
- 宇佐美洋 (2015). 「やさしい日本語」は母語話者に何を求めるか--「やさしい日本語」作成過程における意識調査から ことばと文字 4, 55-63.
- 内海由美子・吉野文 (1999). 短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析—ネットワークの観点から— 千葉大学留学生センター 30-55.
- 若生正和 (2010). 韓国人日本語学習者の誤用分析 大阪教育大学紀要 59(1), 109-119.
- 渡辺倫子 (2003). 日本人評価研究の発展と課題 教育学研究紀要第二部 48, 341-346.
- 渡部倫子 (2004a). 日本語口頭運用能力評価基準の重要度に対する日本語母語話者の意識—教師経験の有無による相違— 平成 15 年度広島大学大学院教育学研究科リサーチ・オフィス研究成果報告書 国際化情報社会における日本語教師養成システムの開発研究 121-131.
- 渡部倫子 (2004b). 日本語口頭運用能力の評価基準に対する日本語母語話者の意識調査—学習者との接触機会による相違— 広島大学日本語教育研究 14, 81-87.
- Weinreich, U. (1953). *Languages in Contact: Findings and Problem*. New York, Linguistic Circle of New York
- West, C and Garcia, A (1988). Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men. *Social Problems*. 35, 551-575.
- Wipha, J., 加藤 好崇 (2010). タイ人日本語学習者—日本語母語話者の初対面場面における話題選択 東海大学紀要 留学生教育センター 30, 17-27.
- 安田雪 (1997). ネットワーク分析—何が行為を決定するか 新曜社
- 山田明子・堀尾佳以 (2009). 日本人チューターと中国人・韓国人日本語学習者のコミュニケーション--話題転換における話題開始部を中心に 東アジア日本語教育・日本文化研究 12, 117-134.
- 山口悠希子 (2007). ドイツで育った日本人青年たちの日本語学習経験: 海外に暮らしながら日本語を学ぶ意味 阪大日本語研究 19, 97-127.

- 山下里香 (2016). 在日パキスタン人児童の多言語使用—コードスイッチングとスタイルシフトの研究 ひつじ書房
- 楊虹 (2005). 日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現 人間文化論叢 8, 327-336.
- 楊虹(2007). 中日母語場面の話題転換の比較-話題終了のプロセスに注目して- 世界の日本語教育 17, 37-52.
- 梁賢俊 (2003). 韓国人日本語学習者の動詞習得における言語転移に関する研究: 中国人日本語学習者との比較において 言語科学論集 7, 119-130 東北大学
- 吉田さち (2005). 二言語能力とコード・スイッチング: 韓国系民族学校の高校生を対象として 社会言語科学 8(1), 43-56.
- 吉田さち (2014). 日本語学習者の言語運用に対する日本語母語話者の評価-場面により母語話者の評価は異なるか- コミュニケーション文化 8, 27-43.
- 尹喜貞(2004). 授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得: 日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象として 言語文化と日本語教育 8, 44-50.
- 柳慧政 (2006). 日韓の依頼談話の開始部の対照研究: 会話分析資料を中心に学習院大学国語国文学会誌 49, 1-16.

## 謝辞

この論文は多くの時間と多くの方々の協力のおかげで完成しました。

指導教員だった千葉大学の村岡英裕先生には、研究テーマの設定から最後の執筆まで丁寧にご指導いただき、感謝しております。調査協力者がなかなか見つからなかったり、研究をする環境が整わなかったりと、思うように研究が進められないことが多く、とても長い時間が経ってしまいました。それでも一つの研究テーマに深く向き合い、一応の結論を出すことができた経験は大きな財産だと思います。いつもギリギリの状況で相談に伺うことも多かったのですが、先生のおかげでここまでたどり着くことができたと思っています。

千葉大学の高民定先生にも多くのご支援をいただきました。時には韓国人の立場から、時には副指導教員としてアドバイスをいただきました。韓国から帰国してもずっと韓国をそばに感じることはできたのは幸運なことだったと思っています。また先生には、個人的なお話もよく聞いていただきました。夕方、突然研究室を訪れる私をいつも温かく迎えてくださり、本当にうれしかったです。

神田外語大学のサウクエン・ファン先生には、研究面でも仕事の面でも大変お世話になりました。先生とのお仕事はいつも新しい発見があって楽しく、研究にも多くの刺激をいただきました。ただし、個人的にとっても苦しい時期に先生のそばでお仕事をする事になり、いろいろとご心配をおかけしたことと思います。それでも、いつも近くで見守ってくださったことは大変心強く、最後まで頑張る力になりました。

調査に協力して下さった韓国人居住者の方にも心からお礼申し上げます。会話の録音と長時間のインタビュー、しかもインタビューではきわめてプライベートなことを話してもらうという手間のかかる調査でしたが、どの方もまったく嫌な顔をせずに気持ちよく答えてくださいました。人生の話を受け止めるにはかなりのエネルギーがいき、人生の重みをいつも感じていました。みなさまのこれまでの歩みのすべてに心から敬意を表します。

千葉大学大学院の同じ研究室の皆さんにもお世話になりました。先輩方にもいつも何かと気にかけていただき、感謝しております。何年経ってもわたしの大切な先輩です。また、ミラー成三さんには論文の内容のチェックから校正まで手伝っていただきました。いつも無理なお願いを聞いてくださり、本当にありがとうございます。

これまでお世話になった職場のみなさんにもたくさん応援していただきました。とくに、神田外語大学の先生方、職員の方々には、ぼろぼろの姿で論文を書いている私を優しく励ましてくださいました。皆さまのご理解とご協力なしでは、論文を完成させることはできませんでした。心からお礼申し上げます。また、同じく仕事しながら博士論文に取り組んでいる仲間にも感謝しています。同じ境遇で頑張っている人がいることは大きな励みとなりました。

そして、ずっと忘れていたふりをしながら実はとても気にかけてくれた家族にも感謝しています。ピンチのときにはいつも助けてもらいました。

最後に、私は今でも忘れられないインタビューがあります。ある協力者の方が、インタビューの最後に「私は日本ではぜんぜん意味のない存在だと思っていたけど、こんなふうにお役にたてるのがあって嬉しいです」とおっしゃったのです。長い間日本でこんな気持ちで暮らしているんだと当時の私はとてもショックでした。日本に住む外国人の方が、ひいてはマイノリティの立場に置かれている方々がこのような気持ちにならなくてもすむような社会であってほしい。そのために少しでも貢献できるよう、微力ながらこれからも研究を続けていきたいと思っています。

みなさま、本当にありがとうございました。

今 千春